Regulus

水谷風狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒｅｇｕｌｕｓ

【Ｎコード】
Ｎ９１０２Ｐ

【作者名】
水谷風狼

【あらすじ】

「異世界なんていらない。私はこの世界に生まれてこられてよかったよ――」世界で一人といわれる希少な「死の能力」、テレジアサモナーの持ち主であるハルは、その能力の危険性から皆に避けられていた。唯一の家族だった母は、幼いころハルを残してどこかへ失踪してしまった。
ひとりぼっちで旅をしていたハルだったが、ひょんなきっかけでギルド『レグルス』に配属に。犯罪組織との戦闘を活動の中心とするレグルスのメンバーとともに過ごすうち、ハルの消えかかっていた

願いがよみがえる。魔術師、エルフ、回復師、錬金術師、天使、悪魔、そして人の心……新大陸世界に交錯する陰謀に立ち向かう、「力」の物語。

作者は初心者なので気軽にアドバイスお願いします。

初心者のくせに、ハーレム・チート・異世界トリップなしの流行逆行型です。それでもよろしければお付き合いください。

残酷な描写・・・戦闘モノのため流血の可能性

プロローグ

その日は、大粒の雪が降っていた。

「すぐ、戻るからね」

桃色の唇がそっとささやく。

雪の中に消えていく後姿を、じっと見つめていた。

後姿が見えなくなっても、帰ってくるのをずっと待っていた。

太陽が何度も昇り、沈みを繰り返して、横顔はなんども日に照らされた。

気づくと、私は泣いていた。

母の名前を呼んで、私は溢れる涙を桃色の袖でぬぐいながら大声で泣いていた。

雪はとっくにやんでいた。

足元にある溶けかかった雪が靴にしみて冷たかった。

プロローグ（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

頑張って更新していくのでよろしくです。

1　ハル、ギルドを決める。

「すみません」
門の脇にひかえている衛兵は、はっと今目覚めたかのような顔をしてこちらを見た。

「なんでしょう？」

いかつい装備の男に横眼で見られて、ハルはいつになく緊張して話しかけた。

「異国からきたものでよくわからないのですが……その、ギルド掲示板広場へはどう行けばいいのですか？」

「ここからしばらく真っ直ぐいって三つ目の角を右に曲がって進むと、あとは道しるべの案内があります。」

無表情でハルにそう告げると、衛兵は真っ直ぐ前を向いた。

「ありがとう、衛兵さん」

ハルは黒いコートをゆるくはためかせながら、言われた通りに歩きだした。

セーンの街は賑やかだ。冬の冷気に負けじとイルミネーションの暖色が往来の足取りを華やかに彩っている。

明るい通りに出たのは何年振りだろうか。ハルは何カ月も歩きっぱなしだった足の痛みが、行き交う人々でにぎわう街に吸い込まれ

ているかのように消えていくのがわかった。
もうすぐ、この長い旅も一段落となるのだ。

「あ、あった」

金属製の標識の中、それとなくやわらかい輪郭で切り出された木製の道しるべを見つけ、ハルは右に曲がった。

「わ……」

向きを変えた瞬間に、ハルの両足がぴたりと止まる。

絵本のページをめくったみたいに、景色が見事に変わった。

軽やかな足取りが運ぶ繁華街の風とは一変して、そこはどこか太陽の中に生まれた世界のような、力強い風が吹いている。

「ギルドをお探しですか」

つかの間たたずんでいたハルの隣に、いつの間に近づいてきたのか、背中に大きな刀をさした肩のがっしりとした女性に声をかけられた。

「あ、はい。」

息を整えている最中だったので、返事が短くなってしまう。が、女性は気に障った様子もなく、

「よろしければ目的にあったギルド候補をご案内いたしましょうか？」

ハルはちらと掲示板の群れを見やった。

一人で見て回ったら日が暮れそうだ。

「お願いします。探しているのは、寝泊りができて、仕事を内部で依頼することができるギルドです。」

「内部依頼ですね。職業は？」

「ありません」

そう答えるのにもう慣れている。が、なんとなく落ち着かずハルはコートの内側の尻尾を押さえた。

ハルは自分の能力を他人には明かさないようにしていた。魔術師や剣士のように、堂々と答えられるものではないからだ。恥ずかしいというよりは、忌み嫌われそうな職業であった。

「戦闘には自信がありますか？」

ここで予想外の質問で答えに詰まった。職業がない、といっているのに、ここではいと答えるのはおかしいだろうか。いや、全部が人並みにできるということにしておけば問題ないかもしれない。でもこんな華奢な体つきでごまかせるだろうか。

「それは、答えた方がいいですか？」

やっとこさ出た応えに、剣士と思われるその女性は訝しげな顔をした。でもすぐに手元の分厚い雑誌をぱらぱらとめくって目を通し、ひとつうなずいた。

「戦闘に自信がおありなら、合うギルドはひとつに絞られます」

ハルの気持ちを察したのか、女性はそのページを手際よく切り取って見せてくれた（どうりでつぎはぎだらけなわけだ、とハルは思った）。

『ギルド名：レグルス　ギルドマスター：アルタ（２２・♀）　平均年齢：１７才』

「女性のリーダーでしたら、なじみ易いかもしれませんよ」

ハルは小さな紙切れを返した。

（ギルドに入ったら、しばらくは抜けられない。けれど・・・・・・ここに特に文句はないし）

今回の目的が達成できるとも限らないし、とりあえず野宿生活から脱出したいという思いもあった。

（そこまで悩まなくてもいいよね）

しばらくしてハルは、セーン街から遠く離れた冬の海の上で船に揺られていた。

1　ハル、ギルドを決める。（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
しばらくはあらすじの部分とかぶる所がおおくなりそうです。

2　ハル、鶏肉を求める。

しばらくしてハルは、セーン街から遠く離れた海の上で船に揺られていた。

「汽笛の音すごーい」

「ねえねえ、君どこまでいくの？」

「おしゃべりしながらいこうよー」

「これいる？近くのマーケットで人気なの」

「かもめー」

子供の騒ぐ声と波の音が混ざり合うのを聞いていると、眠気が襲ってくる。ハルは船の隅のほうに座って、走り回る子供たちや昼食のバケットに手を伸ばす様々な冒険者をぼんやり見ながら、まぶたを開けたり閉じたりしていた。

冬の海は冷たい。船の周りをじわじわと冷気が囲っているかのように、耳や首筋がよく冷える。ハルはコートの襟を立てて、海風から首筋を守っていた。海の吐息はいたずらっぽく髪の毛をあおり、毛先が頬をくすぐる。

「おなかすいたな」

ぽつりとつぶやいて、セーン街の港から長すぎる見送りに来ているウミネコの羽ばたくのを眺めていた。

「鶏肉食べたい・・・・・・」

海鳥に向かってつぶやいたけれど、もちろんウミネコ達は無反応で、にゃーにゃー鳴きながらハルのすぐそばのへりにとまった。それから、何か言った?という風に首をかしげた。

「おなかすいたよ」

ハルはかばんのなかからビスケットを取り出した。これからの旅のために、まだたんまり残っている。

(向こうに着くには一夜越すっていうけど、二日かからずにつくし、もう食べ物をとっとく必要もないんだ)

明日からは道端で人にものを恵んでもらわなくても食べていけると思うと、ちょっと気分が明るくなった。ハルは昼ごはんの一枚目の半分をウミネコに分けてやった。

「はい、おすそわけ」

ウミネコは無表情のままそれをくわえると、首をかしげたまま海の向こうに飛んでいった。

「・・・・・意外とあっさり帰るんだね」

ビスケットのおかげで空腹感がなくなると、本当に眠くなってきた。ウミネコの鳴き声も眠気に拍車をかけて、ハルは壁によりかかって眠ってしまった。

誰かに揺り起こされて、ハルは大きなあくびをしながら目を覚ました。

空はすっかり暗くなって、ただっぴろい船の上のところどころに炎のちらつきが見える。一瞬火事かと思ってびっくりしたが、すぐに肉を焼くためのものとわかった。

「もう夜・・・・・・」

「夕飯のサービスで、焼肉二切れ配られてるわよ。せっかくだからあなたも行ったら?」

2　ハル、鶏肉を求める。（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

3　ハル、ギルドマスターと出会う

誰かに揺り起こされて、ハルは大きなあくびをしながら目を覚ました。

空はすっかり暗くなって、ただっぴろい船の上のところどころに炎のちらつきが見える。一瞬火事かと思ってびっくりしたが、すぐに肉を焼くためのものとわかった。

「もう夜・・・・・・」

「夕飯のサービスで、焼肉二切れ配られてるわよ。せっかくだからあなたも行ったら？」

「あ・・・・ありがとうございます」

ハルは寝ぼけ眼で、自分をゆすった人の顔を見るのも忘れて、人が集まっていそうな大きめの炎に近づいていった。

多少の列はあったものの、ほどなくしてハルの手にも焼き色のしっかりついた肉の乗った暖かな紙皿が渡った。ビスケットに加わった豪華なメインディッシュにわくわくしながら戻ってくると、起こしてくれた女性はまだそこにいた。

「一緒に食べましょ？」

茶目っ気たっぷりにウィンクしたその女性は、暖かそうな黒のファーつきのコートを着て、背中に大型の武器が入った袋を置いていた。ハルは顔をほころばせて、その

人の隣に座った。

「どこから来たの？」

さりげなく尋ねられて、ハルは肉を一切れほおばりながら

「えと、ニホンの国から……」

「ニホン！遠いところからきたのね」

「ニホンからずっと旅をしてて、近頃はセーン街の近く、フィアレ盆地の小さな村にテントを張ってて」

「そうなんだ。じゃあギルドが見つかってよかったわね」

肉をあっという間にたいらげてしまい、ハルはかばんからビスケットを取り出しながら

「条件をしぼったら、一個になったので。早く見つかりました」

「へえ、そんなこともあるんだ。」

ハルはビスケットをかりかりやりながら、改めて隣に座っている女性をまじまじと見た。

気丈そうな横顔は、炎のためかもしれないが明るく見える。２０才くらいだろうか、薄く化粧をしているようで、目の周りが時折ちらっ、ちらっと光る。コートからは柔らかな布地の裾がのぞいている。季節によく合った、暖かそうなロングブーツを履いて、ひざを抱えて座っていた。胸元には星型のバッジが、鈍い銀色に光るピン

でとめられていた。

（あれは……）

「どうかしたの？」

ハルはビスケットが入ったままの口を動かしながらバッジを指さした。

「ギルドマスター、なんですか？」

すると女性は、自分の胸元を見下ろして笑った。

「ああ、これね。そう、私はギルド『レグルス』のリーダー、アルタ。あなたは？」

ハルの総身がぴたりと動きを止めたのを見て、温厚そうな顔立ちが不思議そうな目つきで覗きこんでくる。

「もしかして、私達の事、知ってる？」

「あ、えっと……知っているというよりは……」

ハルは桃色のポシェットから、掲示板受付で今朝がたもらってきたギルド配属証明書を取り出し、アルタに見せた。

「私はハル・スイメイといいます。実は今夜から、ギルド『レグルス』に配属になりました。」

アルタはぽかんとしてハルを見、目の前にぶらさがっている縦長の紙を見てやっと、ああ、と感嘆の声をあげた。

「新たな配属者一名って、あなたの事だったの。よろしく、ハル。ええと……15才、職業なし、戦闘に自信あり、だったわね？」

ギルドマスターのあけっぴろげな笑顔に、ハルはここでまたまた答えにつまることとなった。

「そういうことに、なってます」

3　ハル、ギルドマスターと出会う（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

4　消えたお話

アルタは、回復魔法を得意とするプリーストらしい。あの大きな武器は大振りの鎌で、魔法詠唱中無防備にならないようリーチの長い武器を振いながら闘うのだそうだ。

「本当に、戦闘専門のギルドなんですね」

ハルは朝食に食糧が入ったパウチを探りながら、サンドイッチをほおばるアルタと朝日の光を浴びながら話していた。

「そうね、大体はね。たまに人探しの依頼も来るけれど、うちは戦闘能力の高い者が集っているって、ちょっぴり有名なの。だから、犯罪組織を相手にするのが普通かな」

「犯罪組織……」

にゃーにゃー騒ぎながら寄ってくるウミネコ達に四方八方ビスケットを振舞っていたハルは、舟の木目の床に視線を落とした。

（そんなのを相手にしてちゃ、あたしってもしかして場違いなんじゃ……）

するとそんなハルの不安を悟ったかのように、アルタは慌てて

「あ、犯罪組織って言っても、テロリストだの反政府組織だの大がかりなものは半分くらいよ。遊び半分に盗みを繰り返す泥棒どもが大半ね」

「でもやっぱり、そこらへんの子供ギルドとは格が違いますね」

「あれ、みなしごギルドに入っていた時期があるの？」

しまった、と思った。何となくしゃべっているうちにぽろりとあかしてしまった。ハルはいっしゅん後悔しかけて、ふと

（そうか、アルタさんはギルドマスターで、もう他人じゃないんだ）

この際話してしまおうか。ハルは、食べられもしない焼き菓子をくわえて甲板の方にとまっている海鳥の群れを遠く見ながら、

「実は私、気づいたら一人ぼっちだったんですよ。父は私が生まれる前に離婚して、母と二人暮らしで。」

アルタの食事の手がとまる。ふとそちらを見ると、膝を抱えたまま深刻そうな顔でハルの瞳をくいいるように見つめていた。思わずふっと笑いがこぼれる。

「母は、私を置いて消えてしまいました。私を捨てたのか、母の身に何かあったのかはわかんないです。私を置いたまま、何かしてくるといったきり……それきり、戻ってこなかった」

アルタは黙ったまま、下を向いている。

（向こうに着く前に暗い話は、まずかったかな）

ハルは後悔した。ギルドマスターとはいえ、まだ知り合ったばかりでお互いの事をきちんと認識し終えていないのだ。

「……クルアンに似てるわ」

「へ？」

アルタが顔をあげると、その頭上をうみねこやらかもめやらが派手にかすめて飛んで行った。ハルはきゃっと言って思わず両手でカバーしたけれど、アルタはもう海に慣れているのか全く動じず、笑顔になって話を続けた。

「クルアンっていうのはレグルスの一員でね、ちょうどハルと同じ十五くらいかな。氷を使うウィザードなの」

ウィザードから魔術師に変換するのに少し時間がかかったが、すぐにある事を思い出す。

「ああ、聞いた事がある！氷の魔術師は世界的に珍しいって、子供ギルドの授業でよく言われました。」

「クルアンは珍しさのせいで、よく命を狙われてね。」

「あ……そう、なんですか」

「まあ、命を狙われる理由をそれだけじゃなかったんだけど、とりあえず子供ギルドよりガードの固い戦闘ギルドに入ることに決めたんですって。クルアンが入った時は、まだ拠点もしけていなくて、二人で野宿したの」

野宿！　今まで自分が脱したいと切に願っていた状態を、自分と同じくらいの年の子がしていたなんて。

「クルアンのところも離婚していて、父親と二人ぐらしだったそうよ。でも五年前にお父さんは軍隊に召集されて、何も告げずに出て行ったと言っていた……目が覚めたら荷物も何もなかったそうよ」

ハルは気の毒に、と呟いた。

4　消えたお話（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

お気に入り登録してくださった方かんしゃです。

5　ハル、アルタと仲良しになる

「でも似通った過去を持つ二人ってことで、色々と友達になるきっかけができたんじゃないかな？まあ、クルアンは少し口数が少ないけれど、いい子だよ」

おしゃべりなハルにとっては、話を聞いてくれる友達はずっとほしかったものだ。おまけに幼いころから一人きりだったなら、通じ合える所は多いかもしれない。ハルは両手を組んで、顔をほころばせた。

「よかった。子供ギルドのときは友達なんて今まで一人もいなかった。みんなはずっと暗い顔ばかりしていて、見ているこっちも悲しくなってきちゃって。友達ほしかったんだ」

アルタは魔法のバケットのようにいくつもいくつも出てくるサンドイッチを次々にほおばりながら、にこりと笑った。

「レグルス、楽しみになってきた？」

威勢よく返事をして、ハルはビスケットを取り出す。すると、

「あなた、昨日の昼も夜もビスケットじゃなかった？」

アルタはずいと顔を近づけてくる。整った、どこか少女のような顔、可憐という言葉が似合うんじゃないかな、とハルは想いながら、

「そんな感じだったかも知れません」

この返答にアルタはぷっと笑いだす。

「何、それ。毎日ビスケットじゃ戦闘で持たないわよ。言ったと思うけどレグルスは有名なんだから。依頼も沢山来るし、初日から働いてもらうかもよ」

「えーっ」

「冗談、冗談。どちらにせよ育ち盛りの子が毎日毎食ビスケットなんて駄目よ。はい」

手渡されたサンドイッチは、朝の光のせいか、かすかな温もりがある気がした。

「温かい……」
「それ、私の魔法の一つ。作りたてほやほやの状態だから」
ハルはさっそく一口頂いた。ハムとレタスの真ん中に卵が挟まっている、定番を組み合わせたようなサンドイッチだ。
「あ、おいしい。」
「ありがとう。」
アルタは料理が得意らしい。ギルドの中の食事はほとんどすべてアルタが作っているのだそうだ。
ハルもお菓子作りなら何度か子供ギルドでやっていたことを話したら、何故だかメレンゲのお菓子の事で二人して盛り上がった。
長くずっしりとした響きのある汽笛が到着を知らせるまでに、ハルとアルタは大分仲良しになっていた。

5　ハル、アルタと仲良しになる（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
いつかアルタとハルにお菓子つくらせてみたいです。

6　ハル、拠点に到着する

ハルはアルタに手を引かれ、『守りの木々』をジグザグに抜けていた。

『守りの木々』。ギルドに所属した経験のある者ならこの森の存在は誰でも知っている。読んで字のごとく、ギルド拠点を包囲し、不意打ちにより拠点が落ちるのを防ぐ森だ。現代のギルド設立条件はこの森が完成している事と、ギルドメンバーが二人以上いることだけだ、裏を返せば二の内一つに数えられているわけで、ある意味最も重要なものだ。『守りの木々』は原則魔法で作られる。木々を早急に成長させるために、魔力を持つもの――ほとんどみな、子供の頃に魔力のつけかたを覚えているが――は、守りの木々が完成するまで全ての力を大地と木に注ぎ込む。

「ここの守りの木々はフリージングスピアっていうの。クルアンと二人がかりで、一週間弱かかったかな」

「すごい……」

めちゃくちゃに曲がりくねった、恐ろしいほどに暗い道の中慣れた足取りでハルを導くアルタの背中から、いかに魔力が強いかが感じ取られるようだった。ハルはフリージングスピアほど立派にそだった森は見た事がなかった。いまどきは珍しい広葉樹林で、もう春先だというのにあちこちの枝葉からぶら下がる無数の鋭いつららが氷のウィザードの手の痕跡として部外者を威嚇していた。

分かれ道や茨に隠された道を通過しようやく森を抜けた時、ハルは何だか長い間日の目を見ていなかったような気がした。まぶしす

ぎて目をしばしばさせながら、拠点の入り口に向かうアルタにかろうじてついていった。

丸みを帯びた桃色の屋根に、観音開きの大きな窓。茶色のペンキで塗られた木製の扉には、「Ｒｅｇｕｌｕｓ」の金の文字が斜体に刻まれている。アルタのふんわりとしたコートが、大きいながらもかわいらしい二階建ての館によく似合った。

少し狭いけどすぐになれると思うわ、とギルドマスターは笑顔を見せた。ハルが笑い返すと、アルタは自分でノックするよう促した。

つやのある戸を、細い指で三回たたいた。

「ごめんくださーい」

ほどなくして、かつん、かつん、かつん、とやや速足でこちらに向かってくる音が聞こえてくると、ハルはいよいよ緊張した。たすき掛けの肩ひもをきゅっと握りしめた瞬間、ぎい、と小さく呻りながら玄関があいた。

6　ハル、拠点に到着する（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
とりあえず拠点までいけました・・・。

7　蒼い瞳の持ち主

ドアチェーンをかけてるかのように、いやそれ以上に狭く、やっと顔半分が見えるくらいに扉を開けたその瞳――青色の、宝玉のように透き通った美しい瞳――はじっとハルの瞳を見つけた。

冷たい目だ、とハルは思った。視線から発せられる冷気に、瞳孔の鋭さが加わってさらに冷たく感じた。氷使いのクルアンとは、この子の事だろうか。少し想像と違う気がした。

「ただいま、クルアン」

クルアンはハルから視線をそらし、アルタを認めると、黙って玄関を開け放った。

「わぉ……」

ハルは館の中に、惹き込まれる様な足取りで入って行った。

フリージアの花の小さなランプが壁から顔を出して、ハルを出迎えてくれている。短い廊下の扉からは、何人か人がいるのが見受けられた。ハルが靴を脱ぐのも、もどかしくしていると、アルタが満面の笑顔で囁いた。

「靴は脱がなくていいのよ」

ハルがもう一度ブーツを履いている間に、クルアンは一言も口にしないまま廊下を右に曲がってどこかへいってしまった。

「……クルアン、あんまりしゃべらないね」

「同年代の女の子が来るってことは言ったんだけど、びっくりしたみたいね」

アルタはくすくすと笑っていたが、ハルにはクルアンのあの冷たい表情がなぜか気になって仕方がなかった。

7　蒼い瞳の持ち主（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
物語の切れ目の関係で短くなってしまいました・・・。

8　ハル、ギルドメンバーとご対面

「えっと……参謀担当のフェララさん、ギルドマスターでプリーストのアルタさん、錬金術師のスーサさん、氷の魔術師のクルアンさん、それからその使い魔のグリズリーベアの、ムーンソルト。」

「はは、ハル、今度はムーンサルトの名前間違えてる。」

「えっ!?あ、あたし、ソルトって言った?」

ミルクティーとチョコチップクッキーでブレイクしていたギルドメンバー全員がぷっと吹き出す。真っ白なテーブルクロスの上で首をかしげたハルは、またもう一度全員の顔を順繰りに見ながら今度こそ名前を覚えようと躍起になった。

レグルス内最年長でありながらハルを抜かせば一番の新入り、フェララは参謀担当の美人なお姉さんだ。

緑の濃いアイシャドー、下の方にゆるいパーマがかかった薄い茶色の長い髪、マキシ丈の外国風なワンピースがよく似合っている。

どうやらアーティストでもあるらしい。服やメイクやインテリアにはこだわりがある、と胸を張っている。絵画のコンクールでは最優秀賞を五年連続で獲り、世界有数のエリート大学院をトップ五入りで卒業、今は芸術家として生活の半分を稼いでいるという。いわゆる勝ち組の部類に入る人だが、価値観が人とあまりにもずれすぎていたためと頑固な性格がたたって、人とはあまりうまくいかないらしい。

スーサはレグルス内最年少の十歳。錬金術というちょっと変わった力を持つ少年で、武器の修理はほぼスーサがやっているとのこと。

スーサの両親はちゃんといて、将来錬金術師として生きていけるよう今は修行中らしい。気さくでよく笑って、こんな感じの弟がいたらきっといいんだろうな、とハルはスーサの半月形の目を見てほほを緩ませた。

「それから、アルタさん……アルタさん、そこにチョコレートがついてますよ」

ハルに指差されて、アルタは手元のミニ・ナフキンで口端をぬぐった。先ほどからクッキーを二枚も三枚も持ちながら食べているところをみると、相当のお菓子好きらしい。アルタの部屋もちらと見たけれど、甘い香りの漂ってきそうなストロベリーやらさくらんぼやら、はたまたカカオの実やらの飾りがこれでもかというほどに壁や天井に賑わっていた。今はねずみ色のコートを脱いでいて、白いレースのワンピースの胸元にはフルーツの形をしたロケットペンダントがリビングの光に照らされて白くてかっている。

「クルアンさんと、グリズリーベアのムーンサルト」

指を折りながらいい終えると、ノリのいい歓声があがった。どうやらこれでちゃんと全員の名前を覚えられたようだと、ハルは紅茶をすすって一息ついた。

「まったく、せっかくのお祝いなんだから、クルアンも来ればいいのに。」

ため息をついてクルアンの部屋の方を遠く覗き込むと、スーサが

ティーポットに手を伸ばしながらなだめた。

「仕方ないよ。クルアンはそういう時期なんだ……アルタ、ポットとってくれる？」

ポットに注がれた紅茶が湯気を立てるのをぼんやり見つめながら。ハルはスーサの言葉の意味を考えた。

そういう時期って、どんな時期なんだろう。反抗期だの思春期だのという意味とは違いそうだ。

「クルアンさん、何かあるんですか？」

ハルの言葉に、お茶を楽しんでいた面々が一瞬、ばつの悪そうな顔をした。互いに顔を見合わせて、ぎこちない笑顔とともに

「まあ、でも……ハルが来たなら大丈夫よ。クルアンも段々こっちに来るようになるでしょうよ」

「そうそう、クルアンとハルは今日からルームメイトだし。」

アルタの『よろしくね』が、なぜか腑に落ちない。

ハルは湯船につかって天井を見上げ、ほぅーっと深いため息をついた。

8　ハル、ギルドメンバーとご対面（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
説明だらけになってしまいごめんなさい。フェララは芸術・学問では天才です（↑結論）。

9　ハル、お布団の中の睡魔に負ける

ハルは湯船につかって天井を見上げ、ほぅーっと深いため息をついた。

（……あ、この髪、ちょっと傷んでる。こっちもか。いや、これは光の加減かな……）

長期間の野宿のせいか、ごわついてしまったショートヘアーをいじって気を紛らわしていたハルだったが、どうにもクルアンのことが頭から離れない。

『クルアンはそういう時期なんだ』

なだめるような、スーサのあの言葉。十歳の少年が普通、年上の少女に対してそんなことをいうだろうか。もし言ったとしても、他の人がとがめるだろう。普通ならば。

氷の魔術師が希少であることは、ある程度の常識にはなっている。でも、彼らのことをきちんと知っている人が何人いるだろうか。

（珍しい人だから、他と体質が違うのかな。何か特殊な……）

「まだか」

ハルは体がしびれたようになるのを感じた。

女にしては極端に低く、短い一言。初めてクルアンの声を聞いた。

「ご、ごめん。もう出るから」

ハルが湯船からあがるのと、仕切りからバスタオルが投げ込まれるのとほぼ同時だった。

「ありがと」

大急ぎでぬれた髪を自分の小さなターバンで巻き、フェララがたった一日で仕上げたという白色のガウンを着ると、クルアンはそれを見ていたかのようなタイミングでバスルームに入ってきて、ハルはクルアンと目も合わさずに部屋に戻った。

クルアンと二人きりの部屋。女の子の部屋とは思えないほど殺風景で、大分傷だらけの机と、深い紫で宝石のようなものがちりばめられているカーテン、それに二段ベッドと洋服箪笥。天井には丸くて大きな電気がついているけれど、クルアンの目は闇でも効くらしく、つけないままだった。スイッチの場所を聞くのを忘れた（というより、何となく聞きにくかった）ので、仕方なく暗い部屋でベッドの梯子をのぼり、きっちりと畳まれた掛け布団に身を包んだ。

（ああ、めちゃくちゃあったかい）

おとといまでの野宿は、冬の名残が土に残っていて寒くて仕方がなかった。着替えもそう多くはなくて、びしょぬれのまま眠ったこともある。

フェララ特製の羽毛布団は、デザインも全くフェララらしかった。春らしい薄桃色の地に、草花がはなやかに描かれている。右下にＦｅｒｒａｒａの文字がアンティーク調の文字で派手に記されている

のは、アーティストの自尊心の表れだとハルは思った。

（初めて一緒に寝るのだから、クルアンが帰ってくるまでまっていよう）

と思ったのだが、あまりに寝心地が良かった。

ほどなくしてハルは、半年ぶりの安らかな眠りについたのだった。

9　ハル、お布団の中の睡魔に負ける（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
誤字脱字あったら教えていただけるとありがたいです。

10　アルタ、ケチャップと格闘する

「アイシクルエッジ」

じゃきん！もの凄い音で、ハルはベッドから飛び上った。音のした枕元をみて、ハルはぎょっとして身を引いた。

枕の両端から、大きな氷の剣のようなものが二本、突き出している。

「起床時間だ」

聞き覚えのある声の方を見ると、青い瞳のウィザードが少々腹立たしげにつぶやいた。それでやっと、ハルは昨日自分が拠点に到着したことを思い出した。

「あ、えと、おはよう」

クルアンは無言で部屋から出て行く。むしろもう一言、起きるのが遅いとか、なかなか目を覚まさなかったとか文句を言ってくれた方がいい。不機嫌な顔をされて無言で去られるのは、幼いころの悪夢を思い出させるようで寂しかった。

朝食にも、クルアンはこない。昼食にもこない。

「クルアンは、皆と食事したり、遊んだりしないの？」

ハルの素朴な疑問に、食器洗いをしていたアルタはぷっと吹き出した。

「ハル、遊びはなしよ、遊びは。クルアンは朝早くから拠点近辺の魔物退治に出かけて、午後には戻ってくるの。能力調査をあの子とスーサに頼んであるから、腹ごなしがすんだら庭に出るといいわ。」

能力調査って何なの、と口を開きかけたハルだったが、すぐに自分の護身用具の木製パペットをとりに部屋にもどった。アルタは小皿にこびりついたケチャップを落とすのに夢中になっていた。

スーサはすでに庭に出ていた。昼ごはんでおなかいっぱいになったあとだというのに、もう自前の武器、大斧を自由自在に振り回していた。ハルは邪魔したくなかったので、自分が来た事がわからないようにそっとしゃがみ込んでそれを見ていた。

もう、自分は子供ギルドみたいなお稽古教室に通っているんじゃないんだ、と、スーサの汗だくの顔を見ていると心に染みた。本気で闘う事の難しさを、ハルはまだよく知らない。この十歳の少年が、ハルが相手にした事のないような犯罪組織に斧をぶっ飛ばす光景というのはどうにも想像できなかった。ただ一生懸命に鍛錬をするスーサを、ハルは自然と尊敬していた。

１０　アルタ、ケチャップと格闘する（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

アクセス数１０００突破しました

喜んでる作者です。

11　焦点は鼻？

ほどなくして、真黒なローブに身を包んだクルアンが『守りの木々』の途切れたところに現れた。ハルは前からクルアンがどうして、ローブを口の上まであげ、魔法使いがよくかぶる（フェララ曰く、あれが一番魔力をためておける構造なのだそうだ）帽子も自分でつばを上げないと目が見えないほど目深にかぶっているのかよくわからなかった。つまり普段、皆はクルアンの鼻に向かって話しかけているわけで、そう考えるとおかしくて、ハルはくすくす笑った。

スーサはクルアンの姿をとらえると即座に武器を打っちゃって、真黒ずくめのウィザードの方に両手を広げて走って行った。

「あっ」

スーサがあの大斧をもつほどの怪力でクルアンに抱きついたので、両手に紙袋を持っていたクルアンは胸元にもろにスーサの頭突きをくらった。クルアンが少しよろめく。

クルアンはいつも暗いところで生活しているし、ベッドはいつも布団がしわくちゃのまま置いてある（そのまま寝ている）。その上ときおり見える唇は氷使いのためかほぼ真っ青、視線も態度もいつも冷たくて、時々同じ人間だということを忘れてしまう。

（そうか、クルアンもよろけるか）

当たり前の事を一人で納得していると、

「わ！　ハル、いつからそこにいたの？」

顔をあげると、いつの間にか二人は間近に来ていた。スーサはハルの頭を人懐っこくなでると、クルアンから預かったらしい荷物を置きに館に戻って行った。

クルアンと二人きりになるのは、嫌ではない。時間が引き延ばされたように長く感じるのは確かだが、それでもなぜか嫌ではなかった。

クルアンは帽子のつばをちょこっと上げてハルを見た。

「お前……」

相変わらずの低い声。向こうから話しかけてくるのは、今朝の『起床時間だ』以来初めてだ。

「職業なしか」

頷くしかない。暑苦しいけれど我慢してはおっているコートの下でもぞりと動く尻尾を抑えつける。

ハルはギルドメンバーともっと信頼関係を築いてからでないと、当分この力を明かす気にはなれないだろうと自分で自分に制限をかけていた。

「武器は」

「護身用にこのパペットだけ。自分専用のは持ち合わせてないんだ」

そこでクルアンは初めて、ハルと目を合わせようと控えめにかがみこんだ。透き通った瞳にじっと見つめられて、ハルはどこかやま

しいことが見透かされているような気がしてどきどきした。

11　焦点は鼻？（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
冬休みの宿題のおかげで更新遅くなってしまいました。

まだ宿題は終わってない作者でした（論文作成中）

サブタイが11なのに10になってたので訂正しました。すいません。

12　ハル、重たい剣を持つ

しばらく、沈黙が続く。見つめられたまま、目をそらすこともできず、ハルはただ黙って冷たい視線に対抗していた。

「にらめっこでもしてるの？」

身軽な格好で戻ってきたスーサの一言に、クルアンは黙ったまま立ち上がった。そしてすれ違いざまスーサの耳元に二言三言つぶやいて、今度はスーサと二人きりになる。

「剣をとってくるって。クルアンの」

とりあえず、準備運動でもする？といって、答える暇もなく屈伸を始めるスーサ。

「あの」

横に並んでアキレス腱を伸ばしながら、ハルは館のほうをみやった。

「クルアンは魔法使いなのに、剣も使うの？」

「あの剣は子供ギルドにいた時のものなんだって」

「そう……」

しばらくハルが考え込んでいたので、スーサは退屈になったのか、また斧を振り回し始めた。

「ねえ、スーサ。クルアンはいつもあんな感じなの？」

スーサが振り返った拍子に、斧が小さな掌から吹っ飛んで行った。しかしスーサは構わないらしく、放ったまま顔を曇らせる。

「確かにクルアンはもともとおとなしいけど、最近は何と言うか、調子が悪いみたい。前よりさらに笑わなくなったし。それに今は……」

スーサはしゃべるのをやめた。クルアンが、鞘に入った長剣を持って足早に近づいてくるのが見えたからだ。

片手で無造作に差し出されて、ハルはおずおずとそれを受け取る。質素な見かけによらず、子供ギルドの義務訓練で使った、先生曰く『安全な剣』とはモノが違うのがすぐにわかった。

「ハルも子供ギルドに入っていたから、キホンテキな身のさばきは知ってるよね」

キホンテキ。スーサとハルのそれが、果てしなくかけ離れているきがして、ハルはあえて曖昧な返事をして、とりあえず鞘から剣を抜き払った。冷たい金属音とともに露わになったのは、少し古びている長剣。ハルは子供ギルドの時、長剣を専攻していた。

「長剣の経験なら、あります。これは少し重たいけど」

スーサはその一文に驚きを隠せないようだった。

「えっ？　それ、僕が作れないくらいの軽さなんだけどな。」

普段どれだけ重たい武器を皆が使っているのか、見物である。ハルに手渡された剣は、片手ではせいぜい十秒も持っていれば手が震えてくる。

（自分に合った職業の方がうまくいくのは、あたりまえだよね）

ハルはため息をつきかけたが、スーサが目が笑って、早く訓練したいとせがんでいたので、とりあえずクルアンの横に並んでスーサに能力がどの程度のものか見てもらうことにした。

クルアンの武器はロッドと聞いていたが、今はハルと似たような剣を持っている。

「はい、構え」

一つ手を打つ音が庭からフリージングスピアまで響く。氷使いはハルのペースも考えず、重々しく剣をぬいた。

（うわぁ、緊張するよ）

12　ハル、重たい剣を持つ（後書き）

とっても更新遅くなりましてすみません。
読んでくださってありがとうございます。

13　長剣は向かないって・・・。

（うわぁ、緊張するよ）

ハルはできるだけ、子供ギルドの管理人達のアドバイスを思い出そうとしていた。一歩目が動きやすい、両膝を曲げた体勢。横から振りかぶらない、などなど。

「はじめっ」

言った瞬間、目の前に藁の束が立っているのが爆ぜるような音を立ててならんだ。

（ま、魔術！？）

びっくりしているあいだに、クルアンは女の魔法使いとは思えない見事な剣術で藁を無尽蔵になぎ倒していく。ハルが出遅れてもスーサは動じず、フリージングスピアのすぐ前で二人を見つめている。

最後の藁まで切り倒し、ハルは膝に手をついて呼吸を整えようとした。スーサはにっこり笑って

「うん、ハル、無職業にしてはいいよ。」

ハルの息切れが止まるのを待っていてくれた。クルアンは鞘に剣をしまいこみ、庭に腰をおろす。ちょうど雑草が元気になってきた頃で、若草色の庭に真黒なウィーザードが座っているのが無償におかしかった。笑うのをこらえていたら、息切れがひどくなった。

「もういい」

不意にクルアンが言い捨てた。

「長剣は向かない」

一瞬、なにを言われているのかよくわからなかった。理解する前から、理解したくないと思った。そして理解した時、理解した事を後悔した。

何も言えなくなったハルのかわりに、スーサが

「もう少しみてあげたっていいじゃないか。クルアンはルームメイトだし、ギルドの仲間だろ？いつかはイノセントタナトスと一緒に闘うんじゃないか」

無言で立ち去ろうとするクルアンのローブのはじっこをスーサが掴んだ様だった。無理やり立ち止まらされて、クルアンはまたよろっときた。

そして、膝から頽れた。

ぱたりという音にハルが顔をあげると、支えようとしたスーサを下敷きにして仰向けに倒れているクルアンがそこにいた。

13　長剣は向かないって・・・。（後書き）

更新遅れてすみません。
読んでくださりありがとうございました。

１４　クルアンが倒れた

「貧血よ。安静にしていれば大丈夫。」

クルアンの額に湯で絞ったタオルをのせて一つ頷くと、フェララはロングスカートの裾を大きくひるがえして個室から出て行った。

スーサの頬に絆創膏を貼りながら、ハルはクルアンを見やった。

帽子を取ったクルアンは、髪が短いせいか小さく見える。威圧感も減って、ただ血の気のない顔が洗いたてのかけ布団で溶けるように眠っていた。あの茶色い髪は帽子についていたものだったらしい。ただ帽子のつばの陰から出てこない例の片目は、不自然にのこされた前髪に隠れていた。

「スーサ」

「うん？」

「フェララは貧血だって言ってたけど、本当は違うんだよな」

唐突な質問にスーサは戸惑ったようだった。下を向いて黙りこくってしまった。

「だって、貧血で気持ち悪い時に、あんな剣の振いなんてできない。」

スーサはじっと黙っている。クルアンは昏々と眠っていて、自分が口を閉じるたびに広がる沈黙が居心地悪くて、ハルはクルアンの

青い唇を見た瞬間からずっと思っていた事を口にした。

「クルアン、病気なの……？」

隣の丸椅子に座ったまま、スーサは首を縦に振った。一度認めてしまうと、それ以上かくしている気をなくしたらしく、スーサはぽつぽつと話し出した。

「クルアンは氷のウィザードの中でも、魔力の量が貴重なんだ。他のウィザードじゃありえないような物凄い量をもっていてね。過剰魔、っていう病名だってフェララがいってた。クルアンが命を狙われたり、さらわれそうになったのは、そのせいがある。それに……」

スーサはちらっとクルアンの顔を見た。つられてハルの目もそちらに行く。まぶたが微妙に動いた気がしたが、寝息はやすらかに続いている。

「なんていうか、不思議な能力っていうか。僕が勝手にしゃべっちゃいけないような力を持ってる。どちらかというと、その能力のせいで狙われたようだって、フェララが一度調べた事があったな。」

そして今、クルアンは魔力の製造の山場に入っている。もともと多い量に、器に入りきらないほどの魔力があふれかえって、不本意に魔法を使ってしまう事があるらしい。

「特殊な能力が無意識のうちにに使われて、そのせいで最近、僕らと関わり合いになるのを避けていたんだ。人と関わらなければ使わずにすむ力だったから。」

「そういう時期っていうのは、病気のせいだったんだ」

「病気っていうほどのものじゃないよ。山場が終わってしまえば、元通りになる。普通に話したり、笑ったりできるようになるよ。……こうなる前も、クルアンはあんまり笑わなかったけどさ」

スーサは心配そうにため息をついて、クルアンの額のタオルをひっくり返した。その姿は、姉を気遣う弟のようだった。

「それがお湯で絞ってあるのは、クルアンの氷の魔法をおさえるためなの？」

「ああ、うん。温かい物は、魔力の活性化をおさえるからね。」

しばらくして、スーサが眠そうに舟をこぎはじめたので、ハルは自分が一人で見ている、と言ってクルアンのベッド脇を占領し、頬杖をついて病人を見守っていた、

１４　クルアンが倒れた（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

来月七日から模試があって死にそうな作者でした。

15　母と子

しばらくして、スーサが眠そうに舟をこぎはじめたので、ハルは自分が一人で見ている、と言ってクルアンのベッド脇を占領し、頬杖をついて病人を見守っていた。

『気をつけてね』という、意味深長なスーサの言葉の意味を考えてながら。

「狙われるの、欲しがられるのも、つらいね。あたしもつらかったよ」

ハルはふと、アルタとあんなに楽しく話すようになっても、言い出す事ができなかった事を、眠りに入っている少女にぶつけていた。

「ねえ、もしかしたら、普通に生きる事が一番幸せなのかもしれないね。嫌われても、好かれても駄目なんだ、きっと。

それでもあたしさ、まだ自分が一番不幸せな気がしてならないんだ。誰にも言えない力なんて、いらなかった。」

きっとお父さんもお母さんも、テレジアのせいであたしから離れて行ったんだ。そんな思いが、誰にも言えずに、心の重しになっていた。

「ずるいよ。苦しんでいる事がわかってもらえる苦しみなんて。守ってもらえるなんて不公平だよ」

悔しくてたまらない。シーツを握りしめ、ハルはそのまま軽くゆ

すった。クルアンは眠ったままだ。ハルは笑った。

「あたしたち、似てるね。職業としての力と、特殊な力。命を狙われる。両親はいない。何日も野宿して、たどり着いたのはレグルス。それでもあたしは……」

ぴくり、とクルアンの小指が動いた。ハルははっとして、二段ベッドの下段の柵から身を引く。

「まだだ」

かすれた、低い声を出して、クルアンの顔がゆがむ。

「負けたら……駄目だっ！」

突如、目の前が真っ白になった。そして轟音が耳をつんざいた。

「きゃああっ！」

突然目の前が硝子の壁で真っ白になって、ハルは怯える前にあけに取られた。ハルはきょろきょろあたりを見回したけれど、どこを向いても壁、壁、壁だった。でも、そっと手を置いてみると、

（これ……硝子じゃない。）

凍る様な冷たさに、反射的に掌を離そうとすると、はがれない。氷がとけて、また凍ったようだ。くっついたままの掌から、じんじんと凍傷になった時のような鈍い痛みが伝わってくる。ハルがもう一度腕を強く引いてみると、突然風景が変わった。

氷の壁に、３６０度の映画スクリーンのように映し出されたのは、男の子とも女の子とも見える小さな子供をかばう母親の姿だった。背景はぱちぱちと爆ぜている暖炉、ハルのいる背後から蔽いかぶさるようにして襲ってくるのは、炎のかたまりのようなものだった。

『アイスクラッシュ』

真っ白な髪を顔面にまとわりつかせたまま、母親はその炎の向こうをにらみつけてワンドを突き出した。紫色の宝玉から大量の氷の破片が飛び出し、炎の勢いに対抗する。でも、水に弱い炎でも、氷を全てとかしてしまうほどの力があったようだ。すぐに猛り狂う炎の群れが二人に迫ってくる。

『お母さん』

子供が母親のローブをつかんだ。紫色の三角帽子をかぶり、ローブをまとった女性は目に涙を浮かべて、子供を包み込んだ。

『駄目だね、お母さん。負けちゃったよ』

子供の顔が引きつる。自分がたたかうと言って母親のワンドの柄を引っ張るが、当の母親は武器をしっかりつかんで離さない。

『もう負けちゃってもいいのよ。お母さんはもう、疲れちゃった』

『まだだよ、ねえほら早く』

炎は音を立てて、親子ににじりよっている。それはハルに襲いかかってくるのと同じ感覚だった。

炎と親子の板挟みになって、ハルは意味もなく呻いた。氷に張り付いた掌はもう感覚がない。それでもなんとか放たれようと、渾身の力で引っ張った。

（ぬ、抜けた！）

はまっていたわけでもないのに、そう思った。ハルが顔を上げると、丁度手をついていたところにひびがはいって割れるところだった。

ハルは本能的に頭をかばった。そうして小さくなって伏せた。そして、ハルが思った通り、壁は爆発するかのような音をたててハルの頭上に降ってきた。欠片同士がぶつかりあう、天使の鈴の様な音の中に、聞いた事のある台詞がまじって耳に入ってきた。

『負けたら駄目だ！』

爆発音が本当にスクリーンが崩れただけなのかわからない。もしかしたら炎に弾ける母と子の音……。

「ハル！」

15　母と子（後書き）

（≧≡∀≡≦）

模試のおかげで逆にハイテンションな作者でした。

読んでくださりありがとうございました。

16　逆サイコメトリー

「ハル！」

アルタの温かい手がハルの腕を軽くはらった。

ハルが目をあけると、あの親子はいなくなっていた。ただ自分の周りにある真っ白な、まだ震えている欠片を見ただけで、ハルはあの暖炉の炎が爆ぜるのを目の前に見る事が出来た。

「大丈夫？怪我はない？」

アルタに支えられ、やっと立ち上がったハルだったが、四角く散らばった氷の破片から視線をそらすことができなかった。

「クルアン……」

アルタの温もりが一時離れる。思わずその方に目をやると、ベッドに身を起こしたクルアンが呆然としてこちらを見ていた。ハルを、というよりは、その周りに散らかっているものをじっと見つめている。何がなんだかわからないという表情で、クルアンはアルタとハルを交互に見た。

そして、汗ばんだ手で柵を乗り越え、帽子をかぶり、靴をはいて出て行きかけた。

「クルアン、もう話していいよね？」

アルタの叫びにしばらく立ち止まる。そのあと無言で答え、クル

アンは扉を閉めた。

アルタは相変わらずの甘い物好きで、ハルがむせるほど甘いココアを差し出しながらおおきくためいきをついた。

「大変なときにきてしまったみたいね。」

氷の壁の正体は、クルアンが詠唱なしで稼働した絶対防御壁だった。意識が混濁状態だったため、標的が外れ、自分ではなくハルの周りに作られた、というのだ。

「病気については、もうある程度スーサが話してくれたみたいね。」

「うん。過剰魔力量によるものだ、と。でも、特殊能力については話してくれなかったよ」

「そう。それについてなんだけど……ええと、なんて言ったっけ」

「それについては、私から話した方がいいんじゃなくって？」

きついつり目がかすかに笑う。大きなリボンを頭に飾ったフェララが、藍色の表紙の分厚い本を片手にリビングの入り口にたっていた。

アルタがほっとした表情で席をはずすと、そこに淑やかに腰をかけ、フェララは本を脇において、ハルの表情などおかまいなしにつ

らつらと話し出した。

「クルアンの能力は、まだ研究途中の段階よ。通称逆サイコメトリー。」

ハルはハッとフェララのこげ茶色の目を見た。

「逆サイコメトリー？」

「そう、テレパシーを受け取ることはできずとも、発信することだけはできる人間の事をいうわ。テレパシーでもサイコメトリーでもない能力で、非常に貴重なの。だからクルアンは狙われた……戦力にした時、裏切りができないようにね」

「……クルアンの心を全て読み取っていれば、たくらみを先読みする事ができるってことですか？」

１６　逆サイコメトリー（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
いつのまにか週間ユニーク１００人超えてました。感謝感激です。
お気に入り登録してくださった方ありがとうございます。

これからはもう少しちゃんと小説情報をチェックするようにしたいと思います。

17　傷つけたくなかったんだね。

「……クルアンの心を全て読み取っていれば、たくらみを先読みする事ができるってことですか？」

「そうよ。逆サイコメトリー目的でクルアンに近づいた輩はみんなそう思い込んで、クルアンを守り続ける母親の命を奪おうとしたの。最低な奴らよ」

フェララはどこへともなく、軽蔑の眼で机の上を見下ろした。

「でも逆サイコメトリーは、皆が思うほど完璧じゃないの。むしろ邪魔な能力よ。だってサイコメトラーがいなければ、クルアンの想いは伝わらず、空中で消滅してしまうんですもの。サイコメトラーなんているかどうかもわからないしね」

感情を発散するだけして、誰にも感じ取られないまま消滅する。

（それはそれで楽そうだけどな）

嫌な事があったとき、そんな芸当ができればどんなにいいだろうと、ハルは再挑戦したココアで再びむせながら考えていたが、すぐにフェララに打ち破られた。

「氷のウィザードの魔力は、『気』とつながっているわ。つまり『気』が増幅すれば魔力も増幅し、魔力が増えれば『気』もあふれるの。ハル、クルアンの魔力が最盛期に入っている今、『気』はどんどん溢れ出しているわ。それを補うために今まで抱いたマイナスの感情がどっとよみがえってくるの」

（えっ！？）

フェララは本の表紙をなでながら、大きく息をついた。

「可哀そうにね。クルアンは今、常に今までのマイナスの感情や思い出したくない記憶を、なんとかして抑えようと必死なのよ。だってずっとそんなもにのまとわりつかれてたら壊れちゃう。でもレグルスにはサイコメトラーという受け手がいないから、魔力はずっと放出される一方よ。……人間が傍にいると、その能力が使われやすくなるし。」

その瞬間、いままでのハルの疑問がパチンとつながった。

（だからいつも食事にこなかったんだ）

極力人に近づかず、顔を合わせず、しゃべらない。そうすることでクルアンは自分の心を守っていたのだ。

「じゃあ魔力の最盛期が終わるまで、クルアンはずっとその嫌な感情とか思い出とかを……まとったまま？」

相手は目を閉じてうなずいた。

「そういうことになるわ」

（なんてこと……）

ハルは話を聞いているだけでも気が遠くなりそうだった。十五年分の嫌悪感や悲壮感、傷つけられた過去を思い出し続けるなんて、

どんなにつらい事だろう。さらにそれを思えば思うほど、魔法がおさえられなくなり、不本意に魔法を発動する。

ゲームと違って現実世界の魔法には、味方同士で闘う事はできない、という法則なんて勿論ない。人間に近づいて、もし氷の刃がその人に突き刺さったら？それが一緒に働いているギルドのメンバーだったら？

クルアンはギルド設立当時からずっとレグルスにいる。レグルスに対する思い入れは、拠点に到着してからたった二日のハルには計り知れないほどだろう。

仲間と自分を守るために、クルアンは今ずっと一人ぼっちでいるんだ。

部屋に戻ると、クルアンは二段ベッドの下段で、枕に頭をのせ、足を三つ折りにした敷布団の上に放り出してじっとしていた。上段はクルアンの魔法で壊れてしまって、今はスーサが自分の部屋に運び込んだ後で（僕とフェララでなら、五日もすればなおるよ！と意気込んでいた）、今はそれが二段ベッドだったという証拠はどこにも見当たらなかった。

17　傷つけたくなかったんだね。（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
また、ファンタジー小説の数が急増したような気が・・・；；

18　ハル、クルアンとともに逃げる

（眠っているのかな）

ハルはそっと箪笥の一番下をあけ、寝間着とバスタオルを抱えてバスルームに入って行った。

その途端。

じゃきん、と聞き覚えのある音が聞こえた。それから何かが転がる音。

「何？」

また絶対防御壁でも召還してしまったのではないかと心配になって、ハルはおそるおそる扉を開けた。そして息をのんだ。

くの字になって休んでいるクルアンの腹すれすれに、巨大なつららの先端が突きつけられている。クルアンは気づいたらしく、微妙に身をおこしてそれを食い入るように見つめていた。天井から生えているその隣に、小さなつららがいくつか頭を出している。

クルアンの腕ががくりと大きく揺れる。

「危ない！」

考えるより先に、体が動いた。呆然としているクルアンの腕をつかみ、思い切り引き寄せる。次の瞬間、もといたところにまた大き

なつららが降りてきた。

それからはもうとまらない。じゃきじゃきとたちバサミを使うような音と共に氷の剣のようなものが次々と天井から、床からはえてきて、猛獣の歯を形作っていく。クルアンは一言も唱えていないのに。

ハルは幼いころから回避には自信があった。次々と振ってくる攻撃をかわし、クルアンの手を引いて部屋から脱出した。部屋から出てしまうと、クルアンの魔法が大人しくなったようだ。ぴしぴしと若干板の間に霜をおろして、それきり何も起こらなくなった。他のギルドメンバーは浴室にいるか寝ているかしていて気付かなかったようで、誰も駆けつけてこない。

しばらく、クルアンの手を握ったまま、ハルは息を切らしてあたりの様子をうかがっていた。クルアンも同じく、首から下はじっとしている。

18　ハル、クルアンとともに逃げる（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
絶賛スランプ中なので、少し読みにくくなっています
すみません・・・。

19　ハル、胸のボタンを留め忘れる

「大丈夫かな」

クルアンの顔を覗きこむと、なぜか相手はハッとして目を背けた。

「……ボタン、とめろ」

「は？」

目が点になった。胸元のボタンを二つあけていたが、別に何が見えるわけでもない。それでもクルアンは、ローブを口元にあててそっぽを向いている。

「ああ、ごめん……って、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ、怪我はない？氷がかすったりしてない？」

ハルはクルアンのローブを引っ張って体を起こそうとしたが、クルアンはその手を振り払った。

「いいから、とめろよ」

振り払った瞬間に、ちらりと赤いものが目に付いた。手の甲からわずかに血がにじんでいる。

「ニホンの女の子はそんなこと気にしないから大丈夫だって。それより怪我。アルタならすぐ治せるよね」

クルアンは恥ずかしそうに顔を伏せて、女の子とは思えないテノ

ール調の声でぽそりと呟いた。

「俺は……男だ」

クルアンの言葉を理解するのに、またまたしばらくの時間を空けた。沈黙の中で、クルアンはうつむき、ハルは首をかしげている。その状態で、三分くらい、ずっと廊下で固まっていた。

「えーっ！」

ハルの叫び声に、やっとこさ目を覚ましたらしいアルタがガウン姿でかけつけてきた。

20　二段ベッドが二段ベッドでなくなったってことは、つまり今二段ベッドは

女にしては声が低かったとは思う。肩幅は広いし、手が大きいとも気付かなかったわけではない。

しかしあの帽子についているフェイクがネックであった。あんなに髪が長いと思い込んだら、誰だって女の子だと間違える。ハルが顔を真っ赤にしてそう説明するも、アルタはソファに腰をかけ、腹を抱えて笑いころげていた。

「クルアンが女の子って……愛想なさすぎでしょう……声低いじゃないの……あはは」

クルアンはアルタが来たとわかると、のっそりと立ち上がって部屋へと戻って行った。入りしな少し姿が揺らいだ気がしたが、倒れる音も聞こえてこないのでおそらくベッドに入ったのだろう。

「クルアンが女の子だったらそれはそれで面白そうだわ」

（面白そうだよ、じゃなくて、もう笑ってるじゃない）。ハルはぷっくりと頬を膨らませて、自分も寝ますとギルドマスターに背を向けた。

「……ん？」

くるりと方向転換したまましばし、停止する。

「どうかしたの？」

ハルは二段ベッドでなくなってしまった二段ベッドの事を考えた。

二段ベッドが二段ベッドでなくなったってことは、つまり今二段ベッドは二段ではなく一段だということで、要するに私は今日寝るところが下になるわけで、クルアンは下で寝ていて。

「クルアンと同じ布団で寝るのですか？」

アルタはきょとんとしてハルを見上げた。

「何か問題でも？」

ハルは恐る恐る部屋に忍び込んだ。いつもより狭く見えるのは気のせいだけれど、今夜眠る所は明らかにせまかった。

子供ギルドでは男女の部屋は勿論わけられていたので、異性と寝るのは生まれて初めてだった。

「あのぅ」

ベッドの柵に手をかけて用もなく呼びかけてみたけれど、予想通り返事はない。真っ暗な部屋の中では、クルアンの瞼が閉じているかどうかさえわからない。ハルはベッドの前で立ち止まってしばらくおろおろしていた。でもすぐに眠くなってしまって、意を決して布団の中にもぐりこんだ。

その途端、クルアンの側からかすかな冷気を感じた。昼間の長剣訓練の時は感じなかった、冷たい風。少しずつ魔力が溢れ出している

証拠だった。

２０　二段ベッドが二段ベッドでなくなったってことは、つまり今二段ベッドは

読んでくださりありがとうございます。
学校のことが色々忙しくなってきますが頑張って更新していきます！

最近やっとハルちゃんの人格が定まってきました。一安心なのです。

21　クルアンの手・・・。

（そういえば、クルアンが詠唱せずに魔法を発動したのは二回とも眠っているときだ。もしかしたら、眠っているときに魔力の量が増加するとか、かなぁ）

実はフェララの言っていた事を完璧に把握していたわけではない。フェララはハルにはちょっと早口すぎた。ただおぼろげにわかったのは、何か嫌な事を思い出すと無意識に魔法を発動してしまうという事と、逆サイコメトリーの能力があるということだ。

（本当に存在していたんだ、逆サイコメトラー。）

サイコメトラーでなければ感じ取れない、微弱な心の振動を発する特殊能力のこと。遺伝性ではなく突然変異で現れるため、生まれた時から発症するとは限らない。子供ギルドの授業の中で、ハルが唯一興味を持ったのはこの逆サイコメトリーについての講義だった。ハルはギルドの先生は乱暴だからあまり好きではなかったけれど、このときばかりは教卓の目の前に座りこんで聞いていたものだ。逆サイコメトラーがいれば、私が生きている意味が出来るかもしれないと、胸の奥にどこかくすぐったい、期待に似た物が飛び跳ねていたのを今でも思い出せる。

でも大人になるにつれて、そんなおとぎ話は探したってみつからないのだと、いつの間にか忘れていた存在、逆サイコメトラー。

ハルの考え事にストップをかけるかのように、クルアンの口元から、痛みを耐えるような小さい声が聞こえた。ハルの方に寝がえり

を打ってくる。ハルが避けようとすると、手元の枕カバーの端っこを強く掴んで、うなっていた。

（悪い夢でも見ているのかな）

ハルはクルアンの手を握ってあげようとしたけれど、心臓がばくばくして手が震えて、どうにも駄目だった。男の子の手をつかむから緊張しているんじゃない。触れた瞬間に自分が何を感じるのかを考えると怖くて、でもどうしても震える手を包んであげたくて、どうしよう、どうしようと戸惑うハルの耳に、はっきりとひとつの言葉が聞こえてきた。

「母、さん」

胃袋がきゅうと縮む感じがした。それから、心臓のど真ん中を硝子の破片でえぐられるような衝撃が走った。

21　クルアンの手・・・。（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

次回はちょっと暗くなりそうです。

お気に入り登録をしてくださった方、ありがとうございます。

励みになります。

22　炎と青と閃光と

胃袋がきゅうと縮む感じがした。それから、心臓のど真ん中を硝子の破片でえぐられるような衝撃が走った。降りしきる雪の中で、森の奥に溶けて行く後姿が目の前をかすめる。

「あ……あ」

両手が言う事をきかない。変に引きつり、こわばっている。呼吸があらくなる。母のこと、テレジアのこと、自分の特殊能力のこと。

「いやだぁっ」

誰の言葉だったかよくわからなかった。

気が狂うほどの豪速で巡る瞑想を振り切りたい。ハルはクルアンの手の甲をつかんだ。

一秒……二秒……。何も流れてこない。ただクルアンの苦しげな息づかいが夜の闇に響いた。

やっぱり、テレジアがなければ反応しないものなのかな。手を離しかけたその刹那、意識の電源の途切れるようなブツッという大きな音が耳に響いた。その異音が頭蓋骨に響き、するりと頭の中心に入り込んでいった。

ハルは暖炉の前にいた。

ぱちぱちと爆ぜる火の前にいるのは、ハルだけではない。その上に覆いかぶさっている女の人が一人いる。女の人はぐったりとしていて、半分ハルにのしかかるような状態だ。背中にまわされている片手は、血の温もりがない。とにかく冷たい。しかし浅くかすかな息が、まだその女性の胸の内で心臓が燃えていることを示していた。

ハルは不思議な気分だった。まず、女性の手が冷たい事を当たり前だと思った。おまけに、今自分が座っているところがずっと住んでいたところのように、知っている場所のように感じていた。

（危ない。ほんとに、危ないよ）

頭の中で警告の鐘の様なものがかき回すような鳴り方をしている。誰かに追われている感触が、心にこびりついている何かを掻き立てている。

「あの……」

見知らぬ女性に声をかけてみた。女の人の顔は濃い紫色帽子とマントに隠されてよく見えないけれど、ほぼ真っ青な唇が

「静かにしていなさい。何もしてはだめ」

と幼い子を叱りつけるような強い口調でハルの肩をすくませた。この人の言う事は聞いた方がいい、という、どこからきたのかわからない本能に口をふさがれて、ハルはローブの向こうに見えるいくつもの人影をじっと睨みつけた。三角帽子をかぶっている者と、頭巾をしている者とがいる。それぞれ自分の武器を、敵意をむき出しに

してこちらに構えている。

女性は息も絶え絶えだ。手に握っている短いワンドについている黄金の羽根飾りはぼろぼろで、何か打撃を受けた拍子に崩れたのか、微量の金色の粉が散らばっている。

「あきらめろ。女王蜂の時代は、もう終わりだ」

低い男の声が響く。その後ろに、ぞっとするような黄色い高笑いがついて回った。背筋を冷気が駆けて行った。

狂人の集団。声を聞いた瞬間に、そんな考えが頭を巡った。

女の人は唇を噛み、手元の武器の柄を強く握った。

「私は女王蜂なんかじゃない。……この子も物などと呼ばせはしない。」

男の声は残酷な嘲笑をした。

「その無様な姿で！よく言えたものだ。……さあ、その宝物の魔法を見せてもらおうか」

（宝物って、何の事。）

その宝物って……私？

ハルは女性にしがみついた。女性はハルを強く抱きしめ、かたくなに黙りこくっている。

「……さよならだな、女王蜂。」

刹那、一陣の風と閃光が耳元を貫いた。

23　血に屈した金色

（え？）

耳の端がじわりと痛む。手を当てると、明らかな血の感触があった。

（今の……レーザー光線？）

貫通効果のある魔法が自分の耳元を傷つけた。ということは、とハルは女性を見やる。ハルは息をのんだ。

「騒いじゃだめよ。お母さんは大丈夫」

変色した部分の布をかくそうと、女性は肩の部分に手を当てた。

「……じゃ、ないのかも」

「え？」

見上げたハルに、青色の唇が笑いかける。その背後から迫ってくるのは、炎のけだものだった。

「魔法を使って、お願い！」

ハルの叫びに刺激を受けたのか、女性は壊れかけのワンドを突き出し、一言呟いた。

「アイスクラッシュ」

金色ワンドの先から氷のカケラがいくつも飛び出る。氷達は炎に抵抗したけれど、敵の魔法の方が強かったらしく、掌の雪のようにすぐにとけてしまった。

この光景、どっかで見た事ある。ハルは、この先の出来事がわかってしまった気がした。

「だめだね、お母さん、負けちゃったよ」

まだだ。まだ闘える、と言いたいのに、喉が渇いて、声がかすれてうまく言えない。炎はどんどん近付いてくる。辺りはどんどん熱くなる。

「もう、負けていいのよ。お母さんは、疲れちゃった……」

炎が来る。来てる。ハルの頭にはそれしかなくなっていた。火がこっちに走ってくるよ。あれに触れたら死んでしまう。この人も私も死んでしまう。

「やだ、ねえ、早くもう一度」

「死になさい。って、誰かの声が聞こえるわ」

炎の指先が、紫色のローブに触れるその寸前。

「っあ……」

目を覚ましたハルの目に映るのは、何もない暗闇だった。どこかで感じた事のある匂い、クルアンの部屋の香りだ。

23　血に屈した金色（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
初めて感想をいただきました、ありがとうございます。

模試や学年末試験が近くなっているので、更新できない日が出てくるかもしれませんが、よろしくお願いします。

24　封じたはずの尻尾

（今のは）

「夢……？」

ハルは自分の両手のひらを、意味もなく凝視した。背中の真ん中をまだ冷たい掌が支えている気がして、ハルはぶるりと身ぶるいして自分の肩を抱きしめてみた。

ハルはクルアンの部屋の中で、なんとたっていた。確かにベッドで眠った筈が、ふらふら立ち歩いたのだろうか、とにかく肌触りの悪いカーペットの上に、パジャマのまま突っ立っている。

「……お母さん」

ふと、女性を呼んでみた。

お母さんはもう疲れてしまったと、そう言っていた。何に、とは聞けなかった。とにかく恐ろしい夢を見た、という気持ち悪さがまだ全身を滴りおちる。

滴り落ちる？

何が？

身体中、流れ落ちるほどの

「汗？」

生まれてから嘗てないほどの大量の汗を、ハルはかいていた。今までにも悪い夢を見る事はあっても、こんなに汗だくになった事はない。

ただ悪い夢でなくても、汗だくになる理由がハルには一つだけあった。

（まさか、ノンテレジア作動？）

そんなはずはない。テレジアを尻尾に封じ込めてからは、あの力がちゃんと使えたことなんて一度もない。

（でも……もしかしたら……）

ばたばたっと、大きな水滴のおちる音が暗い部屋に響く。裸足の甲に、冷たい汗が広がる。

（血だ……）

汗を掌で受け止めた瞬間、女の人のローブを染めていた真っ赤な液体を思い出す。胃がきゅっと縮まる。吐き気が喉のすぐそこまでこみ上げてきた。しかし吐き気よりも、頭の中で打ち鳴らされていたあの警告の鐘の余韻が響いて、くらくらする。

――駄目だ。

25　アルタ、甘さ倍増の魔法をかけ損ねる

「ハル。ハル、大丈夫？」

毛布の上から優しく肩を叩かれて、ハルはやっと自分が今まで寝ていた事に気付いた。

「アルタ……」

アルタは心配そうな顔で、体を起こすハルに手を差し伸べてくれた。

「床で寝てたって言うじゃない。ベッドの柵から転げ落ちたの？」

「へっ」

素っ頓狂な声をあげて、あたりを見渡したハルは、自分が寝ている所を見て間の抜けた感嘆の声を上げた。

「おー、じゃないでしょ、おー、じゃ。今日は待ちに待った依頼が来てるの。早速ハルにギルドメンバーデビューしてもらうから、がんばってね」

アルタに髪をなでてもらうと、床で寝たせいか冷えている体に春の訪れのような温もりが広がった。最高の気分で、ハルは食卓についた。

「今日の料理は私が作ったんだからね。天下無双な逸品なんだからね。残さず食べて、今日もしっかり稼ぐわよー」

フェララがそう自慢する途中でナイフを取ってかすかに振り回したのを、隣でサラダをほおばっていたスーサが大げさに身をひいてよけた。

「ふん、おいひいよ。」

「口に物を入れたまましゃべらないでよ。私の美の定義に反するわよ」

スーサは苦いベビーリーフの入ったお皿に、何を思ったかミルクをどっぷりと入れて一気にかきこんでいる。その横でアルタは、チョコレートクリームのかかった食パンに手をかざした。

「アルタ、私のチョコレートクリームに『甘さ倍増の魔法』掛けたら私、とっても怒るから」

図星だったのか苦笑しかできないアルタの左、ハルの右隣には、相変わらずの空席があった。

（クルアンはまた魔物退治かな）

「今日はハル向けの依頼がきたのよね。フェララ、ちょっと説明してあげて」

「ああ、そうそう。」

フェララが手元のメモ帳をめくりはじめると、ハルの視線は空席

からそちらに移った。外部から届く
依頼を受諾するのは初めてだ。本格的な『稼ぎ』に入るということ
で、ハルは瞳をきらきらさせてフェララの色っぽい口元が動くのを
待っていた。

25　アルタ、甘さ倍増の魔法をかけ損ねる（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
模試が終わって（≧∀≦）　になっている作者でした。

次回はハルちゃんの初依頼です。

26　ハル、独創的なドレッシングに遭遇する

「依頼内容はどっかの馬鹿なコソドロ団体だって。なんでも依頼主の総括している村は非武装の法律があるとかで抵抗できないらしいわ」

御苦労さまねー、武器以外に抵抗する方法がないと思ってるのね、と、依頼書に向かってぶつぶつ言いながら、フェララはミルクでむせている少年の背中を軽くたたいた。

「スーサ、あんた一緒に行って頂戴。馬鹿の塊だということを自覚して、あちらも量は沢山いるらしいわ。一人じゃあ面倒くさくてやってられないでしょうから」

スーサはフェララに背中をさすられながらコクコクと二回頷いた。

「けほっ……くひょっ」

「独創的なドレッシングね」

なんでサラダに牛の乳なのよ、というフェララの頬のふくらみには気がつかなかったようだ。フェララは食事をすませると、席をたち、窓辺のマニキュアの中の一番濃い赤を取りだし、キャンプの様な木製のバルコニーに出て行った。

フェララはなんというか、自由気ままな人だ。食べ終わったら、すぐに席を立つ。眠りたいときは、起きない。絵を描きたいときは、どんなに上等な服を着ていても、前掛けもせずにいきなり筆を取るのだそうだ。ただフェララは自分のことは全て自分でこなしてしま

うので、特に迷惑を被った事はないという。ただ、ミルクの海に沈没したベビーリーフをフォークで救出しているスーサは不満顔だ。

「フェララのサラダにミルクかけると、怒るんだ。あたしの手でちぎったベビーリーフなんだからちゃんと食べなさいとか、ハンバーグの肉とチーズと分離したら乗っけてから食べるのが筋とか、全く……」

サラダにミルクはさすがにおかしい、という言葉を飲み込んで、ハルはスーサが食器を置くのを、窓の外の景色をぼんやり眺めながら待っていた。

26　ハル、独創的なドレッシングに遭遇する（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
本日学校の部の部長を引き継ぎました。
これからも創作活動頑張っていきます！

27　ハルとスーサ、初依頼に出発する

「よし、じゃあ行こうか。」

腹ごなしをすませて支度をしたスーサが玄関先に現れると、ハルは思わず感心して全身を眺めた。

全体的にゆるやかで、動きやすそうな服装なのは普段と変わっていない。カーキ色とか小麦色で統一された、作業着に似た格好は変わっていない。ただ新しく加わったおでこの黒いゴーグルがスーサの笑顔によく似合っていた。

「それ、いいね。」

指さして素直に言うと、スーサはぱっと顔を輝かせて頷いた。

「旅に出るときに母さんがもたしてくれたの。特に防御が上がるわけでもないけどさ、なんか安心するよ。」

そう言ってスーサはほこらしげにゴーグルを指先でちょいとあげた。

「それじゃ、出発！」

「いってらっしゃい、気をつけてね」

アルタに手を振り返しながら、ハルはポーチの中のパペットを取りだした。

「ねえ、前も思ったんだけど、それ、怖くない？」

おずおずと指さすスーサ。

ハルの護身用のパペットは木製で、兎の形をしている。手をうごかすと兎の口が開いて、そのいくつもの歯で相手をつかむ、というごく簡単な細工のものだった。

「まあ、口が怖いのは護身用だからだし……目が血走ってるのは持ち歩いているときについた傷なんだけど」

怖いかな、と呟いてパペットと目を合わせて見る。

思わず目を背けた途端スーサが笑いだした。

「フェララに見せたら改造されちゃうね。美しくない。美しくないわ！見てられないもの！って」

スーサはよく笑う。フリージングスピアの暗さもふっとばせるくらいよく笑う。くすくすとお腹を抱えるたびに、背負っている斧がかすかにはねる音がする。

スーサに手をひかれていたら、フリージングスピアをあっという間に抜けていた。目の前には草原がざっと広がり、その向こうにちっぽけな港が見える。

「あそこの港ね、来るときに降りたんだ」

あの舟でアルタに肉を勧められたのを覚えている。確か居眠りしているところを起こしてくれたんだっけ、と口の中で言いながら、

ハルは手招きするスーサにつられてその舟の停泊所へと走り出した。

27　ハルとスーサ、初依頼に出発する（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
自己加速のため連投してみました。

28　ハル、ゴール手前で地図を取り出す

舟にゆられて小一時間。またもやにゃーにゃーと間の抜けた鳴き声に負けて眠りこけてしまったハルは、膝を抱えて座っていたのがバランスを崩して横転し、頭が舟の床板に激突した。

ずきずきと痛む頭を抱えて舟から降りるハルの手にはまっているパペットを、スーサはまだしげしげと見ていた。が、ハルがフェラフラからもらった地図を取りだすと今度は熱心に顔を突っ込んでくる。実際そうしてもらう方が都合がよかった。地図は苦手だった。

「ハル、何で今頃地図出すの。もうそこが村の入り口だよ」

あれっ、と顔を上げると、下り坂のゴールに小さく一軒家が立っているのが見える。

依頼内容のメモとそのボロ家とを交互に見ていると、いかにも裕福そうでない村だという事がよくわかってきた。非武装にしているのは、武器代が払えないから、だそうだ。

「武器って、そんなに高かったっけ？」

スーサは目の前をかすめていった黄色い蝶を目で追いながら、

「う～ん……実はここの地区、鍛冶屋が一つもなくってさ。武器の貸し出しはカルレ市長が担当してるんだ。……あ、カルレ市については聞いてる？」

「セーンの街とか、レグルスの拠点とかを含む都市のことだっけ？」

「都市っていう程ちゃんとしてないんだ。治安も悪い。なんか、市長が悪いんだって。それで市からの武器の貸し出し費が、剣一ダース、月５００ミル。」

「５００ミル！たったの一ダースなのに？」

５００ミルもあれば、高級車一台は手に入る値段だ。村の人々に貸し出すとなれば、剣は3ダース位は必要になるだろう。今自分達が踏み入ろうとしているあの村からそんな大金が湧いて出てくるとは思えない。

「フェララによるとあそこの村はかなり盗みや暴力が多発していて、村は長い間高い貸し出し費を払って、村民に武器を持たせていたみたいなんだ。でも長続きしなかったみたいだね。」

28　ハル、ゴール手前で地図を取り出す（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
通貨については作者もよくわかりません（末期）

29　二つ結びの女の子

先に入って、と促され、どうやら村の入り口らしい、朽ちかけた木を組んで作られているアーチをくぐる。アーチの下にためられている落ち葉がかさり、と音をたてた瞬間、例の枯れかけた老木みたいなオーラを放つ一軒家の入り口がきいと小さく呻って開いた。戸から恐る恐る出てくるのは、小さな子供たちだ。

「お姉ちゃん達、だれ？」

頬に泥がついている、二つ結びの女の子が上目づかいにそう尋ねてくる。スーサはさっと身をかがめると、その子に視線を合わせてくる。

「ギルド『レグルス』からきたんだよ。村長さんから話は聞いているかな」

女の子は真ん丸の目をぱちくりさせてしばらく首をかしげていたけれど、不意に顔色が明るくなった。

「アマンドなら家の中で編み物してた。マリア、呼んでくる！」

ギルドの人きたー、と大声で叫びながら一軒家へ入って行く少女。

「あの家、村長さんのなんだね。」

とてもそうは思えないけど、と付け足して、ハルは自分達がふんで入ってきた落ち葉の山を見た。

焼き芋を焼くのに集めても、こんなにてんこ盛りにはならないだろう。大人三人が並んで入れるほどの古木製のアーチにあふれるほどの落ち葉は、村中で探し集めたのだろう。人が入ってきたときに鳴るかさり、という音で、他の村にはあたりまえについている「侵入者アリ」のベルや衛兵の代わりに『誰かが来た』という事を知らせているのだろう。

「お待たせいたしました、レグルスさん。」

せわしない足音の方に二人が目を向けると、白髪混じりの若い女性が出てきた。頬がこけていて、簡単なつくりの薄紫色のドレスもあちこちすすがついている。

「村長のアマンドさんですね。」

「村長代理なんです。主人は去年、盗賊からの襲撃で死にました」

まだ次の村長は決まっていないのだと、にべもない顔でさらりと言いのけるその女性の影は異常に濃い。

「盗賊の集団は、裏の山でじっとこちらを監視しています。その人質に……」

村長代理は自分を取り囲んで見上げている幼い子達を心配そうに見回して、ため息をついた。

「人質に、ここの村の子供がとられているんです。変な動きを見せたら二度と帰れないようにする、と脅迫文も送られてきまして」

スーサが山への道を聞いている間に、ハルはマリアと名乗った小さな女の子の相手をしていた。

29　二つ結びの女の子（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

30　ハルとスーサ、討伐対象と対峙する

「お姉ちゃんレグルスの人じゃないよね？どこから来たの？」

「え？いや、私は一応レグルスの人だよ」

「前までいなかったよね？」

「新しく入ってきたんだけど。レグルスって、ここに何度もきてるの？」

「だって、泥棒さんたち何人も来るんだもん。最初は青いバンダナの人でしょ、次は頭に変なのつけた人でしょ、それから赤いスカーフの女盗賊とかいってる人達もいて、この前はね……」

マリアは小さな額にしわを寄せて、指折り数えている。

（こんなに小さな子達が、何度も盗賊集団と会ってるなんて……）

村の子達はさっきからちっとも笑わない。しゃべっているのもマリアだけで、他の子供はむっつり口をつぐんだまま、村長夫人アマンドと話すスーサと、マリアと向かい合うハルとを交互に見つめていた。

「任せてください。人質の御子さんも大丈夫ですよ。」

話しが終わったとみて、ハルはスーサのそばに近寄っていった。

案の定スーサは振り返ってふろうとした手を止めて、

「それじゃあ、行こうか。」

裏山までは大分距離があり、いかにも悪人の潜んでいそうな場所だった。レグルス帰属のフリージングスピア程ではないけれど、それなりに暗い。

「……誰か出てくるみたいだ」

その一言に、思わず身構える。ハルは林の中に目を凝らした。

かさり、と葉が揺れる音がすると、スーサは背中から片手で大斧をぬいた。ハルもパペットを上げてみる。

「おうおう、武器なんぞぬいちまってよぉ、何のつもりだ?」

「それはこっちの台詞だな。何様のつもりでここにいる」

スーサは斧を荒々しく地面に打ち付けた。そして顔を険しくして吠えた。

「子供と金を返してもらおうか！」

ハルは少しだけスーサから身を引いた。いつも太陽みたいににこにこしているスーサの表情は怒りに満ちて、今にも目の前の太った盗賊軍団の頭に突っ込みかねない勢いだ。歯をくいしばって、こちらを見下す輩をにらみつけている。

３０　ハルとスーサ、討伐対象と対峙する（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
三連休なので、一日２回投稿できそうです。

31　初依頼、戦闘開始

（……これが、正義の顔つきなんだ）

「人質っていうのはこういう時役に立つもんなんだよ。おい」

顔つきの悪い頭が、右に立ってにやにやしている痩身の男をあごでしゃくると、男は一度アジトの中に入って行った。次に出てくるときには、腕の中にほんの2歳くらいの少女が訳も分からない顔で抱かれていた。

「こいつを殺されたくなきゃ今の内にひきかえすんだな。安心しろ、こいつが一人いようがいまいがこんなさびれた村、すぐに人っ子一人いなくなっちまうからよ」

用意しておいた台詞のような棒読みのあとに続く下品な笑い方に、ハルは胸糞が悪くなった。

「情けないと思わないの？自分では何もできないくせに、下劣な！」

パペットを震わせて叫ぶハルのとなりで、スーサがふっと口角を上げた。

「他に言う事ないの？」

「はぁ？」

スーサは斧を大きく振りかぶって、地面にたたきつけた。信じられない事に、泥棒たちの立っているところまで大きな地割れが響い

て行く。

「な、な、何すんだよ！こいつがどうなってもいいのかよ。」

スーサはその言葉にはびくともせず、足元の安定しない泥棒の群れに一直線に突っ込んでいった。

「おとといきやがれぇっ」

スーサの豪快なひとふりは、人質を抱いた男を綺麗に避けて前列を薙ぎ払う。

「すごい……」

スーサは後ろに目がついているかのようにどんどん人質だけを避けて、敵を一掃していく。少々おこぼれがハルの方にも飛んでくる。

「やっちゃえ、ハル！」

そういってＧＯサインを出したスーサは、いつものやんちゃな顔に戻っている。

「了解」

背後からナイフをかかげて走ってくる何人かの気配を感じる。

（パペットで複数は無理だよね……なら）

ハルは山の方に走った。案の定、考えなしについている。

（まるでカルガモだよ）

笑いをこらえ、細い道に入ったところで不意に振り向く。

複数でおそってきたときには、ひとり分しか幅がないような細い道に誘いこんでしまう。旅の途中でハルはよくこの手を使った。

31　初依頼、戦闘開始（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

32　ビーフシチューとスープとさくらんぼ

（よし）

ハルの繰り出す三回連続キックで、一人目が怖気づいて逃げる。
もう一人もその尻尾についていった
が、後の一人はしぶとく残り、地味な攻撃をかましてきた。ハルもある程度パペットで殴ったり、防いだりして反撃するけれど、前の二人とは違って大分しつこいようだった。しばらく林の中でとどまってやりあっていた。

（うーん、粘着質だなあ）

「怪我するよ」

睨みつけ、最初で最後の忠告をしてみるが、泥棒は、その程度の脅しじゃ怯まないとすごんできた。残念だな、結構格好いい顔してるのに、と思いながら、ハルはパペットの噛み合わせのところで襟元をひっつかんだ。そして、えいっと勢いをつけて大男の身体を上に放り投げた。盗賊は数メートル空中に吹っ飛んだ後、後方の木々に痛々しくキャッチされた。

「だからいったのに」

ハルはちょっぴり格好つけて後ろ向きで手を振った。

「あれ？」

ハルが山から出てくると、盗賊達の姿は影一つ見当たらない。ちょっと髪が跳ねてるスーサの後ろ姿が、くるりとこちらを向いた。スーサは背中に武器をしまって、歯を見せて笑った。

「お疲れ様。」

「終わっちゃったの？」

「ハルがいたからいつもより早く終わったよ」

三人しか倒してないけどね。

二人はひとしきり笑って、ハイタッチをした。

ハルが二、三度ノックすると、待ってましたとばかりに扉が開いた。アルタだ。

「お帰りなさい。ビーフシチューがお待ちかねよ」

「すぐいく！」

スーサは武器やら小物やらを部屋に放り込み、円形に並んでいる椅子の一つに滑るようにして着いた。香辛料のあたたかな香りが鼻をつくと、急にお腹が減ってくるから不思議だ。食卓に着くや否や口の周りを汚しだすスーサにナプキンをこすりつけながら、アルタが

「ハルの初仕事に乾杯だね」

軽くワイングラスを上げてくれる。冷製スープの器で返そうとすると、その縁にもう一つのグラスが鈴の音をたてて上品に便乗した。

「新メンバーの快挙ね。これからも一応期待してるから、まあそれなりに稼いでちょうだい」

フェララのこういう物の言い方は苦笑いを誘いそうなものだけれど、ネイルのラメできらきらした指先がワイン漬けのさくらんぼをそっと差し出してくれるので思わず頬が緩む。

ビーフシチューをハルは二回、スーサは三回おかわりした。

デザートの種を舌先で転がしながら部屋に戻ると、クルアンが箪笥の上でハル達と同じ夕食を摂っていた。

32　ビーフシチューとスープとさくらんぼ（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
お気に入り登録してくださったかた感謝です。

33　ハル、報酬報告をしにいく

デザートの種を舌先で転がしながら部屋に戻ると、クルアンが箪笥の上でハル達と同じ夕食を摂っていた。ハルはクルアンが何かを食べているのを初めて見たのでびっくりしたけれど、当の氷使いはルームメイトには目もくれず、淡々とスプーンを口に運んでいる。大して邪魔になる荷物がなかったから、部屋に戻らずリビングに直行したのを思い出して

「ただいま……」

礼儀上のあいさつで、返事は期待しない。実際、それに応える声はない。

ベッドの中に座って読書をし出してから数分もしないうちに、ハルはうとうとしていた。

「ハルいるー？」

突然スライド式の扉があいて自分を呼ぶ声がしたので、ハルはシャボン玉を割られたみたいな気分で目を覚ました。目をぱちくりさせる暇もなく、

「アルタに報酬金の報告しに行こう！」

スーサに手を引っ張られていく。もう片方の手には、しっかりと本を持ったまま。

「ほら、そこに表があるでしょ」

アルタとフェララの部屋は隣接しているのだが、丁度その壁のあたりにやや古びた表が張られていた。コンピュータで打ち込まれたギルドメンバーの名前の隣に、ハルの出身国でたまに使われる字体、『行書体』風の字で「ハル」と書き加えてあった。それが横の列で、縦の列には日付が書いてあり、それぞれ数字が沢山書き込んである。

「ここに報酬金額を書き込んで、アルタが管理するんだ。はい」

どこから取り出したのか都合よくあらわれたボールペンを握ったはいいものの、実は報酬金を受け取っている間、依頼地にいたマリアという女の子がハルのミニスカートの裾を引っ張るのが気になって村長の話をあまり聞いていなかったので金額の詳細を聞いていない。それにスーサがほとんど倒したのに比べて、ハルはたった三人だ。しかもそのうちの一人は怯えて逃げて行っただけなのに……。

３３　ハル、報酬報告をしにいく（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
申し訳程度ですが行数広くしてみま・・・した。

３４　アルタの兵器？

「１４ミルだよ」

「あ、そうなの……」

言われるままに１４ミルと書きこんで、スーサにペンを渡す。スーサもまた１４ミルと記したので、ハルは何となく申し訳ない気分になった。でもフェララの欄を見た瞬間、その気が吹っ飛んだ。

（ゼロだらけだ！）

ハルはその数字を見なかったことにした。

部屋に戻ると、ハルは殺風景で暗い部屋（いまだにスイッチがどこだかわからないのだった）の壁掛け時計の針が、一定の速度で静寂を破るのをちらと見やった。

「クルアンが出てからお風呂じゃさすがに遅いか」

かといって、今入ったばかりみたいだし……。散々考えたのち、アルタのバスルームを借りることにした。

「そのボトル紛らわしいの。シャンプーとリンス、中身は逆になってるから」

直せばいいのに、と笑いながら扉を開ける。甘ったるい香りを放っている果物やらお菓子の飾り物で賑やかな個室に負けず劣らず、バスルームはあっちこっちに飾り物が施されている。

「ほんとに、甘い物大好きなんだなぁ……」

毎度毎度むせさせられている、砂糖たっぷりのココアを「砂糖には滋養があるんだから」と差し出すアルタの笑顔だけは癒されるけど、あのココアはすさまじい。もう少し甘味が多いとちょっとした兵器になるんじゃなかろうか。

取るにたらない事を考えながら、ハルは『シャンプー』のボトルをプッシュした。

「あ……泡立たない、これ……」

３４　アルタの兵器？（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
ハルはシャンプーの中身がリンスなのを三秒で忘れたようです。

35　クルアンの抜け殻

寝間着に着換えて部屋に戻ると、クルアンはまだシャワーを浴びているらしく、さあさあと水の落ちる囁き声が静かな部屋に響く。アルタの所借りて良かった、と呟いて、ちらっと木戸を見やった。

何とはなしに扉を開いてみる。

いつものマントやら帽子やらは無造作に地べたに脱ぎ棄てられている。わざわざ竹で編んだ着物籠があるのにそちらは空っぽだ。

（やっぱり男の子なんだな）

ハルはためらう前に、セミの抜け殻ならぬ魔法使いの抜け殻を整えにかかった。

氷の魔法使いなだけに、人間らしい温もりがない。ハルは恐ろしいほどに冷たいシャツに手を伸ばして、一つ身震いした。真っ白なYシャツは胸のポケットに水色の刺繍糸で「K」とかかれている。ところどころ曲がっている線が、フェララのお手製ではないよ、と口走っている。

（これだけ見てると、おどろおどろしい魔法使いって感じはしないな。）

そりゃ、マントの下に何も着てない訳ないよね。一人ツッコミをしてシャツを二つ折りにしようとしたその時、何か重量のある硬い物がシャツのポケットから涼しげな

音を立てて滑り落ちた。

「はにゃ？」

なんとも間の抜けた声が出た。床に落ちていたのはいかにもアルタが気に入りそうな、ベリーのかたちをした真っ赤なロケットペンダントだったのだ。ベリーのへたの穴に通る長いボールチェーンが、バスルームの天井から放たれる黄色を帯びた明かりを反射して鈍い光を見せていて、どことなく古びた雰囲気を感じさせられた。

「誰かの写真入り、かな」

ペンダントそのものはクルアンの好みでないとすぐにわかったから、余計に中身が気になった。ハルは意味もなく周りを様子を伺って、

（いいよね、ペンダント見るくらい）

恐る恐るペンダントの蓋をスライドさせた。思いのほか硬かった。

35　クルアンの抜け殻（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
お気に入り登録をしてくださった方感謝です。

３６　ペンダントの女王蜂（前書き）

現在、３４話から作者不調のため読みづらい部分があります。
申し訳ありません。（Ｔ　Ｔ）

36　ペンダントの女王蜂

画質の悪い写真には二人写っていた。右側には黒いローブを着た金髪の小さな女の子が、片手をあげている。笑うとえくぼができるのが、ハルによく似ている。クルアンのように唇は青くないけれど、白っぽく、血の気がないのはおんなじだ。

（兄弟かな）

何気ない気持ちで左側へと目を向け、ハルはその場で凍りついた。というより、全身から一瞬鼓動が消えた。それから胸の奥まで刀が貫通したような鋭い痛みが走った。

「母、さん」

とある晩にクルアンが口にした言葉がよみがえる。それからハルは、あの夢に出てきた女性と写真に写った魔法使いとを照らし合わせて見た。

紫色のローブを着ていて、三角帽子をかぶっている。手中には金の羽根飾りがついた立派なロッドを、凛と背筋を伸ばして持っていた。この人、あの女の人だ。確か「女王蜂」と呼ばれていた……。

突然、水の音が途絶えた。ハルは全身飛び上り、慌ててペンダントを自分が畳んだ服の層のどこかに押しこむと、持ち主がシャワーを止めて椅子から立ち上がり、バスルームの扉の取っ手を引くまでの数秒間でベッドにもぐりこんだ。柵に肘を強打したのは気のせいだ。

（写真見たのバレたかな）

間もなくしてクルアンは部屋に戻ってきた。いつも同じ服装だから脱ぎ気に慣れているのか、並ではない早さだ。服がたたまれていたのには気づいたはずなのに、何のコメントもなく布団にもぐりこんでくる。ハルは緊張で顔が熱くなるのがはっきりわかって、もぞもぞとフェララのサイン入りの掛け布団に頭を突っ込んだ。

二人が布団に入ると、向き合う体勢になった。ハルは余計に赤くなる頬を見られるのが気恥ずかしくて、顔をそらした。クルアンの吐息が冷風になってハルの髪に吹き付けた。今のがただの呼吸だったのかあきれのため息だったのかわからず、ハルは戸惑って布団の中で肩をすくめた。

（どうして、誰かと話したり笑ったりしないで我慢していられるのかな）

過剰魔による非詠唱魔法発動を防ぐため、とはいっても、根っからのおしゃべり好きなハルにとってはおよそ理解できない。

とりあえず跳ね上がっていた心臓をどうにかこうにか落ち着かせて、ほてった頬に両手のひらを押しつける。ハルは冷え症だ。

「あのね」

恐々口を開くと、また首筋に冷たい吐息がかかった。

36　ペンダントの女王蜂（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
読みにくくてごめんなさい。

サブタイトルつけました。

３７　クルアンの返答（前書き）

現在、３４話から作者不調のため読みづらい部分があります。
申し訳ありません。（Ｔ　Ｔ）

37　クルアンの返答

「あの、ごめん。その……女の子だと勘違いしてて」

クルアンはまたかすかに動いた。ハルがちらと横目で見れば、帽子のつばが上がっていて、あの冷たいブルーの目がじっと天井を見つめている。

（……）

聞こえてる、のかな。

氷使い特有の真っ青な唇が半開きになって、空気を吸っては吐いて、吐いては吸っている。片目をかくしている前髪が、たまにゆれる。目は相変わらず暗い天井の一か所をじっと眺めていた。

（まるで、違う世界にいるみたい）

すぐ隣にいるのに、とても遠い所を見上げているみたい。何も感じない。何を考えているのかわからない。感情が、人と違う。そんな雰囲気が、冷たい瞳にはあった。

「一つ聞きたい事があるの」

ハルはいつになくはっきりとした口調で、隣に横になっている過剰魔に問いかけて見みた。

「おとぎ話に出てくるサイコメトラーが本当にいて、他の人の思い

を受け取っているとしたら、どう思う？」

逆サイコメトラーにそんな事を聞いたら、ぎょっとした表情が帰ってくるかと思った。でもなぜかクルアンの表情は変わらない。ただ口元がかすかにゆがんだ。

「あり得ないな。」

「え？」

クルアンは上を見たまま、

「複数の人間の独立した思考で世界が成り立っている。もしそれが起きるなら人間が複数いる意味がない。違うか」

一気に吐き出された、言葉。ハルは胸が縮まるのを感じた。クルアンの身体から来る冷気が無償に悲しくて、ハルは内心とは裏腹に

「そっか。そうだよね。へへ」

笑った。目を閉じる。

（眠ろう。）

眠れば明日が来る。また誰かと仕事をこなす。いいんだ、最初から逆サイコメトラーなんていなかったと思えば。そう自分に言い聞かせる間もなく、ハルはまどろみ始めた。だんだんと意識が海の浅瀬に取り込まれていく。冷気を強く感じる。

37　クルアンの返答（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
最近寒くなってきましたがお体大事になさってください。

作者は元気に風邪ひいてます。

３８　タルトの放し飼い（前書き）

現在、３４話から作者不調のため読みづらい部分があります。
申し訳ありません。（Ｔ　Ｔ）

38　タルトの放し飼い

x　＋　x　＋　x　＋　x　＋　x　＋

「女王蜂」

金の武器から砂がこぼれる。

「服従者……宝」

コートを焼き尽くすような炎が暖炉で揺れている。右耳に優しい息がかかる。紺と赤が混じってしたたり落ちた。

「つかれちゃった」

来る。殺される。私もこの人も、死んでしまう。

死んでしまうよ。そんなの嫌だよ。

x　＋　x　＋　x　＋　x　＋　x　＋

翌日、ハルは自力で目を覚ました。ゆっくりと身を起こすと、氷使いはもうどこかに出かけたらしく隣には誰もいなかった。ベッドの中身を整えて柵を越えた途端、ハルは欠伸をしながら立ちくらみした。

（なんか、目覚め悪いな……）

鈍い頭痛を抱えたままゆっくりと立ち上がって、ハルはリビングに向かった。

「あら、おはよう。今日は早起きだね」

アルタは一人でキッチンに立っていた。こげ茶色の無地のエプロンをして、手際よくホットサンドを作っていた。

「うん……」

ハルはぼーっとした目をこすりながら空の椅子達を見やった。

「まだみんなは来てないんだ」

「そうよ。」

「クルアンは？」

「ああ、クルアンなら庭にいるわ。」

パンに赤いミニスティックを挿して、ようやくアルタは振り返った。

「もうすぐできあがるから、呼んできてくれる？」

ハートをモチーフにした白いフェンスの小さな扉をあけ、ハルは初めてレグルス拠点の庭に足を踏み入れた。

春の訪れを感じる、草の香りが鼻をついた。若草色の地面に、ところどころ桃色やら紫の花が、かわいらしく咲き誇っている。どこにでもありそうな、草原の風景だ。

その中に、ウィザードは並ならぬシチュエーションで立っていた。ハルは両目を思いっきりこすってしばたいた。

「く、熊！？」

クルアンは大きなツキノワグマの鼻の頭をなでていた。真黒な熊

は、目を細めて気持ちよさそうにしている。じゃれている、というやつだろうか。

（そういえば、使い魔がいたっけ。名前は確か……）

タルトみたいな、ソルトみたいな。ぶつぶつ呟きながら、ふと顔をあげる。

「わっ」

いつのまにかクルアンがこちらに来ていたらしく、冷たい瞳がこちらをじっと見つめていた。黙ったまま眺められるとむしょうにあたふたして、ハルはつっかえながら

「アルタが呼んでる。もうすぐご飯だってさ」

クルアンは鼻でふっと息をした。それから後ろに控えていた使い魔（ついてきていると思っていなかったのでハルは全身の毛が逆立つほどびっくりした）の鼻づらをちょんちょんとつついて、拠点を包囲する守りの木々、フリージングスピアを指さした。

すると使い魔は、一つ低く呻ると、なんと指先の示す方向に一人で歩き始めた。まだ冬毛から変わりきっていないのか、ふさふさとした毛皮をゆらして去っていく後姿は、じきに森の中に消えた。

（まさかの放し飼いですか）

依頼のあとにばったり出くわしたらどうしたものかとげんなりするハルをよそに、クルアンはすたすたと館の中に入って行った。

39　ハル、椅子から転倒する

「今日はハルとスーサ、二人で配達に行ってもらいます」

アルタお手製の朝食を食べながら、相変わらずの空席の隣、ハルは新たな依頼についてギルドマスターからの説明を聞いていた。

「行き先はエルフの森で、リ・ジーナと呼ばれているところね。バスが出ているみたいだから、はい、これ時刻表」

「エルフ？森の奥で、草笛吹いて暮らしてる、あの？」

ハルのあまりに素直なイメージ像に、食卓の三人が各々噴き出す。

「ハル、それ、何年前の話？」

「おとぎ話だったらそんなものなんだもん。会った事ないし」

時代遅れのような言い方をされたのでむくれて、ハルはほっぺたをぷくっと膨らませた。スーサはサラダにかかっていたフェララ曰く『独創的なドレッシング』でむせはじめた。

「エルフは人間よりずっと賢いのよ。地球上の資源を大量に使わなくても生きていけるやり方を知っているのね。まあ確かに草笛も使うけれど、あれは一種の文化ね。ニホンのティーセレモニーと一緒よ。」

異国のギルドメンバーの口から出身国の名が出てきたので、思わず

「フェララはニホンのことを知ってるの？」

「勿論」

フェララは急に上機嫌になったようで、人差し指を空中でくるくるしながら話し出した。

「だって、あんなに特徴的な国もそうそうないわよ。だってつい最近まで男は全員、腰に刀さして歩いてたらしいじゃない。ニホンの人達は騙されやすいってよく言うわよね。ハル、気をつけた方がいいわよ」

「あ、そうなんだ……」

「そうね、有名なのは時間についての感覚かしら。エレベーターを五分待てないとか、待ち合わせ時間の前に全員がそろっちゃうとか、本で読んだ事があったわ。あっ」

フェララのエメラルドの瞳は、今や輝きすぎて暴走状態になりつつある。ハルは気圧されて椅子からお尻が転がり落ちそうになるのを耐えていた。

「ニホンの人って、男の子はみんなスキンヘッドって本当？」

この直後とうとうハルが本当に椅子ごと転倒し、おさまりかえっていたスーサのむせとアルタの笑いのツボが再発してしまったことは言うまでもない。質問者本人はきょとんとした顔つきである。

「だって、大学の教科書に書いてあったんだもの。男の子は全員スキンヘッドで、女の子は座敷わらしヘアーだって」

「いつの教科書？」

朝っぱらから二度もげんなりしてしまったハルは、床に打ち付けた腰を軽くさすった。

39　ハル、椅子から転倒する（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
お気にいり登録感謝です。

40　配達依頼開始

「フェララは、一度話し出すと止まらないんだね」

「好奇心の塊って、自分で言ってた」

リ・ジーナ行きのバスの長椅子に揺られながら、スーサはガラ空きの車内を眺めまわしていた。

「珍しい人だな、フェララってさ」

「好奇心ってフェララの誇りとかなんじゃないかな。僕にはよくわからないんだけど」

ハルが目で追っていた蚊をぱっとつかんでガラス窓の向こうに放って座り直す。

「フェララってエルフだったらしいよ」

「どういうこと？」

「エルフから人になった、て。アルタに教えてもらった。」

ハルはフェララの顔を思い浮かべた。エメラルド色の眼、巻き毛の髪なんかは絵本に出てくるエルフに似ているような気がする。でもエメラルドの瞳の人なら他にもいるし、巻き毛はセーンの商店街でも星の数ほどいた。

「あんまわかんないや」

「でしょう。僕にもよくわかんない。」

沈黙。

「本人は人間になりたかったのかな」

尋ねてみたけれど、スーサはわからないと首をふるだけだった。

「でも、この話にあまり触れながらないのは確かだ。フェララは自分のことは、よくしゃべるほうだから」

（エルフが人になる、か）

そんなことが本当にあるんだろうか。

でも、人がテレジアになるくらいだ。有り得ないとは言い切れない。

（もしそうだとしたら、フェララはどうしてエルフでいることをやめたんだろう？）

「ハル、降りるよ」

肩を叩かれるまで、ハルは自分が実はうとうとしていた事に気付かなかった。

「ようこそ、お越し下さいました。リ・ジーナへ」

エルフの森の方に連絡は入っていたらしく、ハル達が下車するとすぐに背の高い女エルフが迎えに来てくれた。彼女がリ・ジーナの長らしい。エルフの特徴であるとがった耳には、雫の形をした小さなピアスが、春の訪れを知らせる穏やかな陽の光に可憐に光っている。

「スーサと、ハルですね。」

二人が黙って頷く。背の高い金髪のエルフは、翡翠色の瞳でじっと二人を見つめた。目の合わせ方が少しクルアンを思い出させるような、何かを見透かそうとする雰囲気の視線で、ハルはどきどきしながら気をつけしていた。

「品物をこちらへ」

エルフの女性は笑って片手を差し伸べた。美しい笑顔だけれど、商売用と行ったかんじの、いかにもおあつらえ向きの笑みだった。ハルはポシェットから、アルタに渡された細長い木製の箱を取り出す。そこに掘られた文字を読もうとしたけれど、白い手にそっと持っていかれてしまった。目の前のエルフはまた取り調べでもしているかのようなゆっくりとした手つきで蓋を開けた。興味津津で覗きこむスーサにつられて、ハルもひょいっと首だけ出して中身を目にした。

目を見張る、鮮やかなネオンブルーのネックレスだ。丸い宝玉の周りに、銀でレースの形に飾りが施されている。銀色の細い鎖は、

ところどころ直したような歪みがあった。年季モノ、という表現がしっくりきそうだ。

41　参謀担当の贈り物

「あの、こちらでよろしいのですか？」

戸惑ったような声色に顔を上げると、困惑した表情のエルフは白い布製のヘアバンドに指先をかけながら首をかしげていた。

「ギルドマスターから渡された品物はこれですけど」

だよね？　とスーサの方を見ると、相手は頷いたものの、曖昧な首の振り方だったので、ハルはますます訳がわからなくなってしまった。

「違ったっけ？」

「いや、多分そうだ。ただ木箱にフェララって書いてあったから、こんな古めかしい物だと思わなくて。」

その言葉に、目の前のエルフがさっと顔色を変えた。白い手があわただしく蓋の裏側を確認する。

『フ　ェ　ラ　ラ』

掛け布団の優雅な字体とは打って変わって、率直に表現すればばたどたどしい、拙い筆だ。フェララの癖である筆記体は影も形もなく、アルファベットを習ったばかりの子供が書きなぐったに等しいブロック体だ。

「あなたたちはこのフェララという方を御存知なのですか？」

そう口にしたエルフの両目は飛び出さんばかりに見開かれていて、ハルは思わずスーサの方をちらっと見た。それを受け取ったスーサは多少つっかえながら、

「同じギルドの参謀担当の人です。フェララ・エステといいます」

「姓は間違いなく、エステなのですね？」

「はい、まあそうです」

質問の勢いに気圧されて口ごもるスーサの手前、ハルは女エルフの顔をじっと見据えていた。眉根を少し寄せて考え込むその緑色の瞳に、茶色の巻き毛、それにフェララの名を聞いたときの反応をハルは注意深く観察していた。

（耳の形を除けば、フェララはやっぱりエルフにそっくりだ。しかもこの人は）

「フェララを知ってるの？」

確かめたい気持ちで声が大きくなってしまい、エルフは肩をすくませた。ちらっと蓋の文字に視線を落とし、彼女はゆっくりとため息をついた。

「……彼女には、悪い事したと思ってるのよ。みんな」

スーサとハルは顔を見合わせた。

「どういうこと？」

エルフは耳元の小ぶりな輝きを揺らしながら、訪問者に背を向け、歩きだした。

「ルコレ、家族の方からよ」

思わず二人が後を追いたくなるセリフを放って。

４１　参謀担当の贈り物（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

重要人物でてきました。

試験１０日前。。

42　アウィナイトの思い出

「聞こえているの、ルコレったら」
「何？」
青青とした蔦で飾られた、木造のオフィスの四角い窓から、ルコレは顔を出した。

春が近いといえど、まだ寒い。マフラーの手入れちゃんとしといてよかった、と気分上々で首に巻き付けた途端、ルッカと思しき声に『ダークピクシー専用罠』の設計図を走るペン先がストップしたわけだ。

「贈り物です、あなたの大切な人からの」
「大切な人ォ？」

ルコレは笑って、そんなのいませんよ俺、と言おうとした唇を思わず閉じる。
ルッカの両目は真剣そのものだった。白いヘアバンドがいつになく強い風になびいているのに髪は綺麗な内巻きのままで、いつもだったらここで

「今日も綺麗だね」
とでも言っておきたいところだが、そんな空気ではないことくらいフェロルにもわかる。

「だれから？」

尋ねた途端にルッカの顔が沈痛そうに歪んだのを見て、ルコレは慌ててその真っ白な細い両手からそっと贈り物を受け取った。

蓋の表面を見てルコレは木製のそれを強く払った。蓋は窓枠にあたり、乾いた音をたてた。

胡桃大の首飾りが、木箱の幅にきっちりはまっている。使われている宝玉が、蒼いアウィナイトだとすぐにわかる自分が苦しくて若干うつむいたルコレだったが、それでも妹からの辛辣な贈り物から目を離す事が出来なかった。

フェララのきつい瞳孔が、ネックレスに映っているように思った。その瞳が、幼い自分達のものと重なる。

「見て、兄さん。本をお金と交換してきたの」

お金と交換という最後の一言が気にかかって、いつもは生返事で終わりにする妹との会話があんなに長くなるとは思わなかった。銃の内部構造の図を書きうつしていたルコレがめんどくさそうに机から妹に視線をずらすと、嫌な予感通り、人間の製本したらしい紐なしの閉じ方をした『エアガン組み立てガイド』というタイトルの分厚い本がぬっと差し出された。

「お前、また人間の住む所にいったのか」

ルコレが妹の様子をちゃんと見ようと椅子から腰をあげると、本の向こうからひょこっとフェララの笑顔が現れた。えへへ、と首を

傾けているが、その顔色はえへへどころではない。

４２　アウィナイトの思い出（後書き）

更新遅くなりましてすみません・・・
読んでくださりありがとうございました。

ここからは少しフェララの過去についてのお話になります。
しかし試験六日前…お待たせしそうですがよろしくお願いします。

43　妹

「馬鹿、真っ青じゃないか。」

仕方ないなぁ、とルコレは内心ため息をついた。人間の存在を知ってからと言うもの、この変わり者の少女は毎日のように長様の目を盗んでは、人間――エルフの森をいやというほど侵略してきた種族――が生活するエリアに勝手に入って行くのだった。

人間の立てる雑音は、エルフの鋭くとがった耳に毒だ。その形の通り、人間より聴覚の鋭いエルフが街の音を聞くことは避けられていた。人間が暮らす首都まで買い物に出た事があるという父は、耳栓をして行ったにも関わらずショッピングカートを押している間中頭の中がくらくらして仕様がなく、結局買い物リストに並んだ文字全部に線が引かれる前に森に逃げ戻ってきたという。

その話を聞いていながら、足繁く人間の営む本屋だの武器屋だのに首を突っ込み、何かしらの収穫を手に帰ってくるお転婆はエルフ中を探してもフェララしかいないに違いない。そして騒音に耳をやられ、顔色を悪くして帰ってくる。

（母さんが知ったら厄介だな）

ルコレは心配症の母が眠っているのを忍び足で確認して、痛み止めの木の実を粉にして瓶に詰めた物に手を伸ばした。

「今おかゆをつくってやるから、そこのベッドに寝……」

「いいわよ、そんなの。」

兄の気も知らずに血の引いた顔でフェララはけろりとしている。

「ほら、あたし笑ってるでしょう。兄さんが欲しがってたもの、ちゃんとあげられたから嬉しいの。笑ってるのは健康の証って本に書いてあった」

「いいわけないだろ。また父さんに叱られるぞ」

「叱りたいのなら、そうすればいいわ。あたしは自分が間違った事をしてるなんて思わないし、父さんたちの言う事を聞く気もないの」

ほっぺたをお餅みたいにぷくーっと膨らませる妹の口応えに、ルコレは内心舌打ちした。

43　妹（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
お気に入り登録感謝です（・▽・）＝Φ

４４　兄、妹を突き飛ばさんとする

（全く、こんなだから長様に嫌われるんだ）

フェララは思った事を心の中にとどめておく事ができないらしく、彼女を諫める言葉にちょっとでも引っかかるものがあると、誰かれ構わず反抗した。兄のルコレに対してはまだマシなほうだったけれど、大人達へは反抗を通り越し、牙をむいて激しく言いたてた。

反抗期にしては早すぎる、どこかおかしいのではないか。呪われたり、憑かれたりしているに違いない。それが大人たちの間での、フェララに対する共通の見解だった。子供の自分でさえそう思う。フェララは変だ。考え方とか、妙に自分の意志にこだわるところとか、全部が人と違う。そもそもルコレにとっては大人の言う事を聞くのは当たり前のことだったから、妹が一層異質に映った。

「そんな事ばっかり言ってると、森から追い出されるぞ。」

近頃は自分の妹に脅し文句が効かないと薄々感づいてきたルコレだったが、案の定フェララはそっぽを向いたまま

「現にもう追い出されかけてるじゃない。長様のとりまきエルフから石ころを投げられたり、枝で突っつかれるのなんてもう慣れたわ」

「お前、側近様にも目をつけられてるのかよ」

「気にしてないわ」

フェララは小さな手を口元にあててきゃたきゃた笑った。

「彼らは自分達の気に入らない物を排除しようとしているの。でも大人げないでしょう？　小石や枝よ？　まるで子供の喧嘩じゃない」

「そのお前が子供だからそんな扱いしか出来ないんだろうがっ！」

フェララの顔が一瞬にしてこわばった。

「兄、さん……？」

「なんでお前ばっかりそんなわがまま言って許されると思ってんだよ。俺も母さんも村の長様も、お前が我慢できないせいでどんだけ苦労してるか知ってんのかよ！」

ルコレの大声に、フェララはまばたきするのも忘れて怒鳴る兄を呆然と見つめていた。青い顔からさらに血の気が引いて、氷使いのように真っ白になる。

「兄さんごめんなさい、私……」

「お前が馬鹿で、自分の気持ちしかわかんないからそんな事が言えるんだよ。父さんが何で職場で謹慎くらったか知ってるか。何で母さんが病気で倒れたのか！　何でおれが毎日、夜遅くまで見世物になって働かなきゃならないんだよ……っ」

ルコレは一気にまくしたてた。頭がかっかして、無茶苦茶だった。考えるほどの余裕がなく、ルコレはベッドに腰掛けていたフェララの両肩を強く突いた。

「お前がいなければよかったんだ！」

４４　兄、妹を突き飛ばさんとする（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

45　昇る画布〈トゥル〉

「お前がいなければよかったんだ！」

「なんてこと言うの、ルコレ」

名前を呼ばれて、ルコレはびくりとした。ルコレは声のした方を見た。怒号で目を覚ましたらしい母が、こけた頬にはりついた髪を払いながら泣きそうな顔でこちらを見ていた。それからハッとして、妹の方に視線を向ける。

フェララはもう笑っていなかった。泣いてもいなかった。ルコレが飽きるほど見せつけられていながら、自分には一度も向かってきた事がない鋭い瞳孔がそこにはあった。

ルコレは手に握っていた汗をズボンで拭きながら、一歩後ろに下がって、机にぶつかった。

エメラルド色の両目が兄に刃向っていた。静寂なる攻撃であった。

（こんな目つきをされて、長様はどうしてこいつに面と向かっていられたんだろう）

「あ……悪い……」

口走る謝罪の言葉に対する妹の反応は、次の様なものだった。

「やっぱり、それを言うのね」

ごめんなさい、兄さん。

「出て行くわ」

フェララは顔を伏せたまま、かばんの蔓をきゅっと握りしめた。小さな手がかすかに震えたが、フェララはくるりとルコレに背を向けた。

「待て、フェララ！」

いいのよ、兄さん。ほんとはわかってたの、もう自分はここにいるべきじゃないって。

「ハルが来てくれてよかったわ。」

白いキャンパスの前に座って、フェララがぽつりと言った。

「これでお別れ……」

赤いマニキュアを塗った爪が、キャンパスを枠から破っていく。はがされたキャンパスは窓の外へ飛んでいった。

蒼いペンダントの描かれた画布は、拠点を越えて空高く消えて行った。

４５　昇る画布〈トゥル〉（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
試験中はきっと投稿できないので、二連です。

幼き頃のフェララちゃんは何においても唐突な子だったようです（書き終わってから気づいた作者）。

46　ハルとスーサ、背丈を確かめんとする

「……フェララが出て行くのを、森の皆は黙って見ていました。誰も、止めようとはしなかったのです」

女エルフ・ルッカは話を終えた。

「それが、フェララがエルフをやめた理由ってこと？」

うなずくルッカの手前、ハルはふーんとうなった。

（異端児か……）

人と異なるから。それを受け入れる事ができないから、排除する。

幼いフェララはそんな考えに体当たりする以外の方法を見つけ出す事ができなかったのだろう。

「フェララは出て行って、それっきり連絡がつかなかった。あんなちびっ子が人間の世界で暮らしていけるはずもない……あんなペンダント一つじゃ、直に金も尽きると思ってたんだけど」

フェララの兄だという青年・ルコレは、妹からのアクセサリーをじっと見つめている。

「それは……？」

「出て行く間際に、俺が渡した。これなら少しは金になるだろう、と。サイテーな兄だよ」

ルコレは頭を抱えてため息をついた。

「引きとめてやれなかった弱っちい男のくれた物なんて、もういらないって言いたいんだろうな。自分が何をしたか見ろってことだろう……スーサとハル、ちびっこ二人組をよこしたのも、兄妹だった頃のことを思い出させようとしてるんだろう」

その一言に、スーサとハルはお互いを凝視した。

「どっちが背が高いと思う」

「わかんない」

「私だといいな」

「えー……」

１０歳にもなって、ちびっこと呼ばれるとは思いもしていなかったようで、スーサは若干すねて、出されたお茶のコースターのはじっこをいじり始めた。

「フェララはどんな奴になったかな？」

（あ、やっぱりそういう事気になるんだ）

兄の妹に対する心がまだあったとわかって、ハルは内心安心した。

「私は入ったばかりだからよくわかんないけど、なんて言うのかな、

自信にあふれた感じの人だった」

「そうか」

うまくやってるんだな、と青年は頬を緩めた。羽根の形をしたオフィサーバッジが太陽に照らされてきらりと光った。

「結婚はしてないよ」

あとからスーサが突拍子もない事を付け足したので、ルコレは紅茶でむせてしまった。

４６　ハルとスーサ、背丈を確かめんとする（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
フェララって一生独身のイメージが・・・こんなこと言ったら怒られそうですけど。

学年末試験のため明日から七日までは連載をお休みさせていただきます。。
試験前日になぜかＰＣを開く作者でした。

47　ルッカの言葉

「フェララは、ここにはもう来ないのかしら？」

送り出す間際につぶやいたルッカの一言が、自分達に向けられた質問と願いであったということをハルは気づいていた。

バスの揺れというのは、どうにも眠気を誘う。バスに限らず乗り物に乗ると、なぜだかハルは寝てしまう性質があった。

「ハル」

スーサの一声で目を覚まし、ハルはあくびをしながら

「ん？」

「ルッカもルコレもさ、フェララのことが嫌いだったわけじゃないんだよね？」

森に向かうときと同じ色合いのバスの窓から、真昼の日の光に揺れている菜の花の群れを眺めながら、スーサは念を押すような言い方でそう問いかけてきた。ハルはルコレの安心したような表情と、帰る間際にルッカが見せた微笑を思い浮かべた。

「うん、ぜったい嫌いなんかじゃなかったと思う」

だってルッカの最後の言葉は、フェララにもう一度帰ってきてほしいと言っていたから。

「ありがと」

スーサは幸せそうに笑った。

「なんでありがとうなの」

「安心したからだよ、ハルがそう言ってくれたから」

ハルはスーサの横顔をしっかりと見た。

仲間思いの、優しい顔だった。

47　ルッカの言葉（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
試験勉強中だったため後書き・サブタイトル遅れましてすみません。

48　エルフもどきの礼

「おかえりなさい、二人とも」

「「あ」」

出迎えてくれたエルフもどきの顔を見るや、二人は玄関口で固まった。

「フェララ……！内部依頼だって知らなかったよ。」

「あはは、悪いわね。いい忘れちゃったみたい」

「あははって……」

フェララは巻き毛の長い髪を揺らして、中に入るよう促した。

「森はどうだった？」

フェララは両手をゆるく組み合わせてにこりと笑った。

「ルコレに会ってきた」

ハルがその名前を口にすると、フェララの笑みは少し切なげなものに変わる。

「そう。兄さんは元気にしていた？」

「元気に見えたよ。」

「そう。じゃあよかったわ。」

報酬を渡さなくてはね、と部屋へ入って行く後姿に、

「待って」

ハルは思いついて声をかけた。

「ルッカがね、いつでも戻ってきてって」

フェララは分厚い本を片手に、しばらく立ち止まっていた。それから振り返って、少女のように笑った。

「ありがとう」

人生二回目のありがとうに、ハルは心底幸せな気持ちになった。

48　エルフもどきの礼（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
日に日に投稿文字数が減少しているのは錯覚です・・・。

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます。

49　尻尾からの応答（前書き）

番外編みたいなものなので、飛ばしてもストーリーに支障はないと思われます。
お付き合いくださるかたは、どうぞ。。

49　尻尾からの応答

とある春の日の午後、ハルは大あくびをしながら依頼ゼロの状況を持て余していた。

（あーあ……）

依頼ゼロといっても、ハルがこなせる依頼が来ていない、という訳ではない。むしろ五万とあったし、ハルだって外に出たいけれど、思い通りにいかない事情というものがある。ハルはため息交じりに、包帯の巻かれた足首をさすった。

アルタの治せない怪我をした時は、ギルドマスターとともに拠点でゆっくりしていること。アルタらしいルールだとハルは思った。

依頼がないのは、初めて拠点に来た日以来、二週間ぶりだ。近頃は魔物が増加傾向にあるというので、討伐依頼が激増しているのだそうだ。そのためフェララ以外のギルドメンバーは全員、ほぼ一日中魔物退治に狩りだされていた。

「疲れがたまってたんでしょう。今日はここでゆっくりしているといいわ」

アルタはにっこり笑って頭をなでてくれ、退屈しないように「空飛ぶくつした」という本まで貸してくれた（それも上下巻揃えて）というのに、それも三時間もあれば読み終わってしまった。幸か不幸か、ルームメイトのクルアンは日課である魔物狩りに出かけているし、アルタは書類整理のために自室にこもっている。

作業の邪魔をしないように、布団のカバーを十回位付け外しして暇を潰していたのだが段々手が痛くなってきたので中断した。おかげで今は掛け布団の半身がカバーから飛び出しているというセクシーな状態だ。

「退屈だなぁ……。」

野宿していたときは本を貸してくれる人はいなかったけれど、退屈することはあまりなかった。なぜなら少しでもすごしやすい所を探そうと歩きっぱなしだったし、なにより旅の途中までは二人の話し相手がいたからだ。

それを思い出して、ふとコートの上から尻尾に手をあてがう。そうして口をつぐんだまま話しかけてみた。

（君たちもいい加減、暑いよね）

尻尾はもぞもぞと動いた。一応生体反応……思念反応はあるということなのか。

冬の旅路には大分役立ってくれたファーフード付のコートも、春先になってくると流石に暑い。室内はアルタの魔法で常にそれなりの温度が保たれているから、上着を着っぱなしのハルにとっては少々つらい物があった。

（今なら誰もいないし、脱いだって大丈夫だよね）

金のボタンに両手をかけたその時。

「やっほ」

「うわっ！」

49　尻尾からの応答（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
区切れの関係で少し足しました。

５０　ハル、ビターが好きと宣言する（前書き）

前回に引き続きマッタリしています。

50　ハル、ビターが好きと宣言する

突然肩に手が置かれた。

「あはは、やっぱり気づいてなかったんだ」

春色の長袖ワンピースに、薄手のカーディガン姿で現れたアルタはハルのリアクションに大ウケしている。ハルは頬をふくらませて

「もう、びっくりしたよ。仕事終わったの？」

「まだまだだけど、一段落ついたから休憩。そろそろ退屈してるんじゃない？」

「うん。本、読み終わっちゃった。面白かったよ」

「よかった」

アルタは嬉しそうに微笑んで、片手に持っているバケットを持ちあげて見せた。

「おやつにドーナツどう？　紅茶も入ってるの」

バケットの中の甘味を覗き込んで、ハルは思わず歓声を上げた。

「美味しそうでしょ。さ、お茶にしましょ」

白い陶器製のポットの細い口から立つ柔らかな湯気は、茶葉の甘

味をまとっている。それがカップに注がれると、今度は茶葉というよりサトウキビの匂いが天井に向かってゆらゆらと立ち上った。

ハルはざっとドーナツを見て、チョコレートがけのシンプルなものを選んだ。アルファベットで『ビター』と書かれているのがその理由であった。選択肢は一つに限られている。

「ハル、ビターがすきなの？」

「好きだよ！」

ハルは威勢よく返答した。

（アルタの味覚、たまに殺人級だからね）

と、こっそり付け足して。

５０　ハル、ビターが好きと宣言する（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

51　ハル、日記を書く

しばらくののち、ハルはまたもや部屋に一人でいた。
ただ今度は暇ではない。机の上には、先ほどアルタがくれた赤いギンガムチェックの手帳があった。
「渡し忘れてたけど、はい」
「手帳……日記帳？」
「皆も書いてるんだ。こうやって、その日にあったことがいつでも見られるって素敵じゃない？」
といってアルタが渡してくれたものだ。
ハルは手帳の表紙を片手でゆっくりと開いた。ロココ調の罫線が桜色の紙にいくつも刷られている。桃色の花びらが散らしてあって、左上に月数と、わざわざ和名まで書いてあった。
（あたしがニホン出身だって、覚えててくれたのかな）
ハルはうれしくなって、思わず顔をほころばせた。一月始まりだったので、二月分は無駄になってしまいそうだったが。
（せっかくの手帳だし、書いてみようかな）
ハルは昨日の日付のページを開き、ペンホルダーから筆記具をするりと引き抜いてペン先を走らせはじめた。
（誰に見られるわけでもないし、たまにはニホン語で書いてみよう）

三月一日
今日はハットゴーンの森に、魔物狩りにいった。討伐対象はドクドっていう、大きな鼠に角が生えたみたいな生き物だった。フェララによるとドクドは近頃異常発生している有害動物の一種なんだって。木陰とかに隠れるのを見つけるのが楽しかった。後ろから足をすくわれて足首ひねっちゃったけど、合格ラインはクリアーできてたからよかったよ。

三月二日

今日はずっと拠点にいて退屈だった。クルアンがいない間に部屋の電気のスイッチ見つけたかったんだけど、途中であきらめちゃった。カーテン開ければそれなりに明るいし、しばらくはこのままでいこう。ここのカーテン、どうして大きな宝石がいっぱいついてるんだろう。開け閉めするのに重くないのかな？

そういえば最近、フリージングスピアで影を見るんだ。気のせいかな。あ、もしかしてクルアンの熊が歩き回ってるとか！　でも、それにしては少し小さすぎたような……。

どっちにしろ、気のせいだよね。

ちょうどそこまで書き終えたところで、館内によく通るノックが響いた。

52　クルアンが帰ってきたら

ちょうどそこまで書き終えたところで、館内によく通るノックが響いた。

「ハルー、開けてあげて？」

アルタの立てこんだ様な声色を聞いて、ハルはぱっと立ちあがり、

「はあい」

アルタにとも帰還者にともつかず声をはりあげながら玄関に向かった。

（誰だろう）

わくわくしながら扉を開けて、ハルはその場で少々固まってしまった。何も言えなくなったハルの顔色を察したのか、相手は帽子のつばを片方だけ上げて

「騒ぐな。目の上を切っただけだ」

淡々と告げた。

「だけって……だって……アルタ！」

「聞こえてたから大丈夫」

首の横っちょで髪を縛ったアルタが落ち着いた様子で歩いてくるのを見て、ハルはやっと少しだけ安心して、場所を開けた。

「ミッションお疲れ様。ああ、これなら私が治せるわ。ちょっと入って待ってて」

てきぱきとクルアンの傷の具合を見て、武器を取りに戻ろうとしたアルタの洋服の袖口を、クルアンが血を流した顔のまま引きとめた。

振り返るアルタの表情は、当然怪訝なものだった。

「……俺は、無理だ」

アルタは一瞬、聞き返そうと口を開いた。それからその顔つきが刹那に変わった。口元を手で覆って、今にも泣き出しそうな顔になった。

「ごめんなさい。私、そんなつもりじゃ……ごめんなさい」

半ば涙目になったまま、アルタは弱弱しい足音を立てて部屋の奥に引っ込んでいった。その後を、クルアンのカツカツという規則正しい足音が追った。

玄関口に取り残されたハルは何が何だかさっぱりである。

（無理？　俺に？　何が？？？）

53　ハル、日記を追記する

三月二日　追記

クルアンが切り傷を作って帰ってきた。まぶたの上だから出血量が多かっただけで、大した怪我じゃなかったみたいでよかった。闘ってたのはトトガーナっていう魔物で、一人で討伐に行くのは珍しいんだって。クルアンの魔法、強いんだろうな・・・。

クルアンは過剰魔だから、魔力を与える治療は行えないんだって。自然治癒を待つしかないみたい。アルタはあのあとずっと元気がなかった。アルタが悲しいと、私も気分が沈む。

（アルタ、大分落ち込んでたなぁ）

クルアンの傷口をガーゼで押さえながらアルタが見せた、切なげな表情にペン先がとまる。ハルには感じられた。心を痛めた人間の顔は、触れたらはかなく散ってしまいそうだ、と。

負傷した本人は何事もなかったかのように部屋に戻っていた。理由はわからないけどなぜだか顔を合わせるのが気まずくて、ハルは箪笥の上で日記帳の追記を書いては消して、消しては書いていた。クルアンは本を読んでいるようだった（背後のベッドからときたま

聞こえるページをめくる軽い音が部屋の静寂を際立たせていた）。

クルアンは部屋で、お風呂に入るか寝る以外することといえば読書ばかりしていた。一度食事をしているのを見たことがあるけれど、それを除けば、ハルにとって部屋でのクルアンは『ゆうに三キロは超えそうな分厚い本に常に視線を落としているとんがり帽子の少年』だ。

（あれ？）

目が包帯でふさがれた状態でどうやって本を読んでるんだろう？

54　隠された左目

目が包帯でふさがれた状態でどうやって本を読んでるんだろう？

ハルの知りたがりの虫が急にうずうずしてきた。出来心というやつである。あまり音を立てないようにそっと立ち上がって、ハルはクルアンの正面が見える位置まで忍び足で行き、さりげなく（本人はさりげなくしたつもりである）ウィザードの顔をチラ見した。

クルアンは確かに、本を読んでいた。その証拠に、いつも片目を隠している不自然な前髪を横に払っている。

（あの目だ）

いつも隠されている、意味ありげな左目。銀色の髪から出てきた事はまだ一度もない。

「何読んでるの？」

ハルが近付いてクルアンの顔を覗き込むと、クルアンにとってはそれなりの不意打ちだったようでびっくりしたような表情で顔をあげた。手で髪を払ったままの状態で、二人の目がしっかりと合った。

ハルはその瞬間、室内が無音になった気がした。ただ、とんでもないものを見てしまったという事はわかった。それはある意味不思議に満ちていて、そしてもう一つ、残酷という言葉を秘めたものだった。

その黒眼はほとんど見えないに等しかった。なんと、クルアンの

左目をすっぽり覆うように、白く巨大な雪の結晶が張り付いていたのだ。相当冷えているのか、薄く煙のようなものがゆらゆらと空気中に消えて行く。まだ完全な形ではなかったが、確かに

雪の結晶

だ。

クルアンはなぜハルが大きく目を見開いて自分の顔を凝視しているのかわからなかったようで、しばらく微動だにしない。ハルからのアクションを待っているかのように、じっとしている。

「それ……」

クルアンの左目に張り付いた輝きに向かって、ハルは無意識のうちに右手をのばしていた。

５４　隠された左目（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
やっと試験が終わりました・・・。

55　青い表紙の魔道書

するとクルアンはとんがり帽子が転がり落ちるほどの勢いで、ハルの手をはたこうとした。実際は空振りだったので二人の手はすれ違ったが、ハルはびくりとして動作を停止した。

「駄目」

子供みたいな言い方だった。短く、ぽつりと、ただ伝えたいことだけを最小限に口にしていた。青い唇が小さく開くと、そこからもまた白く吐息があがった。

「これに……触るな。お前も過剰魔になる」

ハルの胸部で、心臓がドクリと打った。まるで電撃が走ったみたいに、一瞬背筋を駆け巡った衝撃が、ハルの両目を氷の過剰魔からそらさせる。

「なぜ……」

クルアンは一つ、吐き捨てるように声に出すと、本を放り出してバスルームに入って行ってしまった。青い表紙の魔道書だった。ハルは本をそっと手にとってみた。腕にずしりと来る厚みだ。

「重たい」

とつぶやいて、ハルはしばらくそこから動く事ができなかった。

（アルタも、こんな気分だったのかな）

帰還したスーサの明るい声が、果てしなく遠く聞こえた。

「ただいま、ハル！」

「おかえり」

スーサが黒いゴーグルを得意げにあげてひょっこり顔を出したので、ハルは慌ててにっこり笑った。それを見てスーサは見たまんまのコメントをした。

「大丈夫？顔引きつってるけど」

「え、別に？」

「あ、それ、クルアンの魔道書？何でハルが？」

「いや、あたし……」

「まあいいや！　今日の晩御飯なんだろ？」

スーサは弾む足音をたててリビングに向かった。じきにシャワーの音が、して、ハルは胸が痛くなって、青色の表紙を抱きしめた。

「……ごめん」

さあさあと流れる水の音に抱かれて、ハルはただ心の揺れに、じっと曇り色のカーペットにうずくまっていた。

５５　青い表紙の魔道書（後書き）

青い魔道書、頭のすみっこにでも置いておいていただけると嬉しいです。

56　ハル、柘榴を落下させる

「ああ、過剰魔結晶のことね」

「過剰魔結晶？」

アルタの言葉に、三人は声を揃って聞き返した。

「あれ、誰にも言ってなかったっけ」

「聞いてないよ。気になってたけども」

スーサの声がひっくり返った。フェララは品のあるデニム地のハーフスカートのポケットから小型の機械を取り出して、キーボードに何やら打ちこみ始めた。

「触ったら過剰魔になっちゃうの？」

ハルは勢い余って食卓から身を乗り出した。結果としてテーブルクロスがずれてカクテルグラスが倒れ、中から赤く熟した小粒の果実が零れた。果実は軽やかに転がって、床に小さく音を立てて弾んだ。　アルタはそれにはおかまいなしに、難しい顔をして呻った。

「それはきいた事なかったけど、本人が言うのならそうなんじゃないかな？　いつも髪で隠してるしね」

「出たわ。過剰魔結晶、ほら」

ギルドマスターの話を遮って差し出された液晶画面につらつらと書き連ねてある説明書きを、食卓の四人は頭を寄せ合って覗き込んだ。

【『過剰魔結晶』について
過剰魔結晶とは、生物一個体が持つ魔力の器（＝マズヴォール）より魔力の多くなってしまう過剰魔という異常状態におかれた人類に現れる症状の一種である。マズヴォールの許容範囲を越えた魔力が皮膚の一部に集中的に貯蓄され、結晶化する。一般的には雪の結晶の形をしている】……

「接触すると魔力が一気に逃げ込み、場合によっては触れた側が魔力過多になることもあると書いてあるわ。ハル、うかつに触っちゃ駄目よ」

緑色の瞳孔で見据えられ、鋭く指をさされたら頷くほかない。ハルはフェララの危険物を扱うような言い方に抵抗を覚えたが、口をつぐんだまましぶしぶ首を縦に振った。

（私のことを心配していてくれてるんだもん、ここは感謝するところだよ）

５６　ハル、柘榴を落下させる（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
お気に入り登録してくださった方感謝です、励みになります。

一応２００００アクセスを超えましたのでここにでご一報させていただきます。

57　ハル、布団の中で身震いする

そう自分に言い聞かせてフェララに礼を言い、ハルが布団にもぐりこもうとする頃には、クルアンはもう消えかかる様な眠りについていた。実際に体が消えかかっているというわけではないけれど、ハルはクルアンの寝顔を見てよくそんな気分になった。

（不思議。いや、霊妙、かな）

クルアンの寝方は右向きで、体を丸めて縮こまるようにしている。その保守的な体勢の周りにできるシーツのしわが、一人を人間をそっと包み込んでいるように見えて、そうしてクルアンが別世界にいるかのようにハルには見えていた。もう二週間も一緒に寝ているというのに、ハルは相変わらずベッドの柵に触れるだけでも緊張した。ハルは意味もなく寝間着姿でベッド全体を眺めた。

なんだかんだで、まだベッドは一段のままだ。増えてきたドクドだのゴブリンだののおかげで、スーサもフェララも退治依頼にひっぱりだこなのだ。修理作業のための時間はほとんど取れていないのが現状だ。

（早く足治して、いっぱい依頼をこなさなくちゃ）

ハルは大きく頷いて、するりと氷使いの隣にもぐりこんだ。とたんに体からあふれている冷気が容赦なく体温を奪って、ハルはフェララ手作りの掛け布団のなかで一つ、身震いした。

（クルアンは寒くないのかなぁ）

何せ顔を合わせるのは寝る前の数時間だけだから、実はルームメイトの事はあまり知らない。少年は必要以上にしゃべらなかったし、ハルも無理に話そうとはしなかった。

ただ何とも不思議な事に、ハルはかなりのおしゃべりであるにも関わらず、全く話しかける事のないクルアンに対する苦手意識はなかった。

（何でだろう）

誰とも話せないあの時間が、あんなに苦しかったのに、今は……。

57　ハル、布団の中で身震いする（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

58　夢中のハル、掟破り

「さあ、女王蜂の宝物を見せてもらおうか！」

何度も聞いた覚えのある、醜い笑い声が耳に障る。ハルは紫色のローブに抱かれながら、耳を両手できっちり覆って震えていた。

（もう聞きたくないよ。何度も、何度も同じことばかり）

「私は女王蜂じゃない。この子も物などと呼ばせないから」

女性の声は息切れでかすれているものの、確かな力強さがあった。だがそれがすぐに消えてしまうだろうという事を、知ってしまっている自分が恨めしい。

「お別れだな、女王蜂」

「やめて……」

ハルはその時、初めて幾度も言い聞かせられた『しゃべってはいけない』という掟を破った。

子供が口を利くというのは敵方の予想の範疇ではなかったようで、ほぅ、と感嘆の声が上がった。ハルが恐々紫の布の向こうに顔を出してみると、丁度団体のリーダーと思しき男が枝状のステッキを下ろすところだった。男は唇がさけたのではないかと疑われるほど横に広がった大きなマスクをしていたが、三日月形になった両の目がその歪んだ笑みを表していた。

「坊や、我々の所に来るかね？　そしたら私も是以上手出ししない」

女性に話しかけるときとは打って変わった猫なで声に、わずかにハルは胸がむかむかしてくるのを覚えたが、その感情は間もなく脳の中をかき回すような警告音――まるでお江戸の近火の鐘のような――が起こす目まいによってかき消えた。ただ男の視線から、母親の身体の重みから逃げ出したい。いつからか鼻をつき始めた血の匂いが心地悪い。

迫ってくる灼熱の猛火は、最後の力を振り絞った魔女の欠片をあっけなく飲み込んで、ひるみさえせずに突っ込んでくる。

死ぬ。死んでしまう。この人が死んでしまう。

ハルの頭の中に、自分が死ぬことへの恐怖は露ほども生まれてこない。ただ目の前の人間が最期を迎えてしまうとういう身の毛もよだつような予感が逆にハルの目を気味悪いほどくっきりと開かせている。

（いやだ）

59　ハル、悪夢の中（前書き）

残酷な描写あり。

59　ハル、悪夢の中

嫌だ。こないで。殺さないで。殺される。ころされる、ころされるころされるコロサレル！！

突如として、ハルの眼前に大きな花火があがった。鉄の臭いをまとった、真っ赤な芸術。飛び散る液体が髪に、手に、まつげに、足元にべちゃべちゃと音を立てて落ちてきた。

「へ……」

赤い雨にまじって落ちてくる、くすぶった襤褸切れや折れた白いスティックが頭皮に突き刺さって痛い。

ハルは自分の身におきたことが理解できなかった。

（何？これ。マグロのお刺身みたい。こっちには骨が刺さってる。不思議なお魚）

「うふふふ、ははは」

けたたましい笑い声が部屋を包んだ。

（赤い花火だよ。綺麗……）

「見て、お母さん」

目と目を合わせようとした、少女の動きが止まった。はしゃいでいた表情が、さっと疑念の色に染まる。母親の変わり果てた姿が、

いや母親ともわからないようなそれが、少女の前に残酷に投げ出されていた。

「お母さん？」

どこ？

「くすくすくす」

へんなの、お母さんが消えちゃった。かくれんぼしたいのかな。ハルは生魚の肉片に似たそれを見つめながら奇妙な恍惚感に浸っていた。あたしは今目の前にあるものの正体を知らない。うれしい。あたしは今幸せ。

でもそんな浮かれた感情は、泡沫みたいに頼りなく割れてしまうのだ、こんな風に。

「やったぞ」

ハルの感じているのに似た狂喜を乗せた声色が、目前の幻想をかっさらっていく。男の声は興奮に震えていた。笑っているようにも聞こえ、泣いているようにも聞こえる。そんな調子で、男は大げさに天を仰いで声をはりあげた。

「女王を殺した！アークルーンは我々の手に！」

刹那、ぱあんというカーニバルがかった銃声に、ハルのエクスタシーは瞬時に打ち破られた。

ハルの両目が足元にちらばった、赤と肌色と紫が混ざった異物を

捕らえたとき、気づく。知らないふりをしていた、最悪の●●へと眠りを断たれたのだから。

ハルは痛みにしびれる肩を触った。かたいものが指先を押し戻す。打ち込まれた弾は熱を帯びている。

「う……うふふ、は、ははは」

爆発した人肉の香りにまかれて、少女が目を大きく見開いた。

そして、甲高い声で絶叫した。

（なにも聞きたくないなにも見たくないもうだれも私にさわらないで）

耳をふさいで、小さく縮こまって、でも視界だけは明確に辺りを映し出している。一番見たくないものが鮮やかに色づいた風景として脳みそを侵食していく感覚が走った。ハルは歯を鳴らして笑いながら奇声をあげて、床に頭を激しく打ち付けた。視界をぼんやりさせるのにそれはハルにとって必要な行動だった、同時に無意味だった。見ている世界がぼやけても現実は消えない。馬鹿馬鹿しい定義が、どこから仕入れてきたんだかふと頭をよぎった。

段々と額の骨に走る刺激が感じられなくなっていく。頭がぼうっとして、目の前が真っ白になっていった。

「うわぁぁぁぁあああ！」

自分の叫び声で、ハルは暗闇のなかハッと目を覚ました。突然訪れた静寂に、激しい息遣いが苦しげに響く。

「そう……夢だ……」

（なのにどうしてこんなに悲しいの？）

不意に鼻を突き抜ける痛みに、じわりと目がにじんだ。

（あっ）

思ったときにはもう、ぱたぱたと涙が布団に落ちていた。夢の中でしていた動作の反動で半身を起こしていたのだ。零れる悲しみの雫が体から力を奪って、ハルはどさりと倒れこんだ。ふかふかの布団がハルの体を受け止めてくれる。

「……っ」

全身を包み込むやわらかさに、ハルは手のひらで顔を覆った。泣きたくなかった。でも涙は後から後から容赦なくあふれてくるのであった。寝巻きの袖口で幾度となくぬぐっても、背の凍るような恐怖と胸を切り裂くような悲しみが消えてくれない。

ハルはいつかと同じ色の袖口で目を覆いながら、疲れて眠りにつくまで泣き続けた。

（もう、いやだ）

x　＋　x　＋　x　＋　x　＋　x　＋

ハルが悲しんでる。

テレジアは望まれてない。
わたしたちはまだでてきちゃいけない。
だめだぞ、ハク。
ハルは傷ついた。

ハク、コートの中は暗い。
いつになったらまた、必要とされるの。
それともうわたしたちのいる意味なんて、ハルにはないの。
教えて。
答えて。
ねぇ、目を開けて。
x　＋　x　＋　x　＋　x　＋　x　＋　x　＋

59　ハル、悪夢の中（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
グロテスクシーン書くの初めてだったのでタイピングしながら気持ち悪くなった割にはさほどリアリティがない気がしますが。一応全力のつもりです。

６０　ハル、アルタと依頼を受諾する（前書き）

ハルの夢の中で、氷使いの女は炎魔法によりハルの目の前で破裂した。

「もうつかれちゃった」あの声がいつまでも残って、ハルは泣き疲れて寝てしまった。

60　ハル、アルタと依頼を受諾する

「よし、ここら辺でいいかな」

森の中にしゃがみこんで、ハルは持参したピクニックシートを広げた。ばふんと大胆な音とともに、前髪を心地よい風が流れる。

アルタと二人でトトガーナ―クルアンが怪我させられた魔物―の討伐に行ったハルは、十五体討伐のノルマ（ギルドマスターが設定したノルマ）をクリアーしていた。

トトガーナを一人で討伐するのは、本当に難しかった。小型のワニみたいな魔物であるトトガーナは、ドクドと同じく単体行動が基本。そのため見つかりにくく、不意打ちを食らうことが多い。実際ハルはその鋭い尻尾で切り傷をつけられまくった。その度に治癒してくれるアルタは、ありがたい。

初めて見たヒーラーの技は、神秘的で、守護的だった。アルタの技は『ヤイ』っていう。名前は二文字なのに、詠唱はとても長かった。

ハルは前衛となりトトガーナを自力で八体、アルタの鎌とともに七体、合わせて今までにない自信をつけた。

まだいけると意気込むハルだったが、アルタがお昼時であることを告げると途端にお腹の虫が威勢よく音を上げたので、木陰にカムフラを兼ねた土色のレジャーシートを敷いて昼食を摂る事にしたのだった。

「ハルは頑張り屋さんだね。ミッション終わってもまだやる、なんて」

「そんな事ないよ。あたし、アルタと一緒にやってれば何でも楽しいし、それに仕事は沢山やった方がいいもんね」

アルタは嬉しそうに笑って、昼ごはんの上にかかっている布を外した。コスモスの造花でシンプルに飾られたバケットの中のサンドイッチを見て、最初に出会った時の事を思い出す。

「あの時とおんなじ中身だ」

「あ、それは突っ込んじゃいけないところ。実は子供の頃全然家事の手伝いしてなかったから、作れるものも人並みより少なくて」

アルタが恥ずかしそうに笑うので、ハルは慌てて訂正した。

「あ、ううん、そういう意味で言ったんじゃないんだ。ただ懐かしいなって思って」

「覚えててくれたんだ、舟の上でのこと」

隣でアルタが笑うと、ねずみ色のポンポンが胸元で揺れて、かわいらしい。鎌を振っていた時との切り替えがくっきりしていて、ハルはさすがギルドのリーダーだ、とアルタを見上げた。

「当たり前だよ、ほんの一か月まえのことだもん」

ギルドマスターはちらっと空を仰いで、あ、そうか、と頷いた。

「まだあれから一カ月しか経ってないんだよね。でも、もうハルとはずっと一緒にいた気がするよ」

「本当？　そう言ってもらえると、なんだか嬉しいな。」

仲間として見てもらえている気がする。それを口にしてみたら、アルタのぱっちりした目がジャパニーズドールみたいに細くなった。

「だって、一緒にいるんだから仲間だし、友達よ。今までもこれからも、ね。」

そう言って相方は茶目っ気たっぷりに片目をつぶってみせた。アルタは大胆だ、とハルはまた感心した。まだ隠しごとだらけの自分を仲間だと堂々と言ってくれるのはありがたかったが、また秘密をずるずると引きずっている自分が後ろめたくもあった。

「アルタ……あたしね」

６０　ハル、アルタと依頼を受諾する（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
お気に入り登録おかげ様で三十人到達しました。
こんなあやふやな小説にクリック入れていただけてありがとうございます＞＜

61　ハル、涙を見る

「アルタ……あたしね」

「あら、もっと食べてよ。あたしがうまく作れるの、是くらいしかないんだから」

ハルが零れおちそうになった本音を、新しく手に取ったサンドイッチにのみ込もうとしたとき。アルタの手が、肩を優しく包み込んだ。

「アルタ？」

返答はない。アルタは真剣なまなざしで真っ直ぐ前を向いていた。ハルの右肩に左手をのせたまま、右手はバケットに突っ込んだまま突然、ギルドマスターは黙りこくった。いつにない鋭さを秘めた瞳がみつめるその先には何もない。

「ハル」

はっきりとした口調で言い切り、アルタはやっとハルの黒い目と目を合わせた。じっと見つめられて初めて、そこにいっぱいの涙がこらえられている事に気づく。

「私、このままリーダーでいていいのかな」

「どうして？　私は友達だって言ってもらえて、すごく嬉しいよ」

心の底から思っていることだったけれど、アルタは目をつぶって

きっぱりと首を振った。

「ハル。心の痛みがあるんだよね」

気付けなかったよ。アルタは伏し目がちに呟いて、うつむいてしまった。叱られて落ち込んだ子供のような仕草に、ハルは戸惑った。

「そんなの無いよ。あたしはアルタといていっつも楽しくてわくわくしてるよ。一緒に活動したのは今日が初めてだけど、それも嘘みたいに思えるくらい」

「ありがとう。でも違う」

アルタはハルから手を離すと、まつげを下向きにして膝を抱えた。ハルも何とはなしにそれにならって、三角座りになる。目の前を青色の小鳥がかすめて飛んで行った。

「一緒にいて楽しいって言ってもらえるのはすごく嬉しいわ。でもただ隣にいるだけで、苦しんでいることにも気付かないなんて、友達失格……リーダーとしても、失格」

「アルタ、どうしたの？　もしかして、昨日の依頼で何かあった？」

アルタは肩を大きく震わせた。

（図星だ）

ハルは顔つきを険しくした。依頼主の家政婦が、報酬を渡すときにアルタの耳元で囁いていたあれは、やはりアルタを傷つけていたんだ。

昨日、アルタはとある富豪の邸宅へ治療に出向いていた。好奇心でついて行ったハルはまだ足首の包帯がとれていなくって、家の主人が用意してくれた椅子に腰かけて待機していたため、治療の様子は見えなかった。が、帰り際、その家で長く働いている家政婦がアルタのそばに歩み寄ってきて、二言三言囁いたのだ。アルタは会釈というにはいささか深いお辞儀をして、屋敷を後にした。あのときはハルはすっかり待ちくたびれていて、微妙な変化など到底気づくはずもなかったが、頼まれた事を「やってあげた」のだから、普通はあんなに頭を下げはしない。

「なんて言われたの。言える？」

61　ハル、涙を見る（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
地震、大変ですね・・・節電に努めます。
みなさんお気をつけて＞＜

62　ハル、力不足を思う

今度はハルがアルタの瞳を見つめる番だった。アルタは

「レグルスは高レベルのギルドだと聞いていたが……心の傷ひとつ消せないヒーラーがリーダーというのは驚いた、と」

人は身体に損傷を受けた時、その衝撃が少なからず心に響く。その傷を治すことの方が、ヒーラーへの依頼は多いという。

「私は言葉を返せなかった。母様からもらった大事な力なのに、いまく使えない……使いこなせない」

何のためにここにいるの。土色を俯瞰する長いまつげが、アルタの心の戸惑いを浮かべて左右にぎこちなく混迷していた。気持ちがつられないように、ハルはあえて明るく弾けた声で

「そんなぁ、だってアルタがいなかったら、あたしはミッションこなせてなかったよ。何回切り傷つけられたかわからないもん。ね、アルタはあたしの事ちゃんと見ててくれてるよ」

しかし、膝を折り曲げてうつむいたマスターの面（おもて）は足元から離れてくれない。

「体の損傷は時間がたてば必ず治る。フェララみたいに優秀な技術者がいれば、治癒時間を早める事もできる。でも切り崩された心は、急がないと……擦り切れて手遅れになるの」

（そういえば……昨日の依頼人は自殺未遂だった）

都会の真っただ中で、スクールバスと思われる車両にバイクで突っ込んだ依頼人の心の傷が、アルタには見えたのだろうか。

（感じる事はできても、手に負えない……か）

「やるべき事はいつもわかってるの。ハルの怪我だって、処置する場所も方法も全て把握していた。でも、技術不足で……もう心以前の問題よ。いざというときに役に立てないのよ、私」

アルタは大きくため息をついた。

ハルも息苦しくなってきて、唇をとがらせてぶくぅーっとたまっていた物を吐き出す。

（わかってるのに、出来ない、か）

どこかで聞いたような台詞だった。いや、飽きるほど浴びせられてきたと思う。でもハルには、満足な答えを切り返す事が出来た記憶はなかった。

（私も同じだね）

アルタを、友達を励ましてあげたい。でも欲望に見合うだけの力を、ハルは持ち合わせていなかった。

「ね。もう、帰ろっか」

ハルは立ち上がって手を差し伸べ、微笑んだ。

６２　ハル、力不足を思う（後書き）

本当に停電するんだろうか・・・
第４なんですが・・・。

63　キリンが二つ

彼女の物言いにはいつも隙がない。

「入るわよ」

いつものように、威風堂々と言った雰囲気を身にまとったまま後ろ手で扉を閉めるフェララに、アルタはベッドから身を起こした。

「どうかしたの？」

「ハルが話してくれたのよ。カットマンの依頼、やはり私が行った方がよかったかしら？　次の治癒依頼、私が行きたいんだけど」

カチンとくる申し出である。しかしアルタは、フェララのしようとしている事が何となく読みとれた。アルタはベッドの柵に腰掛けて、戸口で腰に手を当て、鋭い視線をこちらに向けているフェララに笑いかけた。

「励ましに来てくれたの？」

「別に。たかが一人や二人の意見に惑わされるようなくだらないプライドの持ち主より、私の方がリーダーに向いてるって宣言しに来ただけよ」

「ありがとう」

フェララはツンとそっぽを向いた代わりに、右手に持っていた物

を投げてよこした。不意打ちだったのでキャッチしようとあたふた手を伸ばすと、見事にストンと赤いセロファンが掌に収まった。

「全く不思議でしょうがないわ。リーダーの素質など皆無なあなたがギルドマスターを名乗るなんて。最低能力者のあなたがね」

「でも、最低能力者にしか出来ない事があるって、あなたこの前言ってくれたわ」

隠しきれずに口角を上げるフェララの傍ら、アルタはキャンディーの包み紙を取り払った。

「あ、キリン型だ」

「え、嘘!?」

フェララは自分が放り投げたラムネの形を確認し、それからデニムのショートパンツからオレンジ色のそれを取りだし、あわただしく中身を確認する。

「ちょっと、どっちもキリンじゃないのよ!」

「そうだけど……」

「こういう時は私がキリンであなたがゾウでしょうっ」

「いや、基準わからないけど……」

「ああ、キリンが二つだなんて。キリンが二つじゃないの!」

二つのラムネを掌にのせてくるくる回るフェララを、アルタはあっけに取られてみていた。

（よくわからない変な人だわ。言う事は厳しすぎるし、入って半年でギルドマスターの座を狙ってくる……でも）

アルタはお茶を振舞おうと、ポットを片手に笑った。

（ありがとう、フェララ）

もう少し頑張ってみるよ。

アルタは心の中で呟いた。

「そういえばアルタ」

「何？」

「今日はクルアンと一緒に寝るって言ってなかったかしら？私の脳の記録によると」

アルタは一瞬宙を見上げて考えた。しかし長くはつづかなかった。

「忘れてたわ！」

「彼ら、もう寝るみたいよ」

アルタはガウン姿で寝台から飛びのき、部屋を去ろうとして電気コードにつまづいた。前のめりになってなすすべもなく転倒した結果、盛大に胸を打ちつけた最低能力者のギルドマスターを、最年長

のギルドメンバーが冷静沈着な様子で

「お大事に」

ちゃっかりキリン二体を口の中で溶かしていた。

63　キリンが二つ（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
これからちらほらアルタ視点が出てきます。

終業式沈没した

64　ハル、リアリティを確信する

ハルは一人、寝慣れない布団を持て余していた。

アルタがクルアンと眠ると言ったので、ハルはアルタの部屋を借りて寝る事になったのだが、どうにも空気が甘すぎて眠れない。

（これじゃあ、チョコレートにおぼれてるみたいだよ）

おかげでハルはここ半刻程、寝がえりを打ったりわざと欠伸してみたりとどうにか眠りに就こうとしていたのだ。

「眠れないよ……」

口に出してしまうと、それ以上夢の世界に入れない理由をごまかせなくなってしまった。

またあの夢を見るんじゃないだろうか。一人の魔女の、最悪の結末を。

ハルはあの悪夢が現実に起こった事だと感じていた。毎日同じ場面を偶然見る筈はないし、クルアンと一緒の布団で日を超すようになってからだという事もわかっていた。

（やっぱりノンテレジア作動してるんだ）

恐らくあれは、クルアンがハルと出会うまでほぼ毎日見ていた、夢。いや、レグルスに所属するずっと前に本人が自身で体験した事

件だ。ハルにはそれを確信するだけの証拠があった。クルアンが逆サイコメトリーであるという確たる事実にのっとった証拠だ。

「なんでだろ。ねえ。」

尻尾に声をかけてみる。もう眠ってしまったらしく、返事はない。ハルは尻尾をくるりと丸めて、横になった。

「なんで、あたしなんだろう」

ハルは破裂して死んだ魔女の屍を思い起こして、心中で弔おうとした。が、突然胃の底からこみあげてくるものがある。ハルはベッドに身を横たえたまま口元をふさいだ。

（忘れるんだ）

吐き気をこらえてアルタのベッドにうずくまったまま、ハルは自分に言い聞かせた。

（今日はクルアンと離れている。夢を見ないかもしれない。だから目をつぶって。明日の依頼に備えなきゃ）

アルタの落ち込み様に、ハルは正直驚いていた。アルタはいつもにこにこしていて一緒にいて気分が安らぐし、足をひねったとき、依頼をキャンセルしてまで拠点にとどまってくれた。忙しそうに書類整理をしていたかと思えば、怪我人が帰還したらすぐ手当できる。ハルにとってアルタは万能リーダーの様に映っていたのだ。

（アルタだって人間だもん。私とおんなじ）

だから今まで支えてもらってた分、今度は私がアルタを助けてあげるんだ。

ハルは必死に友達のことだけを考えようとした。

（明日の依頼は、アルタと一緒にできるものを選ぼうかな。最近は昼をまたぐ依頼が多いから、たまには私もお弁当づくり手伝おうかな）

あれもやって、これもやって。指折り数えるごとに、焦燥感は増していく、恨めしいほど。

（怖いよ。またあの夢を見るんだ。出られなくなるかも）

ハルは拳を硬く握りしめていた。

６４　ハル、リアリティを確信する（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
アルタの味覚と嗅覚は甘さに鈍感なようです。

65　アルタの歌声

その時だった。

［おやすみなさい

今日はもう終わり

私の言の葉に織られて

夢の中を彩りましょう」

天使の歌声と呼ぶに値する、眠りへ誘う子守唄が聞こえてきた。

拠点を包む柔らかな音の綴りに、ハルは拳を振りかざした状態で静止した。突如として有り得ないほど唐突な眠気が襲ってきたからだった。あれほど意識をつかんで離そうとしなかった悪夢への畏怖の念が、別世界に溶け込んで消えてしまったかのように感じられなくなった。足枷が外れて肩に羽根が生えたような心地で、ハルは瞳を閉じた。

（心が溶けるよう。綺麗な旋律……）

［たおやかになびく

王の命をたたえましょう

したたかに移りゆく

窓の景色を数えましょう」

ハルは先ほどまでの不眠感はどこへやら、あっという間に眠りに落ちて行った。

一方その頃、アルタはクルアンの青白い横顔をじっと眺めていた。青い唇は言葉を発しようとしない。氷のように透き通った空色の瞳は空虚に天を見上げている。沈黙を厭わず、相手の行動を待っている。

65　アルタの歌声（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
区切り方が難しいです。

66　クルアンの告白

一方その頃、アルタはクルアンの青白い横顔をじっと眺めていた。青い唇は言葉を発しようとしない。氷のように透き通った空色の瞳は空虚に天を見上げている。沈黙を厭わず、相手の行動を待っている。

（この少年はぼうっとしているのではないのだろうな）

何も考えていないように見えるが、実は蟒のようにじりじりとこちらの様子をうかがっているのだ。どう出てくるか。どう構えようか、と。

「ハルは、どう」

今朝から予定していた質問を、する。氷使いは視線をこちらに向け、じっと考え込むようなそぶりを見せた。

「まだ一カ月だし、よくわからないかな」

「……」

「……」

両者、相互を見つめ合って微動だにしない。海の底でにらめっこしているみたいに、静かで、圧力がかった空気が漂う。

（えーと……）

つなげる言葉が見つからず黙り込むアルタ。

しばらくの間、クルアンは一言もしゃべらずに天井を見つめる。

不意に、クルアンは重たい口を開いた。

「……魘(うな)されてた」

「ハルが？」

「泣いていた」

「そんな……あんなににこにこしてるのに」

「……。寝るぞ」

ハルの心が想像以上に決壊しているという事実を知って、アルタの心にもまた暗澹たる雲が垂れこめ始めていた。

クルアンの身体が発する冷風が、決意の揺らぎを促している気がした。

６６　クルアンの告白（後書き）

よんでくださりありがとうございました。
しばらくグロテスクなシーンはのせられなさそうですが、もうしばらくお待ちください。。
まだまだ余震が続いていますね。東北も関東も、心配です。

???

くすくすくす。
ギルドマスタァの　心　は抑えた。
魔法少年は　病気　がち。
錬金術師は　追って　に気付かず
エルフは　武器　すら持っていない。

仲間に恵まれない可哀そうな子。
徒桜　になりなさい。
もうすぐ　私　が殺しに行ってあげる。

森の中の　影　、帰ってきたらブリオッシュをあげましょう。
それともバニラのトリュフがいいかしら？
くすくすくすくす。
見なれぬ影にご用心。
もうすぐ　終わり　が始まるよ。
ねんねんころり、ねんころり。
永久（とわ）に眠れや十五の乙女。

67　どぶねずみの駆除依頼

「どぶねずみの駆除？」

フェララの言い渡した依頼のタイトルに、ハルとスーサはそろって驚愕の音を上げた。

レグルス全員出動の緊急依頼と聞いたのでいつもより三十分も早く起きて集まったというのに、

「なんで？」

唇をとがらせるスーサの隣で、フェララは澄まし顔で依頼書をひらひらさせている。そのすぐそばの椅子に腰かけていたアルタが思わずと言った風に吹き出した。

「紛らわしい伝達しないでよ、フェララ」

どういう意味かと聞き返す前に、

「同じようなものじゃないの。三日連続の殺人事件の犯人とみられるテロ組織の討伐。どぶねずみの駆除。ニュアンスとしては間違ってないわ」

誤解を招いた張本人はのんきにモーニングティーをすすっている。あまりの悠然さに、ハルはミートパイをくわえたままげんなりした。

「なんだ、総出でいかなきゃならないほどねずみが増えたのかと思

ったよ」

「ははは、ハルってば変なの」

「って言ってるけどスーサも聞き返してたよね」

「うん」

スーサはアルタのツッコミにより現実を思い出したようだ。

「敵方のレベルは」

陽だまりに包まれた季節色のバルコニーから聞こえる声は、氷使いクルアンのものだ。

特殊スキル『逆サイコメトリー』の発動を懸念したアルタの要望にこたえてスーサ&フェララの技術者コンビがバルコニーに取りつけた朝食用のテーブルが、早朝の太陽を跳ね返して白く光っている。

その輝きを背にして立つと、クルアンは逆光で黒魔術師のシルエットに見えた。

「テロリストの平均レベルは3．4。それなりに手ごわいけど、まあ、行くのは私達だけじゃないし、大丈夫でしょう」

余裕綽々の様子でどこか自慢げに笑ったフェララとは裏腹に、スーサは身じろぎして視線を宙に泳がせた。

67　どぶねずみの駆除依頼（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
近く、ブランク部分を掲載する予定です。

最近行き詰っているので感想くださると助かります

68　フェララ、火事場の馬鹿力を利用する

余裕綽々の様子でどこか自慢げに笑ったフェララとは裏腹に、スーサは身じろぎして視線を宙に泳がせた。

「スーサ、お留守番アピールしても無駄。拠点管理は私の役目ですから、行ってらっしゃい前衛っ」

戸口を指さすフェララを上目づかいに見て、スーサはテーブルに顎をつけて低く呻った。叱られた子犬みたいだとハルは思った。

「一応、本業は錬金術師なんだけどなぁ……」

ほっぺたをふくらませるスーサの口元に、アルタが紅茶にくぐらせたクッキーを差し出してやる。すね気味の自称錬金術師は口だけ動かして、金魚みたいにかぶりついた。

さくさくさくさく。

（本物の子犬みたい……）

ほのぼのした気分でスーサの頭をなでていたハルの前に、つと何かが差し出された。

フェララの細い指先が差し出したものをしばらく眺めて、ハルは顔をあげた。

「これ、何？」

聞くと、フェララが開発した通信機らしい。規模の比較的大きい戦闘の時は、一人ずつの現在地や状況、体調を管理するためにメンバーに配布するらしい。

卵型の機械は手のひらに収まるほどのサイズで、淡いピンク色の機体に赤いボタンがいくつか取りつけられている。

「これがセンターモニター。小さいけれど高画質、私と顔を合わせて話が出来るし、映像を送信することも出来るわ。」

GPSがどうこうと簡単な説明を受け、ハルは桃色のそれをコートのポケットに入れた。

「ここのボタン、固くて押せないけど?」

隣でスーサが声をあげ、フェララに機械をかかげて見せるのは黄色の卵。確かに一つだけ、スーサが力いっぱい押してもびくともしないボタンがある。

「あ……私のも」

「それは緊急呼び出しボタン。ピンチになった時にしか押せない仕組みよ」

「どんな仕組み?」

「火事場の馬鹿力。これでわかるかしら」

「よし、鳴るまで押してみよう」

椅子から腰を浮かせ躍起になりかけていたスーサのところへ、一つの声がかかった。

「スーサ」

「ん？」

童顔の斧使いが反応して、クルアンの方を向く。つられてハルもバルコニーを振り返った。

68　フェララ、火事場の馬鹿力を利用する（後書き）

ありがとうございました。
なんだかんだ、スーサなら押せそうな気がします。そんなに強い設定はできてませんが、なんとなく。
そしてフェララに怒られそう。

69　まさかの二刀流

かつかつと規則正しい足音を食卓に響かせ、漆黒のローブを春風にはためかせながら近づく魔術師の姿は、おとぎ話の黒魔術師に少し似ている、とハルは思った。それから、自分の黒いコートは皆の目にどう映っているのかな、とぼんやり考えた。

クルアンはスーサのすぐそばまでやってくると、かがんで耳元に何やら一言囁いた。スーサはそれを聞いて少し驚いたように目を丸くしたが、やがてそれが優しい三日月の形に変わった。

「大丈夫だよ。心配しないで」

幼い手が、帽子のフェイクファーをそっとなでる。その瞬間、ローブの影から口元が少し笑って見えた気がして、ハルはドキっとした。

（え、今……？？？）

自分の反応に取り乱すハルだった。

出発前になると。

「あの……何？」

ハルはスーサの格好をまじまじと見つめていた。

だって、だれだってそうしたくなる。

いつもの斧を右手に持って、頭に黒いゴーグル。一見いつも通りの服装だ、しかし、プラス、あろうことか左手に杖が握られているというまさかの二刀流コンビネーションなのだ。

「そっか、この格好、ハルは初めてだったね。これが僕の本業、錬金術師の杖。星の力を借りて魔術を使うんだよ」

スーサは嬉しそうに、杖を回して見せた。

天井の光を反射してちらちら光っているのは、テンランという魔鉱石なのだそうだ。樫の木でつくられた柄に、あつらえたようにはまっている。

「錬金術師って、星を呼ぶ事ができるの？」

尋ねつつハルが手を伸ばすと、スーサはテンランをこちらに傾けてくれた。

（おお、すべすべしてるよ）

サンストーンに似て、宝石のように輝いている。これを目の前の少年が使っているシーンはあまり想像できなかったが、なんとなくお日様みたいなところが、スーサとの相性がよさそうに見えた。

「錬金術師にはマナマジックっていう、ちょっと特別な魔力があるんだ。確か星の力が波動でなんたらかんたらってフェララがいってた気がする」

「ちょっと、雑談している場合でないようよ」

突然、会話の途中に割り込んできた声がある。振り向くと、普段以上にメイクをきめて、完璧にスーツを着こなしたフェララがパソコン片手に立っていた。

「たった今、先に到着していた少数派ギルドから連絡が入ったの、敵が攻撃を開始したわ」

「ええー……」

スーサが唇を尖らせて、自分の部屋の方をちらっと見やる。しかし

「そこで尻込みしない」

フェララの鋭い視線に見透かされて、スーサの焦点は今度は宙に移り始めた。

(怖がってるんだよね、あのスーサが)

私も気を引き締めて行かないと。

ハルは右手にはめたパペットを一瞥し、一人で大きく頷いた。

69　まさかの二刀流（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

倒壊した家から何人か生存者が見つかっているそうですね。よかったです。

今日中にブランク埋めます。たぶん。

70　ハル、天からの声をスルーする

『戦況を報告します。市軍、後衛３０名撤退。ギルド・ジーナ３名撤退。前衛、ギルド・レグルス加勢を要請します』

無機質に響くセーン市軍隊のアナウンスに、

「もう、闘ってるってば！」

スーサが不平不満をこぼしながら大きく斧を振りかぶった。地面が揺らぎ、地面の前方にひびが入るのが後ろからでも見える。が、相手方は軽やかにかわし、上空に仰々しく飛んだ。

「スーサ、右からも！」

「あいよっ」

ハルの助言に掛け声をかけて、スーサは斧を身の回りで一周振り回し、敵を一掃した。それから降ってきた白刃をグローブで受け止め、杖をかざす。

「偽りの情熱、枷となりて呼び覚ませ、虚無の惑星！　はぁっ！」

風を切る音が鋭く耳に響く。ハルはそれに負けじと、後ろに回り込んできたテロリストの眼前でパペットを噛みつかせる。護身用の大音に身をのけぞらせた男の胸倉をすばやくつかみ、大きく上に放り投げた。

「毎度サンキューな、ハルたん」

男の巨体をキャッチした天からの声は完全スルー。というのも前で闘っているスーサから血が散ったから。ハルはよろめいた錬金術師を支え、片手から杖を拝借すると、眼前に迫ってきたモンクと思われる敵組織の一員のみぞおちを力いっぱい突いた。そしてコートのポケットに向かって

「レグルス・アルタお願いします」

『はいはい、了解』

切羽詰まって敵を撃退したハルに反して、アルタは全くのんびりした声色で応答した。

（しかし、どこがどぶねずみなんだろ、もう）

ハルはフェララのどぶねずみ発言にほとほとあきれていた。

討伐対象とされている地下鉄テロ組織は、かなわぬほどの力ではないとはいえそれなりの力量だし、何より数が多い。セーン市の軍隊まで動く騒ぎだというのに、アルタ・フェララは二人揃ってこれを『日常茶飯事』と称している。さすが、伊達に長ーく生きてきたわけではないらしい。

『ちょっと、今何か失礼なこと言いまして？』

「何でもない」

コートのポケットから聞こえる参謀担当からの文句は、ほとんど

ノイズでかすれている。

70　ハル、天からの声をスルーする（後書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。
活動日記を更新しました。

71　ハル、本気でぐれてやろうかと考える

コートのポケットから聞こえる参謀担当からの文句は、ほとんどノイズでかすれている。どうやらテロリスト側の参謀担当からのハッキングアタックと勝負しているらしい。

『まあこの私が負けるなんてことはあり得ないから安心して頂戴。大体この程度のことでコンピュータから侵入してくるなんて、そんな暇があるならもっと前衛をね』

フェララの蘊蓄がつらつらとスピーカーから流れてくる。

「ごめんハル、もう下がっていいよ」

アルタの治癒魔法を受けたらしいスーサに杖を手渡し、ハルは再び『前衛補助班』としての仕事に戻った。

大規模な戦闘で、団体のフォーメーションが重視される場合、参加者は確定した職業を名乗らなければならないのだそうだ。その名称によって前衛後衛、そこからまた前衛補助と後衛補助に分かれる。

剣や斧・槍など、殺傷能力の高い武器を扱う人達は『前衛班』といって、一番敵に接近した状態で闘う。スーサは斧使いとして活動しているから（というよりフェララが勝手に登録したらしいが）、勿論前衛。そしてパペットや投げ道具など、補助及び護身用の武器を使う者は『前衛補助班』。端的に言ってしまえば、前衛が倒れた時に代わりに闘うスペアみたいなものだ（といった風な事をフェララに言われたのでハルは本気でぐれてやろうかと考えた）。

技術者として『フォーメーション及び待機班』で指揮をとるフェララは「最高指揮官（ナイルカント）」と呼ばれている。ナイルカントは指揮官の中でも一番偉い人なのだそうだ。フォーメーションを指導する技術者は顔合わせの時に十人いるのを確認しているから、その中で顔を見た瞬間にナイルカントに任命されたフェララ、実はすごいかも。

「ハルたん、下から何か来てるよ」

再び降ってきた天からの声で現実に引き戻され、ハルは慌ててわきに飛び退った。

「よそ見してると上からくすぐりにいくぞ」

声の主はハルが放りあげた龍の刺青の女を軽々キャッチし、冗談まで言う余裕があるらしい。

戦場慣れしていないハルは、自分のいる場所にはなはだしい違和感を覚えてため息をつくのであった。

（帰ったら、アルタのビーフシチュー食べたいな）

72　笑いの連鎖

三月十八日

テロリストはなかなか降参してくれない。
まさか三日も泊まり込むとは思ってなかったなぁ……。
ああ、おなかいっぱいお肉食べたい。

そういえば、あの人達はどうしてテロなんて起こしたんだろう。聞き入れてほしい要望があるってことなんだよね。そこまでして何を？
気になるけど、フェララもアルタも忙しそうでなかなか確認するチャンスがない。まあ、私の仕事はセーン市軍のお手伝いだから、そっちに専念していればいいよね。

わざわざ尋ねるほどの事でもないか。

「さ、そろそろ寝るわよー」

ギルドマスターの明るい合図に、ハルはどこか懐かしく感じながら返事をした。

「あらハル、何をしているの？」

ハルは日記帳を声のした方に掲げて見せる。フェララは、ああ、という顔をして、アルタにそれを示した。一つに結った髪をほどく途中で振り返り、手帳を一目見るなり、アルタの瞳が薄暗い待機所

（市軍指定の宿泊施設……とは思えないほどの襤褸屋である）にきらりと光った。

「嬉しい！　使ってくれてるんだ」

ほんわかした友達の嬉しそうな表情に、ハルも自然と頬が緩んだ。

アルタの笑った顔を見れば、まるで肩に羽根が生えたみたいになって、いままで日記に書いてたことなんてすぐに吹っ飛んでしまう。アルタの微笑みは魔法だ……とハルは日記に書き足しておく。

「あたりまえだよ、アルタがくれたんだもん」

ハルは日記をポシェットの中にしまいこんで、アルタが軽装に着替える手助けをした。

「悪いわね、治癒班の装備って無駄にガードかたくって……」

「治癒班は人数がすくないんだから、仕方ないでしょ。あなた、割とレアな能力者なんだから」

「そうなのよね。プリーストなんて市軍には沢山いるだろうと思ってたのにな」

回復系の魔術を扱える者は『治癒班』に配属される。治療できる人が死んだら形勢が圧倒的に不利になるため、本人の装備を体の原型が全く想像のつかないほど厚くし、さらに市軍専属の剣士が護衛についていて、防御はとびぬけて高い。

「そこまで固くガードしなくても、自分で治せるって言ったんだけ

ど……フォーメーションの人達が『念のためです。あなたが死んだら終わりです』って切実な顔して鎧着せてくれるんだもの、あたしおかしくって笑っちゃったんだ」

着替え終えたアルタは木造の小屋の隅に背をもたせようとしてしたたか背中を打ちつけてしまい、一人で勝手に苦笑し出した。

「拠点と違って、ぶつけると痛いわねここの壁……あはは」

笑いのツボにはまって抜け出せなくなったアルタを、生ぬるい目で眺めていたフェララは、ハルの気持ちを代弁して

「あなたのツボって、本当によくわからないわ」

両手をひらひらさせ、面白おかしいイントネーションでしゃべったためハルまで笑いが止まらなくなってしまった。

「あらハル、今のは私のせいじゃなくてよ。だってあなた、アルタとつられてずっと笑ってたもの」

フェララは口元に手をあてて高笑いした。

72　笑いの連鎖（後書き）

だんだん書けなくなってきた・・・ｏｒｚ
もう少し展開早くするように頑張ります！
ヽ（。・、ω´・）ノ・＊：．。ｏ○☆

73　爆発しないでください。

ちょうど大笑いが収まった所で、セーン市軍からの配給食糧が配布された。

「明日の昼まで、これで持たせるようにって」

「ふぅん……足りるかしら」

麻袋を疑り深げに一瞥して、フェララにしては珍しく重々しいため息をひとつ、ついた。

「しかし、セーン市は何をやっているのかしら。負傷者は撤退させる癖に、軍の補給はしないなんて。これじゃますます拉致が明かないっていうのに」

「確かに、全然引いてくれないね……」

ハルは青い刺青のテロリストの表情を思い浮かべた。

不思議なことに、彼らの顔に切実な雰囲気は少しも浮かんでいなかった。願いをかなえたい、というよりは、ただ誰かを傷つけようとしているような顔。憎しみとも何か違う、ただ何となく、悲しそうな表情。無機質というほど冷たい色ではなかった気がする。

前衛は詠唱する必要がないから当然と言えば当然だが、彼らは全く声を出さなかった。仲間同士会話している所もそういえばこの三日見かけていない。ただ目と目があったら、戦う。まるで戦闘プロ

グラムを組み込まれた機械のように、淡々と武器を振う。

突然ちらっとクルアンの横顔が浮かんで、ハルはぞっとした。

（やだ、何考えてるんだろ、あたし。似てるわけないよ）

ときたまじっと焦点を合わせてくる、奥底を覗きこむような透き通った冷たい片目。蒼色の瞳に感じられるのは、空虚と興味が入り混じったような不思議な視線だ。

（不思議な子……）

「ハルってば聞いてる？」

肩にふんわりと手が置かれて、ハルは我に返った。

「しかし、あちらもこれだけ粘ってどうするつもりなのかしら？大体地下鉄テロ用に爆弾持ってるなら、一発やってみればいいのに」

淡い色の巻き毛を指に巻きつけながらフェララがさらりと恐ろしい事を言ってのける。ハルはフェララが作ってくれた寝着用の白いカーディガンに袖を通しながら

「縁起でもない。前衛吹っ飛んじゃうよ。今でも怪我人続出なんだから」

一番怪我をする確立が高い前衛は、メンバーの入れ替わりが激しい。周りがあくせく動き始めると、ハルもつられて持ち場からずれてしまうことがあるのだ。

「本当。前衛は切り傷が多いから、あたしも詠唱しっぱなしで喉乾いちゃって」

アルタは唯一、切り傷を治癒できる役職だ。といってもそもそも、治癒魔法を扱えるメンバーが三人しかいない。考えて見れば治癒というのは本来大変貴重な能力で、それが少数人ギルドの中にいるというのは珍しいことなのだ。

そしてアルタには、杖を使えば離れた所から治癒ができるという更に珍しい能力があるのだそうだ。なんでも通常、治癒をするには傷口に触れないと出来ないようで、アルタが治癒できない部位……たとえば足の筋を切ったとか、骨折したとかという場合は治癒班の配置まで移動しなければならない。

その点、残りのヒーラー（骨治療と筋肉治療）は怪我人が戦場から運ばれてくるまでの手間があるので、矢継ぎ早に仕事が来たりしない。アルタは要請されればすぐに行動に移せるため、次から次へと仕事が回ってくるのだった。

73　爆発しないでください。（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
アルタは実はとっても貴重な人材だったりします。
遠距離治癒と天才エルフと過剰魔って、結構すごいギルドなのかも・・・。
→
気づいてなかった作者でした。

74　一向、雨中を疾走する

「お水もらっていいかな」

食糧と同じく水も配給制だ。節約のため、喉を鳴らして飲むなんてことはできない。

（厳しいんだな、戦場って）

ギルドマスターに革の水入れが差し出されるのを、ハルが頬杖ついてしみじみとみていた時。

突然、ドアを激しくたたく音が小屋の中に反響した。三人は一斉に戸口を見やる。

「敵襲！？」

アルタが口走るが、幸い予想は外れていた。戸口を大きく開け放って姿を現したのは、味方であるスーサだった。息切れのせいで大きく上下する肩は、夕方から降り始めた小雨でぬれている。余程急いでいたらしくパジャマのままで、上着一つはおっていない。

「……何かあったの？」

ハルはそっと問いかけてみた。スーサの喉元から、泣きそうな震える声が漏れている。雨粒が髪に撥ねて、小屋から出る明かりに白く照らされているのがとても弱弱しく見えた。

「助けて」

かすれた声でぽつりとつぶやくと、スーサはいきなりハルの腕を力強くひっぱった。

「え、あ……ちょっと」

スーサに手を引かれて、ハルは雨水にすべりそうになりながらなんとかついて行く。後ろから二人の足音も追ってきていた。

「スーサ、何があったの？」

ハルは先ほどより強まった雨粒の音に負けじと声をはりあげて尋ねてみた。

「クルアンが死んじゃう」

男子宿泊施設までの距離を一気に駆け、クルアンとスーサの小屋の扉のノブを握る頃には雨はどしゃぶりとなっていた。ずぶぬれであることなどお構いなしに部屋に転がりこんだハルは、その光景を見て息がとまったかと思った。

巨大な氷の棘が部屋を横切るように生えている。どこからなのか、一瞬判別がつかず、ハルはただその脅威に立ちつくした。

「ハル、クルアンを助けて！」

スーサの重みが、カーディガンの袖口にしがみつく。ハルはひゅうひゅう言う息を苦しく感じながら、その出所を探そうと一歩、寝台に近づく。どうやら寝台から生えているようであった。

恐る恐る覗きこんで、ハルは目を見開いて悲鳴を上げた。

75　氷の刃

「クルアンっ！」

寝台にうずくまっているのは、黒い布に身を包んだ少年だった。その左手から、無数の棘がダイヤモンドの茨のように突き出している。

思わずベッドの柵に手をかけて、呼びかけた。応答はない。

「スーサ、何があったのか説明してちょうだい」

「わかんないよ。寝ようとしたら、いきなりこんなっ」

絶句してくずおれるスーサを、アルタが支えた。

「ハル、クルアンを寝台からおろしてっ」

フェララの切羽詰まった指令に、ハルはベッドの中に身を乗り出してクルアンを抱き上げた。

ところが人体とは思えないほどの重さに筋力が持たず、ハルの肘が途中で下がってしまう。

「何、これ。重たすぎるよ?」

「氷の重さよ。とにかく頑張って下してちょうだい」

せかされてどうにかこうにか苦心し、やっとの思いでクルアンを木の目の床に横たえる。帽子のつばが床に接触して帽子がずれると、歯をくいしばって必死に耐えている青い唇が見えた。

「過剰魔によるオーバーランね……血管が大分こわれているわ。まずいわよ」

「氷に混ざっているのは血？」

「ええ。でもあなたの魔法じゃとめられないでしょう」

会話を聴いていたところで、横たわっていた過剰魔が小さくうめき声をもらした。ハッとそちらに目を向けると、

「……うぁああ！」

クルアンが叫んだ刹那、囲むようにして座っていたメンバー全員の目の前で、冗談かと思うくらい大きく右肘あたりが揺れた。そして、真新しい氷の刃が無傷だった右腕の皮膚を大きく貫いたのだ。

「な……っ」

魔力の所持者が、魔力で自分を傷つけている。信じられない光景だった。肘を赤く染める血が、木の目に根を張るようにしみていた。

76　怖いよ。

（痛々しい。辛すぎるよ）

「どうしてアルタじゃだめなの？」

スーサはせがむような口調でプリーストを見上げる。

「魔力を与えてどうするの。過剰魔の力が増えるだけよ」

「じゃあ、どうすればいいんだよ」

「それは……」

「鉄拳彗星」

泣きじゃくりながらスーサは一言唱え、氷の棘に手を伸ばしている。まるで握りしめて打ち砕こうとしているかのように。しかしフェララはなぜかその拳を抑えて動けなくしてしまった。見れば拳の周りに、黒いモヤモヤした何かがつきまとっている。

「魔力を与えるなっていってんのよ！」

噛みつくように叱りつけるフェララ。スーサは肩をちぢませて座り込み、アルタは開け放ったままの外に険しい視線を向けた。

「私、セーン軍の医療グループ行ってくる」

スーサをお願い、と言い残して、アルタは叩きつけるような雨脚の中飛び出して行ってしまった。

「アルタ」

苦しげにギルドマスターの名前を呼ぶ青い口元に、フェララの赤い爪がそっと触れた。

「敵に居場所を知られるような医療グループではないわ。彼女は大丈夫」

しゃべっては駄目よ。フェララの口から発せられる言葉は、どこかで聞き覚えがある様な気がした。

「んん……」

さらに増えて行く自分への攻撃に、クルアンは身を丸めて無言で耐えている。氷の刃は痛いのであろう。苦しいのであろう。

その姿を見ているうち、ハルはあることに気付いた。

(もしかして……私)

私が居れば、クルアンを救える?

「スーサ、氷に触らないようにしてマントを脱がせて。魔力がこもるとよくないわ」

フェララの対処命令が、ずいぶんこもって耳に入ってこない。一人だけ霧の中に紛れてかき消されてしまいそうな、非現実感がハル

を包んだ。

（迷っている場合じゃないよ。でも）

怖い。また全てが離れて行ってしまうように思えて苦しい。この子を救ったとして、あたしはどうなるの？また、誰とも一緒にいられなくなるの？一人として、近寄ってきてくれなくなるかもしれない。それが怖い。

ハルは顔をゆがめるクルアンの首元に、スーサの手が伸びる。それさえ、スクリーンを介してみているような感覚だった。またこんな、自分だけ独り世界から抜けてしまったような思いをするのは怖かった。

76　怖いよ。（後書き）

ありがとうございました。
だんだん短くなってきてしまいすみません。
さくさく書いていけるよう頑張ります。

77　クルアンの想い

「さわるな！」

クルアンの鋭い一喝に、その場にいた全員がびくりと肩を震わせた。無論ハルも、急に現実に引き戻されたような心地になった。

スーサはマントに伸ばした手をそのままで、愕然とした目つきでウィザードを見上げていた。無口だけれど兄のように慕っていた人が、感情をむき出しにしてスーサの手を拒絶したのだ。スーサの頬には涙の筋が流れたまま、ひきつった顔で今自分が伸ばした手を食い入るように凝視している。

「な、なんで？」

震えるスーサがやっと口から出したのはその一言だけだった。

（なんで……か）

何となく、なぜ拒んだのかハルは理解していた。おぼろげで、勿論確証などありはしない。

（でも、そんな気がする）

確信が欲しくて、ハルは自らクルアンのマントのボタンに手をかけた。触れる直前、青い唇が何か言いかけたが、またぶるりと肩のあたりが震えたかと思うと、また氷の刃がクルアンの腕を傷つけた。苦痛にゆがむウィザードの頬に、フェララの真っ白な掌が触れた。

「大丈夫よ、クルアン。深呼吸してごらんなさいな」

マントに近づくにつれ、クルアンのかすかな呼吸が頭に響いてきた。

（やっぱり、作動してるんだね。奇サイコメトリー）

ハルはボタンの留め金を外しながら、脳の髄にこだまする心の叫びに耳を傾けた。

『俺ニ、触ルナ。』

触れられたら壊れてしまう。

（……やっぱり）

理性が粉々に砕けるような気がする。そうして、触れた人間を片っぱしから殺してしまうんじゃないか。

傷つけるのは、嫌だ。仲間が悲しむくらいなら、ずっとこのままでいい。クルアンの心は、そう訴えていた。

78　死霊源怨力、召還

（そうやって、自分を抑え込んだままでいいの？）

「傷ついてほしくないんだよね」

考えるより先に言葉が出た。

「ハル……？」

ハルは呼びかけに応えない。代わりに、目の前に横たわる男の子の手に自分のそれを重ねた。

「危ないわ、ハル、じかに触ったら」

「あたしだって、みんなを傷つけたくなかったんだよ。」

ジャキン、とまた魔法の獣が増えた。

「でも、誰かが傍にいたら、やろうと思えば殺してしまえる自分がいるんだよね。後戻りできない何かを、しでかしてしまうのを恐れていた」

フェララがクルアンを服越しにさする手が止まった。ハルの言葉は止まらなかった。

先ほどの迷いが嘘のように、すらすらと、声の織りが続いて行く。とても難しいことだと思っていたことが、当たり前のように……。

「いつからかね、お互い守るために離れているしかないって思い込んだんだ」

ハルは母の顔を思い出そうとした。

駄目、覚えてない。

「近寄ってほしくなくて、突き飛ばしたこともあった」

手を差し伸べてくれたたった一人の友達を、突き飛ばしたあの日を思い出す。

わかんない。どんな顔してるかなんて見てなかった。

（そう、あたしはいつだって怖がってばかりで、ただ逃げていればいいと思ってた。）

近寄られるのが怖い。誰かが傍にいると、どうしていいのかわからない。だから一人でいたい。

≪本当にそうなの、ハル。≫

重ねた手の下に力が込められた。と、ぶるりと震えたかと思った次の瞬間、手の平に何か鋭い物が突き刺さった気がした。見れば氷使いの激痛が、冷たく光って貫いていた。手の甲がみるみる赤く染まって行く。クルアンもそれを感じたらしく、息をのんだ。

『離レ、ロ』

（離れない。もう、離さない）

逃げ続けていた現実、チカラに、もう惑わされたくはない。

直視してみせる。

『あり得ないな。人の心がわかるのならば、人が複数いる意味がない。違うか』

クルアンが言い放った、あの言葉が脳裏をかすめた。

「痛いね、苦しいよね。そんな思いを、感じ取ってはいけないなんて言わないで。ありえないなんて言わないで。
だって君もあたしも本当は……誰かのそばに、いたいんだから」

ハルは腹の底に力を込めた。

（お願い、ミウタ、ハク。私を……助けて）

―死霊源怨力召還（テレジア サモン）――

≪ハル、やっと、やっと呼んでくれた≫

「ハル！？」

「下がって！」

スーサとアルタの叫び声が重なる中、ハルは尾に渾身の力をこめた。

胸の内で爆風が巻き起こる。ハルの心の、ずっと底の方。そこから莫大な量の魔力が全身に満ち溢れるのをハルは感じた。

（懐かしい……でも悲しい、この感じ）

ハルはそっと、氷の刃を指さして何かつぶやいた。

その刹那。

腕から突き出していた氷の棘達は、レグルスメンバー全員の目の前で、溶けるとも砕けるともせず消えうせてしまった。

クルアンの腕に残った幾多の痛々しい生傷だけが、氷がそこにあった事を示していた。

７８　死霊源怨力、召還（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
やっとハルがちゃんとテレジアサモナーになれました。一安心です。

何だかんだでもうすぐ８０話なんですね。
これからもよろしくお願いします。

79　客人の知らせ

《ハル。
ハル。お客がいる。》

曖昧な具合にたたき起されて、ハルはむっくりと顔をあげた。

ぼんやりとした視界から、段々と曇りが消えかかって行くと、確かに見覚えのある人物がハルの顔をじっとのぞきこんでいた。

「……誰？」

興味はないけど、一応聞いておく。

「スーサ」

「……そっか」

ハルにはやっとのことで声を出した。差し出された手に応じるほどの気力はなかった。無理もない、泣き疲れて寝たあとだから。抱えた膝小僧には、まだ冷たさが残っている。

「アルタが待ってるよ。行こう」

「……行かない」

ハルは膝に顔をうずめたまま、

「クルアンは？」

過剰魔法が止まったのかどうかを、ハルは知らなかった。知りたいと思う自分が不思議だ。もうどうでもいいって、呟いたばかりだったのに。

「落ち着いて眠ってるよ」

スーサは静かに答えた。それからハルの隣に、ゆっくりと腰を落ち着かせたのがわかった。

温かかった。隣に人がいることの温かさが体にしみて、ハルは泣きたくなって肩を縮めた。

「なんで黙ってたの？」

「……え？」

予想外の質問が直球できたので、ハルは気づいたら顔をあげてスーサと目を合わせていた。

薄い色合いの瞳が、柔らかに笑いかけている。いつも通りのスーサだ。

（怖がると思ったのに）

怖がって逃げだすどころか、大人びた様子で腰を据えている。

（負けた気がする）

１０歳の少年が、一寸でも頼もしく思えた自分が少し恥ずかしくて、逆にまごついてしまう。すると、代弁したつもりなのか、

《知られたくないから黙っていた。》

初めて聞くであろうテレジアの独特な声質に、スーサの三日月がたちまちまんまるになって、テレジアの女の子を見上げた。

「いいよ、テレジア。自分で話せる」

ミウタの口は、そうか、と言っておとなしくハルの後ろに引きさがった。

「ハル……」

スーサの優しさにあふれた声を遮って、ハルは疑心に満ちた思いを告げた。

「怖がらせたくなかったの。近づいたら危ないだなんて、知ったらみんながどんな顔するかくらいわかってたの」

スーサは、ハルが言ったことがすぐには理解できなかったのか、一寸間をおいてから

「怖いだなんて、簡単に思える事じゃないと思うけどな」

「思うんだよ。村でも子供ギルドでも、みんな私に近づきたがらないの。私のまわりにはいつも空っぽの輪」

ハルの尻尾である双子が人の前に姿を現すと、老若男女そろって、

皆同じ目をしてハルを見た。テレジアが一番嫌いな、憐れみを含んでいるものの、だからといって己は関わらないぞ、という視線。

無責任な、人の心の世界を思い知った。

「関わりたくないと思うのは自然なことなんだろうって……だから、それを知られたくなかった。嫌いにならないでほしかったの……」

「でも、クルアンを救ったのは確かに君だよ」

ハルはハッとして相手を見た。

（まさか……）

「ありがとう、ハル」

スーサの温もりに優しく抱きしめられて、ハルは一瞬ためらったけれど、おそるおそる血だらけの右手でその背中に触れた。

今まで何をしても報われなかった過去が、少し洗われたように、胸のつかえがふわりと花びらのように軽くなって飛んでいく。

スーサの背中は、まだ小さい、でもしっかりとした背中だった。

79　客人の知らせ（後書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

80　スーサ、報酬を請求する

きい、と小さく扉が開く音に、アルタは期待を込めて振り返った。

「おかえり、スーサ。ハルは……」

《ここにいる。》

聞き慣れぬ声質に、アルタは少し面食らったが、それでもずぶぬれのスーサの影から見えるハルの茶色い髪が見えると駆け寄りたくなる衝動に駆られた。

「ハル……！」

ハルは伏せていた顔をぱっとあげた。こちらも同じく、大分雨にぬれている。ただ雨だけではなさそうだが。

（泣いてたの、かな）

泣きはらしてぼうっとした視線に、アルタは一瞬不安を覚えた。けれど、おそるおそる顔を見せたハルの満面の笑みにこちらもくすぐったい気持になる。

「任務完了だね。報酬弾んでよ」

得意げに胸を張るスーサに、アルタはおどけて

「え、あれってまさかの有料だったの？サービスじゃなくて？」

取るに足らないやりとりに、スーサの陰でハルが恥ずかしそうにくすっと笑った

（よかった）

自分が市の医療班とともに帰ってきたとき、小屋の扉は魔風に吹き飛ばされて荒削りの木片と化していた。あわてて駆け込むと、額を残り風がすこしかすめている。何があったのかと尋ねる前に、埃でできた煙幕の向こうから飛び出してきたハルが、物も言わず雨の中濡れに行った。引き止める声にも足を緩めず、広くできた水溜りをぱしゃぱしゃと蹴って遠くなる光景。

（心配したけど、スーサは大丈夫だったね）

こっそりサインを出すと、スーサもちっちゃくピースを返してきた。と、突然後ろでドアノブをまわす音がして、隔離治療室から出てきたフェララが

「処置は済んだわ。あとはゆっくり寝てれば問題ないでし……」

セリフを言いかけて、動揺したように前触れもなく立ち止まった。振り返ったアルタがその視線をたどった。

アルタは心臓がひっくり返るほどびっくりした。

ハルの背後から、赤い衣服をまとった少女が全身を現して立っていたのだ。

８０　スーサ、報酬を請求する（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

81　テレジアの双子

日本人の伝統服である着物によく似ている。しかし少々地味すぎる。普段目にするような豪華な色の刺繍はおろか、柄ひとつついていない。帯はぼろきれを巻きつけた様で役に立っているのかどうか定かではなく、帯揚げもしていない。飾り気がない、といっても、ずいぶんと控えめな言い回しであるほどだった。

向こうもこちらの視線に気づいたのか、目を合わせてきた。しかし濁っていて、どこか生命感に欠けている。伸び放題の黒髪は艶がなく、毛先が枝分かれして点々と白いのがわかった。幼い子供にしては、異常なやつれ様だ。

赤い着物の少女は虚ろな面持ちで、前触れもなく口を開いた。

《ギルドマスターか》

（さっきの声は）

この子供の声だったらしい、とアルタはその主を見つめた。複数の声が混ざりあったような声質で、まるでたくさんの魂が一つの口を使っているかのようだ、暗い色の薄い唇を。声からしても身なりからしても、どうやら只者ではないらしい。いや、人ですらなさそうだ。

得体の知れない生物に、

「ええ」

アルタは内心後ずさりしながらも短く返答した。ぼろをまとった少女が発する不思議な威圧感が、じっとこちらを見つめている。無表情な瞳。

（まともにやりあって勝てる相手じゃない）

これから戦いましょうというシチュエーションだとは到底思えない状況下でも、戦士の勘がアルタにそう知らしめている。

（この子、戦闘経験がある。それも、私達なんて比べ物にならないほどの）

小さな子供の中に感じられる、甚大な戦闘経験値にうろたえるアルタに同調することなく、少女は再び言葉を発した。

《我々はテレジアの影と呼ばれる者だ》

「テレジアの、影？」

「怒りの総合体テレジアがマスターとの接触を通じて活性化し具現化した仮の姿」

後ろから技術者（ナイルカント）の介入があった。

「……で、合っているかしら？」

フェララにしては珍しく確認をとると、自らをテレジアと名乗った本人は、恐らく対面してから初めてであろうまばたきをした。

82　テレジアの影

「うん」

不意に年相応の女の子らしい声になって、アルタは面食らった。が、フェララは動揺する気配は見せない。

「声が変わったというのは、テレジア自体との連携が解けた、と解釈してよろしいかしら？」

少女はアルタの向こうにいるフェララを一瞥したようだった。それからこくりと頷くと、乱れた前髪が可愛らしくゆれた。

「そうかもしれない。……少なくとも当事者でなければ、その認識で十分だ」

「そう。それで、ハルの後ろに隠れている彼もテレジアの影なの？」

なぜだかうとうとしているハルに寄り添うように立っていたスーサがぎょっとして、慌てて傍から飛びのくと、二人の間からずるりともう一体の『影』が姿を現した。

こちらは先ほどのテレジアより一層乾いた視線である。何も見えていないのではないだろうかと思うほどだ。顔つきは少女によく似ているが、身なりは小奇麗で、髪の毛もきちんととかされている様子だ。こちらをぼうっと眺めて、微動だにしない。眉ひとつ動かさず、不気味なほどの静けさをまとっている。

フェララは本性むき出しで、いつのまにか取りだしたらしい小型の機械の画面を熱心にタッチしながら、アルタの隣で身を乗り出すようにして話を聞いていた。

（こんなときも研究者モードなんだからなぁ）

あきれるアルタをよそに、淡々としたテレジアによる自己解説は続いていく。

アルタは、取り残されたような気分でハルを見た。ハルは少し疲れた様子で、二人（正しく言えば三人）のやりとりを眺めている。時々体が傾くので、同じく話の流れについていけないという表情のスーサが支えてあげている。

「フェララ、ハルが休みたがっているみたい」

立ったまま舟をこぎはじめたハルを見かねて、アルタは思い切って進言した。

82　テレジアの影（後書き）

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます。

83　ハル、ミウタと再会する

「ハル、起きたか」

懐かしい声色に、ハルははっと目を開けてみた。

ざんばら髪の女の子の瞳が、ハルの顔を覗き込んでいる。揺らぐことのない瞳孔と、短絡的な質問の仕方が、心にしみるほどに懐かしく感じられた。

「ミウタ」

封じ込めてからずっと、声を聞く事すらできなかった親友が今ハルの目の前にいる。

（そうか、私が呼んだんだっけ）

助けてと呼んだマスターの声を、この子は、いやこの子達はすぐに聞きつけて飛んできてくれた。あれほど煙たがられていたのに。

（嫌いにならないでいてくれたんだ）

ハルはそっとミウタの髪に手を置いて、優しくなでた。

（寂しい思いをさせたね）

ミウタは心地よさそうに目をつむって、しばし大人しくしていたが、不意にハルの手元から離れて行く。

「どうしたの」

「……」

テレジアの少女は言葉もなしにどんどん遠ざかって行くため、ハルはあわてて赤い着物の裾をつかみ、なんとか尻尾が引きちぎれそうになるのを防いだ。あんまり距離があきすぎると、二人をつなぐ尻尾の付け根が引っ張られて痛むのだ。

力をくわえられて（この世の者で、ハルは唯一ミウタにそれができた）バランスを崩し、転びそうになる腕をしっかりとつかんで引き立たせる。寝台と思われるところに横になっていても一連の動作が出来るのは、ずっと一緒に生活していたからだった。

「……ミウタ？」

「ハル、怒っているか。勝手にしゃべったから」

ハルはミウタを見ようと、きしむ体をゆっくりと起こした。テレジアと久しぶりに結びついたせいで、あちこちの関節の動きがぎこちない。すべり落ちる毛布をとどめようとしたが、うまくいかなかった。

しかし、毛布は落下しなかった。

83　ハル、ミウタと再会する（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

84　会いたくない人

しかし、毛布は落下しなかった。

誰かの手が、端っこをキャッチしている！

（えっ）

ハルは突然出現した片手を凝視した。部屋には一人しかいないとおもいこんでいたのだ。

テレジアではない。片方はハルの元を離れているし、もう一人は熟睡している。

不意に体の側面に、冷たい風がふきかけられた。

ぞくりと背筋に悪寒が走る。冷気はいつも感じていた魔力に似ていて、ハルの浅い記憶を瞬時にたどらしめた。ハルは着物を握る手が変な汗で滑るのを覚えた。

（まさか）

ハルはおそるおそる、首を右に回すための力を入れた。心臓が早く打って、痛い。はっきりとした冷たさを感じながら、毛布の手に釘付けになっていた視線を横に、見知った誰かがいるであろう場所にずらしていく。

（嫌だ）

なぜそう思ったのかはよくわからない。ただ漠然とした嫌悪感が、ハルの周りにうずまいていた。ここにはミウタがいる。見たら、隣にいる誰かはどんな顔をするだろうか。テレジアに救われたなどと知ったら。もうその話を聞かされていたら想像もできないほど露骨に嫌な顔をされそうであった。

（でも、確かめなくちゃ）

何を、と自分に聞き返す前に、ハルはクルアンの手が毛布を引っ張り上げる弾みに、見てしまっていた。

ハルの吐息が夜闇に白く昇って消えてゆく。ぞっとするほどの寒さの中で、二人は顔を突き合わせてしまっていた。

ハルは口が利けなかった。目の前にいるウィザードは、一番会いたくない人物だったのだ。

クルアンは帽子をかぶっておらず小さく見える。片目を隠している前髪と半開きの口元、開いた目の冷たさや表情の読めない顔つきは相変わらずだ。

（なんで普通の顔をしていられるの？ここにはテレジアの影がいるのに）

闇魔法とでも言うべき汚れた存在によって助けられた少年がハルのすぐ近くで横たわっていたという現実と、平素と変わらぬ態度が混ざり合って、ハルの頭の中を乱していった。一体自分の知らない所でいかほどの事件が起こったのだろうか。

（わからないよ）

８４　会いたくない人（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

今日小説に関する本を読んでみました。

間違いだらけだったので少しへこんでいます・・・。

85　奇サイコメトリー

（わからないよ）

真っ直ぐな視線の理由が、ハルには理解できなかった。どうして自分が助かったのか、知らされていないのだろうか。それとも誰がテレジアを使ったのか見えていなかったのだろうか。或いは……或いは

「ハル、我々が奇サイコメトリーのことを皆にしゃべったなら、怒るか」

心細げなミウタの発言に、ハルはなぜクルアンが近くにいるのかを悟った。フェララがハルの特殊能力のことを知ったなら、放っておきはしないだろう。

「怒ってないよ」

短く告げ、問いかけの主が安心したようにゆるりと宙返りをした後床に寝る体勢をとるのを見届けると、ハルはもう一度過剰魔の少年を真正面から見据える根性を失くしていた。

二人とも無言のまま、どこからか聞こえる時計の秒針が空間を刻んでいった。

突然肩に氷の様なものが触れて、ハルはびくりと大きく震えた。

（な、何？）

あまりにもびっくりしてクルアンの方をちらりとみやると、あちらも慌てて手を引っ込めている。が、その手がまた伸びてきた。

肌が凍りつかんほどの低体温がハルの頬をはさんで、強引に向かせたのだ、自分の方に。

冷たい、と小さく声を漏らして、ハルはクルアンのことをまっすぐ見ざるを得なくなった。

透き通った瞳が語りかけている言葉が、ハルの頭の中に流れ込んできた。

『なぜ……目をそらす』

脳内にこだましたのは、哀しげな声色だった。普段のクルアンの口からは到底聞けそうもない、感情に突き動かされた台詞に、ハルは戸惑った。

（何が起きてるの）

触れたら自分の思いがこちらへ流れてくる事くらい、ミウタが説明したなら判っているはずだ。この思いを聞いてほしいのだろうか。

（いや、その前に……）

どうして涙がこぼれているんだろう？

落涙に気付いた瞬間、ハルの中にどっと感情の波が押し寄せてきた。心が切り裂かれた様に痛み、細い声をあげてハルは再び大きく

震えた。

85　奇サイコメトリー（後書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。
母が病気してるので、少し更新遅くなるかもしれません。

86　ハル、クルアンにしがみつく

（かなしい……寂しい。辛いよ、こんなキモチ）

どうして君は今、こんなに切ない声をあげているの？

『まっすぐ見られないのか』

苦しげな呻きが、魔法使いの少年から漏れだす。ハルは頬に込められた力が僅かに抜けるのを感じた。

『俺が化け物だからか。何をするかわからないからか』

いつどうなってもおかしくない。誰を傷つけてしまうかわからない、どこで、暴走するかわからないから。

『皆遠くにいる……近くに居る筈なのに、何故こんなにかけ離れているんだ』

自分の住む世界は本当にここで合っているのだろうか。そんな浅はかな疑問さえ、胸の奥をしめつけて消えない。情けない。情けないけれど、どうしようもない。誰かに助けてほしい！

（まさか、これがフェララの言ってた事？）

魔力の最盛期を脱しない限り、嫌な感情や思い出をまとった過ごすことになる。そんな事を前に言われた気がする。

『ただ俺は……誰かと一緒に……』

一緒に、という言葉と裏腹に、クルアンの手がゆっくりと頬から離れて行く。ハルはその隻眼を真正面から見た。

途端に、どこかへ吸い込まれていくような感覚が指先に走った。

（いかないで）

なぜだか、そう叫びたくなったのだ。クルアンの目に浮かんでいた色が、ハルの両腕を動かした。

（ひとりにしないで）

もう一人ぼっちはいやだ。

その心理がハル自身のものだったのか、それともクルアンから流れ込んできたのかはよくわからない。

気づいたら、ハルはクルアンの腕にしがみついていた。そうして、泣きじゃくりながら、

「嫌だ。嫌だよ、こんな苦しいの」

同じ年を生きてきた少年が、十数年分の怒りや絶望を背負い続けているその現実が、ハルには悔しくて仕方がなかった。心臓が痛くなるほど、腕の中の手の冷たささえも温かく感じるほど、今自分の中にあふれかえる感情が酷だった。

大勢の人ごみのなかにいるみたいだった。人の群れは、ふわふわしていてつかみどころがない。そして、その中で一人だけぽつりと

別な場所にいる。誰も自分を見ない。そんな心地。

「なぐさめや同情なんか、い、いらない」

クルアンの手がぴくりと動いた。ハルはさせまいと、更に強く締め付ける。するとクルアンが目を見張って、ハルの両目を凝視した。それからなんと、左手を女の子の短髪の上に優しくのせたのだ。

86　ハル、クルアンにしがみつく（後書き）

行間あけなおしました！

87　終わりの心地

少女はハッとして相手を見上げた。少年の手つきは、どこか懐かしいものを感じたのだ。

「傍にいてほしい。おんなじ気持ちを、俺は……私は……誰か……」

クルアンの片手は、ハルの体温から逃れようとうごめいていた。まるで、負の感情がハルに流れるのを厭うように。一人称が混ざり始めたハルを、元に戻そうとしているようだった。

ハルはハルで、段々と意識が薄れて行くのを感じていた。

（ああ、大きすぎたんだな）

あんまりに大きな波がどっと押し寄せてきたせいで、まだ慣れてないテレジアが疲れてきたんだ。

（取り込まれない内に、やめなくちゃ）

でも、クルアンはどうしたいのだろう。なんてったって十五年分だ、沢山の思いがまだ消化不良のままだろうに。そう考えたとき、クルアンの最後の一言が頭に入ってきた。

『眠りたい』

（……はい？）

予想外の平凡な願望に、ハルは拍子抜けした。これではまるで、子守りをしているようではないか。

だが、本当に必要なのはこれではなかったのか。弱弱しい伝達能力でやっと悟った、クルアンの本心をハルは知ってしまっていた。

（いいよ）

冬の香りがする冷たい腕に抱きついたハルの涙が微笑みに変るとき、ハルはクルアンの瞳がまぶたの奥に消えるのを見た気がした。間もなく、全てが闇にのまれる。意識が柔らかな風のようにふわりと飛んでいく。

（もう眠っていいんだ）

心の中で呟いたことが、届く筈はないかも知れない。

ただハルは一瞬、雪が春に溶けて行くような、不思議な安堵を感じ取った。

クルアンの、一日の終わりの心地であった。

87　終わりの心地（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

88　保護、隔離、隔離、保護。

「本日はレグルスの二名は、危険人物として待機班に置いていただきます」

機械的な通達に、アルタはゆっくりと振り向いた。

やって来たのはセーン市軍の女性指揮官だ。一応フェララが最高指揮官だから、レグルスより格下の存在という事になっている。しかしふくらんだ胸の左につけられた仰々しい羽根のシンボルが、凛と経って自己主張しているのがわかった。

ぴんと背を立たせた女性は、メガネ越しにちらりと上目遣いに瞳を合わせてくる。こちらの様子を窺っている様だ。アルタは女性のフォーマルな態度に内心苦笑しながら、

「わかりました。伝えておきます」

形だけだが、笑顔で対応しておく。

女性を帰して戦闘の準備を万全にした後、アルタは宿泊施設のとある一角に向かった。

アルタは何度か戦争にまで駆り出された経験があるが、今ハルやクルアンがいる場所、まあ正しく言えば押し込められている場所だが、あまりお目にかかった事はない。

「待機班担当地区及び危険能力者保護区域、か」

御大層にたてられた木の看板を確認して、一度朝露の空気を大きく吸い込む。昨日の雨が風を程良く湿らして、アルタの喉を潤した。

政をなす人々は、何故か隔離と保護を混合する傾向にあるらしい、とフェララがぶつぶつ言っていた時期があった。当時は彼女も新入りだったから、アルタにとっては『色々つっかかる人』というイメージだったが、実はフェララの意見が的を得ていることもあるものだと感じていた。

『保護するために隔離する筈が、隔離して保護したつもりになってんのよ、ばかばかしい。私が市長だったら』

その後参謀担当のもしも話は国王だったら、創造主だったらと話は膨らんでいくわけである。明らかに行きすぎではあるが、フェララのたどり着く結論には正直ドキッとした。

『危険人物だらけにしてあげるのに。そうすれば、仲間同士争ってそこまで危ない事にはならない筈だわ』

やっぱり変ってる人だ。フェララもある意味危険人物なのではないかという考えがちらりとアルタの頭をよぎる。それをあわてて振り払い、あまり音を立てないように扉をちょっぴり開けた。

88　保護、隔離、隔離、保護。（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

89　アルタ、悟りを開く

（危険人物、か）

その区分にハルとクルアンも入るのだ。いくら、ごく普通の格好をした男の子が年相応の御洒落をした女の子に触る事さえためらっている光景を見たとしても、それがどんなに微笑ましく感じられても、である。

（あれ、いつもは魔法で起こしてるのに……）

ハルのルームメイトであるクルアンは、ハルが新入りだった時は一緒に起床していた。何度声をかけても起きないハルに業を煮やしたらしく毎朝音の出る氷魔法を使ってたたきおこしていたので、よくハルがアルタにクルアンの壁訴訟をしていた。

いつもと違う様子に、思わずアルタは半分のめり込むようにして二人を見ていた。

ハルは大きなセーン市シンボルの刺繍にくるまって寝台に横になっている（きっと盛大なる爆睡に浸かっているに違いない）。上からのぞき込んでいるクルアンは、魔力過多を防ぐために帽子とマントを外されたせいで幼く見えた。

（こんなにちいさかったっけ）

クルアンは白いシャツと茶色のハーフパンツを着て、ベッドのへりに座り、ハルをじっと眺めている。左手が寝ているハルに伸びて

は引っ込み、近づいては退きを繰り返していた。あんまりにためらっているものだから、つい声をかけたくなるのをじりじりとこらえていると。

ついにぴたりと毛布に手があてがわれて、アルタは声を出しそうになるのを慌てて口元を押さえ、見守る。

「起床時間」

過ぎてるから、とハルの身体を揺さぶっている。それなりに強く力をかけているように見えたが、起こされている張本人は夢の世界に取り込まれてしまったようで、うんともすんとも反応しない。寝返りさえ打たないのでレベルの高さに感嘆の気すら起きてくる。

（こりゃあ、私が魔術師だったら同じことしてたかも）

クルアンがおろおろしているところなど滅多に見られないので観察を続けたいアルタだったが、突然肩にとりつけてあるホルダーから着信のサインネオンが光ったので一瞬目を離した。

その隙に布の破れる音がし、ハルの素っ頓狂な叫びが聞こえた。

慌てて部屋の中を見やって、アルタは真実を悟ったのである。『魔術以外にハルを目覚めさせる方法』は存在しない、と。

ハルの間抜けな寝ぼけ声に、アルタは遠慮なく大笑いしてしまい、結局事の次第を見ていた事がばれてしまったのであった。

89　アルタ、悟りを開く（後書き）

よんでくださりありがとうございました。
昨日のエイプリルフールびっくりしましたね・・・。

90　危険人物

待機班は、ナイルカント・フェララ率いる隊列構成組、行動が不能になった怪我人、そして危険人物をごちゃまぜにした呼称だ。

待機班の持ち場所はいつもの宿泊場所よりも綺麗な掘っ立て小屋であった。いくつもの電源装置とコンピュータが形も色もさまざまに配置されていて、指揮官とみられる人々が机上の機械に向かって話しかけたり、指先でつっついたりしている。その周りに清潔な白色のマットがぐるりとしかれていて、負傷した何人かが横たわっていた。ある人は静かな眠りについているし、また他には目を開けて隊列構成組の作業をまじまじと見つめている人もいた。

危険人物は二人だけだ。

ハルは少しだけ繋いだ手をきゅっと握った。

（あたし達だけ、か）

クルアンの方はさほど動揺した様子はなく、体から放出されている冷気も安定している。ただ帽子とマントが取り上げられているので、目立つ銀髪を気にしているようだった。平常心そのままのクルアンを見て、ハルの力も緩んだ。改めてくるりと部屋を見渡し、知った顔を見かけて手を振る。指定されたらしいベレー帽をかぶる指揮官の中、一人だけ紺色のセーラー帽をちょこっと傾けて着用している女性。隊列構成組の司令塔、最高指揮官（ナイルカント）だ。

「よく来たわ。入って頂戴、見ておいてほしい物があるのよ」

と手招きされる。ハルとクルアンは小屋の入口に立っている指揮官に毒々しい赤色のネームプレートを見せた。ガードマンであるセーン市の若い男性は、示された『危険能力保護対象者』という文字を一瞥、会釈の後ハル達を中に通した。

危険という区分に放り込まれることにハルはもう慣れっこであった。子供ギルドの実践授業では対戦をさせてもらえなかったし、寝る場所も一人だけ違う棟だった。当時はテレジアの影はなく、危険性は全くなかったというのに、二重人格というそれだけで隔離されたのだ。

それを思えば、お尻からくっついている男女双子のテレジアの存在という正当な理由があって前衛補助から外されるのはむしろ有難かった。しかもそばにはクルアンもフェララもいるのだ。

ハルは心強く思いながら、フェララが突きだした折りたたみ式の大きな機械を受け取った。問いかけるように見返したハルに使い方を教えてくれ、

「とりあえず参考になりそうな本のデータと私の知識を合併、整理して書きまとめて置いたわ。赤い絵本の印に白い矢印の先っぽを合わせて左のボタンを押せば読めるから、よく読んでおきなさい」

言われる通りに手元のリモコンを動かしながら、

「何の話？」

90　危険人物（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
くっついているって書きましたがちゃんと尻尾を経由してます。。

91　間違いだらけのメモ

「何の話？」

「テレジアサモナーの能力について、よ。世間で流れている噂とか、科学的に証明されている事、知る権利があるでしょう。ああそうね、クルアンも一緒に見ておいた方がいいでしょう」

すらすらと言葉を綴り、横から覗きこんでいたクルアンにも一声かけると、フェララは水兵帽をかぶりなおして自分のテーブルに戻って行ってしまった。

幅広の画面に映し出されたのは、箇条書きにされた文章の羅列である。

ハルが見なれない電子式のカルマツェーダ文字を解読しようと指で文字をなぞり始めると、クルアンが無言で肩をたたき、空いていたテーブルを指さす。

「座る？」

クルアンは黙ったまま頷いた。

（なんか……ハクみたい）

双子のテレジアのうち、赤い着物の女の子・ミウタはよくしゃべるし感受性もそれなりに豊かだ。一方白黒の地味な浴衣をした男の子・ハクの表情は動かざること仮面の如しで、見ている方向さえ定まらない。焦点が合っていないのだ。

テレジアに言わせれば、感情の差は『活性化』（呼び名はハルが勝手につけた）する時期によるらしい。

テレジアの影は、『活性化』することによって初めて形を成し、生まれる。『活性化』したのはミウタの方が先だったから、ミウタは色々なことを感じ取れるようになってきたのだという。ハクはまだ影になったばかりなので、感受性についてはまだまだ未熟、というところか。

ハルが知っている最低限の事柄さえも、フェララのメモにはなかった。代わりにこのような内容が記されていた。

【テレジア】

現世に多大な怨みを持った人類の怨念が集まったもの。いわゆる怨霊の巨大な集合体である。

幽霊の存在は科学的に証明されていないため現実には居得ないが、これを鎮めるための祭などが古大陸にて行われている。古大陸の慣習に根付いたものと思われる。

またテレジアの目撃情報が確認されているが、老婆・少年・天女の姿をしている、足が無い、甲冑を着ている、首が外れるなど諸説あり信憑性がない。このため次に述べるテレジアサモナーの能力も迷信の一部であり、古大陸における遅れた風潮が生み出した幻の産物といえる。

（幻か）

ハルは自分の手をぺたぺたと触り、ハクの耳たぶを引っ張り始めたミウタの髪に触れた。

（実体はある。でも……それは私にとっての話で）

ごわついた毛先をなでてやると、ミウタはきょとんとした眼でハルを見た。

「確かにここにいるのにね」

「ミウタもハクもちゃんといるぞ。心配するなハル」

ぎこちなく、少し（実のところかなり）ホラーな笑顔になったミウタの横顔を見ていたのか、クルアンがみじろぎした。まるで幽霊でも見たかのような顔つきだ。

（いや、幽霊か）

テレジアサモナーがどうのこうのと議論する以前に、まずテレジアそのものがオカルト化してしまっているようであった。

91　間違いだらけのメモ（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

92　リアクション

「クルアン、古大陸って何かわかる？」

クルアンは右目をちょっと見開いて、首をかしげてから

「カルマツェーダが新大陸」

つぶやくように答えた。

「えーと……つまりカルレ市が入っているカルマツェーダ大国が新大陸で、アフリカとか南極は古大陸ってこと？」

「そうだけど……カルレ市はもうなくなってる」

「え？」

面倒くさそうに右手を目元に持ってきて動かし（どうやら無い帽子のつばを上げようとしたようだった）、空中をつかみながらクルアンが言うには

「セーンの街が大きくなって、カルレの噴水園よりセーンの大広場の方が有名になった。それで他の地域からの好感度を上げるために市の名前をセーンに変更した。だからカルマツェーダの首都はセーン市だ」

想像以上に沢山の事をしゃべったのでハルは得した気分になった。そうなんだ、と呟いて、ハルはまた視線を画面に戻した。

「テレジアが触れた生命は腐る……あ、これは大体合ってるみたい」

ハルが嫌われていたのは、まさにこの恐ろしい特徴のためであった。

普通の人からしてみれば、テレジアは幽霊だ。幽霊は得体が知れない。自分が理解できない者はやはり怖い。その恐怖から逃れるために、人はテレジアサモナーを理解しようとして近づいてくる。結果、更なる畏怖に取り憑かれることになるのだ。

「お前はテレジアに触っているが、腐らないのか」

氷のウィザードの冷たい吐息を首筋に感じながら、ハルは素朴な疑問に

「腐らない。それがテレジアサモナーの能力でもあるんだ」

何でかよくわからないんだけどね、と微笑した。

「ミウタとハクは、魔力が好きなんだ。美味しそうな匂いがするんだって」

「喰うのか」

《魔力は我々に必要な糧だ》

突然ミウタの口から異質な声で解説があった。

（しまった、こんな所で）

ハルが後悔した時にはもう遅く、小屋の中にいた人々の瞳孔がざっとこちらを向いた。

「あ……」

慌ててミウタを背中に隠すが、人々の気味悪そうな視線は危険人物に集中してしまっている。ハルはいたたまれなくなって一緒にフエララのメモを覗き込んでいたウィザードを振り返ると、少年は目を細めて指揮官達を睨んでいた。小屋中に暗澹と不穏な空気がじわじわと侵食していくのがはっきりと感じられた。そして繋いだ右手からは、朧な怒気が流れ込んできていた。

「何だ、今のは」

「機械音声か？」

「あの少女は生き物ではないのですか？」

指揮官達が勝手に話し出して室内が若干騒がしくなると、それを粛清するようにまた声がかぶさる。これに対抗して更に大きな声をあげてこちらを指さし、口々にハルとミウタを責め立てた。

「なんだ、あれはあの子の能力ではないのか」

「人造物ならばこちらに引き渡してください。我々がしっかり管理します」

「おい、あいつらケツがつながってるぞ！」

ハルは耳まで火がついたように熱くなった気がした。きっと真っ赤になっているのだろう。ハルはつながれた手を振りほどいて顔を覆った。その時だ。

「貴方達の集中力って、その程度？」

高飛車な物言いに、さっと場がしらけた。

92　リアクション（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

テレジアの声は、声の低いｖｏｃａｌｏｉｄが全員一斉にしゃべっている…？ような感じです。

93　笑顔のはずが

（フェララ）

ハルが恐る恐る顔をあげ、上目遣いで声のした方を見やると、女子軍服姿の最高指揮官が椅子から立ち上がっていた。腰に手をあて、もう一方を口元にあててフェララはいつものように高笑いをした。

「市長が市長なら軍も軍ね。あるのは数ばっかりでちっとも役に立たないわ」

フェララは小馬鹿にしたように鼻で笑うと、指輪の光る両手を勢いよく床にたたきつけた。待機班はいよいよ静かになる。

「業務を忠実にこなしなさい。人をからかってる暇があったら闘いに行きなさい。自分の仕事を放り出すような人は、私の監視下にはおいておけない！」

きっぱりと言い放ったフェララの手前、指揮官達は不満げな表情を見せながらも押し黙った。半身を起こしてテレジアサモナーの観賞会に参加していた怪我人も、たがいに目配せして大人しく横になる。

おかげで皆の興味はハルから逸れて行ったが、フェララに対する視線は厳しいものを含むようになってしまっていた。本人は席に落ち着いてモニターを監視していて、傷心した様子は一欠片も見られなかったが、ハルは申し訳なくなって下を向いた。テレジアはそれっきり表に出てこなくなった。

情けなく組まれた指先を手持無沙汰にもじもじ動かしていると、隣からそよ、と風が吹いた。不思議に思ってふとその方向を見やると、クルアンが手をひっこめかけている所だった。

「そっか、繋いでなきゃいけなかったね」

ごめん、と片手を差し出すと、すいーっと吸いつくようにして掌が重なる。

（磁石みたいな動きだ）

魔術師の少年は磁力でも持っているのだろうか、とハルが真面目に考え始めた時、ぎょっとした感情が流れ込んできた。亜サイコメトリーを読み取ったハルが

「え、何？」

思わず声に出して視線の先をたどると。

ハルは、あ、といった。それ以外のリアクションはきっと誰ひとりとして出来なかったであろう。見なかったことにしようかと思案したが、ミウタが何か言いたげだったのでやめておいた。

テレジアの影の笑顔は、長年共に旅をしていたハルでさえドキッとするほど影が濃く不気味だ。笑うのに不慣れなのか頬の筋肉がぴくぴくと引きつっているし、彼ら特有のあまり光を宿していないまなこが不自然な三日月形になってもこれを笑顔と判別できる人はなかなかいないだろう。この予想は隣に居る氷使いにも適応されたらしく、

「機嫌が……悪いのか」

訝しげにミウタのマスターに尋ねてきた。ハルは能面になったミウタの表情筋に苦笑した。

「この子の精いっぱいの笑顔なんだよ……」

《喜ばしい事だ》

固まったミウタのまなこが捉えているのは、先程部下を一喝した女指揮官だった。わなわなと両手を震わせ、憧れ・羨望の混ざり合ったような、光り輝いた（とはいえ、元の笑顔がこれなのであまり嬉しそうには見えないというのが正直な感想だが）黒目で、凛とした横顔を見つめている。

93　笑顔のはずが（後書き）

更新遅くなりましてごめんなさい。
学校始まったばかりで色々忙しくなりそうなので、当分の間は二日に一度の更新になりそうです。すみません・・・。

読んでくださりありがとうございました。

94　誇り高きテレジア

フェララはこちらには見向きもせずモニタチェックに全神経を集中させていたのだが、隣にいたセーン市軍の指揮官に肩をたたかれて緊張の糸が切れたようにこっちを向いた。きつい目をした綺麗な顔が一瞬幽霊でも見た（ハルはまたぞろテレジアが怨霊の塊であることを忘れていた）かのように引きつったが、テレジアは構わず言葉をつなぐ、

《さすがエステ血族の末裔だ。伊達に奇抜な遺伝子を引いてきた訳ではないと見受けられる》

テレジアの上から目線に、フェララが触発されてしまうのではないかとハルが心配したのもつかの間だった。

「お褒めに預かり光栄です」

季節外れの牡丹雪みたいな淡い笑みを浮かべ、フェララはごく簡単な礼を返しただけだった。また作業に戻ってしまう。ハルはしばし、あっけにとられてフェララとミウタを交互に見ていた。

（変った者同士、話が通じるのかな）

実際テレジアには江戸時代頃の怨念も含まれていたから、二十六才のフェララなど最高指揮官だろうと天才だろうと取るに足らない存在だ。フェララはそれを理解しているのだろう。

（敬うべき存在だって、ちゃんとわかってくれてるんだ）

不覚にも頬がゆるんだ。ほっと胸をなでおろすじぶんがいる。

（フェララがいてくれれば大丈夫だよね）

まだハクが影になっておらずミウタと二人で旅をしていた時、立ち寄った洋菓子屋の店先でテレジアの事を悪く言った客がいたのを思い出す。想像を絶する年月をこの世で過ごし、様々な時代の流れを経験した誇り高いテレジアは、侮蔑の言葉を絶対に許しはしない。もともとが怨霊である存在を怒らせてしまったのだから、客はただではすまなかった。たまたま洋菓子屋の常連の客だったのにひどい目に合わせて追い払ってしまったのを店主が見とがめ、対価として長らく住みこみで働くことになったのである。レグルスの事を何も知らなかったハルが舟の上でウミネコに分けたビスケットは、お世話になった洋菓子屋の店主が倒産間近にくれたものだった。

突如として鼓膜をつんざくような警告音が鳴り響き、ハルは回想から引き戻された。

「どうしたの？」

今までとは違う緊張感が張り詰める指揮官達の中、冷静沈着なフェララに問われて、モニター越しに誰かと会話をしていた指揮官が焦燥にかられた表情で

「前衛劣勢、壊滅的な被害。援護を要請するとのことです」

ざわ、と怪我人達が動いた。

９４　誇り高きテレジア（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
ハルの過去については、いずれ過去編で詳しくたどっていくつもりです。

95　クルアン、許可を仰ぐ

「どういうことなんだ？」

「勝てそうだったんじゃなかったっけか」

「え、マジで？」

フェララは目を閉じて息をついた。

「仕方ないわね。補欠を行かせ……」

「補欠はもう居ません！」

先程の女性指揮官がモニターにすごい勢いでタッチしながら叫ぶ。

「どうしますか」

ハルは皆の緊迫感に気圧されてたじろいだが、隣にいるクルアンはとんと動じなかった。戦場慣れしているのだ。

「ハル、クルアン。出られるわね」

突然の指名に、ハルは目を丸くしてフェララを見上げた。

「行ける」

クルアンがごく短く答えたので、ハルも慌ててＹｅｓを返そうと

したが、テレジアが黙っていなかった。

《出動を拒否する》

テレジア特有のごちゃごちゃした声に、逸れかけていた興味の視線がまた一斉にハルにかき集められる。それはナイルカントの命令に逆らったことに対する驚愕と、怒りの混じった何十対の瞳孔だった。

「何故かしら」

ざわめいていないのは当事者だけで、お互い穏便さを失った鋭いまなこで対峙している。

「二人が行かなければ、前衛の被害は洒落にならないわ。どんな事情があるのかわからないけれど、今は貴方の力が……テレジアサモナーの能力が必要なの」

《昨日の話を忘れたか。テレジアサモナーの力は、脳を繋げることで初めてその効力を発揮する。三人の身体を同時進行で動かすのに、たった一日共に過ごしただけではウォーミングアップにも程遠い。意のままに操れるようでない時期に戦闘にくわえるなど、危険すぎる》

テレジアは抑揚のない口調で淡々と抗議した。フェララは眉根をひそめてじっと考え込んでしまい、ハルはいよいよ居たたまれなくなってしまった。

「俺が守る」

突然、クルアンの口から想像もしなかった言葉が飛び出た。ハルはクルアンを見上げた。

「クルア……」

「俺が守る」

「でも……」

「守る！」

クルアンが、ハルの前で初めて声を荒げた。ハルはびっくりして物が言えなかった。

（何でそんなに）

《たかだか十数年生きただけの小僧に何が出来る。マスターが操作を失敗すれば、お前の命は無いかも知れないのだぞ》

テレジアの警告は適切すぎて反論の余地はなかった。しかし、クルアンは引かなかった。

「許可を」

最高指揮官の認可を仰ぐ氷使いの少年の視線は鋭く、青く澄んで、真剣だった。ハルは突き動かされた様になったクルアンの横顔を、ただ茫然と見つめていた。

「危険人物組、最前衛に出動せよ」

95　クルアン、許可を仰ぐ（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

96　あらぶる後衛

固く握られた手が、ひどく汗ばんできていた。尻尾二人分の重みを引きずって走っているため、疲労が半端ではなく、息切れは度を越して喉がからからに乾いていた。

ハルの呼吸の荒さに、指定された最前衛区域に向かって猛スピードで引っ張っていたクルアンはちらりと後ろを振り見て、

「もう少しで運び屋に追いつく」

ハルは曖昧にうなずいた。

励ましたつもりだったのかもしれないが、運び屋が何なのかハルは知らなかった。聞き返そうと一旦口を開いたはいいが、先程すり抜けてきた後衛達の魔術やら矢やらがが派手に攻撃するたびにもうもうと舞う砂埃が遠慮なくログインしてくるのであきらめ、足手まといにならないよう必死に走る。テレジアの影達もさすがに状況が判っているのか、逆方向につっぱしって尻尾を引っ張るようなことはせず大人しくついてきていた。

（もう少し早く封印を解いていたら、楽だったかも）

内心ため息をつくハルだったが、不意に何かしっくりこない気分が湧き上がってきた。

テレジアサモナーだなんて、誰にも知られたくなかったのに、今それを早く使えばよかった、なんて後悔している自分がいる。

あの夜は違った。クルアンを死霊源怨力（テレジア）で救った後にハルの心に芽生えた心情は、達成感や安堵を差し置いて後悔ばかりだった。ああ、これでテレジアサモナーであるということがみんなに知られてしまった。レグルスの中で嫌われたままやっていくのだろうか。触ったら生命力が喰われてしまう恐ろしい怪物を泳がせておく闇の少女。廊下を歩けば大げさに避けられ、一緒に依頼を受ければ得も言われぬ微妙な感覚が生まれてしまう。

それが自分の、テレジアサモナーとしての宿命のように受け取っていた自分に気付いたのだ。

「もう少しだが……きついか」

迷惑をかけたくなかったのでハルはかぶりを振ったが、前を走っていた少年は前進を止めた。

炎だの砂埃だのが物凄い音を立ててあらぶっている後衛の手前で立ち止まった二人の間に、激しい息切れが響く。実はミウタ・ハクも一応自力で走ってはいたため、久しぶりの運動にかなり堪えたようすだ。

「ハル、まだ遠いのか」

戦場の砂のおかげで盛大にせき込んでいるハク（おとうと）の背中を無碍に叩きながらミウタが問いかけてくるが、マスター自身も自分の呼吸を整えるのに精いっぱいであった。

（や、やっぱりきついよ）

テレジアサモナーの脳は通常、テレジアの影にも指令を出しなが

ら行動する。たとえば自分が左右の手足を使って走っている間にミウタ・ハクにも同じ速度でついてきてほしい場合は、同じ速さで左右の手足を動かすイメージを二人にも送らなければならない。結果として、一つの脳を使って三人の身体を同時に動かさなければならないのだ。

久々の再会でまだ共同生活に慣れてないから、ハク片方に指令を出すので頭がいっぱいだし、かといってミウタがハルほど体力がある訳でもない。おまけに二人の同時進行なんて余程器用でなければすいすい出来るものではない。実際後衛付近にたどり着くまでの間にハルは度々指令を出し間違えては右手と右足がいっぺんに前に出てしまっていた。

要するに御世辞にも器用とはいえないハルにとって、テレジアサモナーの能力を使いこなすのは……あんまり向いてなかったりする。

「やむをえない。アレを呼ぶ」

クルアンは口の中で呟くように宣言すると、ハルがアレの正体を尋ねない内に詠唱を始めていた。

（切り替え早っ）

96　あらぶる後衛（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
余裕があったので二連です（笑
おかげ様でアクセス五万を超えましたのでここにて報告させていただきます。

97　主従二組

ハルはハルでどうしていいのか判らないので、戦場慣れしているクルアンにまかせる事にした。手にしていた武器……鉄製の棘のついたとても痛そうなスタッフの柄で、風景画のごとくさらさらと書かれていく麻法陣を見ながら、後衛の魔術師達の魔力の匂いに惹かれて独り歩きならぬ二人歩きし出した無感情双子組を引きとめようと躍起になっていた。

「目覚めよ」

突然、ビッグバンでも起きたかのような轟音がとどろいた。ハルはびっくりして、拍子抜けた叫び声をあげてこけた。

もうもうと舞う砂煙の向こうに、巨大な影が現れたのだ。もともと麻法陣が描かれていた場所だった。ハルは目をこらして、大きな獣のようなアレが何なのかを見破ろうとした。

「乗れ」

びっくり仰天して起き上がる事さえ忘れていたハルの右手をつかんで立ち上がらせると、クルアンは突然現れたその動物に軽々と飛び乗った。ハルも持ち前の怪力でなんとか巨体のふさふさに這い上がり、乗り物の正体に気付いて二度驚いた。

「……タルト」

「運び屋の所へ」

合図を察知したのか、使い魔の熊は一度大きく咆哮を上げたかとおもうと、一気に風のように走り出した。

「早い早い！早い」

心の準備が出来ていなかったハルは乗馬よりも難易度の高い乗熊（？）に体を揺さぶられて、咄嗟に目の前の乗り手にしがみついた。

「落ちる！　っていうかテレジアがムーンサルトに触らないようにするので精いっぱいっていうかなんて言うか」

クルアンはもう一こえとばかりに

「速度上昇」

（聞いてない！）

「ハル、指令があべこべで何に従えばいいのか判らないぞ」

ツッコミはともかくとして、実は危険な事態だったりする。ミウタもハクも、魔力によって召還されたらしい使い魔のかぐわしい香りにどうしても惹かれて近寄りがちだ。触れた瞬間に熊の生命力を喰って、体を腐らせてしまう。ハルは一生懸命指令を出して、ミウタとハクが宙にとどまっていられるようにしているのだが、自分の「しがみつく」という行動とテレジアの影の「浮く」という行動は真逆の系列であったから、下手をするとミウタ達までしがみつかせてしまう。

「とりあえず浮かんでてくれればいいから！」

「連携を解いてくれ、体が勝手に動く」

ご主人様の命令を忠実に守ってどんどん加速していく使い魔を恨めしく思いながらも、息も絶え絶えにくらいつきながら（走るのとどちらが楽だったのかよくわからなくなってくる）自国語を唱えた。

97　主従二組（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

98　ムーンサルト、オニキスを食す

「怒りよ、憎しみよ、汝の意志を解放せよ」

連携を解くとテレジアの重みが一気にぬけていくらか動きやすくなった。ほう、と息をついてしっかりとムーンサルトにまたがると、

「今の……」

珍しい発音のせいか仄かに興味を示してきた魔術師であったが、ハルがあげた歓声によって問いはかき消された。

「運び屋って、あれのこと?」

クルアンは面倒くさそうにちらりと眼前に広がる純白を見やり、一つ微かに頷いた。ハルは今までの不格好さはどこへやら、運び屋と呼ばれる一人の青年の幻想的な姿に釘付けになって、身を乗り出した。

それはおとぎ話に出てくる天使のようだった。青年は背中に生えているらしい真っ白な翼を広々と羽ばたかせ、空をゆっくりと旋回している。翼は雨上がりの太陽の光にてらされてちらちらと光る雫が眩く輝いていた。

青年は熊乗りの二人組（ハルからしてみれば四人組だが）の姿を認めたのか、羽根を広げたまま軟着陸した。大きな翼から小さな白い綿毛が舞い散り、風に乗って飛んで行った。

「危険人物組ですね。話は聞いています」

ですます口調に素人くささが残っているその声に、ハルは聴き覚えがあった。

（あれ、誰だっけ、えーっと……）

見覚えのない翼に翻弄されてハルがムーンサルトに乗りっぱなしで考え込んでいる間、クルアンはさっさと使い魔から飛び降り、どこから出してきたのか大粒のオニキスを口に放り込んでやった。

「彼は運びますか？」

「待機班に送ってほしい」

「はい了解しました」

いきなり口笛を吹きだした翼つきの青年に驚いて、ハルはハッと我に返った。慌ててムーンサルトから降りる。熊の子は初めて乗せた女の子をつぶらな瞳でじっと見つめてくるので、ハルはたまらなくなって鼻づらをなでてやろうとしたが、口をもぐもぐ動かしていたので何となく手をひっこめた。その途端、背後に凄まじい突風を感じて振り返ると。

次の瞬間、ハルは空中に浮いていた。

「……へ？」

「ほい、ここら辺でいいだろ」

すとんと下ろされて、ハルは運び屋を見返して微笑んだ。

「ありがとう。助かったよ」

「ゼスト様にかかればちょちょいのちょいだっつの」

翼族の青年は得意げにはにかんで親指を立てた。ぼさぼさの黒髪が、敵前衛の立てる砂埃に揺らいでいる。背中に生えた翼がばさばさと風を起こすと、砂埃が多少晴れた。

「ゼストに敬語って似合わないな。一瞬誰かと思っちゃった」

「お、そりゃ失礼。しかしハルたん、戦闘中に居眠りするなよ。初対面の時みたいに」

生温いジョークではあるが、ハルは苦笑いして頭をかいた。

98　ムーンサルト、オニキスを食す（後書き）

読んでくださりありがとうございました
一段落したら番外編が入るかもしれません。

99　銃弾

ハルとゼスト、依頼開始当初に知りあっていたのだ。ハルはセーン市軍からの指令説明会に参加している途中にあろうことか居眠りしてしまい、結果ゼストと名乗るこの男性の肩を枕代わりにしてぐーすか眠っていたのだった。

今回運び屋であるゼストに抱きかかえられ、白い翼でひとっ飛びしてもらった訳だけれど、人肌の温かさというのも睡魔にとっては絶好の住処らしい。戦場の上空に居るにも関わらずハルはうとうとしっぱなしだった。

「ハルたんを地上から攫った時のあの顔、超おもしろかった」

ひょえーって感じ、とおどけて見せるゼストにハルは抗議の声を上げようと口を開いたが、髪をくしゃくしゃに撫でられて何も言えない。

（ごつごつしてるよ）

神がかったように美しい天空の翼の柔らかさとは裏腹だ、とハルは思った。

出会ったときは羽根を畳みこんでいたので、運び屋の姿ではそれとわからなかったのだ。

「お、やっこさん達が気づいたっぽいよ」

後ろを指さされて振り返ると、いつも戦っていた無機質な表情の

数人が物騒な武器を片手にこちらに向かってきていた。視界の端で、魔術師が武器を構えた。

背後でばさ、と大胆に翼を広げる音がしたと思えば、ゼストは対峙する人間達の地面に大きな影を落としながら一度旋回し、所属中の空中戦班待機場所へ戻って行くところだった。

ハルはミウタとハクに指令を出し、いつもの位置に立たせる。そうして敵が接近してくるのをじっと待った。

「接近戦狙いか」

クルアンが前を睨みつけたまま問いかけた。

「うん」

「お前の能力は生命力搾取、テレジアの影を生命体に触れさせることで攻撃する。この認識でいいか」

ミウタに確認をとると、おもむろにうなずきつつ

「ハル、ミウタもハクもまだ慣れていない。指令は口で出せ」

「わかった」

頷きかけて……ふと、じわりと二の腕ににじむ痛みを見やった。

「まずい、さがれっ！」

突然突き飛ばされて、ハルは軽々と二、三メートル吹っ飛んだ。

クルアンがその前に仁王立ちになって、スタッフを突き出して詠唱を始めたのを見て、もうすでに攻撃が始まっている事をようやく悟る。慌てて護身用のパペットをはめ直し、ハルは勢いをつけて地面を駆けた。

「護衛は頼んだよ、クルアン！」

ハルは腕に喰い込んだ弾丸の感触が気持ち悪かったけれど、我慢して目の前の敵に集中することにした。

テロリストは全部で十四、五人。ほとんどが剣を構えた男性だが、中には煙を吹いたままの銃口をちらつかせている少女だの魔道具らしきものを抱えた老婆だのが紅であった。

（あんな小さな女の子まで、テロ組織に）

「敵を確認、排除します」

機関銃を手にした少女が、ハルが最初に聞いたテロリスト側の声だった。

99　銃弾（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

１００　死のチカラ

（なんて冷たい声なの）

女の子の声は、機械そのものだった。無表情な瞳が動いて、砂を蹴りつけるテレジアサモナーの目をとらえた。

（あ……）

少し、ハクの視線に似た何かを垣間見た気がしたが、それすら確認する余裕はもう無い。

いつの間にか目前に迫ってきた男戦士が、とてつもなく長い剣を振りかぶっていたのだ。

一瞬、黄金の刃がきらりと陽の光を反射して白昼の星が光った気がした。次の刹那、長剣はその威力を失っていた。

鈍く悲しい落下音が、勢いづいていた敵側の人間の動作を停止させる。ハルは機会を見計らうまでもなかった。

一瞬の内に腐り尽きた男性の肉体に相手が凍りついた瞬間を見逃さず、ハルはテレジアに指令を出した。出す瞬間、若干声が震えた気がした。

「右足で地表を蹴り両手で前列三名に触れよ」

二人の攻撃は素早かった。生命力を吸いつくした戦士の躯を踏み

台にして、呼吸を合わせて呆然としていたテロ組織の三人組に飛びかかった。

あっという間に崩れ落ちて行く人体。土色になりはて、砂漠の中では地に還る事すら出来ないのだろうかとつかの間考えた。

生き残っている者達が顔を見合わせているのが判った。当然だ、彼らはきっと出来事の顛末を理解していないだろうから。

「印を踏み加速して機関銃使いの生命活動を衰退させよ」

テレジアの影はハルの命令に忠実に、的確に動き、敵を殲滅していく。一人、また二人と地面に崩れ落ち、それを瞠目して凝視している残りの三人のうち、楕円形の魔道具を持っていたマント姿の老婆が動いた。

（どう来るか）

ハルが身構えた瞬間、一陣の風が吹き、老婆はそこにはいなかった。

「え！？」

「後ろだハル」

切羽詰まったミウタの助言に慌てて前転した。

（交わしたかな）

否。

背中に、殴りつけるような直球の魔術が飛び込んできたのだ。ハルは衝撃に持ちこたえきれず砂の地面を転がった。手をついて起き上がろうとするハルの頭上に、陰が落ちる。

ハッとして上を見やると、空から無数の針が猛スピードに降り注いでくる所だった。

体が凍りついて動かない。

（こんな速度で刺さったら、沢山刺さったら）

避けなくては。

せめて、双子を盾にして生き延びなくては。でも、刺さったらミウタもハクも絶対に痛い！ハルは考えられなくなって、ぎゅっと目をつむって地面に伏せた。

「チラースピア」

頭上に轟音がとどろき、ハルの背中に生き物のような悪寒が走った。いや、悪寒というよりはただの寒気にも思える。身に覚えのある冷気がじんじんと背中を冷やしていく。

（クルアンだ）

上を見上げてハルは息をのんだ。

巨大な氷の槍が、銀色の針を全て包み込むようにして突き出していた。ダイヤモンドカットのような沢山の側面が太陽光を乱反射

して、まるで宝石のようだ。それが先ほどの老婆に突き刺さり、砂漠の色を赤々と湿らしていた。

「インダンスデュヴォン」

敵側からも短い詠唱があった。

「クル……」

這いつくばったまま振り返って、言葉が出なくなる。ハルの脳裏に、あの日の光景がよぎった。

あの日ハルは、誤作動した防御壁の硝子に囲まれて、悪夢と同じ光景をみたのだ。毎晩見ていた終わりのない……。

クルアンの氷の防御壁に跳ね返されて、目に見えない透明な魔法が粉砕していく様子が、表面が砕け散ってつららのようにきらめいた。

「インダンスデュヴォン」

二度目の標的にされたハルだったが、テレジアの双子に魔術らしい突風を喰わせてうまく無効化する。魔力は生命力の一つ、テレジアにとって大事なエネルギー源だ。久々にチカラを沢山喰って、双子は満足そうににたぁと笑った。

１００　死のチカラ（後書き）

更新遅くなってすみません。
いつもより長く載せました！

そしてあっという間に百話ですね・・・。

１０１　ミウタ、次の鬼を指名する

《美味だが、弱い。取るに足らぬ。もっと欲しいな》

「まだだよ。まだ二人いる」

ハルは再びパペット片手に相手の動きを待とうとしたが、それまでもないというように後衛からの容赦ない攻撃が炸裂した。

「ラストコールドネス」

ド派手な音を立てて、テロリスト達が居た場所の地面から水晶色の馬鹿でかい大剣が飛び出すと、もうもうと砂煙が煙幕のようになってしまった。前が見えない、と思った瞬間に砂埃から突撃してくる一つの影がある。ハルは一人避けきったらしきテロリストに、テレジアの影・四本の腕を仕向けた。

「首を狙え」

我ながら物騒な事を言っていると感じていた。首を狙え、だなんて、フェララが聞いたら侍魂か何かだと勘違いするに相違ない。

ミウタの襤褸の赤色が風にはためいて、生き残った少女に飛びかかって行く。一年間封じられてなまっていたとは思えない俊敏さが、幾重の年を経てきた証拠だ。一方のハクは指令がうまく行かなかったのか、砂地に佇んで宙を見上げている。

「ハク、動け」

今一度命令してみるが、幼い男児はなぜかマスターに背いて空をじっと見上げている。

銃を連射する音に、ハルはハクを諦めて左右に飛び退って避け、ミウタ一人を少女の首筋に向かわせた。ひゅうっと風を切る音がしてから、平手打ちみたいな鈍い音がいやに耳に響いた。

「つぎはおまえが鬼だ」

ミウタは鬼ごっこをしている気分だったらしく、決め台詞を言い放つ。傍ら、もう原型をとどめていない屍が視界の端で、汚れた雪みたいに溶けて行った。

ヘドロのようになってしまった死体を見て、ハルはふとそこに黒光りする何かが埋もれているのに気がついた。

ハルは震える足を一歩踏み出して、陽の光に照らされた銃身を人差し指でゆっくりとなぞった。

血走った眼の少女が最期に叫んだ言葉が深深と身体を貫き、ハルを動けなくしていた。

「ごめんね」

こんな小さい子の命さえ、テレジアサモナーは吸い取ってしまうんだ。ハルは胸を締め付けられる思いで地べたにうずくまった。哀しかった。泣きたくなかった。

不意に鳴り出す警告音に身の危険を知らされるまで、ハルは液状

になった人肉が入り込んで使い物にならなくなった機関銃を、ただ、ただ、見つめていた。

『最前衛及び前衛、撤退せよ。繰り返す、最前衛及び……』

桃色の卵から甲高い声で繰り返される命令が遠くに聞こえる。最前衛という便宜上の呼び方が、ちっともハルに差し迫った危険を感じさせなかった。自分のいる区分なんてどうでもよい。今誰が何を考えているかなんて知ったこっちゃない。目の前で起こった事が真実で、曲げる事のできない死という一つの法則の終末なのだから。

「戦いは一方を滅ぼす」

後ろから発せられた言葉に、ハルはゆっくりと振り返って少年を見上げた。

クルアンが、手を差し伸べていた。逆光のせいで影に見えた。

１０１　ミウタ、次の鬼を指名する（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

１０２　ハル、砂地を引きずられる

クルアンが、手を差し伸べていた。逆光のせいで影に見えた。

ハルは氷のように冷たい手に、磁石で惹かれるように自分の掌を合わせた。

『最前衛はどこに行った！』

二人のポケットから同時に、焦燥感に支配された怒鳴り声が鳴り響いた。

「早く」

男性の怒号と握った手の平にせかされて、ハルはやっと最前衛が自分達の担当であったことを思い出してあたふたと立ち上がった。

「ありが……」

礼を言いかけた時、突如として尻尾が引きちぎられるような痛みが走った。

（え？）

この感覚にはもう慣れっこだ。一人で旅をしているときに何度もテレジアの影が勝手に方向転換して、よくあっちゃこっちゃで尻もちをついた苦い思い出がある。

すぐさま繋いだ手を引きはがされて、気づけばハルは尻尾を引っ張られて地面を引きずられていた。

（何？）

慌てふためいてテレジアの影を見やれば、二人ともおぞましい程の満面の笑みでとある方向にまっしぐら、脇目も振らずに走っている。

「二人ともどうしたの？」

《かぐわしい力の香り……莫大な魔力を感じる。美味そうだ》

陶酔しきったテレジアの特殊な声質がミウタの口を通じて叫んだ。ハルは心底ゾッとして、咄嗟に手をついて止めようとした。しかし一人ではかなわない怪力にとっては何の効果も示さなかった。砂漠の黄土色が目や口に入ってきてひどくせき込んでいるのに、テレジアはマスターの異変に頓着できなくなるほど、魔力の香りにかき乱され、暴走していた。クルアンとの距離がみるみる内にかけ離れて行く。

「やめて、撤退しなくちゃ」

《近いぞ。ああ、早く喰いたい》

テレジアサモナーの言葉が、テレジアに通じていない。

（この熱中ぶりは）

一体如何ほどの魔力の持ち主なのだろうか。

もし、本来怒り以外の感情が格段に薄いテレジアをここまで有頂

天にさせるような量の持ち主がこの付近に、危険人物が投入される最前衛のような場所にいるんだとしたら。

（まさか……地下鉄テロの首謀者？）

テレジアの様子を見れば、その人物が格別であることは一目瞭然、疑う余地はなかった。テレジアは過剰魔であるクルアンを前にしても、冷静沈着といった風で、ミウタの口を借りる事も頻繁にはしなかった。もともと人と話す事自体あまり好かない様なのだ。それが今は、風の音を拾ってしまったスピーカーみたいな、鼓膜を突き破らんほどの高笑いを空中に渦巻かせながら、突進している。媒介となっている双子の両目は先程屠った敵勢の最前衛達の死に際の色が亀裂のように巡っている。

不意に、頭上に影が落ちた。

「へ？」

あまりの唐突さに、テレジアも我に返ったのか立ち止まる。

上空を確認したハルの尻尾から、さあっと激痛が引いて行った。何十秒もの間体重をまるごとを引きずられ続けたにも関わらず、嘘のように感覚が消えて行った。

巨大な飛行艇みたいな黒いもの。ハルの低い知能で表現しようとすれば、空から降ってきた物体はそう形容された。ハルは形容した落下物を心の中で一度、繰り返した。

（落ちてくると……どうなるんだ？）

背後で微かに魔法を唱える声が風に運ばれて、ハルの耳に届いた。

刹那、耳をつんざくような轟音にハルは上空まで撥ね上げられていた。くるくると身体が風に弄ばれて、どっちが上でどっちが下なんだか、何が起きたんだか全く以て理解できない。耳を切るほどの速度の風がびゅうっと横切り、次の瞬間ハルの身体は勢いよく砂中に叩きつけられた。

息がつまりそうだった。右半身を覆っているひりひりとした痛みに粒が食い込んでしびれ、思うように腕が動かない。起き上がらなくてはと力を込めるのだが、どうにも使い物にならないようであった。

「ど、しよ」

ハルが黒眼だけを動かして見上げていた、すがすがしい程ゆったりと流れていた白雲が闇色にぼやけて消えた。

１０２　ハル、砂地を引きずられる（後書き）

ちょっと長めになった気がします。
読んで下さりありがとうございました。

１０３　何もできない自分（前書き）

ちょっと・・・ひどいです。書き方の雑さが。すみません

１０３　何もできない自分

クルアンが目覚めたという知らせに、アルタはフェララから看病のバトンを受け取った。

「だめ。こんなに震えてる」

懲りずに起き上がろうとする過剰魔を無理繰り横にならせ、フェララに飲ませるよう言われた白湯を口元に持っていくが、吸い込むと同時にせき込んでしまう。アルタは自分の手際の悪さを呪いながら、繰り返し背中をさすった。

「クルアン、寒くない？」

尋ねておきながら、首を横に振る本人を無視して毛布を追加してやる。

原因不明の過呼吸と痙攣に襲われた状態で運びこまれたクルアンは、小一時間睡魔に乗っ取られたかのごとく微動だにせず眠っていた。テロリストの最終兵器であった爆弾が間近でお仕事をしたにも関わらず、数か所の切り傷のみで運び屋に拾われたというのは、流石高レベルの魔術師といったところだ。咄嗟に発動させた防御壁が効を成したらしくひどい怪我はなかったが、代償とでも言うべき呼吸困難が突発的に起こった……というのが、近場を偵察していた運び屋の証言だった。

「あいつは」

かすれた声でも安否確認。クルアンはいつもこうだ、自分がどん

な目に合っても他人の事ばかり口にする。思いやりがあるように感じられるが、近頃アルタは異なる印象を受けるようになってきていた。

（この子は、自分の身に起きた事の大きさが判らないだけなのではないかな）

つかの間「あいつ」という代名詞に考え込んだ。

クルアンがあいつ、と呼ぶ人物はアルタの知る限り二人だ。うち片方は先程まで意識を失った少年のまぶたが開くのを待っていた。もう一方は右半身にひどい火傷を負ってクルアンと同じく翼族の青年に届けられたが、アルタの治療をすませて元気に飛び回っている。テロリストを爆弾を使うほど追いつめたテレジアサモナーは何事も無かったかのようにぴんぴんした足取りで、五歳下のスーサと「竜巻ごっこ」なる遊びで汗だくになっているのを数分前に目撃したばかりである。

「それより、自分の心配しなさい。しびれてろくに歩けないんだから安静にしていて」

アルタは薄手のかけ布団に浮かび上がる、魔術師の男の子のシルエットを優しくさすってやる。胎児みたいに縮こまって眠っていたクルアンの強張りはなかなか抜けて行ってくれない。

（これで震えも止まってくれるといいんだけど）

しばらく撫でていると、ふと思い出したような顔をされる。何、と尋ねて見れば、クルアンは音も立てずに片手を自分の顔の正面に持ってきて、じっと見ている。小刻みに震えたままの掌。アルタに

はなぜか、その小さな空間に沢山の物が詰まっているように感じられた。ギルドマスターは突然、始終無表情でいる仲間の少年に居心地の悪さを覚えた。

（どうせここにいたって、何もできやしないんだけど……、ね）

傍にいてあげたいというこの気持ちの理由が欲しい。アルタは溜息をついて、ただただ冷たい毛布をさすっていた。

数分後に一度扉が開けられて、竜巻ごっこ二人組が顔を出したが、クルアンはいつの間にかまた沈み込むような眠りの底辺に落ちていた。

なでてもなでても直らないほどの硬直のせいか、布団からちらと見える指先には痙攣の名残のようなものが、まだ疲労の蔦となってクルアンに絡みついていた。

「取り去ってあげられたらいいのに」

生憎蔦を断ち切る能力は、アルタにはない。

（これはハルの役目ね）

ゆっくり休ませてあげようと治療専用室から去って行ったハルを呼び戻そうとアルタが腰を上げたその時、

「いるんでしょう。話があるわ」

力強い声のした方を振り向けば、戸口から赤いマニキュアを塗った指がひらひらとアルタを外へ誘い出していた。

１０３　何もできない自分（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

１０４　ハル、竜巻ごっこで敗れる

セーン市軍の御迎えの舟の上、ハルは不機嫌真っ盛りだった。
スーサとの竜巻ごっこで五戦五敗したというのも確かに理由の一つに含まれるかもしれないけど、そんなことより最終兵器の爆弾がなくなったというだけの理由で降伏したテロリスト達に腹を立てていたという方が原因として相応しいだろう。

「あんなに大騒ぎしたのに、何だか馬鹿みたいだよ」

敵側降伏・撤退命令が出された時、必死に戦った努力がぽっきり折り取られた。興醒めしたと言ったら不謹慎になるかもしれないけど、とにかく腹立たしい、腑抜けた結末だ。

「本当だよ。お互い死んだ人だっているのに、そこまでして最後に爆弾切れなので諦めますって、何それって感じ」

相槌を打つのは錬金術師のスーサ。こちらも斧の手入れをしながらほっぺを膨らませて不満げだ。様子を見ていたアルタがぷっと吹き出したので、竜巻ごっこ仲間が抗議の声をあげた。

「納得いかないんだもん。あれだけの事を起こしたのに……大した事ないっていうかなんて言うかさあ」

「芯の無いチンピラ。Ｆｕｃｋ！」

「そんな感じ。あんなの結局、人の数と爆弾に頼っていただけだよね」

ハルはスーサのぼろ糞な言いように大いなる同意を示した。

ギルド・レグルス配属以来最大規模の依頼の幕は予想外のあっけなさで降りてしまった。

ハルの右半身を襲った爆発がかれらにとっての最後の切り札だったらしい。しかしハルがテレジアの影に引きずられている間にセーン市軍側の前衛はスーサを含めさっさとひいてしまっていて、大した効果はなかった。利が無いどころかテロリストの三分の一が前衛として最終兵器の犠牲になった。要するに馬鹿である。いや馬鹿と云ったら馬鹿に失礼になる。阿呆と言えば阿呆阿呆となく黒い鳥にとっていい迷惑だ。

「さんざん戦って頑張ったっていうのに、この終わり方は無いよ」

ぶつくさと文句を大放流しているハルとスーサの掌に、一つずつ赤いセロファンの包が乗せられる。

「よかったんじゃないかな？　これ以上長引かない方がよかったかもしれないし」

ギルドマスターからのねぎらいに、スーサは隣でぱっと笑顔になりさっそく中身を口に放り込んだが、ハルは海上の日向にてかるセロファンを手中に眺めながら、どうしてもあの場面が忘れられないでいた。

崩れ落ちて行く液状化した人間。壊れてしまった機関銃に、上空で停止したように見えた黒い飛行艇、それとテレジアの狂ったような高笑い……。

（あれは、本当に起こった事なんだよね）

１０４　ハル、竜巻ごっこで敗れる（後書き）

お気に入り登録してくださった方ありがとうございます。
更新遅れましてすみません。

１０５　ハル、自問自答に失敗する

ハルは寄り添っている双子の寝顔を見やった。二人とも久しぶりの戦闘で働き疲れたのか、ほっぺたをつつかれても寝返りすら打たない。波の動きの心地良さに眠気を誘われたのだろう、なんだか無表情のくせに幸せそうに寝入っている。

（可愛い）

幼い童に見せかけて笑顔は十分怖い。般若さえ刀を放り出して逃げだしてしまうだろう、ディープインパクトそのものである。

（それがあんな風に目が血走ってて……怖かった）

突っ走っているテレジアの姿は、明らかに正気を失っていた。中途半端な論理で解析する間もなく、尻尾を介して伝わってきていた。テレジアに関しては、ハルは自分の直感を確信していた。

あの力は一体、何だったのだろう。どうしてテレジアが狂喜するような膨大な力を持った首謀者が、あっさりと降伏したのだろう。どうにも腑に落ちなかった。

「アルタ、あのね……」

「ん？」

ハルは揺らぎそうになる本心に、内心苦笑した。完全なる既視感……以前にもこんなことがあった。春のひだまりの中、自分の本性

を打ち明けられずにいた。それで友達を悲しませた。

（今度は、ちゃんと話せるよ）

テレジアサモナーであることを言い出せなかったのは、アルタの事を信じる事が出来なかったからだ。こうして傍にいてくれる今、もう包み隠す様なことはしたくなかった。

「テレジアのことなんだけど」

ハルが話し終えるまで、アルタは頷くほかは何もせずにじっとハルの話を聞いてくれていた。

「本人達はあの時の事はよく覚えてなかったみたいだし、結局あやふやなままなんだけど」

アルタは気難しげな顔をして二、三秒、騒がしく鳴きたてるウミネコだの食べ物ほしさにしばしば急降下してくるカモメだのを見上げていたが、すぐに微笑(わら)って一つ頷いた。

「わかった。一応フェララに話しておくわ。ありがとう、ハル」

ふっくらとした掌が伸びてきて、ハルの横髪を優しくなでてくれる。女の人らしい手つきに、ハルは心地よくなって目を閉じた。

（やっぱり、アルタは笑った顔が一番だ）

いつかのように膝を抱えてうつむいているのは似合わない、とハルは笑顔を返して、ふと黒い塊の方に視線を向けた。

防寒の意味もあって普段の魔術師スタイルに戻ったクルアンは、相変わらず鼻先しか見えない状態で海風にあたりながら本を読んでいた。微かな風で、三角帽子についている茶色のフェイクファーがそよそよと揺れて、何となく絵のようなそれになっていた。

「今はおさまってるみたいね」

亜サイコメトリー、とアルタが耳打ちしてくるのに相槌を打って、ハルは目を覚ました医療班の待機場所で耳に入ってきた看護師の会話を思い出していた。

確か、過呼吸と痙攣、止まらない、パニック、レグルス。五つの単語が繰り返し出てきて、みんなして一斉に持ち場を離れて行った。取り残された怪我人やら病人やらは同じような顔をして、お互い顔を見合わせている。ハルもその一人で、何が何だか訳がわからなかった。ただ自分の所属するギルド名が出てきたので、メンバーの誰かに何かあったのだということは察しがついたのだった。

どうして、誰もその事について触れないのだろう。

触れてはいけないから？それとも、触れたくないから？

自問自答に失敗したハルであった。

106　生存者

x　＋　x　＋　x　＋　x　＋　x　＋

許さない。許さない。

お母さんを殺したあいつを、私は絶対にゆるさない。

……憎い。

誰を憎めばいいのかわからない自分がけがらわしい。

決まっているじゃないか、あの、男。

なのになぜ私は彼を怨みたくないと思っているのだろうか。

わからないまま、今尚茨の中を走り続けている。

金色の風がふわりと肩にかかった。まるで私をくい止めようとしているかのようだった。でも、もうためらう事はない。

一歩足を踏み出して、世界が消えて、私もいなくなった。

x　＋　x　＋　x　＋　x　＋　x　＋

ハルは花束を抱えて砂漠を歩いていた。

なんだか映画の撮影にでも来ているみたいだが、至極大事な依頼であった。

昨日終末を迎えた地下鉄テロ事件の犯人数は二千人に及んだ。内死亡者は五・六百人と推定されている。一方ハル達が一時所属していたセーン市軍側は、総勢三千人の内約百人が死んだ。

昨日の夜中に、セーン市軍からギルドマスターの通信機に連絡があり、人数の情報と報酬の連絡と一緒に、大量の配達依頼が舞い込んできている事を告げられたのだという。

「今回参加したギルドに、引き続きご協力をお願いしたく存じますので、配達先が一致している物を均等に割り振らせていただきます」

よってハルは乾燥した空気のなか、砂で咳は出るわ、ミウタとハクの重さがまだ残っているわ、散々な状況で配達依頼を決行していたのであった。

出る間際になってアルタに

「風が強いから、大変だったら無理しないで帰ってきて」

というアルタらしい言葉をかけてもらったのだけれど、ハルはどうしても両手いっぱいにかかえた花束の集合体が一つ残らず指定場所に添えられるまで、帰る事は出来なかった。

（だって、戦死者宛ての大事な花束だもん）

生存者のハルにとっては、たかだか目に砂が入ったくらいで引き返せるような依頼内容ではなかったのだ。ハルは花束についた手紙

やメッセージカードの名前を確認しながら、それがいったいどこにあればいいのかを探していた。

一つ目の花束は、大きな黄色の花びらとすずらんという清楚な組み合わせのもの。送り主はセーン市軍前衛の人の両親だ。ハルはスーサの一緒に戦った場所まで移動して、手を合わせた。するとミウタがハルの頭をぺたぺたと叩いてきて、何に祈っているのかと尋ねたので、ハルは途方に暮れた。

「何に祈るかわからないのにお祈りするのか」

ミウタはよくわからないという顔をして、首をかしげ、それからハクの頭をぽんぽん叩いた。暇になる度にいじられている弟だったので、ミウタが退屈だという事がわかったのか、ちょっかいに応じて頬をつねる反撃をしていた。

二つ三つと味方の前衛宛てが続いた。砂地に置くごとに丁寧に手を合わせる。いつの間にかテレジアの双子も真似をしていて、風に遊ばれる花弁のなびくのを物珍しそうに眺めていた。

「次は向こう（敵側）の人だ……あっち。駅の方だね」

ハルは後半戦は危険人物として最前衛に配属され、敵の拠点に一番近づいていたポジションだ。だからハルは地下鉄テロの砦の目の前で戦っていたことになるが、なぜだが駅を見た記憶がまったくない。砂埃立ち込める中攻撃をかわすことに精一杯だから、目がいかなかったのかもしれない。それにしても……

「変な駅」

ハルはまじまじと駅舎を眺め、率直な感想を述べた。

１０６　生存者（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
高校生って色々忙しいですが頑張ります！

少し長く書いたつもりです（・ω・´）

１０７　花束のカード

地下鉄の駅としては、何の変哲もない建物だ。ドーム状の入り口から覗きこむとなだらかな階段がずっと下まで伸びているのがわかる。ところどころに硝子の破片のようなものが光って見えた。視線を全体に戻してみれば、黒々としたそれは、駅としてはごくごく普通の地下鉄駅だというのにまるで違う何かを暗示しているように見えた。

（暗示……）

自己暗示。それとなく、自分に思い込ませる事。子供ギルドにいたときに、習った記憶がある言葉がふと脳裏をよぎった。

（地下鉄テロ……？）

ハルは一歩後ろに後ずさり、あたりを見渡した。

そして違和感の正体があっさりと発掘される。

「なんで砂漠に駅なんか？」

ざあっと吹く空っ風にさらわれる一面の砂がハルの視界を黄色くけぶらせた。砂煙がおさまるのを待ってから、もう一度敵の拠点だった場所を見上げてみた。

近場で爆弾が使われたとは思えないほどしっかりとした構えのまま建っている。全体的に黒いから、強風に取り残された砂粒が白々

とはびこって異様なほどに目立つ。今となっては廃駅になったそこは、砂漠の中に図太く突っ立ってまるで世界遺産か何かのようだった。でもフェララの情報によれば、ここは観光客が来るほど魅力的な砂漠ではない。

（どうしてこんな、誰も来ないような場所を）

テロの拠点に選んだんだろう？

第一、テロって人質を取るものじゃなかったっけ？

人質がいたとしたら、なんでセーン市軍は交渉もなしに攻撃を開始したの？

「……あれ？」

ハルは砂漠に佇んで、自分の中にわらわらと浮かび上がってきた基本的な疑問に半ば呆然としていた。なぜこうなったのか、という訝しみと、今まで気づかなかったことに対する驚愕とが入り混じって、砂がそれに同調するかのように、風にからめとられ削られていく。

不意にテレジアが口を効いた、

《戦士の残霊を感じる。早く離れた方がいいだろう》

ハルはミウタを見た。テレジアもハルの目とミウタの瞳を合わせ、一つ瞬きをした。

《早く供物を置いて離れた方がいい。残霊の怨念が我々にくっつい

て肥大化すると、マスターには少々重すぎるだろう》

我々は別に構わないが、とテレジアは付け足した。ハルは言葉の意味は理解しかねたが、とりあえず言われた通りに、抱え込んだ花束を駅の入り口にそっと供えて手を合わせようとした。

カードに張り付けられた写真が目に飛び込んできたのは、その時だった。

「これは……」

掌にちょうどおさまるほどの、白い厚紙に綺麗の糊づけされた写真に写っている女の子。どうやらその子が宛先らしく、カードの裏側に「安らかなる眠りを」と丁寧な字で書いてあった。ところどころインクが丸くにじんでいる。

（まさか、あの機関銃の子？）

ハルは地べたに座り込んで、満面の笑みでカメラに撮られた女の子をまじまじと見た。

茶色い泥をほっぺたにつけ、二つ結びにした髪には有り得ない数の枯葉がからみついている。首から上だけの写真なので手元は見えないが、湯気がのぼっているところを見ると焼き芋でもしたあとのようだ。だが女の子の向こうにちらりと桜色の花が咲き誇っているのを見て、それは無いと判断する。

じゃあ、この子はどうしてこんなに薄汚れた格好をしているの？

「……泥」

と、

「枯葉」

大量の葉っぱ。いつか見た茶色の警告道具。

探り、深く掘り進めた記憶で、パズルのピースがぶつかりあって割れた。ハルは震える手で地面をつき放し、勢いよく立ちあがった。

１０７　花束のカード（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

大分前の話になりますが、テレジアについてのメモを読むシーンで「電子式のセーン文字」とありましたが正しくは「電子式のカルマツェーダ文字」でした（本日訂正）。失礼しました。。

１０８　立ち止まるハク

「嘘だよマリア」

嘘って言ってよ。

初めて会った時、あんなににこにこ笑ってたのに。

何度村が盗賊に襲われたって、健気に生きてたのに。

村長さんの奥さんを、きらきらした笑顔で呼びに行ったのに。

上目遣いに私を見て、微笑んでくれてたのに。

ハルの悲痛な叫びが、嘆きが、無人の駅にこだましていった。

写真の少女は確かに、初依頼の日に出会ったマリアだった。二つに結んだ尻尾みたいな髪も、笑いかけている口元もきちんとマリアだ。つい昨日、自分が屠った銃使いの冷淡な瞳が幼い少女のどんぐりまなこと重なりあって、否定して、弾けた。

「行かないのかハル」

尻尾が引っ張られるのに気付いて、ハルは慌てて零れおちそうになっていた涙をこらえ、花束に背を向けた。

「帰ったら何をするつもりだ」

守りの木々を抜ける途中、ミウタがそう尋ねてきた。

「やることないから、寝る」

ハルはうつむいて、速足でフリージングスピアを歩きながら簡潔に答えた。本当は予定など立てていなかったから、他に言いようが無かったのだ。ミウタは何を悟ったのか、口を閉ざして黙々とついてきてくれた。ハルは内心安堵して、それから情けなくなった。

（ミウタに気を使わせているようじゃ、皆に落ち込んでる事がすぐバレちゃうよ）

戦場から帰って来たばかりで、ギルドメンバーの疲労具合は半端ではない。その上溜まってしまった三日分の依頼をこなすのにまだまだ忙しそうだった。ハルは新入りだから、と、アルタがわざわざ仕事を減らしてくれた事を思い出すと、せっかくもらった時間なのに寝て過ごすのは勿体無い。

（う～ん、そろそろクルアンは帰ってきているだろうから……）

一緒に仕事をしようか否かと考え込んでいた時、突然ハクが足をとめた。なぜハクだと判ったかといえば、二股になっている尻尾の左が引っ張らさったからだ。ミウタは右側に通じているが、こちらはマスターと同じくハクにつられた形で立ち止まった。

「どうしたハク。ハルならここにいるぞ」

ミウタは相変わらず無遠慮に弟の頭を叩いた。ハクは虚ろな目をぎょろりと見開いて、森のとある一点を見据えていた。荒れてがさがさした唇が開く。

「なんで、も、ない」

話慣れていないハクは、たどたどしく発音して、酷使した目を潤す為に瞬いた。

（？なんだったんだろ）

ハルは見えてきた拠点の茶色い扉に視線を戻して、再び指令を出し、テレジアサモナー一行が茶色いニス塗りのドアにたどり着くまでにものの一分もかからなかった。

ハルはいつものようにノックしようと手を丸めて、ふと動きを止めた。

「どうしたハル」

「……見て、これ」

いつもフェララが耳にタコができるほど言いつけている扉の戸締りがされていない。レグルスの拠点にはフリージングスピアがあるとはいえ、メンバーの知っている曲がりくねった抜け道が攻略できてしまえば誰だって侵入できるから、用心してフェララとスーサの技術コンビが二種類の鍵を取りつけて、御大層にドアチェーンまでかけてある。

それが今は扉が若干開いて廊下の壁の白を覗かせている。隙間から覗きこめば、金色の鎖が役目を果たさずに細くぶら下がっている。

１０８　立ち止まるハク（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。

１０９　血ぬられた魔術師

それが今は扉が若干開いて廊下の壁の白を覗かせている。隙間から覗きこめば、金色の鎖が役目を果たさずに細くぶら下がっている。その頼りなさに、ハルは首筋に悪寒が走ったように思った。

「クルアン？」

留守番からの返事はない。いや返事はないのはいつもの事だけれど、こちらに向かってくる規則的なヒールの音が、待ってみてもやってこない。

フェララ曰くエレベーターを五分待てないのは日本人の面白い特徴らしい。それが特徴と称されるほどのものならば、ハルはやっぱり生粋の日本人だ。

ハルは勢いよく扉を開け放った。明かりがついておらず不気味に暗い廊下に、何かの影が見える。ハルは急いで駆け寄り、それを確認した。

クルアンの帽子とマントが、はぎとられた様に打ち捨てられている。黒光りする衣服に嫌な予感を覚えながらつきあたりを右に曲がる。息を呑むのは、双子の方が早かった。

「見てハルあそこ」

指さされたのは暗い廊下の突き当たり、リビングへ続く扉の向こうに誰かの足が投げ出されている。見なれない鉄製のブーツが無機

質そのもの、無表情に横たわっていた。

「クルアン！」

戸を開け放って、ハルの両足は一瞬眼前の光景にすくんだ。

白い布から床の目までしたたり鈍く光る不吉な色。倒れた人間の腹部ら辺から汚い丸を形作って赤黒い水面に、こわばった自分の顔が映るのが怖くて、正直逃げ出したくなったけれどなんとか踏みとどまれたのは、テレジアの一声だ。

《意識確認だ、マスター》

ハルはしゃがみこんで、赤く染まった衣服に手をかけながら名前を呼びまくった。大声にも全く反応がない。指一本、ぴくりともしない。ますます鼓動が跳ねあがって、すでに呼吸は荒い。

（刺されたのかな）

背中に手を当てた時、命の足音を感じたので、ぱっと見で恐れた最悪の事態にはなっていないらしい。

《何者かに襲われた可能性があるならばかなりの実力者だ。フリージングスピアを抜けて侵入してきたのだから》

まだ拠点内をうろついているかもしれぬと指摘され、ハルは身も凍るような思いでミウタを睨みつけた。テレジアは淡く笑った、

《双子を見張りにつけておけ。案ずるな、敵が来ようとも触れて死ぬだけだ》

ハルが指令を与えるまでもなく、四つの足音がてんでばらばらに戸口へと向かっていった。

「クルアン、聞こえないの……？」

ハルは両手が血を纏うのもためらわずに、重傷のウィザードを抱き起した。うつぶせになっていたのでわからなかったが、クルアンは背中だけでなく、顔にも短い直線的な切り傷を負っている。口の周りをおおっていたらしい右手の平にも点々と紅色が散っている。血を吐いたのかも。

ハルは傷に痛々しさに泣きそうになったが、とりあえず持ち前の怪力で怪我人をベッドに横たえた。アルタの部屋だけれど、ここが一番近い。それから晒しを探そうとベッドの傍から離れ、廊下に出て

「うわ！」

再び足をすくませたハルとテレジアの双子の目に映ったのは、血のついた斧を持ったまま仰向けに倒れているスーサの姿だった。

１０９　血ぬられた魔術師（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

個人の事情により、次回の更新は三日後になりそうです・・・。

チャンネルはそのままで！（笑

１１０　スーサがみたモノ

怖かった。すごく怖かった。

部屋で武器の修理をしてたら、誰かがノックする音がして、そろそろクルアンが帰ってくる頃だったから出迎えに行った。

そしたら、そしたらすごい息切らしたクルアンが立ってた。帽子とマントで顔は見えなかったんだけど、なんか苦しそうで様子が変だったから

「どうしたの？」

って聞いたら、いきなり天井からつららの大きいのが突きだしてきた。びっくりして、何があったのかわかんなくて、でもクルアンの姿は魔法の氷に邪魔されてよく見えなかったから……。

もう一度話しかけようとしたら、今度は天井から何かが擦れ合う音がして、頭のすぐ上の壁紙に渦巻きみたいな模様が出てきた。見上げてたら見覚えのある透明な針が見えたから急いで避けたんだけど氷の先っぽがかすって袖が切れて、もっとびっくりして、そこでやっとクルアンが魔法を使っていることに気付いたんだ。

（なんで？　なんでここで攻撃魔術を？）

自分が狙われてるとは思わなかった。けど頭の中はもう訳分からないし、体が震えるし、目の前が真っ白になって。

気づいたら全速力で走っていた。自分の部屋に向かって夢中で駆

けてた。天井からは敵を追いつめるみたいに氷柱ががしゃがしゃ突き出して、それを避けて、逃げて

「止まれ！」

思わず叫んだら、今度は逃げる背後から魔術が飛んできた。背中が一瞬、凍てつくように痛んだ。

（しまった）

流石に僕は、今クルアンが自分を標的にしていることを理解した。遅すぎた。クルアンの攻撃は強い。じきに背中は、魔物にしがみつかれたみたいに固まって自由に動かせなくなった。

１１０ｐｏｉｎｔ５　その子が見たモノ・・・

追いかけられていた。ナニカに。

ソレは不気味だった。ソレには、実体が無かった。ただ忠実に自分にくっついてきていた。まるで濃い影のように。

ソレには翼が生えていた。運び屋と同じシルエットだというのに、異常なほど醜く見え、羽根は俺の魔法を全て消した。まるであいつの尻尾の双子みたいに。

ソレには口があった。横に裂けた口からは小さな歯が並んでいるのが見えたが、全て金色に輝いていた。見覚えのある光だと思った、まるでいつかの魔術のように。

帰って来たのか。そう尋ねたが、ソレは答えない。

殺しに来たのか。問いかけるが、ソレは声を発しない。

俺は焦れて、しつこく攻撃を仕掛ける魔物に一発アイシクルエッジで応じてみる。が、もともとこちらの不利な近距離で攻撃したからか大した威力はなく、長い爪があっさりと氷の牙を打ち砕いた。そして、いつの間にかソレと俺は拠点の扉をすり抜けていた。鍵を開けた記憶はない。

目の前でスーサが手に斧を持ったままうつ伏せに倒れていた。

俺はスーサを抱き起しかけて、ふと手の平に冷たさを感じてスー

サの背中を確認して、驚いた。

「魔法？」

小さな身体に張り付いている、いくつもの氷の粒。確かに自分達氷魔動士（ウィーザード）の使う魔法・アイスクラッシュ（アイス）だ。

いつどこで、俺は詠唱した？

何が起きている？

問いかけに答えるかのようにぽたりと床へ血が垂れた。赤色を見た途端頬に感じた痛みに手をあてがうと、ぬるりと液体の感触があった。

血だ。一度認識した事柄を繰り返し、俺は出来事を朧気に理解した。

「なぜこいつに手を出した」

１１０ｐｏｉｎｔ５　その子が見たモノ・・・（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
小説にかける時間が大幅に減ってしまい、少しずつしか載せられない状況です・・・まさかＧＷがゴールデンじゃなくなる日が来るとは。

この後、物語が急速に進みます。
技量不足で無理矢理なところもあるかとおもいますが、お付き合いくだされば嬉しいです。

111　価値ある質問

「なぜこいつに手を出した」

後ろに感じた気配に話しかけて見たら、やっとソレが言葉を奏でた。歌うような戦慄を。

「お前がやった」

声を聞いて思わず振り向けば羽を持つソレは、俺を切り裂こうを長い爪を頭上にかざしていた。廊下のランプをいくつか巻き添えにして迫ってくるかぎづめ。持ち主の唇は汚い黄土色だった。発せられる声色は、テレジアの女の子がときたま発するあの、複数の声質が混ざったような音によく似ていた。

「意識さえ奪えば、お前は仲間を傷つける奴だ」

反論できない自分の存在に気づく。守るべき少女の手の甲を貫いたいつかの氷の牙のきらめきが、ソレ……そいつの歯並びにかぶった。

「お前がやった。ざまあみろ」

高笑いの直後、背骨を電撃の様な痛みが走った。

「……っは」

勝手に吐かれた息の振動が心臓に響いて、それから地面が揺れた。

やばい。倒れる。

また、何もできないまま……？

嫌だ。

嫌だという感情を抱いたのが懐かしい。

とりとめのない思考に支配されかけるのを振り切り、俺は無理矢理動かした右手で、スーサを守った。

かぎづめが食い込んだだけとは思えない痛みが右手首を襲って、すぐに引き抜こうとするが、相手は獲物をがっちりとつかんで離さない。俺の体力は背中に負った一撃のせいで大分削られていたし、生憎腕の筋肉は鍛えられていない。敵から逃れる事はかなわなかった。

痛い。

「彼女はいつかお前を喰う、逃げられはしない。いずれ死ぬ」

俺はそいつを見上げた。不気味な笑みを口元に浮かべ、爪をかちゃかちゃと打ち鳴らしている。無い目を倒れた俺達二人に迷わせているのを見てとれた。

むかつく。

腹が立つ。

怒りを何年ぶりに感じただろう。

誰にぶつけるべき感情なのだろうか。

だがぶつけるだけの体力がもう無い。

「誰を殺しに来た」

それが俺に出来る唯一の価値ある質問だった。

そいつ……彼女は黄土色の唇から、返答をした。

「二人」

（！　一人じゃないのか）

質問を重ねようとしたその時。

「クルアン？」

不意に震える声が聞こえた。あいつだ。

今帰ってきたら絶対殺される。

だが来るなと叫ぶ余裕などない。限界はとっくに超えていた。背中から血が流れ出るせいで目の前は闇に支配されていた。右手には痺れるような痛みが残って、自分のものでないかのようにぴくぴくと動いていた。

それからあとに起こった出来事の情報を、持ち合わせるすべはなかった。

111　価値ある質問（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
お気に入り登録してくださった方感謝です。

112　不躾な質問

床の板のきしむ音に、アルタは書類から戸口へと視線を移した。

リビングの入り口に、桃色のガウン姿で、ハルが立っている。手の中には先程スーサに貸したハンカチが使い物にならなくなったティッシュみたいに端を頼りなく下げていた。それと同じくらい落ち込んだ様子で、ハルはうつむいたままびしょぬれのハンカチを差し出しながら、黙って隣の席に座った。アルタは酷使したボールペンを一旦おいて、ハルの方に向き直った。

「スーサはどうだった？」

「いろいろ話してくれて……泣きつかれて、寝ちゃった。……クルアンは？」

「フェララの部屋にいるけど、まだ寝てると思うわ」

「そっか……」

ハルが顔を上げた。少し眠そうだった。テレジアの双子・ミウタとハクも、とっくに睡魔と御友達になりかけているらしく、ハルの尻尾から地べたに寝そべっていた。眠たいのはマスターも同じだろう。

（早く済ませた方がいいかな）

ハルは慣れない戦闘のせいで大分疲れている。できるだけ長く、休ませてあげたかった。だから、アルタは不躾だと判っていながら、

「スーサから聞いてきたこと、話してくれる？」

ハルは思いつめたような表情のままゆっくりと頷いて、アルタの帰宅時泣きじゃくっていた錬金術師からの情報を話し出した。

クルアンは、魔力のオーバーランによって暴走しているようにみえた。

スーサはクルアンからの攻撃から身を守るために、クルアンと戦ったという。

徐々に身体が凍らされて身動きが取れなくなり、スーサが斧をふるえなくなって負けたということ。

スーサの知る限り、クルアンは前のオーバーランと違い、しっかりした発音で詠唱していたということ。

「スーサは大体こんな感じのことを言ってたよ。泣きながらだったからうまく聞き取れなかったところもあるんだけど」

ハルが話を締めくくると、居心地の悪い静寂が食卓を支配した。

いつも四人で囲むテーブルは、不思議なほどに空席が目立って寂しく、またビーフシチューもクッキーも乗っていないせいかレースのテーブルクロスの白がひどく味気なく端を下げていた。代りに場所をとっている大量の書類は皆白黒で、彩りの足しにはならなかった。

「詠唱しても、している自分に気づかないってことかしら……」

オーバーランは多くの場合、使用者の意志の範疇を越えた魔力が一人歩きすることによって起きる。クルアンは氷のウィザードなので、攻撃をする状況では最も多く使われる固体、刃物型と呼ばれる形態でオーバーランが起きるのが普通だ。その結果が、テロリスト討伐依頼中に起きた両腕からの自己攻撃だった。

しかし今回は勝手が違う。詠唱を伴うという事は、本人が自らの意志で魔術を使ったという事になる。

「アルタ」

「ん？」

アルタがハルの顔を覗き込んでみると、テレジアサモナーの少女は膝ににぎった手を置いて、唇をかんでいた。その口元が、何かを言おうか言うまいか迷って、曖昧に動いていた。

アルタはふと、自分の中に何か安堵感に似たものが唐突に生みだされるのを覚えた。安心しているのではない。どちらかといえば、そう……

見守っている側の人間の心地がした。

113　アルタ、ハルに盲点をつかれる

ハルを見ているとときたま、こんな気分になる。何となく、誰かを守るというプリーストとしての使命を、果たせているような気がしてくるのだ。

アルタはいつものように、ハルの髪に手を伸ばした。ハルは目をつぶって、大人しく撫でられている。ほっぺたがガウンと同じ桃色に染まる様になって、アルタはやっとハルから手を離した。

（これで緊張は解けたかしら）

二三度、自分が乱した髪を撫でつけて整えてあげて、アルタはハルが何かを言い出すのを待った。

「……クルアンは、本当に魔術を使いたかったんじゃないかな、って思うの」

（えっ）

「クルアンはスーサに攻撃したかったんじゃないかなって」

アルタは瞠目し、顔を上げたハルの瞳をじっと見やった。

冗談を言っているようには思えない。むしろ、自前の理論に基づいて発言するときのナイルカントの目に少し近い色をのせた、でも戸惑いを隠せない、そんなまなざしだった。

「……どうして、そんなこと」

握りしめた膝が痛い。でも何か漠然とした恐怖のせいで、アルタは自分に爪を立ててしまっていた。

アルタが見てきた限り、クルアンとスーサは憎み合うような関係には絶対にならない。クルアンと行動を共にした期間はアルタの方が長いというのに、二人は兄弟みたいに打ち解けていた。不思議な巡り合わせのように、自然と一緒にいた。あまり口を開かない過剰魔に向かって、何の隔てもなく接する事ができたのは一人の少年だけだ。あのスーサがクルアンに敵視される理由なんて、どこにも見当たらなかった。

アルタにとっては。

しかしハルが、アルタも知らない事をいつの間にか握っていたとしたら？

渦巻きだした思考回路を止めたのは、次の一言だった。

「クルアン、スーサが味方だってこと、判らなかったんじゃ……」

アルタは二度驚いた。盲点をつつかれた心地とともに、憤りかけていたのがおさまった。

「……」

アルタは何も言えなくなった。恨むはずはないといっておきながら、少年達の絆を疑ってしまった自分が恥ずかしかった。

（何を言ってるんだ、私は……皆と一緒にずっといるのだから、見誤りなどありはしないのに）

アルタは自分を少しばかり叱りつけて、ハルの話に耳を傾けた。

幸いハルはアルタの揺れに気付かなかったらしく、小首を傾げたままぽつぽつと思案していたらしい事柄を話し出した。

１１３　アルタ、ハルに盲点をつかれる（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

１１４　零抗者《ゼロスー》の憂苦

幸いハルはアルタの揺れに気付かなかったらしく、小首を傾げたままぽつぽつと思案していたらしい事柄を話し出した。

「これは奇サイコメトリーで感じた事なんだけど、クルアンと気持ちが通じているときね、たまに自分がどこにもいなくなる気がするの」

「どこにもいない？」

ハルはこくりと頷いた。

「どこにもいないんだ……自分で、どこに立ってるのかわからない。居場所がないの。」

椅子の脚がかすかに擦れあうような音をたてた。テレジアの双子のどちらかが寝返りをうったらしかった。

「ひとりぼっちで……皆がみんな違う世界の人に見える。傍に誰も味方がいないみたいに、自分だけ違うところにいるみたいに思えるの」

「……それは、成長していく人なら、誰でもおもうことなんじゃないかしら。寂しいって、私も今まで何度も思ったわ」

アルタは年上として、正論を返そうと努力してみたが、ハルは目を閉じてゆるく首を振った。ひどく大人びた仕草に見えた。

「違うんだ。寂しいんじゃないの。そっか、味方がいないんじゃないんだ。多分クルアンにとってあの瞬間は、みんなが敵になるときなんだ」

アルタはどきりとして、影でよく見えないハルの顔に視線を注いだ。『あの瞬間』というその言い方は、二人だけが知っている事で、特殊能力を持たないアルタ達三人を締め出すような言い草のように感じた。

「あの瞬間、ね」

動揺を気づかれまいと、敢えて静かに、淡々と切り返す。テーブルクロスの垂れ下がった四隅が急に情けなく思えてきて、抗う間もなく目を背けてしまった。

（全員が敵だなんて）

あの氷のように冷たい面（おもて）の裏に、無頼の心情を秘めていた。ハルの話に、ただアルタはうなずくことしかできなかった。

誰が味方で、どこからが敵なのかがわからない。居場所がない。ただ目の前にいる人間が全て敵に見えて、理性がもう一ミリでもかけていたならば攻撃をしかけたい衝動にかられてしまう。

だからスーサを襲ったのだという。

アルタはハルがクルアンの様子を見に行くと言って部屋を去った後、一人椅子の背もたれに寄りかかって、フェララが作った花の形のランプが放つ、抑え込まれたような色の光をぼうっと見上げていた。

クルアンには逆サイコメトリーがある。

ハルには奇サイコメトリーがある。

それだけで、未だ一端のヒーラーとして名乗る事もできないギルドマスターにとってはすでに突拍子もない話であった。

『特殊能力者（アラトルノ）』、アルタ達、純粋な職業の者達『零抗者（ゼロスー）』はああいった類の力の主をそう呼ぶ。

特殊能力とは魔力を必要とせず、世界の規律を突破した能力のこと。

読めてはいけない人の心がわかる。声を出さなくても、誰かに思いを届ける事ができる。時間をまきもどす・とめる。瞬間移動ができる。こうしたチカラはもともとあってはならないものとされている。それは人間が定めた法律にとってではなく、生まれた時から生きとし生けるものに植えつけられた、信念という名の規律からくる自然の感覚だ。

あってはならない出来事を現実にしてしまう、アラトルノの存在はアルタ達ゼロスーにとって理解の範疇を越え、ちょっとした脅威だった。脅威を目前にし、それを救う使命を持たされたゼロスーは、アルタは心底、どうすればよいのかわからなくなっていた。

内面的な脅威（アラトルノ）が、混乱を起こして巨大な氷の攻撃（危険人物）と化す。それがアルタの身の回りで起きている現実だ。

周り全部が敵に見えるというのは、同じアラトルノであるハルが言

っていたのだから間違いはないだろう。誰もかれもが攻撃対象として映る感覚、果たして15、6の少年の理性に耐えうるものなのだろうか。

答えは、ノーだ。アルタは二年前、レグルスを設立した時からそれを悟っていた。

あの頑なな面持ちの少年を近くで見る度に、アルタは自分が身構えられているような心地に襲われることがあった。

次はどう動くだろうか。クルアンのオーラはいつも臨戦態勢の様に感じられた。隠しているつもりで、長く一緒にいるこちらにはバレバレだ。要するにクルアンの理性は、本能があの体躯から漏れだすのをうまく制御できていないのだ。

何も感じていない、仮面のような表情でじっと天井を見つめているその横顔には、深い疑念が宿っているのが透けて見えた。

どす黒い、その中に氷の棘がきらめいて渦を巻くような光景を垣間見るような、むしろその渦の目にとりこまれてしまうような寒気が首筋にはしる。アルタが思うに、アラトルノの氷使いは本当は全てを敏感に取り込んでいるのに、どこかに追いやっているのだろう。追いやられた感情は周囲への疑心暗鬼と姿を変えて、結果として今回のように盲目的に敵味方を取り違えて暴走してしまったのだろう。

「逃げているのは私も一緒なのに」

アルタより幼いクルアンに、己から目を背けた代償は重くのしかかるのだった。戦闘中に味方が一人もいなくなってしまった経験を、ギルドマスターは幾度もしている。あの心細さは言葉では言い尽く

せない。

クルアンが、そして手をつないでいるハルがどれだけ不安に押しつぶされているのか、アルタは痛いほど判った。でも。

（私にはなにもできないんだ）

心の治療はできないし、クルアンに魔法は使えない。アラトルノにゼロスーは通用し得ない――

アルタはまぶたをふせ、食卓に山積みになった書類を一瞥した。一番上に、心の治療をともなう自分指名の依頼書が承諾印を誇らしげにちらつかせてのっかっているのを見るなり、アルタはぱっと紙の山から上澄み一枚取り上げて、手の内に丸く収めてしまった。

十二時のサインネオンが、ガウンのポケットの卵型から淡く浮かび上がった。

１１４　零抗者《ゼロスー》の憂苦（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
ここのシーンがなかなかうまくかけず、更新が遅くなりました。ごめんなさい。
お気に入り登録して下さった方感謝です・ω・

少し長めに投稿した・・・つもりであります。

115　画材はいずこ

フェララの部屋に一歩入るなり、ハルは口をぽかんと開けて入り口に佇んでしまった。

「な……な……」

なんじゃこりゃああ！

と、声に出しはしなかったものの。

（これは……ひどい）

ハルは心中で断言した。

何度見ても広々として、キャンバスやら絵の具、アクセサリーが整然と並べてあったフェララの部屋。

今は空き巣が入ったかのようにひっかきまわされていた。芸術作品はどこを見渡しても見当たらず、代わりに出しっぱなしの医療器具が床に散乱している。手術用の鋏、ピンセット、鏡などの金物は御洒落な花の形のランプに照らされて鈍く光っていて、その上に散々ころげまわって細くなった包帯が、最早取り返しのつかない状態でいくつか放置されていた。

（余程急いでいたんだろうな）

ハルが怪我人を発見したとき、クルアンのシャツはほぼ全面的に

赤黒く染まってしまっていた。相当ひどい傷を負っていたのだろう、アルタと二人で廊下に大きくできた血だまりの掃除をしたときも、なかなかの時間がかかった。

たまたま館に帰還していたスーサがクルアンと戦って、負けた方は軽い凍傷程度で済んだというのに、勝者は自らの魔法で重傷を負った。

皮肉だ。本当に皮肉だと思う。

しばらく散らかりようをみていたら、左奥にある低い扉から声がかかった。

「あら、いたの」

声のした方を見れば、清楚に仕立てた御手製のワンピースの上からビニールのエプロンと手袋をはめたフェララが出てくる所だった。どうやら怪我人は奥の部屋にいるようだった。

フェララはハルと、地べたに寝そべっているテレジアの影を認めると、にっこり笑って両手を大きく広げた。

「すごいでしょ？」

苦笑するしかない。フェララは改めて自分の部屋に凄まじさを確認したらしく、勝手に高笑いし始めた。

「あのね、クルアンに会ってもいい？」

「結構よ。ついでに情報交換もよろしく」

よろしく、のところを強調するかのように、フェララは手袋をしたままの人差し指をハルに向ける。指先は血で汚れていたが、ハルはかろうじて笑顔を取り繕った。

初めて入る奥の『集中治療室』に案内してもらい、ハルは魔術師の少年のいる場所へと足を踏み入れた。

ハルは身じろぎして、入るのを躊躇した。

（何もない）

誰かを閉じ込めるかのように分厚く塗り固められた壁部屋の中央に白い寝台、銀色の細い柱から伸びる透明のチューブの数々。以上。

これが集中治療室にある全てのモノだった。白以外の色がない。整然をとおりこしてむしろ殺風景だった。集中治療室とは名ばかりで、御大層な電子機器だの管だのは、ない。二つの部屋のギャップに、ハルはくらくらしそうになった。

「さ、入って頂戴」

ハルはうなずいて、白い光に吸い込まれる様に足を前へ進ませた。治療室はフェララの自室ほど広くなかったので、少し寝台に近づけばすぐに、そこに横たわっている誰かが見えた。ハルはベッドの短い柵に手をかけて、クルアンの顔を覗き込んだ。

116　心も凍った

魔力過多の暴走によりギルド内戦闘を引き起こした張本人は、荒く呼吸をしてぐったり倒れていた。ベッドにいるのだから倒れているという表現はおかしいが、本当に疲れ果てた表情で、息をするのも大変そうだ。

「ありったけの魔力を使い果たして、今は安定してるわ」

かったるそうにビニール手袋をはずしながら、フェララは反対側の柵にどっかりと腰をおろした。

「クルアン、苦しそう」

「ひどい熱が出てね。勝者がクルアンとはいえ、スーサもああ見えて相当の実力者よ。お互い本気で戦ったのだから、体力は激減しているし、もともと魔力過多のせいで体調はよくなかったから、まあ当たり前の症状かしら」

手袋とエプロンを外し終えて床に放り投げると、フェララはいつものフェララになった。茶色の巻き毛に、きつく釣り上ったエメラルド色。フェララの緑色の瞳が、ハルの目を覗き込むと、まるで本物の宝石のように透き通って見えた。綺麗な目だと思った。やましいこと何もないと断言できそうな、自信に満ち溢れた目力、笑みを描いた力強い口元。

しかし、そこから吐き出された言葉は、予想外のものだった。

「……あなたに、隠していた事があるわ」

えっと驚愕の声をあげたハルが心の準備をすませるまでもなく、天才技術者は氷使いの病状について、すらすらと自己の持つ情報を語り始めた。

「クルアンはね、もう一つ病気を持っているの。正式名称はアウレナントクレイア」

「ウレタンとナンとグレイ？」

「ああ、名前は覚えなくていいわ。大事なのはこの事実にあなたが耐えられるかどうかという事。覚悟は」

ハルは柵を握った拳に力を込め、まっすぐフェララの目を見つめた。

「確認するまでもない様ね。隠してた自分が馬鹿みたい」

フェララは淡く笑みをもらし、視線をクルアンに移した。

「心の病気なの、クルアンはね。今までのオーバーランや体調不良の要因は、単に魔力の器から溢れ出した中身だけじゃなかった。ずたずたに切り裂かれた心だったのよ」

「こころ？」

「ええ。

クルアンは過去に何らかの事件に巻き込まれた可能性があるの。まあ、希少な氷使いである上に逆サイコメトリーなんて特殊能力を持っていたら、事件の一つや二つ、体験しても不思議はないわ。それ

が幼い事に起きた出来事だとしたら、目の前で繰り広げられる得体の知れない恐ろしさが、一生の傷になることもある」

フェララは腰を折って、投げ捨てた白いビニールを拾い上げた。

「そうして傷つきすぎたクルアンは、おそらく……何も感じなくなって行ったんだわ」

自分が何者なのか。今、どう思っているのか。自分の好きな物はどこにあるのか。本人が一番知っていなければならないことを、クルアンは無意識のうちに、心の奥底に閉じこめ、心を使うということができなくなってしまったのだという。

「クルアンって、ハクに似てると思った事、ない？」

ハルはハッとして、ハクの寝顔を見やった。テレジアの双子は先程からマスターが移動するたびずるずる引きずりまわされているにも関わらず、寝返りさえうたずに昏々と眠っている。その横顔は、あどけなく可愛いけれど、感情はまだ無い。無機質な視線は痛々しい程乾いていた。

ハルはクルアンを見た。顔をゆがめて、高い熱に必死に耐えているように見えた。青かった唇は、熱を帯びて紫色がかってきていた。過剰魔結晶を隠すための前髪が、額に当てられた濡れ布巾のせいで少しずれて、大きな雪の結晶が見えていた。

116　心も凍った（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

117　ハル、覚悟を迫られる

「前は、そうだったかもしれない。……あんまり表情変わんなかったから」

「でしょうね」

「でも今は少し違う気がする」

フェララは横目でハルを認めた。どこか試しているような色のまなざしだ。と、ふと視線がそらされた。

「さすが奇サイコメトリーの持ち主ね。相手の心の変化に敏感だわ」

言われている事の意味がよくわからずキョトンとした表情を見せるハルの手前、フェララは少々考え込むようなそぶりを見せた。

「確かに、今は少しずつ感情をそれと判る様になって来たわ。でも代償として、オーバーランが起こりやすくなったの」

「どういうこと？」

「オーバーランは、魔力或いは感情が高ぶることによって起きるわ。つまりオーバーランは、感情の自己制御ができなくなった結果としての形なの。」

今まで何も感じずに生きてきたクルアンの心が、とある理由で少しずつよみがえってきているというのだ。でも本人はまだ「感じる」

ということに免疫がないから、自分の心がどうなってしまったのかわからず混乱してしまうとのことだった。

ハルからしてみれば、正直信じられない話だった。自分が自分を理解できないなんて、それじゃあクルアンは一体今まで何を見てきたのだろう？

でも、フェララの言う事を疑う理由もなかった。

「自分の心が独り歩きして、本人はそれについていけてないの。そうして爆発した感情の塊が」

フェララは言葉を切り、患者の額においてあった手ぬぐいを裏返した。

「それがオーバーランの、正体……？」

フェララはにこりと笑った、

「ある程度お分かり頂けたようね。つまり彼の魔力の最盛期が終わったとて、心の病気が完治しないかぎり、半永久的に逆サイコメトリーは作動し続けるという事よ」

刹那、半永久という言葉がハルの胸に突き刺さった。

ハルは両手を握り、まぶたを閉じて息をついた。

寝台に倒れ込んでいるこの少年は、何も知らないまま眠り続けている。これから自分がどうなるのかもわからずに、ただただ、熱にうなされて闘っている。

闘ったとて、どうなるというわけでもないのに。

「それ、治らないの？」

「アウレナントクレイアを完治させる薬は今のところ無いわ。それに古大陸と新大陸じゃ、根本的に動植物のあり方が異なっているから、古大陸で生産可能だった精神薬がこっちでは作れない事もあるの。

薬以外の治療だと、そうね、長期的な目で見て行かなければならないわ。クルアンの心の傷がついた時期にもよるけれど、アルタが何も知らないという事は……新大陸の技術じゃ、完治には年単位の時間がかかるわよ」

「年単位！？」

身を乗り出したハルに、病人がいるからとフェララが諫言を挿んだ。

「そんなに長い間嫌な思い出に付きまとわれたら、ホントに戻れなくなっちゃうかもしれないよ」

ハルの心配の炎を、フェララの正論があっさりと消してきた。

「オーバーランは悪い物、つまり溢れた魔力への拒絶反応よ。熱と同じで、毒を出しきってしまえば元に戻るわ」

しかしハルの炎は正論をぶっかけられても、まだぷすぷすとくすぶっていた。

スーサとクルアンが面と向かって武器をふるった。あんなに仲良しだった二人が傷つけあわなければならないような事態を引き起こした現状は、理屈で消し去ることはできなかったのだ。

「ただ、オーバーランの期間が長くなるという事は有り得るでしょう。そうなれば、今まで通りの生活はできなくなるでしょうね」

両手をひらひらさせて解説を続けるフェララに、ハルは大きくため息をついて、再び眠っているクルアンの顔を覗き込み、考え込んだ。

（今まで通りの、生活か）

ハルはクルアンの「今まで」をまだよく知らない。これから何が変わっていくのか、何が加わり、失われていくのか。ハルには見当もつかなかった。

黙り込んでしまったテレジアサモナーに、ナイルカントは残酷な真実をつきつけた。

「長く続けば死ぬわ」

ハルが目を見開くと、エルフもどきの鋭い視線が直撃した。それでも目をそらすことはしなかった。先程覚悟を決めたばかりだというのに、ただ少しばかり胸が痛むからといって逃げてしまうような人間にはなりたくなかった。

フェララはハルを睨みつけたまま、言の葉を織った。

「だからあなたには、奇サイコメトリーを持ったあなたには、彼を守る使命がある。あなたがそばにいて、逆サイコメトリーを特殊能力で吸収してくれれば再起不能を免れる事ができるの。だから」

フェララの手が、ハルの両手を握りしめた。

「覚悟を決めて。この先ずっと、この子と一緒に生きて行く覚悟を」

フェララの瞳は、真剣さに光っていた。

医師としての使命に満ち溢れた目だった。

１１７　ハル、覚悟を迫られる（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
更新がスローペースになってきて・・・アセアセ・・・。

少し長くなりました。

１１８　一瞬だけの女神像

「もう寝なさい。そこのスペース、ハルのだから」

フェララは浅い呼吸をしているクルアンの隣の白い空間を指差して、それからふとハルの足元を見やった。ハルもつられて下に目を向ければ、テレジアの二人がからみあうように抱き合って深い眠りに入っていた。ハクが寒がったらしく、姉であるミウタは弟に自分の赤いぼろを余してかけてやっていたので、すその方がはだけて、旅の途中にハルが買って着せた下着が見えてしまっているのを、フェララがかがんでそっと直してくれた。

「あ、ありがとう」

ハルが礼を言うと、

「どうしたしまして」

フェララは安堵したような面持ちで言葉を返し、クルアンの額をどこかもの寂しげな手つきでなでた。美しく整った横顔に軽くかかった巻き毛が、細々とした電球の力に照らされて一瞬女神の髪みたいに白く輝いた。

美しさに、ハルは数秒息を呑んでしまうほどだった。

一瞬だけの女神像だった。やけに麗しく、優しく見えた。

フェララは凛と背を伸ばし、

「それじゃ、私も休むわ。ハルの布団、代わりに借りるわね」

手をひらひらさせながら、ゆうゆうとした態度で部屋から去っていった。

部屋に飛び交っていた会話が途絶えると、荒い息遣いが耳に入ってきた。

クルアンの半開きになった口から吐き出される息は、いつも一緒に寝ているときよりだいぶ温度が上がっている。フェララ曰く氷使いの平熱は１０℃、今は１７℃で、お世辞にも右から流れてくる吐息が冷たくなくなったと言えば嘘になるが、いつもよりだいぶあたたかくなってしまっているのはすぐにわかった。

電気を消して同じ布団にもぐりこんだハルは、クルアンと違って夜目なんて利かないくせに、苦しげに眠り続けている氷のウィザードに視線を注がずにはいられなかった。

（大丈夫……なのかな）

なんてったって平熱から7℃もあがっているのだ。相当体はだるいに違いない。仲間が苦しんでいるのに、ハルができることといえばせいぜい傍について手を握ってあげることくらいだった。手を握ってほかに何かできるものはないかと思案しているうちに、ハルの脳内にふといつかの声がよぎった。

「同情なんかいらない。ただ俺は……誰かと一緒に……」

誰かと一緒にいたいんだ、と叫んでいた。クルアン本人でさえ気づいていないような大きな響きを持つ願いを、フェララはしっかり

と見抜いてハルに託してくれたのだ。正直クルアンとはあまり打ち解けた記憶はない。奇サイコメトリーがなければ相変わらず何を考えているのかよくわからないし、青い瞳も唇も、未だ語りかけてくる気配は少ない。でも傍にいるというたったそれだけのことが過剰魔の少年にとっては大きな意味を持ち、その役目を自分が果たすことでいくらか「恩返し」ができると思うと、どこか嬉しい気持ちもあった。

テロリストが最終兵器を炸裂させたときハルと双子の身体を吹っ飛ばしたのは、爆風ではなく、もう一人の危険人物の援護魔法だった。あの日御世話になった運び屋の青年ゼストがその様子を上空から見ていたという。クルアンは爆発直前にハルの服に氷の刃の先端を引っ掛け、敵の武器から遠ざけてくれたのだ。もしハルが単独で最前衛に乗り込んでいたら、運悪く死んでいたかもしれない。

（命の恩人……だよね）

クルアンはハルに何も告げなかったからお礼を言うタイミングを逃してしまっていたけれど、こうした形でお返しができるのならそれでよかった。

ハルは、握り返してこない氷の片手の分まできゅっと右手に力を込め、秒針の代わりに聞こえてくる吐息に自分の呼吸をあずけた。

ここにいるよ

明かされる真実は、
ときに幾人かを「そこ」へと誘う。

其処がただの場所なのか
奈落の果ての底なのか

足を踏み入れずに知るすべはあるのだろうか。

もし君がそれを知っているなら、
どうか僕に教えてほしい。

心を失くしたと思い込んでいる、
もう一人の冷たい僕に。

自分で確かめるのをどこかで怖がっている、僕のために。

最近、胸が痛む。

外傷的なものではない。

内面からつかまれるような、鈍い痛み。

痛みというにも足らない感触。

あの感覚は、一体何なのだろう。

ここにいるよ（後書き）

明日が体育祭なのです。超特急で寝るのです・・・。
体育祭明けには試合が控えているので、試合が終わったらもう少し長く投稿できるかな、とおもってます。
お待たせしてすみません。

119　緑のてのひら

ぼくはテーブルの前にしゃがんで、突き出した掌が肌色になっていくのをぼうっと見つめていた。クリスタル色のスプーンが手際よく動かされて、緑色がぐんぐん落とされていく。

掌にべっとりとついた緑色の粉末を、母さんにスプーンでそぎ落としてもらっているところだった。

「お母さんの作っているものに触ってはだめだと、あれほど言っていたでしょ？　ココはちゃんと守っているのに」

お説教を受けて、ぼくは黙ることしかできなかった。

洗っても落ちないというその粉末は、木製のテーブルに描かれた麻法陣の周囲に、雑草がはびこっているかのように点々と散っていた。母さんが魔術で作った薬草を基礎魔法で粉々にしたものだったらしい。

母さんと違って料理の得意な父さんが、ココのお洋服の買い物に付き合って留守にしているから、いつもなら夕飯が出ている時間なのに仕上がっていなかった。お腹が鳴った瞬間に目の前で粉々になった草からかぼちゃクッキーに似たいいにおいがしてきたからつい手を出してしまった結果がこれだ。

粘り気のある薬草はぼくがいじっているうちにしっかりと僕の両手の平にしがみついて落ちなくなってしまった。仕方なく洗い流そうと洗面所に行こうとしたところを、御風呂掃除をしていた母さんに見つかって引き戻されたというわけだ。

「はい、取れました。もういたずらしてはだめよ」

頭をこづかれて、ぼくは照れ臭くなって自由になった両手で三角帽子を思いっきり目深にかぶった。つばだけちょこっとあげて母さんの方を覗き見たら、青い唇が淡く笑っていたので余計に恥ずかしくなった。

もう七歳なのに、変なとこに手、出しちゃうから。

トシゴのココの方がしっかりしてるって、この前気づいたばっかりなのにまたやっちゃった。

ぼくがまだ始めてない「お勉強」を、ココはもう中学校に行けるくらいのところまで進んでいる。御片づけも大体ぼくが散らかしっぱなしなのをココがさっさと済ませてく。ココは何につけても完璧だ。ぼくの妹とは到底思えない。

髪の色だってココは綺麗な金髪なのに、ぼくのはくすんだ銀色だ。氷の魔法使いのこどもなんだから、銀の髪が生まれる事もあるって母さんはいってたけど、大体母さんは黒髪だからいいじゃないかって何度か喧嘩した。ココの髪の色がきれいで、おひさまがあたると黄金色に輝くのが眩しくて、うらやましかった。

「そろそろココが帰ってくるから、あの子に夕飯を作ってもらうとして、あなたは先に御風呂に入っていて。もうわいた筈だから」

母さんはぼくの頭をなでようとしたのか、とんがり帽子の先っぽをちょんとつまんで引っ張ったようだった。ぼくは髪を人にみられるのが恥ずかしいから慌ててつばを両手でぐいっと引き下ろすと目

の前が真っ暗になった。

黒く染まった視界に、突然何かをぶち破ったような轟音が鼓膜をつんざいた。

それから、それから、いっぱいの人が入ってきて、ぼくたちは追いつめられて、それから、えっと……えっと……

119　緑のてのひら（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

１２０　神秘と謳われる狂気

ハルはざらざらした床の上に手をついてしゃがんでいた。

のしかかるような頭痛で、うまくまぶたが開けられない。背中は焦がされたかのようにじりじりと鈍くうずき、喉は声が出せないほど枯れ切っている。全身は抑制が効かないほどの勢いで震え、思うように動かせなかった。

縄も枷もないというのに、心身の自由を全く奪われた状態でハルはうずくまっていたのだった。

（ええと……何があったんだっけ）

確かに大事が起こったのは間違いないだろう。ハルが様子を窺おうと薄目を開けると、糸のように細い視線から赤い色がぼんやりと浮かび上がってきた。更に目を凝らそうとして、ハルは突然身を硬くして、本当に動けなくなった。

是以上目の前に広がる光景をみてはいけないという本能からの警告が鳴り響くと同時に、確かめなければならないという義務感のようなものが血の匂いとなって鼻をついた。聴覚と嗅覚がちぐはぐに動いて、平衡感覚が乱されたのか、急に身体がぐらりと前に倒れた。

手をつく暇もなく、顔からつんのめるように赤い液体に突っ込んで、ハルは思いっきり咳こんだ。ひどく嫌な……うまく説明できないけれど、吐き気のするような鉄混じりの匂いがした。

どこかで嗅いだ覚えのある匂いだ。と気づいた瞬間に、ハルは厳しく叩きつけるような声を聞いた。

「さあ、こっちへおいで！」

顔を上げたハルの数ミリの視線に映ったのは、差しのべられた片手だった。誰かがハルの手を取って、抱き起そうとしてくれている。それなのにハルはどうしてか、その手に応じる気になれなかった。ハルは自力で血だまりから起き上がり、後ずさりした。

血だまり？

ハルはハッとして、顔に手をやった。掌がぬるっとすべって、目の前に映った。

血だ。察した瞬間に、ハルの記憶が前触れもなくよみがえってきた。

「あ、あ」

金色のワンドから零れていた砂も、耳元から垂れている液体の正体も、手を差し伸べている、母さんそっくりの服装をした女の人が今まで自分を追いつめてきた人々の仲間だということ、息絶え絶えになった母親にすっぽり包まれてしまうほどの小さな身体には莫大すぎる量の記憶がまたたく間に喉の奥からせりあがってきた。

「ちょっと、あんたどうしたの？」

目の前でひらひらと掌を振られて、ハルの視界が一気にゆがんだ。

「だめ……殺しちゃだめだ……」

「え？」

視界が煙り、喉元から突き上げてきた聲が急激に喉を貫いた。

ハルの絶叫に、女の人はうろたえたような気配の後飛び退った。女の人が戻った場所には、今ただの血だまりと化してしまったヒトが闘っていた数人の大人の影があった。

（仲間だ）

「アークルーンはそれでこそ！異端でいいのだ。狂っている人間ほど神秘的なものはない。本能に忠実にうごめき、我々と共に主の糧となるのだ！」

耳障りな男の声をかき消すように、ハルは泣き叫び続けた。

どこかで爆発のような音が聞こえて、人影が消え、つられるかのようにまぶたが閉じる。

（いつもの夢と違う）

意識を失う直前に、ハルは自分の口がそう呟いた気がした。

１２０　神秘と謳われる狂気（後書き）

更新遅れましてすみません。

試験二週間前になりました。

私立大学文系希望者もどうやら因数定理から逃れるすべはないようです。

１２１　ハル、飛び出したハムを救出する

「ぜ、全員出動！？」

ハルとスーサが食卓から身を乗り出すのを、アルタが御手製のサンドイッチを口に押し込みながら無理矢理座らせた。

「市長直々の依頼なの」

眉根を寄せて溜息をつくギルドマスターの傍ら、ハルとスーサは顔を見合わせた。とたんにスーサの方のサンドイッチのハムがぺろりと落っこちて、ハルは吹き出しそうになるのを必死にこらえた。

「ちょっと、私が挟んだハムなんだからね。単体で食べないでよ」

真っ赤に塗った爪の人差し指に釘をさされてスーサがしぶしぶパンを開く。ハルも若干飛び出し気味になっていた、フェララの挟んだレタスを挿み直しながら、アルタが一風変わった依頼内容を読み上げるのを聞いていた。

「依頼主はカルマツェーダ大陸国王の側近、セーン市長のチャールズ・スミス」

「まあよくある名前ですこと」

ミルクティーをすすりながらフェララが苦々しい表情で茶々を入れた。

「依頼内容はセーン広場にギルドメンバー全員が集結すること、追加の仕事は後ほど言い渡す、だそうよ」

「追加前提なわけね」

フェララの声色は明らかに噛みついていた。噛みつく相手を間違えてはいたものの、恐らく朝食に集まったメンバーはハルも含めて同じ不安を抱いていた。

ギルド・レグルス一の技術者、フェララの個室の奥にある集中医療室で眠り続けている少年のことだ。

「クルアンはどうするの？」

『魔力過多』と『心の病気』で暴走を起こしたクルアンは、昨日、自分の魔法で背中を一直線に深く大怪我をしていて、とても広場まで移動できる状態ではない。おまけに体力低下のせいで平熱プラス七℃の高熱も出していて、未だ一度も目を覚ましていなかった。

しかしアルタはいつも以上に甘ったるい紅茶の入ったティーカップに角砂糖を三つほど追加しながら首を振り、依頼書を食卓に置いてとある一文を指し示した。ハルは朝食を一気にのみ込んで、金で縁どりされた大きな電子式のカルマツェーダ文字を解読した。

「集合できない場合、そのギルドは大陸国への忠誠を破ったものとみなし、解散を命令する」

「事情を話せばいいんじゃないかな」

ハルの率直な回答に畳みかけるように、スーサも

「病人を無理に来させるなんて、市長はそんなことしないよね？」

「いいえ、彼の言うことは絶対だわ」

きついエメラルド色のつり目に、三人の視線があつまる。お気に入りらしくよく付けている、雫の形のイヤリングを揺らしながら、フェララは片手をひらひらさせた。

「いくつもの郡や村から多額の税金を巻きあげてきた前カルレ市の市長よ。ハルも知ってるでしょ、初依頼の時に行ったあの村」

同意を求められた瞬間に、いつかテレジアの双子が屠った少女の笑顔が脳裏をよぎった。ハルは胸が締め付けられるような思いが皆にバレないように淡々とした表情を努めて話の続きを聞いていた。

（マリアが死んだこと、私しか知らないんだよね……）

得体の知れない罪悪感を心にまとったまま、ハルはクルアンを起こす役を頼まれ、真っ白な枕元に立っていた。

122　＝アークルーン

通り過ぎてきた部屋は、相変わらず包帯があちこちほったらかしにされていて、床が怪我してしまったみたいになっていた。一つ前の個室と裏腹に、気味が悪い程整然とした医療室の真っ白な寝台には、同じく色の無い寝間着を着させられたクルアンが横たわっている。

見渡す限りのホワイト。でも今のハルにとって、その光景は決して殺風景ではなかった。むしろいろんな物が詰まっている気がした……自分が一番欲しがっているものが。

「マリアがいなくなったの」

就寝時間が遅かったせいでテレジアの双子が眠っているのをいいことに、ハルはつっかえていたものを吐き出して、荒い息の病人が苦しそうに掴んでいる薄手の布団の脇を握った。クルアンは片目をきつく閉じたままだ。

「機関銃の子を殺したのは、ミウタなの」

とどめを刺したのは、ハルの護身用パペットではない。ミウタの片手の平だ。だから、命を奪ったのはハルではない。

「でも、そんなの」

ただの屁理屈だ。ハルは自嘲した。

本当はどこかでわかっていたのだろう、自分は事実から目をそらし、ミウタに都合のいい罪を御ッ着せて逃げていただけだということを。

「ずるいんだ。クルアンだって勝つために魔術師の御婆さんを殺したのに、私は自分の手が触れていないから汚れていないと思い込みたかったんだ」

もうごちゃごちゃでわかんない。弱いんだ、私って。

口の中で呟いて、ハルは陽の光が差し込む四角な小窓を見やり、それから朝日に照らされて輝いているクルアンの短髪に目をやった。きれいな銀色だと思った。

昨晩見た、新しい夢。あの『母さん』を殺した人間に、大きな掌を差し伸べられた子供が誰なのか、ハルはもうわかっていた。

あれは今、自分が見ている少年の過去を物語る壮絶な悪夢だ。目の前で熱にうなされている氷の魔術師の母親が殺されて、今もその記憶にさいなまれ続けている。

誰かにとっては母を殺してでも手に入れたい御宝だ。クルアンはまさしく、得体の知れない『アークルーン』とやらなのだろう。

ハルは手を伸ばして、そっと寝顔に触れた。熱でほてった頬はハルの冷え性の指先と同じくらい温かい。体温を肌で感じると、氷使いにある筈のない温もりに似た何かが、心髄にしみこむような感覚がした。

「嘘も隠し事も、私が一番嫌いなものだった。だから本当はしたくないよ」

目に染みいるような純白の空間に、嘘は似合わない。相変わらず仲間を信じる事ができず、自分をだましている人間はこの清楚な空間にいちゃいけない。そんな気がした。

『……そうだな』

低く短い一言に、ハルは思わず飛び上がって後ずさりした。

（お、起きてた！　聞かれてた！？）

「そんなに言うなら起きるから足をどけろハル」

二人目の介入に、ハルはさらにぎょっとして足元を振り返った。ハルの片足の下敷きにされたミウタの顔が、虚ろな眼だけこちらに動かしてじっとマスターを見つめている。ハルはいよいよ心臓がひっくり返った。

「ご、ごめん、踏んじゃった」

慌てふためいて足をどかし、もともと痩せこけている上に赤いあとがついてしまったミウタのほっぺたをさすりつつ、ハルは自分に語りかけてきた声の主に振り返って、様子をうかがった。

122　＝アークルーン（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

１２３　スーサ、カエルに八つ当たりする

目を覚ましている気配は、無い。両目は固く閉ざされ、ただ半開きになった口から漏れる締め付けられるような息遣いが、胸元を動かしているばかりだった。

「今日はハルの方が早いぞ」

ミウタの台詞はたまに肝心な単語が抜け落ちている。

「寝てる……よね。」

ミウタは首の骨をこきりとならしながらマスターに同意する仕草を見せた。

昏々と眠っている少年の傍ら、ハルは己の片手に目をやった。逆サイコメトリーの持ち主に触れていたこの右手が、想いを受け取ったのだろうか。胸中に優しくこだまする、凛と澄んだ、しかしどこか穏やかな色を灯した短い一言。いつもの冷たい眼をしたクルアンの雰囲気とは、少し違った。

（今のは、誰の言葉だったんだろう）

そんなこと、わかっているはずだった。なのにハルは疑わずには居られなかった。

（だって、それじゃあクルアンは……寝言を言ったことになる訳で）

クルアンに寝言というのは何とも似合わない。間抜けすぎる。ハルが不意にこみ上げてくる笑いに対抗していると、

「ハル、まだー？」

ばたばたとスーサの足音が廊下から響いてくるのをきいて、ハルは慌ててクルアンを起こしにかかった。

「そーっと起こしてよ。しっかり起こしてよ」

「どっち！？」

フェララって、たまに逆の事を同時に要求してくる。

なんだかんだで結局、クルアンの起床の手助けをアルタにまかせ、ハルとスーサはフェララの身支度を手伝う事になった。異常に多い荷物にぶつくさ言いながらもせっせと医療器具やら非常灯やらを詰め込むスーサに次々と用意された品々を渡しながら、ハルはたまたま手に取った物がカエルのホルマリン漬けだったことに気づいて危うく取り落としかけた。

「国が秘密依頼を出しているのよ、何が起こるか分からないでしょう。とんでもないものが動くかもしれない……恐らく相手の目的は」

「どこでこれらを使うのか説明してよ」

仏頂面のスーサが、用途不明のホルマリン漬けをじゃぶじゃぶ振り出したのを、若干離れてミウタが物珍しそうに眺めていた。

x　＋　x　＋　x　＋　x　＋

心地よい。人の肌のぬくもりが、全身を包み込んでいる。

でも、今は少し暑いかもしれない。体中が熱でじんじんしている。胴にまかれた包帯が、寝汗でぬれて素肌に張り付いてるのを、涼やかな風がさらっていくと、首から下だけが妙に寒かった。

俺のものとも誰のものともつかない、心臓の鼓動が耳元に聞こえた。鼻先に、春の匂いがかすかにして、そのせいなのか何なのか、身体中の力が抜けて行く。

目を開けようとしたが、諦めた。その程度の気力もわかなかったし、眩しいのは苦手だから。

その代わりに、手探りで誰かの肩につかまって、この温かな柔らかさを逃したくないと、願った。

x　＋　x　＋　x　＋　x　＋

１２３　スーサ、カエルに八つ当たりする（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
定期試験が迫ってまいりました死にかけています。

１２４　多忙なるギルドメンバー

懐かしい船だ。ハルは続々とギルドの人達が乗り込んでくる光景を眺めながら、思わず顔がほころんだ。

一月前に初めて乗船したギルドメンバー専用輸送帆船は、当時よりはるかに多い人数が乗り合わせていた。皆同じような依頼を受けているらしく、警戒のためか様々な武器の手入れに力を入れていた。スーサは先程から得意の錬金術を使って金物の修理に飛び回り、小銭をちょこまか溜めてはにこにこしながらハルに見せに来てくれた。

波の音にまぎれてよく聞こえないけれど、アルタはどこかで怪我人の無償治癒にあたっているらしい。

船の先端の方には大きな人だかりができているが、あの正体は世紀の鬼才と呼ばれた女流画伯のサインをもらおうと詰めかけた他のギルドの人達だ。あんなに大勢のファンがいるとは知らなかった。

「すごいね！半年前よりファンが増えてる」

もう五回目ほどになる集金結果報告をハルは笑って受け取った。スーサの顔は汗と、瞳に映る晴天の海原できらきらだ。両親からもらったという黒いゴーグルが、海風になびく短髪によく似合っている。

（それに比べて）

ハルはフェララが『気が向いたから一夜で作った』という高級黒

革の鞄の小さなポケットに小さな錬金術師の報酬をすべりこませながら、自分の巨大な尻尾を一瞥した。

《ギルドも多様化したものだな》

大人数が船に乗り合わせるのがそんなに珍しかったのか、久々に表に出てきたテレジアの声の奇抜さは相変わらず周囲の視線をバンバン集めている。注目を浴びている事に本人は気に触っていないのか、死んだ魚の様なミウタの目を動かして頭上を飛び交う海鳥の羽根を払いのけもせずぼうっと眺めていた。

（言ってることとやってることがズレてる気がする）

いつものことと割り切ってしまえばそれまでだが、テレジアが出るとミウタの身体から染み出てくるいわゆる負のオーラが異常に濃く感じられる。反動で、隣でいつも姉にいじられてばかりのハクが地味に現世に馴染んで見えた。もっとも着物の質が大分違うせいで、常日頃から赤い襤褸は非常によく目に付いたが。

尻尾の双子は、物を持たせたり、着せたりすることはできるが、生前身に着けていた物を現世に生きる人間が剥ぐことはできない。テレジアに言わせれば、テレジアの影の衣服は生物での皮膚に値するほど重要で、マスターでさえ取り除く事は許されない神秘の物ということだった。実際問題、まだミウタが影として実体化して間もない事、感情など無いに等しい状態だったのに、道行く人の目が気になるから自分の着替えを使ってほしいとミウタに頼んでみたら、なんと眉間にしわを寄せて、赤い着物のほとんど破けてしまっている襟もとを両手で押さえ、その一日中髪の毛一本たりとも触らせてくれなかった。当時まだハクとは出会っていなくて、ハル自身ミウ

タと大差ない年齢だったため、無償に心細かった覚えがある。

対してハクは、白と黒の浴衣を小奇麗に着こなしている。ぱりっと糊のついた小袖、全く汚れていない裾の黒い桜文様。艶のある黒髪は前髪と肩までの長さですっぱりと切られている。

ハクの方が明らかに、なんというか、潤った生活をしていた気がある。それ故光を宿さない曇った瞳が浮いて見えた。

まじまじと眺めていると、ふとこちらを見やったミウタと目があった。

「退屈かハル」

突然尋ねられて、ハルは少々面食らった。ずっと考え事をしていたから、活動中のメンバーの中で一人だけ仕事をしていないことを忘れていたのだ。ハルは柔らかい笑顔を作った。

１２４　多忙なるギルドメンバー（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

１２５　ミウタとハク、ハルに尋ねごとをする

「ちょっとだけ。でも、二人がいるから寂しくないよ」

「ハルはミウタもハクも大嫌いだと言っていた」

思いがけない言葉で切り返され、ハルは一瞬目の前が真っ白になった気がした。しばしぼうっとしている間に戻ってきた景色の彩りの中、床板のくすんだ茶に視線を落とす。

（覚えてたんだ）

当たり前だよね、覚えてるよね。

だって三人はいつも一緒だったから。

冬の旅の間、ハルが野宿のための場所を決めると、ミウタはいつもハクの頭をぐいっと押して頷かせながら自分も同じ動作をした。雨上がりの土の上だって、雪崩の近い雪山だって、決して嫌だとはいわなかった。年は十に届かないほどのミウタにとって、寒い野宿はつらかったろうに、嫌な顔一つせず、黙々とハルについてきてくれた。ハルがさむがったら、ミウタとハクがするすると近寄ってぴったりくっついてくれた。死人とは思えないほど、あたたかい体だった。ハルが風邪をひいたら、代わりに薬を探そうとしてくれた（事情を聞いたカルマツェーダの治癒師が無償で回復させてくれた）。

ミウタもハクも小さな身体で精いっぱいハルのために動いてくれていたのに、ハルは二人をつき放してしまった。

カルマツェーダ大陸国に到着してすぐのころのことだった。通行人にたまたまハクの手が当たってしまい、半殺しにしてしまった時、ハルは何も言わずその場から逃げた。あとからおそってきた身を切られるような自責の念がいつの間にか怒りに変って、ミウタとハクに理不尽で辛辣な八つ当たりをしてしまったことがあった。ハルの怒りがテレジアと癒着しかけたのを悟った影の双子は、自らを封印してしまったのだ。そしてつい最近まで、ハルは封じらた尻尾さえも、人目につかないよう黒いコートに閉じ込めていた。

（怒っているよね）

すっかり落ち込んで肩を落としたハルに、もう一つの声がかかった。

「でも、ハル、たあ、すけてて、った」

たどたどしい一文に、ハルはハッとして顔を上げ、のけぞった。

ハクの乾いた瞳が、これでもかというほどズームインしてこちらを見ていた。鼻先をくっつけるようにされて、思わず

「顔近っ！」

両肩にがっちりと食い込んだ（どうやら力加減がわからなかったようだ）ハクの爪を引っぺがして、船板に座らせた。ちょこんと正座したハクの隣で、ミウタが

「本物のハルはどっちだ」

クイズ番組のように尋ねてきたので、真剣な問いかけだというのについい笑いが漏れた。

「……助けて、って言った方」

答えたあと、笑みが強張った。

最悪だ。今、都合のいい事を言った。

「そうか。今のハルが本当らしいぞハク」

ミウタは淡々とハクに教えてやり、頭を乱暴にたたいた。

卑怯ながら、二人の感情が薄くてよかったとハルはほっとした。

この答えが正しい答えじゃないことくらいわかっている。自分が勝手で卑劣だということも。

でも少しくらい、二人の優しさに甘えてもいいんじゃないかと思う。三人は同じ脳で通じ合っているのだから。

（わがままかな）

ハルは一人で、わがままでもいいと、なぜかそう思った。

ほっとしてしまうと、何だかとても眠くなってきた。もともと船の揺れとウミネコのニャニャー声、更に雲ひとつない晴天の温かな日差しに、眠気をそそられていた所だったのだ。

（広場まで一日はかかるし、別に寝てても大丈夫かな）

片手で膝をかかえなおして寝る体勢を取ろうとして、ふとハルは、頭上が暗くなった気がして顔をあげた。

１２５　ミウタとハク、ハルに尋ねごとをする（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
来週の火曜日から試験のようです。

次回の更新は日曜日になります。

私と彼女

「主様」

呼ばれて私は、零れる笑みを隠すことなく振り向いた。

「報告を……レグルス一行、アークルーン、テレジアサモナーも無事乗船したとのことであります」

「さがってちょうだい」

大臣だったか将軍だったか、とにかく使いの者を適当にあしらい、私はもらいものの赤いソファに腰を下ろした。

顔じゅうに笑いが広がる。きっとみっともない顔をしているに違いない。そもそも国王が趣味で集めていたアンティークものの家具を全てズダズタに刻みつけたあたりから、全く悪趣味な女王様だ……が、それもまたよいという気がしてくる。

「素敵なブラッディ・パーティーの始まりね。あなたもそう思うでしょ」

語りかけると大きな尻尾がかちゃかちゃと長いかぎづめを鳴らして咆哮した。

「嬉しい？　私もよ」

汚らしく黄ばんだその子の唇からしゅうしゅうと歓喜の音が漏れ、

喜びの念がそれとなく私の脳にも通じて届いてきた。

カルマツェーダ大陸国を乗っ取って、思うがままに動かしてきた。

最近はお互い調子が良くて指令を出す私も従う彼女も少しずつだけど計画に関与する成果をあげている。特にあの拠点を襲撃した時は色々と大収穫だった。

まあ当たり前といえば当たり前、私達は以心伝心の完璧な存在なのだから。

「でも、パーティーなんてまだまだ序盤よ」

さて、もっと仕事してもらわなくちゃ。

お得意料理のバニラのホットトリュフのレシピをちらつかせて、私は黄金の歯を持つ自分の尻尾に出来る限り柔和な表情と声色でそっと指令を出した。

「トトガーナ辺りで十分。あなたならできるわよねぇ？」

彼女はご自慢の真黒な翼を二三回羽ばたかせて、不格好に小さい、口だけの頭を頷かせた。

「いい子」

私は最早化け物以外に何と呼べばいいのかわからない容姿をしたソレの、毛の生えていない頭をなぜた。

世界で一番奇形で一番愛すべき子の頭を愛でて愛でて、愛でて愛

でてあの子への憎しみを植え付けて、押しつけて抉って散りばめて
対象物の自我を完璧に消し去れるまで私のあの子への憎しみをこの
子が共感し洗脳され共にあの子を殺したいと思うまで撫でて撫でて
強くなでまわしてそうして私は私は私は私は私達は二人は

――悪魔にナッタ。

私と彼女（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
描写が素人なのですが・・・わかっていただけたらいいな、と。。

126　ハル、おでこを隠す

「よっ」

出会いがしらにデコピンをくらって、ハルはやられた後だというのに慌てて額を覆った。その様子を見ていた相手がぷっと吹き出す。

「やられた後におでこ隠したってしょうがないじゃん」

相変わらずだなー、と笑いこける青年の手前、ハルは頬をふくらませて、

「ゼストの方が相変わらずだよ！」

「やあ、うとうとしてたからさ、ついついこう、いじりたくなっちゃうんだよねー。なんでかな」

「なんでかなって……」

くしゃくしゃっといかつい掌で髪を撫でてくる。運び屋のゼストは仕事でもしていたのか、汗だくになっているらしく濡れた顔をくしゃっと笑わせた。

「久しぶり」

「うん」

ハルが笑いかけると、ゼストは小さな子供に話しかけるみたいに

かがみこんでハルの目を見、またにっと白い歯を見せた。

ゼストはテロリスト討伐依頼の時、ハルを運んでくれた『運び屋』だ。フェララ曰く運び屋は、空を飛んで人や物をあちこちに運搬する仕事をしている。生まれつき生えている翼は風に非常に強く、たいていの強風にははむかっていけるほど強靭（強靭の意味を理解するのに数分かかった）だ。

飛行に必須の翼は、目の前の青年の背後で太陽の光を受け、純白に輝いて海風にゆっくりと動いている。

制服なのか、初対面の時と同じ白いズボンをはいている。裾が広くなっていて、やや強くなってきた海風にぱたぱたとあおられて青いラインが揺らいだ。

左胸に鳥の形のワッペンがついた上着の肩にあけられた丸い穴から、下のシャツに刺繍されたらしい楕円形の赤い何か（火の粉が散っている太陽に見える）のシンボルマークがわれを見よとばかりに誇らしげに顔を出している。運び屋のしるしなのだろうか、とハルが問いかけようとしたとき、ほどよく日に焼けてしっかりとした指先が、何かよくない方向に伸びた。

「君たちもレグルスのメンバーなの？」

ゼストがにこりと笑いかけた視線の先を辿ると、ちょうどほっぺたをつつかれようとしているミウタと目が合った。

（あ、危ない）

触ったら……！

不意にミウタがハクの手をつれて、ハルの背中と船のへりの間に隠れてしまった。きょとんとしたゼストの手前、双子は何事なかったかのようにてんでばらばらの方向を見上げている。ウミネコ達がハルたちをからかうみたいに姦しくなきたてて、それからちょうど大きな荷物の包みをかかえて歩いていたいかめしい顔つきをした中年の男性から、（少なくともてっぺんの光り輝く頭にとっては）大事な毛髪を一本失敬して帆と帆の間に姿を隠した。

「えーっと、俺、悪いことしちゃった？」

まゆじりを下げてハルの後ろからはみ出た少女の着物のすそを見やりながらゼストが言ったので、ハルは気を悪くしないように、人見知りだから、とだけ言っておいた。ゼストはそれで納得したようだった。

咄嗟に指令を出して、ミウタにあの行動をとらせたということは言わないでおいた。

運び屋の青年は興味津津といった風に珍しそうにミウタを眺め、ふとその後ろに目をやった。ハルもつられて同じ視線の方向に振り向く、

「もう一人誰かいる？」

「うん。この子はハクっていうの。二人は双子なんだよ」

ハルが背中を指差すと、ゼストはまばたきして

「違う違う、そっち」

指差されたほうを見て、ハルは初めてクルアンの存在を思い出した。

１２６　ハル、おでこを隠す（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

明後日から試験っていう笑える展開です

否、笑えない。橘とからたちの違いを覚えようと必死です。

１２７　氷使いも発熱します。

帆船の柱の陰にもたれかかるようにして、外着に着替えたクルアンが寝かせられていた。よほど深い眠りなのか、船に乗りこんで早三時間ずっと手を握っていたというのに、何の声も映像も流れ込んでこない。あんまりに静かだったから、ついいることすら忘れてしまっていたのである。

「クルアンだよ。ギルドのメンバーなの」

ごく簡単に紹介して、本人が見えるように少し横に退くと、ゼストは帆の影になっている一角に首を突っ込むようにして、目を覚ます気配の無い魔法使いの少年の顔を見ていた。ハクが広げっぱなしになっているゼストの厚みのある翼を顔の前からどけようとやや雑に払いのけたが、ゼストは気づかないようだった。ただ少々曇りかけた面持ちでしゃがみ込み、荒い呼吸の主をじっと食い入るように見つめている。

「……普通に寝てるわけじゃねーな」

おもむろに口を利いたゼストに、ハルはうなずくしかなかった。

「高い熱があって」

フェララとアルタの看病の甲斐あって、クルアンの体温は一、二度下がっていた。それでも身体にひどくこたえる熱であることにかわりはなかった。昨日ほどではないもののまだ少し息は浅い音が目立ち、ときたま思い出したようにせき込むのであった。

「氷のウィザードも発熱すんだ。知らなかった」

ゼストはハルの話に興味を示したようで、それからあとからぽんぽんと質問が転がり出てくるのを、ハルは内心大慌てして投げかけられた問いを一つ一つ拾い上げて行った。

氷のウィザードにとっては、何度くらいから熱と呼ぶのか。

いつ頃から続いているのか。

今いくつくらい？　どうして出てこられたの？　他のメンバーも来てるんだ……

「あれだ、参謀担当のフェララさんって、確かレグルスだったよな」

「そうだよ」

（やっぱり有名なんだ）

どこか楽しそうに話す運び屋の青年によると、フェララは『運び屋ギルド』のなかでも、飛びぬけて話題に上がる回数の多い技術者・芸術家なのだそうだ。

（そりゃそうだよね）

ハルは今になっても姿の見えない天才エルフの人気すぎる苦悩を思いやって内心苦笑いした。

有名になりすぎるというのも、案外大変かもしれない。その点、

忌み嫌われないようにひっそりと生きてきた日陰者の自分は、フェララみたいな目立つ人より楽……だったのだろうか。

女性画伯のサインを求めて集った人々が最早楕円とも言えないなんともいびつな輪を作っているのをぼんやり眺めていると、後ろからぱたぱたと急いている風をまとった足音が近づいてくる。

「ハル、はい！」

どこかはしゃいだような声にハルが振り返ると、汗で前髪が額にはりついてしまったスーサの笑顔が誇らしげに手の内の硬貨を広げて立っていた。

１２７　氷使いも発熱します。（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
だんだん貯蓄が減ってきたので頑張って書きます！

128　スズランと眠気。

どこかはしゃいだような声にハルが振り返ると、汗で前髪が額にはりついてしまったスーサの笑顔が誇らしげに手の内の硬貨を広げて立っていた。

「ありがとう」

もう六・七回は届けに来ているというのに、一体いくつの修理依頼を請け負ったのだろうか。元々この謎に包まれた国家依頼に招かれているギルドの数が半端ではないから、スーサは錬金術の武器修理、フェララは行く先々で勃発する果てしない握手&サイン会とおちおち病人であるクルアンの様子を見に来る暇すらとれていかなった。アルタは軽傷治癒を頼む声が乗船当初からすでにあっちこっちで上がっていて、散らばった豆粒でも拾うかのように声の主をたどって一つ一つに治癒魔法を使っていたのを見ていたはずが、いつの間にか船尾から離れて随分前の方に出張なさってしまったようだった。

スーサは大きく息をついて、額にからまった前髪を指でちょっと直して（汗のせいで余計ひどくなったのは気のせいだ）から、てくてくと軽い足取りで柱の影に近づいて行く。

「よく寝てるね」

ギルドメンバーの寝顔を見て呟く錬金術師に、ハルも頬を緩ませて頷いた。

スーサは金臭くなったからと手を洗いにまた去って行ってしまった。

「俺、完全に空気扱いだったよね、今」

何を意図してか柱の影の奥に隠れていたゼストが情けない顔つきでひょっこり出てきて、水夫に水をもらいに揚々と走っていく少年の後ろ姿を見送る。ハルは苦笑い以外に対応の方法がない。

「あーあ、俺って結構影薄い方？」

いつの間にか畳まれていた翼をクッションにして、乱暴に全身を舟に投げ出したゼストは、もう夏も近くなった日差しに目を細めてまたふにゃりと笑った。それを見て、ハルの頬も自然と緩んでしまう。

気持ちよさそうだね、といってみると、

「ハルたんもやってみれば」

ぱっと両手を拡げられて、ハルは笑って首を振った。

「私はゼストみたいに羽根ないから、痛いよ」

（それにクルアンと手をつないでいなきゃいけないし）

ハルがクルアンの方を見やり、髪に触れようとしたら、今度は板の上をごろごろ転がって、ぴとりとハルの横に居直ってきた。

「……」

ゼストはにこにこしていて温厚そうに見えるわりに大男なので、

肩に手を回されると少し重い。重い分だけ温かい気がする。温かいし、ゼストの心臓の音は普通の人よりゆっくりで、丁度舟の揺れとともにハルの眠気を誘ってくる。それにゼストの翼から鈴蘭みたいな甘い匂いが、睡魔の住処になってしまっているようだった。ハルはなんとかして、初対面の時のように肩を枕がわりにして眠りこまないようにこらえていると、

「彼、魔術師なんだよね？」

ふと念を押すように確認され、ハルはなんだかはいと答えていいものかどうか思案しなければならないような心地になりながらも

「そうだけど、どうして？」

浅い息をして眠りこんでいる銀髪の少年に目をやりながら問い返すと、魔術師の服を着ていないと指摘された。

１２８　スズランと眠気。（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
試験中ＰＣを欠かさず開いていた私は何なんだろうか・・・

お気に入り登録感謝です♪

129　足りない部品

浅い息をして眠りこんでいる銀髪の少年に目をやりながら問い返すと、魔術師の服を着ていないと指摘された。

過剰魔であるクルアンは、魔力がこもり体内に溜まってしまうのを防ぐためにマントも帽子も外して乗船していた。いつもは装備で顔を隠しているので、持っていくかどうかアルタが尋ねたけれど、熱でぼうっとしていたのか答えてくれなかったという。

「ちょっと……今のクルアンには必要ないから」

ゼストは不思議そうな面持ちでしばらくハルの目をじっと見つめていたが、やがて口端をあげた。

「そっか」

それきり前を向いて、黙ってしまう。

（ちょっと言い方が悪かったかな）

包み隠しているのがバレバレというのは、仲間外れにされたようで寂しい。また病気のことを知らなかった頃の心地で、ハルは少し申し訳なくなった。

（でも、仕方ないよね）

ハルはクルアンの手を握りなおして、溜息をついた。

この手が握り返してきた事は今までただの一度もない。

「ずっと握ってるの？」

尋ねられて、ハルはうんとだけ答えた。ゼストはさほど興味がなかったのか、へえ、とだけ呟いてクルアンの顔を覗き込んだ。それからハルとクルアンを交互に見合わせて、にかっと笑った。

「二人とも髪綺麗だね」

不覚ながら、顔が一気に熱くなってしまった。

時を追うごとに増してきていた太陽の輝きが、舟のへりに上がる波のしぶきを照らして眩しい。

完全に陽が昇り切り、お昼時になってやっと皆が昼食を食べはじめたので、船内の臨時依頼に振り回されていたアルタとフェララ、それにスーサがハル達の元に集ってこちらも一息つこうとしていた。レグルスメンバー一行はいつの間にか新しくできたらしい『友達』の運び屋も混ぜて、一緒にセーン市から支給された昼食を摂っていた。

レグルスのメンバー全員が揃うというのが、まだ一日も経っていないというのに果てしなく久々に感じるのは自分だけだろうか。アルタは戦闘の影など露ほども見えない温和な船上での詠唱で酷使した喉に、強い日差しのせいで温かくなった真水を流し込みながら、

一向に中身の減る気配の無いとあるランチボックスをちら見した。

「……で、運び屋の正式な種族名は翼有る者という意味の有翼人（ウィンカ）で、確か古大陸イタリアに伝わる民謡によれば、それぞれ惑星に帰属すると唄われていたわ」

サイン会で相当体力を消耗したにも関わらず、食事をするのも忘れてエメラルド色の瞳を爛々と輝かせたフェララの赤い唇が放つ攻撃に、

「いやー、よくご存じで。民謡っつーのはよく知らなかったです」

と、なんとも不慣れな調子をまとった敬語が、開けた笑いとともに返答する。延々と続くフェララの研究者モードに普段はアルタもスーサも苦笑いしかできないのだが（ハルに至っては舟をこいでいた記憶がある）、今回は勝手が違った。

皆の注目をあびつつフェララと笑顔で対話を続けているハルの友達。名前をゼストといって、セーン市直属の運び屋ギルドの青年だ。

かろうじてゼストのことを覚えてたのは、クルアンの過呼吸症状についてたまたま目撃していたのが彼だったからだ。

見たところセーン市の運び屋の制服なのだろう、戦場であったときはぴったりと着用していたものと同じものだ。が、市に属しているという雰囲気をそこはかとなく醸し出している、セーンのシンボルマークである鷲のワッペンの鋭い目つきが、ファスナーを全開にした着こなしのせいで非常に残念なことになっている。

白いYシャツは、他の運び屋……無償治癒で舟中飛び回っていた時に、十数人の運び屋が背中の翼を大きく広げて海上を飛び回り、

心地よさげに羽根を伸ばしていたのを見かけたが、彼らの服装と比べると、明らかに足りない部品が一つあった。次第に温かくなってきたとはいえ、ネクタイを取り払っている運び屋というのはなかなか見ない。

おまけにゼストは、アルタがレグルスを設立する以前から見てきた何百という数の運び屋の中で、こんなことをする人は初めて追お目にかかったと断言できるようなことを平気でしてのけていた。

すなわち、あろうことか目の前でフェララの質問に上手に応じているこの青年は、自分の白いズボンにめったやたらに傷をつけ放しにしていたのだ。

一言でいえば……

（ちょっとチャラチャラしてる感じね）

１２９　足りない部品（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

化学の前期中間でサービス問題が３コでました

これで１００点中３点は確実に取れる……筈（筈って何だ）。

１３０　ウィンカは「生まれない」

服装とともに言葉遣いもざっくりとしていて軽い。

「惑星？　ゼストさんも、何か星の力を持ってるの？」

星の力を扱うと言われている錬金術師であるスーサが、興味津津で身を乗り出すと、ゼストは自分の右肩を指さして得意げな笑顔を浮かべた。

「見りゃわかるって、モロに太陽。ベタだろ？」

ゼストはからからと笑った。が、スーサのリアクションは、

「太陽！？」

目を真ん丸にして口をぱくぱくしているスーサを、隣で自分の尻尾に食事を分けてやっていたハルが不思議そうな眼で眺め、ふわりと春風のように笑った。

テレジアの影は魔力だけでなく普通の食事も摂れるらしい。アルタは初めて知った。無表情なまま、乾いた唇だけ黙々と動かすミウタやハクの姿は、生きているアルタには少し奇妙に感じられた。

「何、太陽って、そんなにすごいもんなの？」

驚かれた張本人はピンと来ない表情である。アルタは苦笑して話に混ざった、

「太陽って、地球を守ってくれるものでしょう？それの力を使える

って、すごいことだと思うな」

アルタの一言に、ゼストは感嘆の声をあげて、珍しそうにベストの右肩に開けられた穴に手をやった。まだまだ若そうな顔つきをしているのに、使い込んだようにごつごつしている指と指の隙間から、赤い刺繍がちらりと覗いている。

「太陽っていっつも出てるからそこらへんに転がってる暇人みたいな扱いだと思ってたー」

あっけらかんと笑うゼストに、他のギルドメンバーもつられて笑う。

（ハルの笑顔とはちょっと違った良さだね）

ゼストの笑った顔に、アルタも思わず顔をほころばせて、ふと運び屋の青年の背後にうごく純白に目が行く。

運び屋と呼ぶにふさわしい、立派に羽根の揃った翼が、並みの砕けた欠片をまとって、太陽を柔らかに反射している。

アルタは最早お湯の域に入ってしまった革袋の中身を一気に飲み干して、ほっと息をついた。

「ゼストは太陽の力を操って、何かできるの？」

「別に何も。ただ、太陽から生まれたってことになってるんだよ」

ことになっている、という表現は、市でそう名乗る（？）ように定められているのだそうだ。

「特に意味は無いんだ。宗教みたいなものだよ、生みの親ってことで」

なんでも有翼人（ウィンカ）は、人間やエルフのように母親や父親がいないらしい。どこから生まれてくるのか、どうやって生まれてくるのか、未だ何も解明されていないというのだった。

１３０　ウィンカは「生まれない」（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
ついに貯蓄が尽きまして（爆）、あわてて書いている次第であります。
短くなってすみません。

131　謎の質問

「以前私が勤めていた研究所でもウィンカについての研究がおこなわれていたわ。私も一度かじった事があるんだけど、全然駄目ね。どこをどう探っても何の手がかりもつかめなくって。つまらないからすぐにやめちゃった」

フェララがお手上げというのだから、本当に謎だらけなのだろう。

「俺はね、生まれた時、雨が降ってる地べたにうつ伏せに倒れてたらしいよ」

手をあたまのうしろに組み、どっかりと後ろに倒れ込んで、ゼストは太陽の光に目を細めた。

「どういうこと？」

「知らない。ウィンカってーのは大体、忘れたころに現れるって言われてる」

ふと気がつくと、そこにいる。

「空から降ってくるとか、何か証言があれば少しは解明できたのかもしれないけれど、はっと地面に目をやってみると、そこに倒れ込んで眠っているらしわ」

アルタはハルと顔を見合わせた。ハルは怪訝そうな顔でアルタとスーサと、フェララを見比べて、それからゼストに向き直った。

ハルの真剣なまなざしに、他の四人も何を言い出すのかと少しばかり居直る。

謎の生物・ウィンカの、しぶきの光がちりばめられた真っ白な羽の輝くのを三秒程見つめたあと、ハルはおもむろに口を開いてこう言った。

「ウィンカって、虫？　鳥？」

ゼストの吃驚した顔をみて、ミウタが豆鉄砲を食らった鳩みたいだと呟いたので、ますます鳥そっくりの表情になってしまった運び屋の少年を、スーサが海に落っこちてしまうんじゃないかと本気で心配するくらいころげまわって大爆笑してしまった。

つられてアルタも吹き出し、フェララが高笑いを初めて、ついにはゼストも大口開けて笑いだす。

ハルだけがキョトンとした顔で、皆のリアクションを眺めていた。

（ハルらしいわ）

アルタはそう心の中で思った。

ｘ　＋　ｘ　＋　ｘ　＋　ｘ　＋　ｘ　＋

舟の上にこだまする明るい笑い声。

それにかき消されて、その時必死に声をだそうとしていた少年には誰も気づかなかった。

熱にうなされた少年の蒼い唇が、微かに、しかし確かに動いていた。

かすれた声で、切なる響きで、

「エスケープ（にげろ）」

と。

x＋x＋x＋x＋x＋x＋x＋

逃げろ。

逃げろ。

逃げろ。

逃げろ。

逃げろ……！

x＋x＋x＋x＋x＋x＋x＋

１３１　謎の質問（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
第一話を若干変更しました。話の流れに支障はありません。
あとクルアンの病名について、今後出てくることがなさそうだったので消去しました。
訂正が多くてすみませんが、そのまま読んでくだされば大丈夫です！

お気に入り登録ありがとうございます。

１６日追記
三話でハルの年齢がわかるようにしてみた（１５）。
わかりにくくてすみませんでした。何をやっとるんだ過去の自分・・・。
そしてあとがきがさらに長くなりました。

１３２　ハル、珍しく自分で目を覚ます

ガクンッと大きな揺れを感じて、ハルはすぐさま飛び起きた。

自分が飛び起きるなんて相当珍しい。ハルは一人で呟いて、隣で眠っているクルアンの様子をうかがう。舟に乗りこんだ時から露ほども動かず、柱の影にかくれるようにして眠ったままだ。ハルは水夫にもらった薄手の毛布を払いのけて、あたりを見渡した。

周りに何もない夜の海で、月明かりが煌々と海を照らして、舟も一層明るい。振動に気付いたのか、上半身を起こして同じようにキョロキョロしている影が幾人が見えた。揺れた？　揺れたよね、と確認の声が静かにざわめく中で、今度はもっと衝撃の大きな横揺れが舟を襲った。

「うわっ」

舟の人が何人か起きて、歩き回り始めるのを見て、ハルの中に急に胸騒ぎがし出す。

ハルは何がなんだかわからないまま不安で、アルタを呼びに行きたかったけれど、何となくクルアンの傍から離れるなというフェララからの警告が頭に残って無暗に動けなかった。座り込んで、思わず離してしまったクルアンの氷の手を握りなおし、じっとしている。

何度か人影がハルの前を横切って通ったのがわかった。じきに舟のあちこちで似たような形の炎がともった瞬間、また若干揺れが起こる。

「地震か」

近くの男の人が誰かに問いかけると、

「……いえ、違いますね」

静かな声の返答とともに、ハルの間近くでも赤いあかりがともされた。どうやら他のギルドの炎使いが魔術で灯をおこしているようだ。魔術師のとんがり帽子をかぶった女性の唇が、炎に絶妙のタイミングで息を吹きかけ、少々強すぎる海風でなびく魔術を操っている。

突然、ひときわ野太い声が司令塔のような口のきき方で怒鳴った。

「起床、臨戦態勢に入れ！」

ハルは今度こそ飛び跳ねる勢いで起き上がり、クルアンに触れないよう離れたところに寝かせていたテレジアの双子を揺さぶった。

「ミウタ、ハク、起きて」

テレジアの影は感情が薄い程眠いが浅い。すぐさま目を覚ましたハクが眠たそうな眼でじっとマスターの顔を眺めてくる。

「ハク、ミウタを起こして。何か大変なことが起きてるみたい」

ハルが頼むと、ハクをゆっくりとまばたきして、大の字になってぐーすか眠っている姉の痩せた腹を乱暴に叩いた。

「ハルいる？」

スーサの声が自分の名前を呼ぶのが聞こえるが、先程魔術師が灯した炎が寝起きの目には刺激が強すぎてうまく視界が開けてくれない。

「いるよ」

とりあえず返事だけしてみると、

「フェララがね、アルタの所に行った方がいいって」

アルタを含め、招集されたギルドのギルドマスターは甲板の方に集まらされている。ハルは自分の現在地から甲板までの距離を考えて、混乱の状況下思わずため息をついた。

「ハル、クルアンを起こしてみて」

どうやらフェララ本人もスーサの傍で眠っていたようで、欠伸混じりの面倒くさそうな色をのせた声が、人々のざわめきにかき消されまいと大きさばかりが威勢よく響いた。ハルも嵐のように踏みならされる足音に負けじと声を張り上げ、クルアンがあの大きな揺れでさえ目を覚ましていない事を告げると、不機嫌そうな呻り声で返された。

「っていうか、何が起きてるの？　なんで舟がゆれてるの？」

再び大きく揺れる舟に足を踏ん張って、ハルは声を張り上げる。かったるそうなナイルカントが返答するには、

「魔物の大群の襲撃らしいわ」

１３２　ハル、珍しく自分で目を覚ます（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

あすから二日間、大会に行くのでＰＣを開けられなくなる可能性が大です。

更新が遅れるかもしれません。ごめんなさい。

133　ハル、戦闘す

舟は戦場と化していた。

もともと襲撃してきたのはハルも何度かてあわせのしたことのあるトトガーナという獣で、皆も見なれていたからか、左程大騒ぎする事もなく得物を振っていた。夜の海に響くのは、覇気のある掛け声か、金属のぶつかり合う音だけだ。攻撃魔法は使用禁止になっているらしく、先程まで炎をともしギルドメンバーの視界を支えていた炎使い達が不平をもらしながら魔術を消した。どうやらクルアンの魔術と同様、本人が消そうと思えば簡単に消えるものらしい。

突然暗闇に包まれるのが怖いのか、やや不安げにスーサが腕を掴んできたが、幸いにも月明かりを遮る雲が姿を消してくれたため少し目が慣れてくれば何が起きているのかよく見えた。
トトガーナを目の前にして、ハルはクルアンをかばいながら闘っていた。

小型ワニのような体つきだが、下あごから飛び出ている、太刀のようにいかめしい四本の牙と、サーベルみたいな形をした長くて鋭い爪が特徴で、攻撃パターンは単純な物の、長い武器を避けるのはなかなか大変だ。アルタと一緒に狩りをした時はしょっちゅう切り傷を作っていたが、今はハルには怪我ひとつない。ハルは目を閉じて、八本の手足を動かすことに集中していた。

ハルの周りには誰もいない。当たり前だ。今のハルに、ハル達に近づこうものなら、きっと身体がただでは済まされないだろう。

魔物に完全に包囲されるというのは何年ぶりだろう。ミウタとハクを脳内イメージで操りながら余計なことを考えていると、操作ミスでミウタの頬がトトガーナの牙の餌食になった。

「あっ、ごめん」

慌てて謝り、アルタに遠距離治療を頼もうと尻尾を引き寄せると、頬からバタバタと黒い液体を垂らした赤い着物の少女が乾ききった黒眼で魔物を一瞥した。

《厄介な物だ。怪我をしやすい割に、食える魔力の量が見合わない》

魔物の生命力を嗅ぎつけたのか珍しく表に出てきたテレジアがいまいましそうにつばを吐くと、液体が目にでも命中したのか、トトガーナの大群の一匹が低い呻き声をあげた。それを合図に、ハルとクルアンの周りをぐるりと取り囲んでいた黒い影の数々が、一斉に飛びかかってくる。

山のとどろくような咆哮は、やはり数がいるせいか、下級生物とはいえなかなか迫力があり気押されてしまいそうになる。ハルは弱い気持ちを振り払うように、

「ていっ」

残念ながらあまり強そうではない掛け声とともにミウタの脚で魔物を蹴散らした。トトガーナは溶けるように死んでいく。

《死体だらけになってきたがどうするつもりだ》

ハルは答えなかった。あとのことなどかんがえる間もなく、魔物

は後から後から飛びかかってくる。これぞ大群と言わずして何と言おうか。

黙々と双子を駆使し、敵を殲滅していると、なんだか自分までドロドロになった心地がして気が滅入る。死んでも身体が残らないというのは、生きていた時の証拠が残らない気がして、ハルは嫌なのだった。

たまに後ろを確認し、自分がかばっている氷使いが安全かどうか見る。船尾の壁にもたせかけているので、クルアンが襲撃されるということはまず無いとは思うけれど、トトガーナは牙と爪を振り回して無鉄砲に飛びかかってくるから安心はできなかった。

（……起きないな……）

ハルはあの時から、クルアンが意識を取り戻したのを見ていない。

出発前にアルタが起こして、包帯を取り換えがてら着替えをしたらしいけど、その時ハルはスーサと一緒に薬缶の蓋だのカエルのホルマリン漬けだのをスーツケースに詰めていて、傍にいなかった。いざ出発というときには、クルアンはとっくに眠りの世界に帰ってしまっていて、フェララ以外のギルドメンバーが交代で抱きかかえながら船着き場につれて行った。

（何でだろう）

何で目を覚ましてくれないのだろう。

１３３　ハル、戦闘す（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
大会の予選、突破しました。まさかの全国行き。
一日経つと実感湧きますね。どうしよう。

友人に挿絵を書いてもらおうかどうか思案中です。

１３４　消せない凶器（前書き）

読みにくくなっております。
すみません。

１３４　消せない凶器

（何でだろう）

何で目を覚ましてくれないのだろう。

得体の知れない不安を振り切るように、ハルはハクの手で、何頭か飛びかかってきていたトトガーナにさらりと触れた。あっというまに崩れ落ちて行く。

「ハル、こっちに来る数が増えているぞ」

ミウタが指さす方向を見やり、ハルは思わず萎えた溜息をついてしまった。

「何が起きているのかよくわからないが、あの少女に任せておけばどうにかなる」といったようなことを、ハルの戦う様子を見た数人の戦士達が広めてしまったせいか、先ほどから甲板の方から乗り込んできたトトガーナがそのままテレジアサモナーのいる船尾まで横流しにされている気がする。

（しょうがないな）

大変だけど、昔みたいに見向きもされず、ずっと膝を抱えて過ごしていたみなしごギルドの頃を思えばずっとよかった。

ハルは数秒前とは打って変わって、手当たりしだいに敵につかみかかり始めた。

一応自分にもパペットがある。ハルは運悪く目の前に飛びかかってきたトトガーナの太い牙を護身用のうさぎの歯でがっちりとつかみ、大きく振りかぶって目の前の仲間にぶつけた。痛々しいうめき声が、真夜中の海に沈んでいく。魔物とはいえ、生物を殺しているのに、なぜだか毬のように撥ねて行く動物を見ているとスッキリした。やたらめったら武器をふるっていると

《あれがこちらに来ているようだが、どうするマスター》

ごちゃごちゃと混ざり合った様なテレジアの声に、ふと手を止めて振り返ってみれば、ミウタが一人立ち止まってとある方向を指さしていた。

指さされた方向を見ると、一人の男剣士が何かを追いかけるようにこっちに近づいてきていた。どうやら目をつけた魔物に夢中になっているようだ。あまり寄られると、ハクかミウタに接触して死にかけない。

（危ないから遠くに行ってもらおうかな……）

「あの……」

おずおずと口を開いた瞬間、勢いよく剣をふるう男の人の手から、何かが飛び出した。

（え？）

ブン、と呻り声をあげて、それは真っ直ぐにテレジアサモナーの少女めがけてすっ飛んできた。一瞬何が起きたのかよくわからなかったが、見なれた武器だったのですぐにそれとわかった。

それは、極端に長くて鋭い宝剣だった。月の光を鈍く反射しながら、一直線にこちらに向かってくる。獲物をふるおうとして手が滑ったのだろうか、凶器が勢い余ってすっ飛んでしまったようだ。しまった、という表情の男の人と目があった瞬間、不意に根拠の欠片もない確信がハルの両足を縛りつける。

（避けられない）

ミウタとハクの動きが、電源を切られたロボットのように停止したのが視界の端に映る。

背筋に。悪寒が走る。ハルは総身が凍りついて、動けなくなった。

（だって、あれは）

イキモノじゃない。

あれは、私に消せない……！

「や……っ」

咄嗟に両腕で顔をかばいながら、誰かの小さな声がやけに耳についた。

「クリスタルガーディアン」

低く、かすれた声が言葉を紡ぐのが微かに聞こえた。

ハルはハッとして、思わず視界を覆っていた手を離した。

ガキィン、という金属音がして、スクリーンの向こうの白光りする物体がくるくると回りながら文字通りすっ飛んで行く。

ハルは壁に囲われたまま、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

それはいつしかハルに悪夢を見せた、あの透き通った画面ではなかった。表面はどうしようもなくガタガタしていて、形が悪かったし、ところどころ白く濁って、全体的にぼんやりとしか見えない。

（でも）

ハルは後ろを見やった。そして思わず、あッと声を上げた。

月光に照らされた青白い掌が、ハルに向かって突き出されていた。

光がほの暗いせいか真っ白に見える一本の腕は、手のひらを弱弱しく揺れ動かして、それでも何かを必死に支えようとしているみたいに見えた。

ハルは驚いて、呆然と立ち尽くしていた。ふきガラスの守護者を呼んだ掌は、今にも崩れてしまいそうに揺れ動いていた。

ハルは魅入られるように、その一本の腕を見つめた。凍りついていた両足の枷が魔法のように解かれ、ハルは吸い寄せられるようにクルアンに近づいて行った。

（起きてるのかな）

考えるまでもない事なのに、なぜか強い疑問が湧き上がってくる。

次の瞬間、それは違う感情に変わっていた。

（……聞きたい）

声が、聞きたい。

何故だか強い思いが込み上げてきた。

無性に声が聞きたかった。

何でもいいから、聞きたいと思った。

でも、ハルが話しかけようとした瞬間、どうやら氷使いの少年は力を使い果たしたようだった。

がくりと手首が折れたと同時に、背後でガラスにひびが入る不吉な音を利く。ぱっと振り返ったハルの瞳めがけて、派手な音を立てて崩壊した防御壁が降りかかってきた。

「動け」

自由になったハルが咄嗟に命令を出してから間もなく、そこには氷の破片も、牙をちらつかせて突進してきた忌まわしい生き物の姿も、跡形もなく消えていた。

１３４　消せない凶器（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
長さの関係で投稿しなおしました。

135　しずくの音

雫の撥ねる音がしていた。

波の音ではない。

ハルがそう断言できるのは、今輸送船が完全停止状態に追い込まれていたからだった。ハルはアルタの覗くギルドメンバー四人と一緒に船尾で静かに拠点出発から二度目の夜を過ごしていた。昨夜の魔物襲撃騒ぎで勃発した戦闘の影響で、輸送船のエンジントラブルが発生したという。エンジンがなければ進まない帆船など帆船ではない、とフェララとスーサが不満げに船員に訴えていたが、とにかく、動ける状態でないことに変わりはないのである。

今頃だったら広場について、訳ありの依頼内容について明かされる筈であった。

要するに呼ばれた人々は全員、北極海の上で足止めを食らっていたのである。

魔物の奇襲については、まだ原因がよくわかっていない。勿論原因解明のためにレグルスの誇る天才技術者が駆り出されたのは言うまでもないが、数分も経たないうちに両手をひらひらさせ首を横に振りながら舞い戻って来た（少々髪の毛が乱れていたのは気のせいだ）。フェララにもわからないことがあるらしい。

アルタはアルタで、舟の中でたった一人の治癒師だったから、トトガーナの爪痕を消すのに大童だった。詠唱のしすぎで声が出なくなってしまったらしく、卵型の通信機で連絡をとっていたスーサに

よると治癒請求をしたがる怪我人の目を避けてどこか甲板の方にかくまってもらっているとのことだった。ハルも自分の操作ミスでミウタのほっぺにつけてしまった傷を治してもらいたかったけれど、テレジアの影はもう死ぬ事は無いから、生身の人間の方が優先だ、と我慢してフェララの鞄に詰まっていたガーゼだの塗り薬だので応急処置をした。

ミウタは感受性が段々豊かになっているらしく、ハルが傷口に触れた時、ちょっと嫌そうな顔をした。成長だと思う。死んでるけど。今はくたびれて、双子ともども手足をてんでに放り出して眠り込んでいた。

「何これ？悪魔の穴とかかいてある」

「ちょっと、液晶に触らないでよ。気分転換に作り替えたばかりなんだからね」

「なんでこんなの見てるの？　三歳児が読む絵本だよ？　あ、もしかして本当はこういう話が好きとか」

「違うわよ、こんな幼稚な本趣味で読むわけないでしょう。スーサこそどうなのよ」

「面白いし、いいんじゃない別に」

「……」

スーサとフェララは先程からちらちらと会話しながらも、二人して食い入るようにフェララの白い折りたたみ式の機械を食い入るように見つめている。ハルも何をそんなに一生懸命見ているのか気に

なったけれど、何だか二人の世界を邪魔してはいけない気がしたし、先程から手を伝って聞こえる雫の音がいちいち耳に残ってどうにも技術者組の話題に入る余裕がなかった。

奇サイコメトリーがあっても、普段はよほど強い感情がないと言葉すらはっきりとは聞き取れないのに、くもっていながらもはっきりと聞き取れる水の音は、日本の水琴よりも深い風をまとっていた。ぽちゃん、ぽちゃん、と、みなしごギルドでよく独りで聞いた雨漏りの音に似ているせいか、滴がどこか水のたまった所に落ちたあとの余韻は、ハルの気分を沈ませる。身を切る様な切なさが含まれている気
がして、それは一つ一つ落ちるうちに、ハルにあることを思い起こさせた。

（ひょっとして……）

ハルは手をつないだまま、不思議な音を発している氷使いの少年をじっと見ていた。

喘ぐようなゆっくりとした呼吸で、喉がときたま微かに鳴く。手が胸元に伸びては、服を脱ぎたいのか白い襟のボタンに爪をかけ、また諦めたようにハルの指先に戻ってくる。額にのせておいた乾手ぬぐいはもうずいぶんと汗に濡れてしまっていた。

クルアンは昨夜の戦闘で、魔法を無理に使って、どっと熱が上がってしまったのだ。

ただいまの体温は、平熱＋１０℃。普通の人間ならとっくに死んでいる数字だ。氷使いの身体はもともと体温が低いため、死にはしないものの、フェララに「古大陸のサウナというものを（フェララ

は元々新大陸固有種のエルフだった）、４６℃に設定しているようなものだと言われたら、こっちまでくらくらしてきそうだ。

135　しずくの音（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
試合楽しかったです。

136　クルアンの病死

（私がちゃんと、ミウタかハクを盾にしていれば……）

もう何時間もこうして一緒にいるせいか、少しずつ荒い呼吸音にも慣れてきたものの、ずっと握っている手の方がそろそろ限界であった。段々感覚が無くなってくる。自分の手がどこにあるのかわからなくなって、たまに動かしてそれを確認するのだった。

セーン広場に到着するまで攻撃魔法は全面禁止されているから、風の魔法使いの力で帆船を動かす訳にもいかず、また皆いい加減に待ちくたびれて静寂を破らずにいる。そのせいで滴の音がとてもはっきりと響くのだ。

海の香りがいくら強くても、外着姿の銀髪の少年が、帽子もマントもなくていやに清楚でうぶに見える男の子の奏でる音がぶつかって、かき消されるということはなかった。

もどかしい。すこし蛇口をしめればなんてことはないのに、人の心には触れる事すらままならない。たまに掌に力を込めて止まらないかな、なんて、汗だくのクルアンの顔を見つめるけれど、水滴が途絶える事は勿論無かった。

それに、この音が何なのか少し判る気がして、もっともどかしさが増す。ハルはぐったりとした氷使いの、汗だくになった銀の髪を額の手ぬぐいでそっと拭いてあげながら溜息をついた。，

クルアンの顔は滅多に変らない。ハルが心の病気を抱えた少年の

表情が変わるのを見たのは、ここ二カ月の間、両手の指に収まるほどしかない。ほとんどは怒っていたり、痛がっていたりという感じだった。一度だけ、スーサに何か話しかけて微かに笑っていた。それだけ。

思えばクルアンは今まで一度も泣いたことがない。

でも、本当に涙を流すべきなのはクルアンだとハルは知っていた。

あの日初めて双子を呼び覚まし、奇サイコメトリーを使った日、流れてきたとてつもない量の感情をハルは一寸たりとも忘れる事が出来ない。

味方がいないとか、一緒にいたいのに避けなければならないとか、クルアンは色々なものを心の底に抑え込んで、蓋をしている。本人が蓋をしているんじゃなくて、面に出てこないのは病気のせいなんだけど、でもどこかでクルアン自身が感情の喪失を望んでいるような気を感じる事があるんだ。怖い。

(何も感じなくなったら、それこそ心が病死してしまったみたいだ)

クルアンが小さくせき込むのに促進されるかのように立て続けに奇サイコメトリーが水音を受信した。

ハルは大きなため息をついて、手を握りなおした。

(泣いても、いいのにな)

オーバーランを起こして負った深い背中の傷は、きっとすごく痛かったろう。スーサを味方だと思えず刃を向けたとき、一人ぼっち

で、心細かっただろう。血を吐いて、たぶん何がなんだかわからなくてたまらなくさびしく思うに違いないのだ。かわるがわる眠気を覚ましてしまう過去の夢だって、魘されるハル同様、苦しいことに変わりはないのだ。

でも、でも、クルアンはいつも、あの透き通った海色の瞳で、じっと前を見ているだけだった。

透き通った目が必ずしも美しいとは限らない。それはもしかしたら、何も移っていないかもしれないからだ。にごりきったテレジアの双子と、同じように。

「クルアン」

思わずそっと呼びかけてみる。返答は、無い。

「クルアンってば」

おきてよ。

声が聞きたいよ。

何でおきないの。

なんで怒らないの、なかないの、笑わないの？

どうしてこんなに違うの!?

「むしゃくしゃ、する……っ」

中と外のしずくが、同時に落ちて、はねた。

136　クルアンの病死（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

今から先生に怒られにいってきます（部室より）。

137　ハル、久々に日記をつける

「むしゃくしゃ、する……っ」

中と外のしずくが、同時に落ちて、はねた。

双子のうちの白い方の子が、夢でも見ているのかぴくりと動いた。

届かないことがもどかしかった。

相手の言葉は声がなくても聞こえるのに、自分は声にしても返事がないのが、自分は悲しかったり怒ったりするのに、クルアンには欠片ほどもそれがないのが、何故だか無性に腹立たしかった。

……とてつもなく、嫌だった。破り捨てたかった。滅茶苦茶に、ぐしゃぐしゃ壊して。

不意に頭上をすごい勢いで掠めていったものがある。

「うぉう！」

「何しけた顔してんの、ハルたん」

風を切る音とともに、数枚の丸っこい羽根はばらばら落っこちてくる。

慌てて上を見上げるハル。ゼストはいつものように小さく旋回してから、軽い調子ですとんと舟のへりに片足で降り立った。

「ゼスト……」

「ずっと手つないでんだね。」

唐突に笑いかけられ、どうリアクションしていいのかわからず曖昧に笑ったハルの前で、ズボンのポケットに手を突っ込んで、ひょいっと差し出されたものがある。

「はい、これやるよ」

ゼストはどうしてか相変わらず汗だくの顔をにこりと笑わせた。

桃色の小さな鈴だ。金色の細い紐に通されて、二なりのさくらんぼのようにぶつかりあって可憐な音を立てる。

ハルがおずおず手に取ると、また小鳥みたいに可愛くさえずった。

「可愛いっしょ」

可愛いわりに清楚な音色だ。先程の毒々しい感情とは相反する澄んだ音。それを手渡してくれた有翼人の少年の、爽やかな笑顔。

ハルはなんだか咎められているような気がして、ぎこちなく、笑った。

招集されたギルドの面々をのせた舟がセーン市の港に着いたのは、

その日の深夜のことであった。予定より丸一日遅れて到着したにも関わらず、大した謝罪の言葉もなく、船員に案内されて通された市長室にスミス市長の姿はなかった。

外出中、とブロック体で書かれた白いプレートに締め出されて、極秘依頼の内容公開を首を長くして待っていたギルドメンバーがぶーすか文句を言う一方、市に仕えている船員達が淡々と宿泊施設まで案内してくれた。

部屋は成人と未成年でざっくりと分けられていた。ハルはスーサ・クルアンと同じ部屋で、触れる事すらためらわれるほどの質の部屋に備え付けてあった机に座っていた。

「フェララなかなかもどってこないね」

一級品の天蓋つきベッドに身を投げ出して欠伸ばかりしていたスーサの口から別のものが飛び出したので、ハルはふかふかのクッション付の座椅子に腰かけて久々に開いていた日記帳に走らせるペン先を止め、振り返った。大の字になっているスーサの、まどろみかけた瞳と丁度目が合う。ちょっと満月を通り越してレモン型に光るお月様みたいな目だ。

「……フェララとは部屋が違うから、もう戻ってこないとおもうんだけど」

１３７　ハル、久々に日記をつける（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
明日から模試があるらしい作者でした。

138　スーサとレグルス

「……フェララとは部屋が違うから、もう戻ってこないとおもうんだけど」

ハルが確認すると同時に、スーサの目がくるりと横を向いた。つかの間考えて、がっかりしたように溜息をつく。

「そうだ……じゃあまた、って帰ってったから戻ってくるのかと思ってたよ」

スーサはくるりと寝返りを打ってうつ伏せになり、表面のつやつやした枕に顔をうずめた。スーサのパジャマは、普段の戦闘服とよく似た小麦色の地にドットが入っているシンプルなもので、薄手だったから、なんだかいつものだぼっとした服ばかり着てるときに比べて身体の細さが妙に目立った。

（こう見ると、華奢なんだな）

ハルはスーサの髪をなでてあげた。急に十才であるということがとても幼いことのような気がする。

もともとスーサは寂しがりやで、夜な夜な自分の部屋を抜け出してはフェララの布団にもぐりこんでいたらしい。いつも一緒に寝ている人がいないと、落ち着かないのだろう。そわそわして、あっちへ行ったりこっちへ行ったり、見なれない彫刻入りの重厚感ある扉を押したり引いたりして気を紛らわしていたのが、フェララが戻ってこないとわかった瞬間にぐったりと枕につっぷしている。

と、ハルが日記を書こうと体の向きを変えるや否や、寝間着の袖に力が引っ掛かった。

「ハル、一緒に寝たい」

「え？」

「今」

よって、天蓋付のベッド×3で三人揃って広々と寝られる筈の状況下で、ハルは右から来る冷気と左から伝わるぬくもりにはさまれて横たわることとなった。

スーサは嬉しそうに羽毛布団の中にもぞもぞ入ってきて、ハルのほっぺにすりよってくる。いつもクルアンの冷気に肌を晒しながら休んでいたから、スーサの子犬みたいな温かさが新鮮だ。ぽかぽかしたほっぺをすりつけてくるので、短い髪が首筋に当たってくすぐったくてくすくす笑いながら、

「明日何するんだろうね」

スーサは寸の間沈黙してから、

「きっとすごい依頼なんじゃないかな。だって極秘任務だし、あんなに沢山の人がいたし」

そのすごい依頼とやらに選ばれるレグルスは、やっぱりアルタの言っていたとおり有名なのだろう。

「だって、アルタとクルアンの二人しかいない時から大分有名だっ

たからさ。そこにフェララやハルが入ってきたら、もう名前が知られない方がおかしいよね。あはは」

「え、二人の時から！？」

治癒師も氷の魔術師も、世界的に見ればかなり珍種の職業だったし、ギルドマスターである治癒師は遠距離治癒、当時唯一のギルドメンバーだった氷使いの少年はそれはそれは力の強いことで、新大陸では度々話題に上がっていたらしい。

「僕もレグルスに入ったのは、知名度が高いから、かな。父さんに錬金術を教えてもらってたんだけどね、なんか将来家の武器屋を継ぐことになった時、魔物の出る道を通る配達とかしなきゃいけないから、戦闘力を高めてきなさいって」

自己を鍛錬するならば、戦闘依頼の多く、頼れる仲間がいるギルドがいい。それでスーサの父は、自分の仕事でたまたま耳にした二人組の新人ギルドを選んだのだそうだ。

「ハルは？　なんでレグルスに来たの」

興味津津で尋ねられ、ハルはうーんと唸った。

レグルスが有名だったことは知らないし、見つけたのだって条件を絞り込んだら一つに決まっただけだし、特にここ、と決めていた訳ではない。

（あれ？）

そもそもどうして一つに決まったんだっけ。

「ハルってば」

「待って、今思い出し――」

言いかけて、ハルは思わず口をつぐんだ。

138　スーサとレグルス（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
ワードからココに移すとすっごく短く感じられて・・・むなしい（笑

139　雪の降る日に

「待って、今思い出し――」

言いかけて、ハルは思わず口をつぐんだ。

思い出した。

『探しているのは、寝泊りができて、仕事を内部で依頼することができるギルドです』

『内部依頼ですね』

そうだ。一言が、口からもれた。

ハルはずっと、野宿生活から脱出するとき、入るギルドは内部依頼と決めていた。そうでなければ、たとえ住む所が出来ても意味がないから。みなしごギルドから脱退して、ミウタとハクと三人で何千里を歩いた意味がなくなってしまうから。

必死で探していた母の事を、忘れていたなんて。

「私はね、探してる人が居るんだ」

ハルは一生懸命言葉を選びながら、母の事をスーサに話し始めた。

「私のお母さん、きゅうにいなくなっちゃったの」

その日は、雪が降っていた。水っぽくて、服につくとすごく冷たくしみる、霙みたいな雪。

母と一緒に呉服屋に行って、お正月の初詣にいくための新しい着物を買ってもらった帰りだった。新しい、といっても新調したのは母だけで、ハルはまだ幼かったから初めての和服にはしゃいでいた。

晴れているうちに家を出た筈が、路面電車が呉服屋前駅に着くころに車窓からどんよりとした雲が垂れこめているのが見えた。傘を持っていなくて、

「早く決めて帰ろっか、ハル」

母の細い手に背中をとん、と叩かれた拍子に、桃色の着物のショーウィンドーに映った母の痩せた顔が笑ったのを、それがハルを異様にせかしたのを、昨日の事のように覚えている。

母はあの頃、きっと疲れていたんだと思う。物心ついたときから、父と、もう顔も覚えていない父と喧嘩ばかりしていた。一度大きな口げんかをしたきり、父は家を出て行ってしまっていた。

母は弱り切っていた。子供ながらに、薄々感じていた。

ハルはもう自分が着物を選ぶことなどどうでもよくなっていた。痩せた母の腕に、雪がしみたら冷たかろう。目の前の桃色の着物を指さすまでに、時間はかけられなかった。

母は値札を確認して目を丸くし、一寸ののち、笑った。

「ハルはお目が高いのね」

意味はよくわからなかったが、母が笑ったからハルも嬉しくなって笑った。その後、せっかくだからとお店の人に着付をしてもらって、二人で金糸で豪華に飾られた和服を着て外に出た時には、もう天気が崩れていた。雪を見上げて母は、一言、

「ちょっと待ってて。すぐに戻るからね」

ハルは頷いた。そして待った。決められた場所から一歩も足をはずさず、何日も何日も、お店の人が泣き声に気づいてハルを追い返すまで。

「お母さんを探していろんな人に話を聞いてみたんだけど、大した情報は教えてもらえなくて、もうギルドの内部依頼に頼るしかないと思ったんだ」

それでレグルスに来たんだよ、とハルは話を締めくくった。

スーサは黙ったままだった。夢中になってしゃべっていたからか、自分が話をやめた瞬間にクルアンの荒い呼吸が部屋によく響いている。

「スーサ？」

１３９　雪の降る日に（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
学校の文化祭の脚本に抜擢されて死にかけている作者でした。
何も言わない間に三日に一度更新になってしまいすみません。。

お気に入り登録して下さった方ありがとうございます！

１４０　母と子

「スーサ？」

もう一度声をかけてみるけど、返事がない。右隣を確認すると、もうとっくに寝入っていた。

（なんだ）

幸せそうに笑っているスーサの頬を指でつっついて、ハルはふっと、言いようのない淋しさを感じた。

母を、少しでも忘れた。それが母とはからずに離れていくのを暗示しているように思えた。

母は、遠い。果てしなく遠い。娘の直感でなんとなく感じ取ってはいたけれど、まさかこんなにも遠い存在になるなんて。

（やだな）

考え事をするハルの耳元で、不意にクルアンがひどく咳き込んだ。

ハルはびっくりして、あわてて背中をさすってやろうと仰向けに寝ていたクルアンを向こう側に向かせ、とんとんとたたくようにさすってやる。背中が朝に抱っこしたときよりじんわりと湿っている。そのせいか、背中に巻いた包帯の向こうに、溝の様に深い傷があるのが手触りで判る。生々しい鮮血の色が脳裏によみがえってきて、

ハルはクルアンの咳がおさまってもしばらくさする手を止めなかった。

（痛みも吸い取ってしまえればいいのに）

吸い取る、といえば、昼間聞こえた例の不思議な音が気づかぬうちに止まっていた。今は手が触れても何も流れてこない。ただ相変わらず熱にうなされた苦しげな息遣いが静まり返った寝なれない部屋に響くばかりだった。

ハルは夜闇の中でため息をつき、手をとめてクルアンの体を仰向けに戻した。いつも天井を微動だにしない瞳でじっと見上げて、半開きの口から冷気を吐き出していたクルアンを思うと、この体勢が一番眠りやすいのだろう。もっともフェララの集中治療室でに寝かされているとき以外、クルアンが眠りに入っているところをみたことはなかったのだが。

ハルと、見たところスーサは丸まって寝る派だ。なんとなく落ち着くし、外的から身を守っているような安心感があった。

テレジアの双子はちょうど尻尾が伸びる距離にあつらえたように配置されていた紫色の天蓋がついたベッドに二人で寝かせているので見えないけれど、今は普段は二人でからみつくようにして眠っている。くっついていられる人の数が少ない分、絡み合って眠ると安心するのかもしれない。

（クルアンは、安心とかするのかな）

むしろ感じることすらしないのだろうか。心安らぐときは、あったのだろうか。

なんだかクルアンはハルにとって、不幸の塊みたいにみえた。レグルスに来るまでは、周りの人々がみな潤った生活をしているように映った。だから余計に、酷なことにばかり巻き込まれているクルアンがひどく可哀相に思えた。今だって、高い熱を出してまともに起き上がることもできないというのに。

それでも悪いことばかりではないのかもしれない。

フェララがいっていたのだが、この熱は魔力を無理矢理放出したため、その分身体を休ませるために発熱していて、約一日我慢しきってしまえば体温が一気に下がるとのことだった。また今は魔力の器に余裕があるため、しばらくはオーバーランを起こす心配もなくなり、依頼も普通に受理できるようになるそうだ。

災い転じて福となす。

それでもクルアンがハルのために、無理をしてしまったのは変わりない。

あの時、本当にクルアンが目覚めていたのかどうか。ハルにはどうにも言いようがなかった。あの詠唱は寝言だったのかもしれない。そもそも寝言でも発音してしまえば魔法は発動するものなのだろうか。魔術師ではないからそこらへんの仕組みはハルにはよくわからない。

（みなしごギルドの魔術の授業、もう少し抜け出さないで聞いておけばよかったかな）

あれは、寝ぼけていたのかな。

でも、手が伸びていた。何かを支えようと、揺れ動く手のひらが必死に押していたのを思い出すと、なぜだか幸せによく似た、妙な気分になる。

その手を、ハルは、握り返してこないクルアンの分までしっかりと握った。

１４０　母と子（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
お気に入り登録して下さった方感謝です。

１４１　フェララ、芸術にとりつかれる

「悪いけど頼むわよ」

ぜんぜん悪びれる様子もなく、むしろアルタの方が自分に何かしたかのような勢いで指差し、フェララは画材一式をあふれんばかりに両腕に抱えて部屋から出て行ってしまった。

ハル達の寝泊まりしていた紫調の部屋に二人っきり取り残されて、アルタは口をぽかんと開けながらしばらく開け放しにされた白いディテール入りの観音扉を眺めていた。

フェララの「降臨」と災害は忘れたころにやってくる。スーサが入りたての時につくった造語だ。

（本当におかしな人）

普通、突然情熱的な絵画のイメージが脳内に降りてきたからといって、発熱しているギルドメンバーの少年の看病を放り出してまで画材を引っ掻き集めて外に出るものだろうか。セーン市から貸し出された、高価な肌触りの白いガウン姿で、である。大体依頼内容が何かもわからない疑わしい招集をかけられている最中だというのにそんなものが降りてくるというのがアルタにはもうすでに判らない。

「時と場所を選ばないのよ、芸術というものは！　芸術の主様に『描きなさい』といわれるんだから、私に限らず誰だって筆をとるしかないわ。私達のような芸術家はたまたま回数がが凡人より少し多いだけ。いい事、それは動物ラムネを二つ食す場合、同じ形状のものを同時に袋から取り出してはいけないというのと同じように、自

然の摂理に組み込まれた本能なのよ、わかる？　いえ、あなたがわからなくても別に構わないけれど、とにかく今、私が、描かなければならないのよ！　世界の果てにたどりつけるのは私しかいないわ。だって見える？水面にオレンジ色のインクが浮かんでるの、多分小さな子供がこぼしたのね、真っ直ぐな線になってそれはそれは綺麗なんだから。子供は女の子がいいわ、家から持ち出した塗料で流れる川に絵を描いているの、ね、秩序が理解できていない幼い子供でも芸術と結ばれている部分があるのよ、あ、いえ、これは私の頭の中のイメージであってあくまでも」

　何やらてんで意味のわからない事を一気にまくしたてて、整然と並べてある鮮魚の内の一つをくわえて逃げた野生の猫のために裸足で家を飛び出すどこか古大陸の国の人のような勢いで、輝ける晴天の下へ駈け出して行った。よくもまあ、あのような重厚な扉をハイヒールの蹴り一発であけられたものだ。芸術の主様とやらは筋肉増強剤でも服用しているのではないだろうか。

「……まったく」

　アルタは笑い混じりにため息をついて、乱暴に開けられた扉を閉めに丸椅子から腰を上げた。

　守りの木々と使い魔のムーンサルトに拠点を任せてから、はや二日目も過ぎようとしていた。昨日の深夜に初めて新首都となったセーン市に足を踏み入れたというのに、朝の六時ごろに朝食を配りに来た中年の男性のダミ声にたたき起こされた。

　ハルとスーサは、朝方にようやく戻ってきたらしいスミス市長に呼び出しをかけられていた。なんでも過去一年以内に能力測定を行っていない者はそこで能力値を市に通告しなければならないらしい。

アルタはとある市の軍に所属していたときの癖で、年に一度必ず受けていたのだが、スーサとハルは公式の測定の存在自体しらなかったらしい。睡眠時間もろくに取らされないまま、めいめい斧だのパペットだのをひっつかんで、いかつい鉄製の装備を誇らしげにテカらせたセーン市直属の案内人につれて行かれた。

能力検査は、受験者の職業に合わせた頭数・強さの魔物を出し、討伐するまでの時間や経過の立ち振る舞いなどで力の度合いを判断する公式テストだ。評価は五段階評価、三以上がつけばその職業の中ではそこそこ有能であるとされている。原則として5が最高である。

「ハルは五をつけてくるかもしれないわね」

控えめとはいえ少々まぶしいシャンデリアの黄色い光に照らされて鈍く光る胸元の星の形をしたギルドマスター印章がずれていたのを直しながら、アルタは一人でぽつんとぼやく。

テレジアサモナーの能力はある意味で天下無双だと思う。世界中が無機物にでもならない限り、最終的につきつめてみればハルに倒せない敵はいない。ハルの技は、アルタに、見るものに、奈落の底シュウシュウとうなり声を上げて煮え立つ、赤黒い、血の池を思い起こさせる。尻尾の子供たちは灼熱の大釜のみなもであって、少しでも触ってしまえば最後、体が腐り落ちるようにほどけて沈み、二度と生き返ることはできなくなってしまう。水面から逃れようと、業火に熱せられた釜のへりに必死に足をつく罪人も、きっとあの厳かでおどろおどろしい気を纏ったテレジアの手から逃れることはできないだろう。

アルタはテレジアが好きになれなかった。

１４１　フェララ、芸術にとりつかれる（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
混雑してたので更新遅れましてすみません。

追記　番号治しましたすみません。

１４２　ハルに近寄りたくない

アルタはテレジアが好きになれなかった。

もっとも、進んで接するのはハルとフェララだけだが、何かこう、一緒の空間にいてはいけないような厳かな気がテレジアにはある気がする。

対面した瞬間に読み取れた、莫大な戦闘経験。あれは、なんだったのだろう。

「あの子達はいったい、何年生きているんだろう……」

不意に背中に走った冷気に命じられて、アルタは半ば反射的に寝台の方を振り返った。

「クルアン？」

手触りのいい上質な寝台の上に仰向けに横たえられた氷使いの様子をあわてて確認して、冷気のもとを探ろうとしたが、鬱々と考え事にふけっていたアルタを堅実に引き戻したと思われる張本人は、露ほども動く気配すらない。一瞬冷気を感じた気がしたのだが、気のせいだったようだ。

「そんなにすぐに、目覚めてくれるわけないわよね」

アルタは自嘲し、飛ぶように早い呼吸で苦しむクルアンの寝巻きの襟元を、そっとあけてやった。先ほどから手が首のボタンに伸び

ては羽毛布団の中に引っ込んで、しばらく見つめていると忘れたころにまた白く細い手が顔を出すので気になっていたのだが、フェララになるべく体温を上げたままにしておくようにと念を押されていたのでなかなかためらっていたのだが、

（さすがにやりすぎじゃないのかしら）

クルアンの額を汗を手ぬぐいで拭いてやりながら、また気分が沈む。

「こんなに判断が遅いんじゃ、ついてくるメンバーも大変、か」

依頼主の陰口を耳にした時の台詞がよみがえってくる。悔しさで、握りしめた拳が震えた。

どうしてこんな私がギルドマスターなのだろう。

正直、近頃そんなことばかり考えている自分が心底うっとうしい。けれど特殊能力者（アラトルノ）であるハルと一緒にいると、余計に自分の無能さが浮き彫りにされるから、考えずにはいられないのだ。ハルのことは好きなのに、あまり近寄りたくなくなっている自分が確かにいるのはとっくに判っている。

卑屈だ。それも痛いほど自覚はしている。でも、自分にも特別な力があれば、と思う。

アルタは川の流れのようになめらかな銀色をそっとなでながら、部屋の一角に設置されているいかにも使い込んだ風の洋式箪笥を見やった。

上から三段目に、アルタが念のため持ってきておいたクルアンの漆黒の戦闘服がしまってある。拠点の館を出る際に、要りようならばと声をかけたが、本人はまだ意識が覚醒とまではいかなかったらしく、黙ったまますぐとろけるような深い眠りに戻ってしまった。

あれだって、自分がハルみたいに奇サイコメトリーを持っていれば、言葉は発せずとも魔術師の少年がどうしたいのかくらい汲み取れたかもしれない。本当はマントと帽子だけじゃなく、かさばるからとおいてきた、殺意の針を秘めた鉄製のスタッフも欲しがったかもしれない。

（なのに、私は……何もきづいてあげられなくて）

そもそも自分が治癒師として心の治療ができていれば、クルアンが今になって心の病にさいなまれることは無かったかもしれない。

（どうして、出来ないんだろう）

治癒師の力はほぼ遺伝そのものだ。飴と鞭で大事に育て上げてくれた祖母も、物心ついた時とっくに写真の中の人になっていた母も、いっぱしの治癒師として古大陸各地に引っ張りだこになっていたそうだ。一方ギルドに憧れて新大陸に渡った娘はといえば、幾度訓練してみても精神治癒が出来ず、依頼に顔を出すたびに欠落品のように扱われ、治癒師仲間からは腫れものに触れるように扱われる始末である。

「私が治癒師に生まれた意味は何？」

気づいたら、いもしない誰かにそう問い詰めていた。自分の力の理由を、むさぼろうと必死だった。

「どうして私が……」

言い終わらないうちに、

『アルタは魔力なんかなくても大丈夫だよ』

あどけない笑い声が胸の奥底でしゃぼんの殻を破るように明るくこだました。

思い出したのは、小さな記憶。いつか子犬の様な童顔の錬金術師が、初めて人を殺めた時の言葉だ。

『アルタの歌は、とってもきれいだよ』

自分の振った刃で討伐対象の喉元を掻き切って死なせ、浴びた帰り血の生ぬるさがまだ体に残っていてどうしても眠れないとスーサが泣いてすがった夜に、子守唄を唄ってやった時があった。祖国ノルウェーの治癒師に代々伝わる、夏の日暮れのようにゆっくりとした歌に、スーサは多少ほっとしたような面持ちでアルタに笑ってみせた。

『その歌、なんか和む』

『え、そう？　小さい時にお婆様が気に入ってた民謡なんだ。お婆様は歌なんて使わなくても、魔法で私を寝付かせる事くらいできたけれど……』

言っているそばから情けなくなってきて、アルタはくちをつぐむほかなかった。

黙りこくったアルタに、スーサはアルタまでぐったりしては明日の依頼主が困る、と眉根を寄せてほっぺたを膨らませた。

『だいたい、魔力なんてなくてもさ、古大陸の人達は今まで暮らせてこられたんでしょ？　だから力がないのが当たり前のことで、力がなくてもどうにかできるのが本当の仕事なんじゃないかな』

違う？　と、うつむいた顔をのぞきこまれたあの時、アルタは心臓がむずがゆくなるくらい恥ずかしかった覚えがある。ぶわっと顔が熱くなって、真っ赤になった顔を見られたくなくて視線をそらしたら、照れている、とまた笑われた。だって、当時九才の子供に諭されている二十のギルドマスターというのはどうにも妙な感じがして、落ち着かなくて……それでも鼓動が高鳴った。

歌で人を救う事ができるなど、テレジアの存在と同じくらい不確かなものだ。だが、もし自分の奏でる旋律が目の前のぐったりと横たわっている少年に届いて、少しでも心の傷をいやすことができたなら、望むものはなにもない。

「……歌うよ」

アルタは自分に言い聞かせるように、一人口の中で、小さく、しかし力強く呟いた。

１４２　ハルに近寄りたくない（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

The Tale of Venus

x + x + x + x + x + x +

それは、果てしなく遠い物語。

とある人物を目指し、彼は歩いていた。

吹雪に悩まされた山奥も、灼熱の太陽に身を焦がれた砂漠も、

足をとられる湿地帯も、魔物の棲みついた古い塔も、

たった一人で切り抜け、彼は前だけを見ていた。

息は激しく、喉は乾き、両腕は魔物の毒で痺れ、脚は引きつって

思うように動かなかった。

しかし、彼は、先へ向かった。

恵みの女神、ウェヌスの玉座を目指して。

【彼女ならきっと生きている。再び世界に恵みをもたらしてくれる】

ただひとつの望みであった、女神ウェヌスに会いに行くためだけ

に、複雑な迷路を抜け、急な階段を足を踏み外さぬよう慎重に、し

かし急いで。

しかし、玉座へと向かう階段の手前で、彼の鼓動は止まった。

破砕された十二階段を目の当たりにした刹那、自分の居場所はもうどこにもないと、今までの努力は全て手遅れだったと悟った瞬時に、彼の心臓は生きる事を諦めてしまった。

数千年後、遺体を発見したのは、崩れ落ちた最上階で事切れた女神ウェヌスの末裔、死神だった。

とある伝説を耳にし、異国の地から足を運び、塔にたどりついた彼女は、突然目の前に現れた屍をひどく憐れみ、連れ帰って墓に埋めてやろうと、決めた。

しかし千年の時を経ていた青年の遺体は、時の止まった塔から離れた瞬間に彼女の両腕から砕け散り、白い粉と化して、塔の建っていた青いタイルに夜の星のように落ちた。

死神はひざまずいて、静かに泣いた。彼と同じように、入り組んだ道を何度も引き返しながらたどりついた、とある伝説の広間に、たった独り誰にも知られることなく横たわっていた彼を、心底憐れみ悲しんだ。望みを失い、魂は現世を離れ、身体までも原型をとどめぬ姿になった彼を。

彼は何を残したかったのだろうか。

考え抜いて死神は、己の黒いちりめんの衣服を引きちぎり、拾いにくい骨をかき集めて包み込み、故郷に持ち帰った。

せめて、墓と名前だけでも後世に、と思ったのだ。

幼いころ、いない者とされて育ってきた彼女にとって、「知られない」ことのつらさは、よくわかっているつもりでいた。

彼女はいくばくかの資料を頼りに、彼の故郷を探し当てた。

しかしそこは彼女の住む島国からは遠く離れたとある大陸。

死神は途方に暮れた。彼女は海を渡る事ができない。

人間達は自分らの魂を狩る己の事をけっして好いてはいない。

舟を貸してくれる者など、いるはずもなかった。

しかし彼女は諦めきれなかった。彼女は、人の身で雲間を突き抜けるほど高く複雑な塔を昇りつめた彼の勇敢さに、死体ながらも惹かれていた。愛情ではない。彼女には愛する夫がいた。

だが彼を見た時、我が子に会った母親のようないつくしみが胸のうちでぼんやりと灯ったのがわかったのだ。

嫌われることを覚悟で人の世に足を踏み入れ、彼女は海辺へと向かった。案の定、舟を貸してくれと頼むどころか、目を合わせることすらできなかった。

炎天下、浜辺に波打つ海の白さを手前に、彼女はやはり困っていた。

単身で泳いで行くしかないのか。

どこへでも駆けていけるほど広い、浜辺だというのに、彼女は衣のはしくれを後生大事そうに抱えたまま身動きがとれなくなっていた。

その時、突如として陽が奇妙な影を宿し陰った。死神の女が驚いて天を仰ぐと、赤く燃える恒星に、黒々といびつな模様が浮き出ていた。

どこかで見た、古代文字によく似ている形をしていた。

しばらく眺めていると、段々それが大きくなっていくのがわかった。

死神があっけにとられている間にそれはどんどん大きくなり、否……地上に近づいていた。

それが地についたとき、彼女は前触れもなく巻き起こった魔風に飛ばされた。すぐに手をつけばよかったものの、彼女は小さくなってしまった遺骨をかばって背中をうちつけてしまった。

激痛に耐えて身を起こし、陽光を遮ったものが落下した地点の様子を確認した彼女は、驚愕のあまりしばらく呼吸するのを忘れていた。

いつの間にか砂漠に、生き物のように踊りくねっていた文字がいた。

文字はたがいに絡み合い、もみ合って、そして唐突にまばゆい光を発した。

思わず片腕で視界を覆う。

再び彼女が前方を確認したとき、そこには死神が魂を喰らったあ

との人の身体を運ぶのにつかう舟によく似たそれが、忽然と現われていた。

x＋x＋x＋x＋x＋x＋

１４３　蒼い光

アルタはクルアンの頬をなでながら、スーサの時と同じ民謡を歌った。

声を響かせながら、ふと一度クルアンに子守唄をうたってやったことがあると思いだした。

（確か、久しぶりに一緒に寝た時に……）

ハルがギルドに来て一カ月経つか経たないかという時に、一度ルームメイトとしてうまく折り合いをつけられているかどうか尋ねた時があった。そのとき初めてハルが、魘されていたことを知った。もう少し早く気づいてあげられたら。ちゃんと見てあげていたら、苦しまずにすんだはずなのに。

［夏の夜の星に

駆ける四つの光

暁とよく似た色調（グラディション）

獅子の心臓を灯した］

ｘ　＋　ｘ　＋　ｘ　＋ｓ　ｘ　＋　ｘ　＋

懐かしい歌声。

どこかで聞いた言葉。

帰る場所は、ないと思っていたのに。
故郷で聞いたような優しい旋律。

許されることならば、

もう一度目を開けてもいいのだろうか。

できることなど何もない無力な俺を、

呼んでいるのは誰なのだろう。

知りたい。

だから、

もう一度、目を開けてみる。

x　＋　x　＋　x　＋　x　＋　x　＋

突然、微かな光が自分の視界の端に入った。

（え？）

気づけばアルタは、歌声と一緒に呼吸を止めてしまっていた。自分の動きがすべてとまったことを意識した次の瞬間に、アルタの目

は視界の淵に宿った蒼い光に釘付けになった。

「……ルアン？」

最初の文字の発音がすっ飛んでしまう。でも、そんなことはどうでもよかった。アルタは我を忘れるほどの美しい一筋の青色を、宝石のように輝く細い線を、息を呑んで食い入るように見つめた。

まぶたを半分開けた碧眼の少年が、確かにこちらを見ている。

「クルアン」

アルタは病床の氷使いにかがみこみ、苦しそうに息を吐くクルアンの額をそっとなでた。返事はない。代わりに、熱があるとは思えないほどの、どこかあどけない、清澄さをたたえた不思議な瞳がくっきりと視線を成していた。

まだぼうっとしているのだろうか。当然だ、こんなにひどい熱を出して。まともに呼吸をするのも難儀だというのに。

それでも。アルタは、口元が自然と緩んでしまった。自分の歌が届いてくれたような気がした。いくら待てども目覚めなかった少年の意識を、自分の力で取り戻せたような気がした。

「……は、ア、ル、タ」

つっかかるような吐息とともに突然名前を呼ばわれ、アルタは思わずベッドの柵に手をかけて

「なに？　言って？」

１４３　蒼い光（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
短くてすいません。
明日も更新します（・ω・）

１４４　アルタ、質問される

少々せっつくように聞き返した。長い黒の髪がクルアンの白い耳元にするりと落ちた。

クルアンが青い唇を震わせながら、とぎれとぎれに放つ言葉を聞いて、アルタは耳をクルアンの口元に近づけたまま思わず目を見開いた。

「俺死ぬのかな」

つっかえつっかえだが、確かに聞こえた。

アルタは寸の間黙った。ただじっと、熱で喘ぐ少年の力強い眼と己の視線を合わせていた。

熱で朦朧として思わず口走ったのだろう。クルアンが自分から誰かに何かを尋ねることなど、最近ぱったりと無かったことだった。

「……死なないよ」

アルタの口からついて出たのは、単純な答えだった。どこの誰にでも言えそうな反応。それでもアルタは両目から涙が伝うのをこらえる事が出来なかった。

苦しい、と、口にしない。それでもクルアンの身体の辛さは痛いほど判ったから。

アルタの涙を、氷使いの銀髪が優しく包み込むように受け止めるのを見て、アルタは泣きながら微笑んだ。

アルタがふざけて帽子を取ろうとしても、つばをきゅっと抑え込んで決して見せてくれなかった銀色の髪。今は金色の窓枠から差し込む陽の光に照らされて、湖の水面のように質素な輝きを見せている。

そう、二人でじゃれ合っていた時期があった。同じ闇夜の中で、あの日二人は星空を仰いでいた。

確か、まだ守りの木々を作るための土地を見つけたばかりで、森の中で野宿していた時の事だった。

「人が死んだら星になるって本当？」

背後の呟くような声に、アルタは日記帳に走らせていたペン先を止めた。

膝をかかえ、鼻先だけちょこんと出して、帽子のつばを右だけ少し持ち上げて、星空を見上げている瞳が小さく光っている。

不思議な少年だ。ギルド掲示板広場で話をした時から、そう思っていたアルタだったが、クルアンの目に映る星明かりがなぜか異様に鋭く、まるで星を貫かんとする者に見えた時はどきりとした。

「父はこの空のどこかにいるのかと思って」

聞いてもいないのに質問の理由をぽそりと呟き、クルアンは帽子のつばを両手で引き下げた。目元の小さな光が帽子に隠れて見えな

くなる。

アルタはクルアンに寄り添うように座りなおして、空を仰ぎつつ

「そうだね。きっと見てくれているわ」

「俺は、生まれたら星になる方がいい」

畳みかけるような台詞に、アルタはどうして、と聞き返した。そうしなければならない気がした。

クルアンは帽子のつばのせいで最早見えない筈の星をじっと見上げながら、

「行きている間はあんな風に輝いていられるのなら、死なずにすむ気がしただけだ」

面倒くさそうに答えて、少年はそっぽを向いた。そのまま黙りこくって何も言わない。

アルタはしばし、あっけにとられてその様子を眺めていた。

（……随分、厭世的なことを）

アルタはしばし、どうしてよいものやら考え込んでしまった。アルタはクルアンの過去に何があったのか、全く知らなかったから、父親が亡くなっている事も初めて知ったし、一人旅をしていた所を見ると、ひょっとして母親とも会えなくなっているのではないだろうか……。その中で１３，４に見える少年が、何を思ったのかわからなかった。

「なるならばあの星がいい」

不意に指さされて、アルタはその細い指にぴったりと視線を合わせて示された方向をたどる。

紺色の夜空に、贅沢なほど散りばめられた宝石の中で、それはひときわ眩く目立って輝いていた。

「じゃあ、二人でなってみようか」

１４４　アルタ、質問される（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次回の更新日は２６日です。

１４５　ギルド・レグルスができたわけ

「なるならばあの星がいい」

不意に指さされて、アルタはその細い指にぴったりと視線を合わせて示された方向をたどる。

紺色の夜空に、贅沢なほど散りばめられた宝石の中で、それはひときわ眩く目立って輝いていた。

「じゃあ、二人でなってみようか」

クルアンは少し驚いたように顔をあげた。瞬きをしたのか、瞳に映る星明かりが一瞬消え、また光った。

それから、夜の暗さではわからないくらい、微かに、頷いた。

夜が明けてから二人で守りの木々を作り始めた。ひときわ大きな木を選んで、周囲の土から魔力を注ぐ。大木はギルドメンバー二人の力を飲み干すようにむくむくと枝葉を広げた。新大陸特有の、じわじわと蒸し暑い夏を静かに鎮めるように、横ばいに広がった枝から下がるつららが冷気を放っていた。

最後の一本に魔力を注ぎ終えた時、クルアンの出した大きな氷の欠片で、アルタはその太い幹に7文字を刻みつけた。

二人が望んだ星、獅子の心臓なる一等星――二人で一つの名前、『Ｒｅｇｕｌｕｓ』を。

涙をぬぐいきれないままふとアルタが紫色の天蓋が影を落とす寝台を見やると、クルアンのまぶたは再び閉ざされていた。だが、もう目覚めるのを首を長くして待つ必要はない。呼吸が、ゆっくりと静かなものに変っていた。アルタは安堵のため息をついて、それから突如ドアに叩きつけられるようなノック音に慌てて顔を拭いて、赤くなってしまった鼻の頭を簡単な治癒魔法でどうにかすると、ちょうど振り返ったタイミングで観音扉の片側が重苦しい音を立てて少し開いた。

隙間からぬっとあらわれた顔を見て、アルタは吹き出すのをこらえるのに必死になった。

「念のため外に出てきてもらえるかしら」

きっぱりと言い放つフェララの鼻から頬にかけて、緑とも青とも使ない色の絵の具がべったりとついているのだ。真剣な表情とのギャップに、笑わずにはいられなかった。

外に出たアルタに、フェララはつんとそっぽを向いて

「何笑ってるのよ。バレてるわよ」

若干不機嫌そうな技術者に絵の具の事を指摘するか否かアルタが一寸迷ったところで、

「あなたはクルアンとハルについてどう思っているのか、気になったの。是非聞かせてもらいたいところだわ」

また唐突な質問だ。芸術の主様からの耳打ちがなくても、思いつきに走りがちな性格は変わっていない。

アルタはちょっと考えてから、

「別に、何もないわ。ハルはクルアンを色々と助けてくれるし、今のところあの双子に触って腐ったって話もないし」

「どこに目をつけてるのよ。そのくらい私だって知ってるわよ」

若干腹立たしげに切り返されて、アルタも思わずムッとした。

「じゃあ、どういう意味？」

「いちいち言わせないでよ、男女の仲ってことよ……」

フェララはエメラルド色の瞳孔をきつく光らせてアルタを一瞥した。アルタはアルタで、そんなことを突然言い出したフェララにしばし呆気にとられた。

「あの病気は感情を消してるんじゃない」

叩きつけるような口調だった。

「押さえつけてどこかにやっているだけ。今、ハルの奇サイコメトリーに感情を引きだされることで、あの子の心は少しずつ戻ってきているわ」

アルタは黙ったままフェララの説明とも呼べない何かをじっと聞いていた。吐き出すように続けられる言葉は、まるでクルアンが心を摂り返しつつあるのを、厭うているようにすら感じられた。

クルアンは今まで感覚が麻痺していたから、突然の感情に本人がついていけず、理性が効かなくなることもある、というのだ。そのせいでクルアンがハルを傷つけたり、おそったりすることを危惧しているらしかった。

しかし、この距離感は何なのだろう。アルタの内心には言い知れない疑問が浮かんでいた。

クルアンがハルを襲う。その構図が、どうしてもイメージできないのだ。

「そんなこと言ったって、クルアンも年頃よ。ハルは……まあ、意識していないみたいだけど」

苦笑いとともに肯定する。ハルは最初に一緒のベッドで寝てもらったときは、うろたえた様子が無いともいいきれなかったが、今ではごくごく自然体でルームメイトに接している。

「とにかく、クルアンとハルは離した方がいいわ」

「そんな、それじゃまるで隔離じゃない」

１４５　ギルド・レグルスができたわけ（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次回更新は２９日です。

１４６　アルタ、×印の少女に出会う

「そうよ、隔離よ。何か都合の悪い事があるの？」

しれっと言われて、アルタは自分の胸の内にふつふつと怒りがこみ上げてくるのを感じた。

「……クルアンはそんなことしないわ」

眼前の人影から半ばあきれたような溜息が洩れるのを聞いて、アルタは後から情けなくなってきた。

フェララの方がメンバーの事をよく見ている。認めたくないけれど、そうじゃなければこんなに腹立たしく、嫉妬にまみれた感覚には為らない。クルアンの心がどれほど戻ってきているのか、やたらとギルドマスターの集まりに駆り出される自分はあまり把握する事ができていないのだ。メンバーと接する時間が、目の前の、きつい眼をした技術者より少なくなってしまっている。

それがしょうもなく、情けなくて、アルタは下を向いて何も言えなくなってしまった。

フェララはそんなギルドマスターの変化には露ほども気づかない様子で、両手をひらひらさせながら

「念のためよ。そうね、同じ未成年の男性の知り合いといえば……」

なんだかんだで隔離の方向に話がすすんでいるが、もう反論する

気力がなかった。耳がこもったように音が遠くに聞こえる。

「運び屋のゼストなんて、どうかしら」

ぼんやりと、もう、どうでもいいと、思って、無意識的に賛成の意を示そうと首を縦に振ったその時だった。

「それはいけないです」

少女の澄んだ声に、女二人が一斉に振り向いた。

「あなたは……？」

フェララが怪訝そうな顔をした。

目の前の少女は、二人をまっすぐに見上げている。目の色が異常に薄いぶん、余計に視線が澄んで感じた。逆に半開きになった口がどことなく頼りなさげな雰囲気をかもし出して、強いのか弱いのかよくわからない。まだ十を過ぎていなかったころ、アルタの育て役の祖母がいつかに手土産として買ってきた西洋人形のように赤く染まった頬の片側に、×型の傷あとがあり、不自然に浮いてみえた。

二人に凝視されて、相手は少したじろいだように視線をそらし、うつむいた。こちらもつられてその子の顔から視界を下に移す。するとゼストと同じ、セーン市のシンボルが縫ってあるベストを着ていることにすぐに気がついた。背中から、たたまれた白い翼が夏の香りがする風にかすかにゆれて見え隠れしていた。

（もしかして）

「あなた、運び屋の子？」

アルタが地面を向いて黙ってしまった女の子にかがみこんで確認する。

とたんに、目の前の幼な顔がぐいっとこちらを見据えた。

アルタはどきりとした。

顔をあげる動作そのものは、極道の親分みたいにいかめしい振る舞いだというのに、おもてに貼り付けられた顔のパーツはおびえた獣のように弱弱しかったからだ。

少女はひとつうなずく。

「セーン市直属の有翼人（ウィンカ）ギルド・アポロンの第五班の班長、やってる。だから私、あなたたちに、ゼストのこと、口出す権利あるです」

１４６　アルタ、×印の少女に出会う（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次回の更新は８月１日です。

少々詰まり気味なので、感想など気軽にいただけると嬉しいです（・・・）φ

１４７　保護者の言い分

たどたどしい大陸語だ。話しなれていないらしい。

「どこのどなたか知らないけれど、小さな子供になにかわかるのかしら？」

馬鹿にしたような気を帯びたフェララの口調に、少女が思わずといった風に顔をしかめた。アルタはなだめようと唇を開いたがそれをさえぎるように

「彼は小さい頃、兄から虐待、受けてました。それから彼、誰かと一緒に寝る事、嫌う、怖がるます」

有翼人の少女の喋り方は身振り手振りを加えて、拙い言語を隠すかのように、少しまくし立てる調子だった。

アルタは少女の言葉に、動かしかけていた自分の口が貼り付けられたようになった。

ゼストの笑顔が記憶の線路を走って、それに虐待という二文字が追いかけていった。が、追いつかない。

（ゼスト君が、虐待に？）

「そんな……」

どうにも結びつかなかった。ハルやクルアンより年上に見えるの

に、二人よりはるかに天真爛漫に、ある意味軽々しく振舞うあの青年が、暗い過去を持っている人物には到底見えなかった。

だが、このおどおどした少女の、体からにじみ出る不思議な力は何なのだろう。テレジアと対面したときのとは別の『強さ』が、この有翼人には満ちているような感じがした。

アルタはフェララを見た。エメラルド色の瞳が揺らいでいた。

（そりゃ、そうよね。私も信じられないもの）

突然突拍子もない話が飛び出してきたのだから、無理もない。

「ゼスト君が、本当に？」

有翼人の少女は色の薄い目を見開いて、ぎこちなく頷く。

「あんなになれなれしい人が？」

フェララは驚愕のあまり建前というものが頭の中から吹っ飛んでしまっているらしい。

「虐待を受けた人の心、いつも疑心暗鬼になる。けどゼストは違う。人、信じたい、信じよう思います。それに他人の存在、邪魔になります。いまさら余計な刺激、与えて、くじかないで」

邪魔、と、挫く、という言葉が妙に耳についた。

ゼスト本人は他者と積極的にかかわっている。邪魔者だと思っているなら、たった一度の出会いでハルを好いたりしないはずだ。

（ゼスト君にとって邪魔かどうかなんて、わからないのに）

すると少女はアルタの心中の疑問を見透かしたかのように

「彼、自分が他人を怖いことを知りません。だから私が見張りしてる」

それは保護者の言い分だった。

保護をする側の人間は、案外対象物を過剰に弱く視ていることがある。ギルドマスターになって、アルタはうすうすそれに感づき始め、だからこそメンバーにはあまり付きっ切りにならず、なるべく自分の意思で決めさせることを尊重しているつもりだ。

だから目の前の少女が、ギルドを設立したばかりの未熟な自分の姿と重なってしまう。

しかし、彼女は守っているものの種類も、方法も違う。

そこそこ健康なギルドメンバーを扱っているアルタに、口出しする権利はなかった。

「でも……」

それでもなおぐずるフェララに、ギルドマスターはここは一つ、己が収拾をつけようと、

「いいじゃない、わざわざゼスト君の所に預けなくたって。クルアンがハルに手出しする筈ないじゃない」

と、つり目の翡翠をなだめにかかった。

はっきりと言ってしまうと、アルタにとってクルアンとハルは特別仲がいい関係には見えなかった。どちらかというとスーサの方が、たつまきごっこにハルをさそって一緒に盛り上がっている光景をよく見かけるし、印象深い。それに……アルタが見る限りでは、ハルはクルアンより若干幼い。恋愛の対象に為り得るのだろうか？

実際自分が経験したことが無い感情だから、そこの所の確証は持てなかった。

フェララはあるのだろうか。

あの性格で？

１４７　保護者の言い分（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次回の更新は４日です。

１４８　とぐろが解かれた

フェララはあるのだろうか。

あの性格で？

いやでも、愛情も芸術として受け入れていたかもしれない。あるとしたらやっぱり、彼女の方が正しいのだろうか。

言った傍から、鋼のようにしっかりしていた確信が徐々に薄雲のようになっていく。追い打ちをかけるように、

「あなたって意外と、うぶで楽観的なのね」

露骨に溜息をつかれてしまうと、

「フェララこそ、何でそんなこと考えてるのよ」

思わず言い返してしまった。心ない言葉に、フェララの瞳孔がみるみる内にとげとげしい雰囲気をまとっていく。

「何よ、その言い方」

「だって私はクルアンとハルの関係なんて考えた事もなかったし、二人ともまだまだ子供じゃない」

「子供！　だから何なのかしら？　いいこと、１５の子供は一番不安定な時期なのよ、なのにあの子が心の病気になったりするから……」

あまりに乱雑で粗悪な台詞に、アルタが怒りにうち震えてきた。

「何よそれ、クルアンが病気になったのが悪いみたい！」

「ち、違うわよ」

つっかえる所がどうもあやしい。クルアンのことを「あの子」と呼ぶのも、いい加減よそよそしくて気になっていたところだった。

「違うけど、でもあの子は危険なの。感情が爆発したらどうする気？いざという時双子が寝ていて、ハルが対処できなかったらどうするの！」

的確な指摘だった。いつもそうだ。非の打ちどころがない正論で相手を言いくるめて……丸めこまれてしまう。

そうしてとぐろを巻いて眠っていたアルタの中のどす黒い感情が、むっくりと鎌首をもたげて、正論という刃に向かって牙をむいた。

「何よ、知った風に。フェララは何にも判ってないじゃない。私はずっとここでやってきたんだから……っ」

アルタは、もう止まることができなかった。拳をふるわせて、叫んだ。

「あなたはいつも出しゃばってばっかりで、肝心な時に役に立たないじゃない！」

自分だってギルドのメンバーと一緒にいたかった。もっと色々知

りたいことがあったのに、仕事があるからぐっとこらえてやってきたつもりだ。

それなのにフェララは、ここぞという時でいつもリーダーの格をかっさらって行くではないか。日頃の汚れ仕事は全部こちらにまかせて、書類の検印も油絵にかまけて手伝ってくれなくて、その癖ギルドメンバーの前では大きな顔をして居座っているではないか。

「年上だからって、いい気にならないでよ。たった半年しかここにいない癖に、私の席を取らないで。そこはあなたが座っていい場所じゃないんだから！」

「いい加減にしなさい、あなたがあなたの仕事をこなすのは当たり前のことでし……」

「クルアンの心のことだって、病名やメカニズムを知ってるから何？ハルやスーサみたいに、枕元に寄り添ってあげたことなんてないじゃない。今だってゼスト君が辛い過去を持っているのにクルアンと引き合わせようとしたじゃないっ」

考える前に右手が大きく振りかぶっていた。それは整った醜いエルフの顔に叩きつけられようと勢いをつけた。訳のわからない言葉を口走って、アルタは掌を思い切り叩きつけようと目の前にあるワンピースの首元を乱暴に掴んだ。

その時である。

「はーいはい、落ちけつ、落ちけつ」

明るい調子の声と共に、不意に背後から真っ白い何かがばさりと

アルタの視界を覆った。え、と声を上げおわらないうちに、肩のあたりから誰かに抱きつかれた衝撃で思わずよろめく。

アルタは絵の具で汚れた襟から手を外した。

「ゼスト、いつからいた？」

１４８　とぐろが解かれた（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次回の更新日は８月７日です（・ω・）
［ｎｅｘｔ→ゼストの激昂］

１４９　ゼストの激昂

「ゼスト、いつからいた？」

明かなる焦燥感をまとった声に、ようやく有翼人の少女が今までの自分の行動を見ていた事を思い出す。おまけに飛び出してきた話の中心人物まで、翼を眼前に広げてアルタの攻撃を阻止していた。

……見られた。

急に心ノ臓が冷えて、足から力が抜けた。膝からくずおれるアルタと一緒に、抱きついたままゼストも地べたに座ったのがわかった。

「およ、腰抜けちゃった？」

菓子や紅茶とは違う、花のような甘い香りがふわっと匂う。子供のように温かい体温にほっこりと包まれて、心がぐらりと揺れる。揺れたあと、何か大事なものが水の底の奥方に沈んで、見えなくなった。心の閉ざされた部分に、怒りがしゅうしゅうと吸い込まれて消えていった。

掴んでいたものが離れて、手持無沙汰になった両手を地面についたアルタの身体に、ゼストは手を回したまま、

「ミラノ、俺がいつ過去の話を言っていいって言った？」

穏やかさの中に珍しく責めるような色が扮した質問をふっかけた。うろたえるような返答があった。

「ご、ごめんなさい、私……」

「まあ、いっか」

温もりが身体から離れるや否や、アルタは涙腺の留め具が外れるような気がしてきゅっと拳をまぶたに押し当てた。フェララの姿もついでに闇に隠す。

「話は全部聞いた。俺んとこ移すつもりなんだ？彼」

ハイヒールが腹立たしげにコツコツと音をたてた。

「盗み聞きしてたって解釈していいのかしら」

「いえ、少し奥まったより拝聴させていただきました」

とげとげしいフェララの台詞に、笑い混じりの冗談をかまし、ゼストはアルタの拳をやや強引に目元から外して、自分の袖口で拭ってくれた。泣きべそを見られたくなかったけれど、ゼストはそんなこと気にも留めていない様子で、アルタの正面に回り込んでしゃがんだ。

顔を上げれば、溢れんばかりの満面の笑み。

しかし何故か、口端が無理に上がっているように見えて、ちっとも笑えなかった。

「ゼスト、請け負わないで」

顔を伏せていても、ミラノと呼ばれたウィンカの少女が強い瞳をしているのが感じ取られるほどの声だった。その強さは禁止というよりむしろ、切望に聞こえた。

「……俺の勝手じゃん？」

立ち上がったゼストを見上げると、鼻の立った横顔が半ば拗ねたような面持ちで、背の低い同胞を見下ろしている。その腕を、ゼストがきゅっと押さえつけたのをアルタは見逃さなかった。

「やっとみんな、しゃべれるなった。ミラノ、悲しむ。ゼスト元通りになるの皆悲しむ」

唇を動かすのももどかしく、無意味なジェスチャーをつけてミラノの台詞をさえぎって、

「じゃあ何？俺がハルたんみたいな小さな子でも怖がるっていいたいの？」

ゼストはかなりイライラしているようだった。いつも朗らかで、滅多なことでは角が立たないゼストにしては珍しく、どこか責めるような口調だ。ミラノが答えようとしても、いい終わらないうちに自分の言葉をかぶせてしまう。口論に似てきた言い合いに、ミラノは次第に気おされ、たじろぎ、声が震えてきた。

ゼストの声がだんだんと怒気を帯びてきて、先ほどまで言い争っていたアルタとフェララが思わず顔を見合わせていたとき、

「やだ……」

理論合戦から呟きに変わった言の葉のひとひらに、両者が口をつぐむ。

ミラノが制服のベストの裾をつかんで、うつむいてしまっていた。背中の、ゼストのよりだいぶ小さい白色が、心なしか項垂れるように下がって見えた。

泣き出しそうな面持ちに、顔をしかめていたゼストもさすがにハッとしたようだった。

「あ……えと」

取り繕うにも言葉が出てこないようだった。アルタは助け舟を出そうと口を開いたが、結局辞めた。クルアンとハルを引き離すことに納得はしていなかったからだ。

しかしゼストは、ふっと憑き物が落ちたかのように柔らかな表情に戻り、ミラノの目線までかがみこんで、やさしく波のかかった髪をくしゃくしゃっとなでて言った。

「もうちょっと俺のこと信じてよ。な？」

胸がしめつけられるほど、切なげな笑顔だった。

ミラノは黙ったままだった。ゼストはレグルスの二人を見返ると、

「とにかく、クルアンはもらっていくからさ」

もう一度念を押すように節くれ立った男らしい手がうつむいた少女の頭をぽんと叩く。もの言いたげな視線の色には気づかず、運び屋の青年はばさりと純白の翼を広げた。

「つーことで、仕事終わりに引き取りにくるから！」

じゃっ、と二本指を立て、歯を見せて笑うと、ゼストはアルタの頭をまた撫でた。アルタは恥ずかしくて顔から火が出そうだったけれど、同胞の少女にもやっていたところを見ると、そういうタイプの人らしかった。

それからゼストはフェララを通り過ぎ、翼を広げるのに時間がかかったのだろうか、数秒そこで立ち止まり、次の瞬間に一陣の風が吹いて、ゼストはもういなかった。

代わりに遠くの空に、出遅れたミラノが一生懸命小さな翼をはばたかせて、遥か彼方の背中に追いつこうとしていた。

１４９　ゼストの激昂（後書き）

パソコンの熱暴走で更新遅れましてすみません。
次の更新日は１０日です（・ω・）
［ｎｅｘｔ→妹の記憶］

150　妹の記憶

目の前を金色の風が通り過ぎていく。

必死に追いつこうと、帽子のつばをあげて走る。

でも僕はココほど足が速くないから、どんどん引き離されていってしまった。

「ココ、ちょっとタイム」

叫んだつもりがぜいぜいという音にかき消されて、ココはふわふわしたゴールドの長髪に、春先に咲いたたんぽぽの綿毛をまとわせているのに気づかず進んでいく。人間ってあんなにかろやかに走るものだっただろうか。

日の光に反射して、とにかくココの総身がまぶしい。僕には到底追いつけない。何もかもが遠い。

それでも僕はココが大好きだ。

「ココってば」

大分差が開いたところで、ココはやっと立ち止まり、振り返った。

勝負が終わったとわかったから、僕も足を止めて息を整える。

ココは遠くではにかんで、

「お兄ちゃんたら、遅―い」

そんなに声を張り上げなくても、今は春風が穏やかだから、普通に聞こえるのに。

僕がひざに手をついて息を整えていた間に、ココはスタスタと寄ってきて、僕に小さな手のひらを見せた。

「ほら、早く早く」

野原の向こうまで父母を迎えに行くんだと張り切って、僕とは違う意味で息を荒くしたココの手を、僕は軽く握った。

その瞬間、手の内に握ったものが突如ビキビキと折れたかと思うと、派手な音を立てて爆ぜた。

俺は慌てて手を離そうとする。しかし向こうがきつく握り締めてくる。指の指の間が圧迫されて、痛い。爆ぜる、弾ける、折れる、割れる。めまぐるしく手の中に握った、握られたソレが形を醜悪なものへと変えていく。

「ココ」

妹の名をつぶやきながら、必死で自分の腕をこちらに引っ張る。が、引けば引くほど、相手の方に引きずり込まれていく。

わき腹を汗が伝った。口がからからに渇いて、声が出なかった。

みるみるうちに形の変わっていく妹の手のひらから、腕から何か

ら全部が黒々とした醜い物体に変わっていく。

のどの奥で空気がひゅうひゅうと鳴る。自分らの周りの草の色が急激にくすみ、枯れ色を通り越して焼け焦げたような黒に変わり、怒りの黒煙を上げる。生ぬるい北風が時が止まったように笑顔がはりついている妹の長い髪を、乱雑にさらっていった。

「あ、あ……っ」

こわばった咽喉が不本意にあげる声。

毛髪が消えた目の前の人面の、額から皮膚が垂れ下がってくるのから目をそらせなかった。瞬きをする間に、そこには妹の顔は影も形もなく、変わりに金色に光る歯列をちらつかせた黒い化け物が、とどろくような奇声を上げていた。

必死で腕を引っ張ると、すぽんと外れた。

やっと放たれた、血のにじむ左手を見やった。黒々とした文字のようなものが血管をうごめいているのが透けて見えた。

虫のようなそれを追い払いたくて、俺は魔法を唱えて傷つけてみる。

自分の皮膚を突き破って、先端に透き通った赤を飾った氷柱がいくつも生えていく。しかしその森をすり抜けて、文字がのた打ち回りながらマントの内側に侵入してくる。

夢中で唱えた。アイジクルエッジ、カッター、チェイサークラッシャー、フリーズブロー、自分の腕を突き刺せるものは何でも試し

た。つかまらない。

不意に不自然な形の影がその腕に落ちて、ハッと上を見やると、ちょうど赤くなった太陽の円を切り裂いて、長い鍵爪が迫ってくるところだった。

俺の作った無数のとげとは比べ物にならないほど鋭い光を宿していた。

逃げなくては。

でも

どこへ？

足が、動かない。

突き刺さる瞬間、きゅっと目を瞑る。

逃げられない……！

痛みに身構えたそのとき、何の前触れも無く視界が紫色に染まった。

「？」

なにやらつやのある紫だ。よくよく考えてみれば、俺は閉じた筈の目を開けていた。

夢、だった。

そんなこと、夢を見ている最中で気づいていた。だがどうしてか、目覚められなかった。途切れてほしくなかった。あんなに忌まわしい記憶なのに……。

紫の正体は、天蓋の布だった。どうやらベッドで眠っていたらしい。それも拠点のものではない。

俺は凍りついたように動かない体の中、目だけ動かして右を見やる。

白い重厚な観音扉の向こうに、見慣れぬ街の景色が広がっている。大理石の道、いまだ火のともっていないランタン風の街灯、その向こうにしぶきを上げる噴水に似た何か。

その陽だまりの中で、アルタと例のアーティストが、向かい合っている。

言い争いをしているように見えた。温厚なリーダーにしては珍しい。

だから何の考えもなく、耳を傾けてしまった。

１５０　妹の記憶（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次回の更新日は８月１３日です。
［ｎｅｘｔ→明の４、鬱の５］

151　明の4、鬱の5

「アルター！」

「フェララー！」

はしゃいだような声に、アルタはあわてて立ち上がり、声のした方を見やった。

「『あなたの』ギルドメンバーが帰ってきたみたいよ」

同じ方向を確認したフェララがさらりと言ってのけたが、皮肉の色は否めなかった。

アルタは謝ろうと唇を開きかけたが、フェララは浅く息をついて、ぴょこぴょこ跳ねながら大理石の小道を駆けてくるスーサとハルに、軽く手を振ると、キャンバスでも取りに行くのかふらりとどこかへ去っていってしまった。

「ただいまっ」

笑顔で帰ってきた竜巻ごっこ二人組にアルタはねぎらいの言葉をかけ、実技試験のせいか汗だくになっているスーサにハンドタオルを貸してあげた。

「どうだった、試験は？」

二人に聞いたつもりだったが、スーサだけが優しい色の目をしば

しば瞬きしながら

「斧はそこそこ。錬金術の方はめっきりだめだって」

スーサの『そこそこ』が相当高いものであろうことを本人は自覚していない。アルタの見た感じ、４をつけられてもおかしくない実力である。一方、

「ハルは？」

目を向けて、アルタははてと内心首をかしげた。

ハルはスーサと裏腹に、まったく汗をかいておらず、息もあがっていないというのに、後ろに控えているテレジアに似た、疲れ果てたような静けさをまとっていたのだ。普段は自分と目を合わせると笑ってくれるのに、それがない。うつむき加減に大理石の模様を足でなぞりながら、

「実技は５だったよ」

とだけ伝えた。

「ん、そっか」

アルタは瞬時にハルの暗さの原因を察して、部屋へ入るよう促した。

セーン市の能力試験は、会場が仕切られていない。公開とまではいかないものの、近場で受験や訓練をしている余所のギルドのメンバーは、お隣同士の戦闘状況を見ることができる。

アルタはテレジアの影が人を腐らせる瞬間を、未だ目撃したことがない。何度か庭の雑草が枯れるのをみたことはあっても、テレジアの能力の恐ろしさがあんなちゃちなものではないこと位理解している。

周りの心無い者に罵られても、不思議はなかった。おまけにレベル5とあらば、嫉妬も買うはずだ。

どう慰めてあげようか。また歌を歌ってあげればいいかな。

しかしアルタの考えるまもなく、ハル達の疲労も暗澹たる気も、外から吹き抜ける青嵐のごとく吹っ飛んでしまうような出来事が起こっていた。

すなわち、部屋に一人で残しておいた氷使いのギルドメンバーが紫の天蓋のしたで身を起こしていたのである。

三人とも、誰かに時を操作されたかのように足をぴたりと止めた。

右のこめかみのあたりに手を押しつけて、若干だるそうな表情でこちらを見ている。外は晴れているのに、青い両目は曇天を映して、アルタとは目が合わなかった。

「クルアン！」

スーサを見れば、きらめいたとびきりの笑顔でかけよって、病み上がりの少年に渾身の力で抱きつきに行くところであった。走る度に揺れる、背負った斧の金属音が小刻みに室内に響く。

ハッとして、

「あっ」

アルタが止めようとしたときにはもう遅く、実力試験向けに持って行った斧やら杖、おまけに鉄製の防具までの重みが一挙にクルアンにのしかかることとなった。

「ぐふ……っ」

人間とは時に何とも不吉な声が出るものである。

ハルはかつて見たことのない魔法使いの大群に目を見張った。

宝石屋やら武器屋やらの品々を覗きに来ている民間人で賑わうセーン街大通りを、優雅におしゃべりしながら歩いて行く魔術師達。紫色で統一されたマントからのぞく皮ブーツの数々のかかとに踏まれて、白い大理石の敷き詰められた地面が軽い音をたてていた。

（さすが新大陸の大都会……いろんな学校が研修に来てるんだ）

先程から同じ組み合わせの衣服を着た人々の集団がひっきりなしに目の前をかすめる。かれこれ二時間位ここに棒立ちしているが、あんまりに皆が楽しそうに歩みを進めるものだから、ハルも学校というものに今更通いたくなってきてしまったほどだ。

ハルは市長直々の依頼で、この大通りにそびえたつ巨大な時計塔の警備をしていたのだった。
このくらい、わざわざ民間人を舟で呼びよせなくても、セーン市直属ギルドのメンバーにでも頼めばいいのに、と文句の一つや二つはいいたいところだったが、報酬を弾むと言われ、ゼロがいっぱいついた……それこそフェララが一日であっさり稼いで来そうな額……をつきつけられたら、受諾するしかない、それに相手は首都の長である。

ハルは時計台の塔によりかかり、道行く靴達の大行進をぼんやりと眺めていた。

以前来た時にイルミネーションであざあざと彩られていた裸の木々は、立派な枝葉の緑を伸ばし、店沿いに整列して観光客を出迎えている。

「やあ、やっているか」

聞き覚えのある、おごり高ぶった口調が自分に話しかけているのを聞いて、ハルは胸糞悪くなりながらも振り向いた。

１５１　明の４、鬱の５（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
時計台は自然に生えた木に時計をとりつけたものです。
補足で描写説明をするあたり素人ですが生温かい目で見てやってください（

次回の更新日は１６日です。
［ｎｅｘｔ→噴水に落下するマッシュルーム］

１５２　噴水に落下するマッシュルーム

悪趣味なステッキをついて、びっこを引きながらスミス市長がやってきていた。皮肉にも若づくりな顔が、石膏でできたかのように無表情のまま微動だにしない。

「ああ、いやいや、邪魔をする気はないんだ。しかし君の様な子供が本当に……」

答えてもいないのに、口をすべらせたらしく、チラッとこちらの表情を確認する。それから、全く以て悪いと思っていない表情で

「あー、失敬失敬。どうにも庶民の感情というのは理解しがたい」

言葉の間に、『んー、』という声が度々入る。これってお年寄りの癖だとハルは思っていたのだが、どうやらそうでもないらしい。ハルは能力検査の時からこの『んー、』を数えているが、今ので記念すべき六十回を迎えた事を本人は恐らく知らない。

「どうだ、私の市は」

ハルは何も言いたくなかったが、かといって黙っていても隣に佇んで手元の分厚い本を読みふけっている冷たい横顔が代わりに口を開いてくれることはないと判っていたので、短く

「都会って感じがします。いろんな人が来ていて」

市長は機嫌よく、仮面の表情を少しひずませて笑った。そう、鼻

で笑うのではなく大口を開けてくれたなら少しは気分も晴れたかもしれない。

市長はマッシュルームみたいな髪の毛の端を指先でちょんちょんやりながら厭味ったらしく、

「いい事を言ってくれるね。田舎のギルドでも、都会の良さを判ってくれる人がいるなんて」

褒めた訳でもないのに勝手に都合のいい方向にすり替えられているあたり、図々しい。

「任務を満了したら、私の部屋に来るといい。君一人でね」

一人という言葉に反応して上目遣いに市長の顔色をうかがう。何か企んでいるようには見えなかったが、

「ま、監視だけなのだし、簡単な任務だ。うまくやってくれ。その時計台は噴水広場とともに、私の市が誇る先祖の遺産だからな」

ちゃんと確認する前に、ステッキをつきながら遠ざかってった。

何がしたかったのかいまいち判らず、ハルは黒いスーツ姿を見送りながら

「帰り際噴水に落ちたらいいのにな」

クルアンが鼻だけ出した魔術師スタイルでちらとこちらを一瞥し、また魔道書に視線を戻した。

独り言が珍しかったのだろうか。

クルアンはハルの言動に時々、うっすらと好奇心を覗かせることがある。砂漠の戦地で唱えたニホン語とか、いつかアルタの洗い物を手伝おうかと言った時とか、前者はともかく他にも不思議な個所で幾度か興味を示していた。

突如として耳に飛び込んできたバリバリという音に、ハルはびっくりしてから、自分がこの音で肩をびびらせるのは初めてではないことを思い出した。

横目でクルアンを見やる。ハルがびびくる原因を作った張本人は、何事も無かったかのようにページをめくっただけだった。

クルアンは見張りが馬鹿馬鹿しいらしく、いつもの青い魔道書を読んでいた。まだ軽い頭痛が残って本調子ではないものの、発熱のおかげで大分過剰魔が落ち着いたらしい。これでしばらくオーバーランを起こす事もないそうだ。

能力検査の結果とともに渡された依頼書は、ハルのクルアン宛てのものだった。クルアンが倒れてる事くらい、セーン市側も把握していた筈だが、ギルドマスターアルタによると、市長が『わざわざ他の配達依頼や戦闘依頼からはずすよう部下に指導した』らしい。これを聞いたフェララは、

「高飛車ねえ。所詮は大陸国の犬だっていうのに。平和ボケした貴族の子供らしいっちゃらしいけど。あんな貴族の性悪おぼっちゃまに市長をやらせるなんて、カルマツェーダ国王もついに老けて頭がパーになっちゃったのかしら」

およそ酷い言いようである。おまけに、

「ねえ、前から気になってたんだけど、貴族と平民の違いって何？お金とか？」

「スーサにはまだ早いわ」

説明が面倒くさかったのか適当にあしらったせいで、しばらくハルがスーサの『やけくそ竜巻ごっこ』に付き合わされてしまった。スーサが勝手に付け足したとある特別ルールのおかげでハルは連敗し、一応スーサの気はおさまったみたいだからいいのだが。

（フェララ、市長のこと本当に嫌いなんだな）

この場にフェララがいて、スミス市長ご自慢の髪型を見ようものなら、あんなキノコに指図されるなんて云々言い出しかねない。

もっとも、ハルも午前中の一件で市長が大嫌いになってしまったので、むしろ言ってほしい気分でもあった。

１５２　噴水に落下するマッシュルーム（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次回の更新日は明日です。
予定…明日→明後日→２３日
１９～２２まで群馬と山梨で部活があるのでお休みさせていただきます。すみません。
［ｎｅｘｔ→ミウタとハク、傀儡になってみる］

153　ミウタとハク、傀儡になってみる。

もっとも、ハルも午前中の一件で市長が大嫌いになってしまったので、むしろ言ってほしい気分でもあった。

倒し方が優雅ではない。テレジアがいなければ何もできない。卑しい姿だ。あの男は、検査中、ミウタとハクと、自分とのつながりを延々と否定しつづけて、鼻で笑った。極めつけに、

「実技でレベル5がついたからといって、つけ上がらないように指導しておいてくれたまえ」

試験監督に向かって偉そうに口をはさんでいるのを聞いたときは、双子を差し向けてやろうかと思った。

ふたたびバリバリと派手な音が大通りにこだまして、道行く人々の視線が一斉に自分達の方に集まるのを感じて、ハルは自分もつられて音のする方向をチラ見した。

黒い三角帽子を目深にかぶり、マントを口までひっぱりあげたスタイルで本を読む氷使いの少年。その隣で、何の用があってか、アルタの鎌を借りて召還した使い魔のムーンサルト（魔法陣が描ければなんでもよかったらしい）が、バリバリと口に放り込まれた餌をかみ砕いていた。盛大に宝石を崩す超人的な咀嚼音だけでも異色だというのに、見なれた時計台のそばにツキノワグマが現れたら誰だって驚くに違いない。

「あの……」

声をかけると、クルアンは微動だにしないまま

「何」

「ムーンサルトの音、びっくりするんだけど……」

クルアンはちょっと首をかしげてから、マントの内側に手を突っ込んでしばらくまさぐるようにしてから、茶色い棒状の凝固物を取り出して、飼い主の顔をものほしそうに覗きこんできていた使い魔の口に放り込んだ。咀嚼音が嘘のように消えた。通りの魔女やら剣士やらその他諸々が、たがいに首をかしげながら観光を再開させた。

ハルはぽかんとして、クルアンの横顔（というよりは鼻）と満足げな熊の表情を交互に見やった。

（魔法使いみたい）

「何だ」

もう一度低い声に聞き直されて、ハルは慌てて何でも無いと取り繕った。

しばらくして、そろそろ依頼担当の時間が満了するかしないかという時間になった頃、ハル達は一人の魔女に声をかけられた。

「時計台の見張り番って、あんたたちの事？」

ハルは南中した太陽のほどよい温かさにやられて、陽だまりの中まどろんでいたので、長身の女性にいきなり肩を叩かれて

「す、すみません、寝てました！」

思わず謝ってしまった。その様子を見た魔女は可笑しそうに腹を抱えて笑いながら、

「違うよ、そろそろ交代時間だから確認しただけだよ」

どうやら彼女も、セーン市からの謎の手紙に呼び出されてギルド拠点から出てきたらしかった。午後からは時計台の警護を自分のギルドメンバーが受け持つため、依頼満了を知らせに来てくれたらしい。

ハルが急いで謝罪からお礼に台詞を変える。その隣で、いい加減いないふりをするのに飽きたらしいミウタが、マスターの真似をして頭をぺこぺこ下げた。

「いいって、いいって。お疲れさん」

口調からして姉御肌なその魔女は、炎の魔術師（クルアンが身じろぎした気がした）で、アルデバランというギルドの臨時マスターだという。

「レグルスなんだってね？　有名所じゃん」

「ありがとうございます。私なんて、まだまだですけど」

「そうかい？優秀そうな傀儡持ってるじゃないか」

フェララと同じ色の爪で、テレジアの影を指さされた。どうやら

人形遣いだと思われたらしい。その方が都合がよかった。以前のように封印しているわけではないし、勿論黒いコートも羽織っていないから、尻尾が目立ってしまって先程から人の視線から避けるのに精いっぱいだった。ミウタとハクは揃いも揃って死んだ魚みたいなジト目で、片目を黒い前髪で隠した魔女を眺めているので、気を悪くしないかドキドキしたけれど、そこらへん、あまり気にしない性質の人のようで、赤い片目を心なしかきらきらさせながら

「一度手合わせ願いたいねえ。……それにしてもセーン市も、早く本命の依頼を通達してくれるとありがたいんだけどね、そう思わない？」

黙りこくったまま本を読んでいるクルアンの顔を覗き込むように見る。が、クルアンは珍しく慌てた様子ですばやく一歩後ろに下がり、時計台の柱に頭をぶつけた。

魔女はショックを受けたような面持ちで、自分から逃げた少年を獣に似ている強気な瞳で見つめていたが、やがて思い出したように、

「ああ、やっぱり。氷使いのクルアンってあんたのことだね」

１５３　ミウタとハク、傀儡になってみる。（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
炎使いは氷使いにとって絶対の天敵です……とけて攻撃にならないので。
炎使いの天敵は水使いになります（ここにはまだ出ていませんが）。
……不思議ですね。（お前が書いたんだろう）

［ｎｅｘｔ→植物の壊死と悪魔の穴］

１５４　植物の壊死と悪魔の穴（前書き）

タイトル大事です（、・ω・）

１５４　植物の壊死と悪魔の穴

「ああ、やっぱり。氷使いのクルアンってあんたのことだね」

「御存知なんですか？」

「有名所の同胞だからね。うちの参謀担当はそっちのと同じくらい優秀だしね」

さすが貴重種、他ギルドの人に名前まで知られているとは正直驚きである。自分も貴重種であることに間違いは無いが、まず居る居ないで議論されているうちは論外であろう。

「ところで、本命の依頼って……？」

「こんなくだらないものの見張りのために呼び出された訳はないということか」

突然クルアンが口を効いたので、魔女は一寸驚いたような顔をして、それからふっと不敵な笑みを浮かべた。

「気が合うね」

一瞬、慢心の表情を見せた魔女は、マントから指揮棒のように細長い杖と、くしゃくしゃになった紙を取り出した。そして口元でなにやらブツブツ唱えると、杖の先端から広がった炎でそれをちりぢりにしてしまった。

「この依頼書は信用できない。あんたたちも気をつけなよ、スミス市長に関しては良い噂を聞いたことがないし、近頃は嫌な事件も多いし……」

「事件？」

そんなものがあっただろうか。ハルが聞き返すと、魔女は下がってきていた紫色のとんがり帽子のつばを上げながら、訝しげに

「何、あんたたち、知らなかったの？」

クルアンに視線だけで尋ねてみたが、無反応であった。隣の使い魔は魔女のマントの匂いを嗅ぐのに夢中だ。

「どういうことですか？」

「あれま、二人とも知らないんだね。最近は本当に大変なんだよ。魔物の増加とか、植物が原因不明の壊死事件とか、悪魔の穴の目撃情報とか……」

「悪魔の穴？」

「絵本であるやつだよ。ほら、隣から食べ物を恵んでもらえなくって、逆恨みで腹を立てたバカな女が、その怒りの匂いにそそられてやってきた悪魔に丸ごと食べられちゃったってやつ！……これは知ってるよね？」

念を押される様に聞かれたが、ハルは苦り切ってしまった。再びクルアンを見やるが、本人は息もしていないかのように静かに魔女の話を聞いているだけだ。

「朧気に聞いたような気がします。あ、でも」

ハルは子供ギルドで皆に混じるのが苦手だったから、読み聞かせの時間になっても、お部屋の中に入って行くのが億劫だった。先生の甲高い声が甘ったるい調子で文字を辿って行くのを、ハルはドアの隙間からこっそり拝見するしかなかったのだ。

だから有名な昔話でも、漏れ出てくる物語をつぎはぎで記憶しているだけで、実際どんな話だったのか詳しくしっている物は少ないのだ。

「へえ、意外と知られてないもんなんだね。とにかくあんたたちが何も知らなかった間に、世間は大分変ったよ。その時計台の怪我だって、巷じゃ神話に出てくる毒蛇がかじっていて、近々完全復活して新大陸古大陸ともども食い荒らされるなんてうそぶかれてるしね」

顎でさされて、ハルは今まで自分が守っていた時計台を振り返った。

樹齢云千年はあろうかという巨大な木の幹に、凝ったデザインの壁掛け時計が立派に飾られている。振り子は三つ、どれも磨きたてのようにピカピカで、たがいがぶつかり合うと、ずしりとした見かけとは裏腹にシャンパングラスを鳴らしたような可憐な音が小さく通りに響く。

その幹の根元の辺りが、削り取られた様にえぐれてしまっていた。セーン市が警護をつけたがったのもこの傷のためだ。成程神話級の大蛇がかじったように大きく削れている。

「蛇か……」

「真に受けちゃいけないよ？たかが神話だ、おとぎ話みたいなもんだよ。でも……もしかしたら毒蛇以上に大変なことが、起きてたりするのかもね……」

魔女は指揮棒を持ち直し、面倒くさそうに溜息をつき、空模様に視線をやった。

「いやな雲が出ている」

女性の視線に合わせて上を仰げば、いつの間にか出てきた厚ぼったい暗雲が、低く、どっしりと、空に陣地を構えてしまっている。

「嵐になりそうだね」

ハルは、はい、と応えた。

１５４　植物の壊死と悪魔の穴（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
これでしばらく新キャラの登場は落ち着きます。多分……。
普段から展開はトロいですが、少し展開テンポが早くなるかもしれません。
次回の更新日は２３日です。
［ｎｅｘｔ→フェララ、デザートをくすねる］

155　フェララ、デザートをくすねる

「悪魔の穴？」

セーン市噴水記念館での豪勢な夕食を済ませ、上機嫌で宿泊施設まで戻ったハルは、新たに配られた依頼書を置き、寂しがるスーサに毛布をかけてやってから、ギルドレグルスの誇る技術者フェララの部屋へ向かった。

「うん。アルデバランっていうギルドの人が言ってたんだ、悪魔の穴に連れ去られたって行方不明になってる人がいるって。スーサは何も知らないみたいだったんだけど」

ハル達のよりもっと派手な色遣いの部屋で、こっそりくすねてきたらしいデザートのさくらんぼをつまんでいたフェララは、ああ、と、遠くの空を眺めるときみたいに目を細めて、一寸考えたのち、使っていた自作の白い機械の画面を切り替えた。電子カルマツェーダ式文字の羅列が、古大陸の建造物ピラミッドの写真に変った。

セーン・カルレ連続失踪事件のことかしら」

「何、それ」

フェララは果実の種を唇から飛ばし、機械の前から離れて、戸口で立ち止まっていたハルに入ってもよいと示した。

「お邪魔します」

拠点にいる時に、キャンバスに向かっているフェララに断りなく部屋に入ってはいけないという掟がある。いつ絵を描いているかなんて予測不可能だから、要するにいつも確認を取る。

（セーン市に来てまでやっちゃうなんて……習慣って怖い）

昇天しそうなかけごごちのソファーに並んで座り、フェララはハルにデザートのおすそわけを譲りながら、

「色々忙しくて忘れてたわ。拡張子開発とかクラッカー捕獲とか、システム上の職業は仕事が多いのなんのって」

セーン市のギルド間で話題の大事件をあっさり忘れる仕事量なんて考えたくもない。

「それほど大変じゃないわ、拡張子の開発とかクラッカーの捕獲と対策とか、簡単な依頼ばかりだから。ただ無駄に時間を食う依頼なのは確かね」

いともたやすく言ってのけるが、まず言われている単語の意味がわからないので適当に相槌を打った。

「セーン市とカルレ市の住民を中心に、一か月くらい前から突然失踪したと届け出られた人物がたくさんいるわ。目撃者の証言が稀にくっついて、市直属の軍に報告が入ってる……らしいわ、国の公式サイトによると」

「硬式サイト？」

聞き慣れない言葉を鸚鵡返しに尋ねると、

「システム用語よ、学校で習わなかった？」

「……ううん」

「あら、そう」

天才技術者から何を言われるかと身構えていたが、意外とあっさり返された。ホッとするべき所なのに、絶対過去を掘り返されると力んでいたせいか、腑抜けた溜息が洩れた。

「でも、一般市民の言っていることなん大して重要視されていないみたいね。足元に突然穴が現れて、吸い込まれる様に消えたって言うのよ？　非現実的、まず軍は信用しないでしょうね。オカルトじゃあるまいし、自分達が見たことが無い物は疑惑の対象にしかならないんだわ」

肩をすくめて首を横に振るフェララの手前、ハルは一生懸命表情を明るくしながら、無意識のうちに、ピラミッドの写真に釘付けになっているハクの乾いた目を盗み見た。闇よりも深いそれは、ハルの心と違ってオカルトという言葉に対して反応していないらしかった。

「あなた、あんまり驚かないわね。さすがテレジアサモナーね」

皮肉ではなかった。かといって、褒め言葉でもない、そんな感じ。ハルはフェララのこういう所が好きだ。変な感情が入っておらず、純粋な感想だけを述べている。有る意味人間離れしているが、人ならぬ者と生活しているハルにとっては、むしろ馴染みのある感覚だった。

「捜査は進んでいるみたいだわ。何者かに連れ去られた形跡は無し、土地にも事件を引き起こすような特徴は発見されず。完全に手詰まりね」

「フェララは、穴の証言、信じる？」

１５５　フェララ、デザートをくすねる（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
山梨は涼しかったです。青薔薇のソフトクリームなるものを食べてきました（個人的にマニキュアの味がした）。
次の更新日は２６日です。
［ｎｅｘｔ→ハル、護平の正体を知りたがる］

156　ハル、護平の正体を知りたがる

「フェララは、穴の証言、信じる？」

「私は全ての可能性を排除しない」

即答された。少々難しい言い回しをされたが、ハルはその台詞に心底安堵した。

「だって、自分が知っていることが全てだなんて思えなくないかしら？　一人が全部を把握できるほど世界は狭くもないし、もっと奥が深いものなのよ。それに、古くから伝えられている神話や童話には必ず現実に結びつくメッセージが美しく隠されているわ。おあつらえむきのハッピーストーリーなんかじゃない、本物の物語よ」

したがって、悪魔の穴が存在する可能性は十分にある、という結論を叩きだして、フェララは食べ終わったデザートの器の中身を屑かごに放り込んだ。

「悪魔の穴って、悪魔が住んでるの？」

悪魔の存在もまたあやふやだ。こればっかりはハルも疑わずにはいられなかった。フェララはからっぽの皿を弄びながら眉を寄せて、

「そもそも悪魔の定義が曖昧だから、何とも言えないけれど、目撃情報を信用する側に立って考えて見れば、童話に出てきた悪魔と少なからず似通った性質を持つモノが棲んでいる、ということになるわ」

『怒りの匂いにそそられてやってきた悪魔に丸ごと食べられちゃったってやつ！』

興奮気味に語っていた、アルデバランの炎使いの声がよぎった。

「怒り、か」

怒りを食べ物としているならば、真っ直ぐテレジアの所に向かってきそうなものだ。なんせ、死人の怨霊の塊なのだから、尋常な強さではない。魔力とおなじように感情にも匂いがあるならば、いつかテロリストの討伐でテレジアが見せた暴走を起こしているかもしれない。

もしかして、そのせいでセーン市とカルレ市が多いのだろうか？自分がいる場所だから？

そして怒りの渇望による暴走故に、道端の怒りを手当たり次第に喰っているとしたら？

不意に背筋がぞわりと冷えて、ハルは顔をこわばらせたまま何も言えなくなってしまった。

「ちょっと話飛びすぎじゃないかしら？」

落ち着きなさいよ、と笑われて、ハルはなんだか身体中がむずがゆくなってきた。

「確かに、ハルの言ったことを全否定はしないけど、証拠がない。状況証拠さえないわ。それに――」

フェララは一度言葉を切った、言うべきかどうか迷っているみたいだった。

「それに？」

身を乗り出すハルの様子を、エメラルドの瞳がばっちりと見据えた。

「――悪魔はテレジアを襲えない」

恐らくね、と付け足されたが、ハルは緑色の鋭い瞳孔を呆然と見てしまった。

「どうして？」

「そんなこと本人（テレジア）に直接聞きなさいよ、私の机上の説明文をだらだら話すより体験談の方が判りやすいし語弊（ごへい）も少ないでしょ？」

「護平（ごへい）って誰？」

「いいから聞いちゃいなさい」

どうやらフェララにとって話す価値があるのは、ここまでらしかった。悪魔については部屋でテレジアからゆっくり聞くことにした（といっても、気分屋だから呼んで素直に出てきてくれる気がしないけれど）。ハルが話とさくらんぼの礼を言い、退室しようとした丁度そのタイミングで、

「そういえば、クルアンのことだけれど、他で預かってもらう事に

したわ」

思わず身体ごと振り返る。ハルの表情を読み取ったのか、こちらが口を開く前に、

「あなたにお願いしたことは忘れていないわ。ただ、あの発熱のおかげで今は魔力過多がおさまっている。他人の近くにいて、どれだけ保険が効くのか把握しておきたいの」

「……保険？」

「発熱したあと、何日間オーバーランの危険から離れていられるかってこと」

「でも、実際に起きなきゃ、わからないよね？」

「オーバーランの予兆の頭痛くらい、いい加減あの子も気づいたでしょう。起きる前に本人が気づいて戻ってくるわ」

よっぽど強がりでなければね、と付け足されたせいで、ハルは余計に心配な気持ちが、晩冬の雪のように残されたまま部屋から追い出された。

小さな子供をあやすかのように、なだめすかして部屋から帰らされたので不思議に思い、外からドアの鍵穴を覗いてみると、フェララは古大陸の三脚によく似た美術の道具に、いそいそとカンヴァスを立てかけている所だった。

（ああ、成程）

この光景だけでベッドへ急きたてられた意味が判る辺り、自分もレグルスの一員として活動して、大分慣れてきている証拠だ。ハルは夏空の下一人、安心したようなびっくりしたような、何ともいえないくすぐったい気分でほくそ笑みながら自室への大理石の道を走って行った。

１５６　ハル、護平の正体を知りたがる（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次回の更新日は２９日です。
［ｎｅｘｔ→アルタの手記］

157　アルタの手記

ジュリ――オッテ（7月8日）

今日はクルアンの包帯の交換と、傷口の小さな手術をフェララと二人でしました。本人は怪我をした時の事をあまりよく覚えていなかったのか、呼び出された時は狐につままれたような顔をしちゃって、本当、面白かったです。

でもあの大怪我の治療中、音をあげなかったクルアンの、ベッドにうつ伏せに臥している横顔は冷静すぎて、少し怖かったです。枕に爪を立てる仕草が無ければ、痛みという感覚さえ、感情と一緒に消えてしまったのかと思ったかもしれません。

ただ今日は、熱が下がった直後だから大丈夫だろうと、フェララに魔法を使う許可をもらいました。勿論あんな大きな傷では、許された制限内での魔力じゃごくわずかの治癒でしたが、私の治癒魔法がちゃんとクルアンの痛みをやわらげてあげられたなら、私はギルドの長として、幸せ者だと思います。

あんな事を聞いたあと、クルアンとゼスト君を同室に移すのは不安だったけれど、ゼスト君はいつも通り元気がありあまっている感じで迎えに来てくれたし、共同生活で注意するべき点までしっかり聞いて行ってくれました。ゼスト君は正直かなりいい加減なイメージがあったけれど、意外とそうでもないみたいです。本当はクルアンにもあいさつしてもらいたかったんだけど、念のためとフェララが打った痛み止めの副作用で、昏々と眠り込んでしまっていました。ああいう時、飛べるウィンカは便利。

明日は早朝からギルドマスターの集合会議があります。新依頼の配布だそうです……今度はもう少しマシな依頼だといいんだけど。スーサは制限時間二時間の討伐依頼を三十分で済ませてきて、あとはずっと、風のウィザードの送風機制作を錬金術で補助していました。スーサはいつでもやる気いっぱいだから、私も負けないようにがんばらないと。

それでは、またあした。

手帳の内側についている輪っかに黒い軸のボールペンを納めて、アルタは手帳をとじた。大きく溜息をつく。

「やっと一日ね。ながかったわ」

窓の外では月が光眩く天地を照らし、空は全体的に青白かった。月を囲うようにゆっくりと流れる夜雲が、風情のそれをにおわせている。

アルタは一日中依頼をこなし、酷使した喉に水を流し込んだ。流しに置いたガラスのコップには、水滴が水滴を移している。

アルタの依頼は、セーン市の軍隊の怪我人を治癒するというものであった。それなりの報酬を弾むと約束されなければ、こんなセーン市の独裁的な依頼は絶対受諾したくなかったのだが、誘惑に負けた。絵が描きたいからという勝手な理由で、自室でできる依頼のみを受け取ったフェララより、今日は稼ぎが多い。フェララを越え

る稼ぎなんて絶対できないと思っていたのに、これが実現できてしまうのだから、人生ってわからない。

しかし……治癒術をつかうのなら、クルアンを一番に優先してあげたかったと、思う。

クルアンの傷口は、V字型に大きく削れていた。どうりであんなに血が出たものだ、骨が見えていないのは奇跡的な事だと、レグルス自慢の技術者兼女医フェララが目を丸くしていたのがなぜだか頭から焼きついて離れない。掌に集めた癒気（神の力を借りて、生けるものの患部を「なかったこと」にする魔力のことを、プリーストの業界ではそう呼ぶ）を怪我人の背中にあてがった時、枕に食い込んだ爪さきが少し和らいだのを見た瞬間、夏の暑さが胸にとびこんできたかのようにじいんと全身が熱くなった。

アルタは、自分の気持ちに気付き始めていた。自分自身が救われるだけではけっして満たされてくれない、我がままな心を持っているということを、クルアンの一件で痛いほど感じていた。

アルタは小さな日記帳を、大事に大事に両手で包み込んだ。そして不意にくすぐったくなって、一人でそっと笑った。

「完全消灯時間です。館内に宿泊している地方ギルド・市直属ギルドは消灯し、明日の戦闘に備えること。以上」

感情を消し去った機械的な女声のアナウンスが部屋内に響く。風の魔法使いが使う魔術で、建物中に一つ一つの音を届かせているのだ。

セーン市は魔法の有効活用が進んでいる。

なぜならセーン市は、希望の都市だから。

古大陸に残った人達の進んでいる方向は異なった、もう一つの隠された、人々の、願いを、かなえる、未来都市だから。
それでもセーン市はまだ、進化を続けようとしている。

私はその進化にちゃんとついていけるだろうか。

止まったまま動いて行く新大陸の時間に、呑みこまれたり、取り残されたり、しないだろうか。

たった一つのアナウンスに、色々と考えを巡らせつつ、アルタは紫の天蓋がついたふかふかの寝台にそっと身体を休ませた。アルタが布団に入るのを待っていたかのように、光の魔法を閉じ込めたランプが、一斉に消灯されるのが、閉じたまぶたのむこうで判った。

１５７　アルタの手記（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次の更新日は９月１日です。夏休みももう終わりですね…（作者はゆとり出身です）。
［ｎｅｘｔ→弾丸のあと］

158　弾丸のあと

「よっ」

ハル達が待機班の持ち場所に向かうと、すでに先客が足の削れた木製のベンチに座っていた。

「あ」

ハルは思わず呟いて、翼の生えた青年の元へ駆け寄った。

昨日の天気の反動で、今日は絶好のひなたぼっこ日和だ。その空の青色に、白い翼はよく映えている。

「おはよう。今日は合同任務だってね」

よろしく、と、にかっと笑って、青年はハルとクルアンの髪をクシャクシャにした。あんまり強くなでるものだから、乱髪にされちゃ大変とハルは慌てて青年の掌から脱出した。クルアンもそれにならって抜け出し、青年の手が触れた拍子に飛ばされた三角帽子を取りに行った。

「おはよう。ゼストはどうしてここにいるの？　配達依頼は？」

と挨拶がてらに尋ねると、ゼストはにかっと笑って、ゆらゆらと風にあおられていた羽根を大きく広げた。

「よそ見してたらここ撃たれた」

運び屋のの特徴である神秘的な翼の片方に、焼け焦げたような円形がくっきりと見て取れた。これでは飛行が安定しないため、専門分野である配達依頼は受けられないらしい。翼の損傷はヒーラーには治せないので、その部分は安静にせよとの指令を受けたのだそうだ。ハルが傷痕をそっと撫でて見ると

「痛ぇよ」

ツッコミとともに頬を引っ張られてしまった。

「いひゃい……あ、クルアン、この人ゼストっていうんだ。仲間の人だよ」

突然頭をなでられたせいか碧眼を丸くしてゼストを見ていたクルアンは、ハルの知り合いと判ると安心したのか、警戒の視線を解いた。

「そか、そういや初対面だったな。」

悪い悪い、と気さくに手を差し出す有翼人の少年だったが、逆サイコメトリーの持ち主は握手に応じようとしない。代わりに横目でハルを見た。手を触れないということを察してハルはクルアンの握手代わりに、改めて

「レグルスのギルドメンバーのクルアンだよ。氷の魔術師なの、よろしく」

ほう、と声をあげ、ゼストは不思議そうに引っ込めた手を見たが、すぐに顔をあげて笑った。

「……ハルたんと一緒の部屋って言うのも、うらやましいね」

どうやら彼は、ハルに好意をよせているようなのであった。

「ハルたん色々危なっかしいんだもんな、そこが可愛いんだけどな」

「え、そうかな……」

《もう危なっかしくはないぞ》

突然、ミウタを通じてテレジアが声をあげた。

ハルは場の空気が凍りついたように思った。

《我々がマスターを守るのだから》

「じゃあ、テレジアと俺はライバルだね」

「へっ？」

ゼストはあっけにとられているハルの後ろに目をやり、やえばを見せてミウタとハクを指さした。

「俺とその幽霊の二人組、どっちがハルたんをちゃんと守れるか。競争だよ」

茶目っ気たっぷりにウィンクして、ゼストの長い腕がハルに伸びてくる。

「え、え！？」

遠慮なく抱きしめられて、ハルはあたふたする一方で状況整理をしていた。

（ゼストはミウタ達と普通に話してる……んだよね）

幸い、ゼストの身体は尻尾に一ミリも触れていない。腐る心配はないものの、なんとなく不安でさりげなく離れようと胸を押してみたが、なんということかびくともしない。

「ハルたん照れちゃってかわいー」

そんな仕草されちゃ簡単には離さないよ？と、テレジアに喧嘩を売る様な発言をする。ハルが真っ赤になってされるがままに髪をぐしゃぐしゃにされている間に、依頼書を預かっていたクルアンが文面の簡単な説明をした。

「……つまり、二人が死なないように戦闘依頼について行けってこと？」

ゼストの注意が依頼書に向いた隙に、ハルは緩んだ青年の手から脱走してクルアンの隣に行った。ゼストは人間じゃないからか、ハルより体温が高い。夏の照りつけるような日差しの下ではじきに汗だくになってしまう。氷使いの発する冷気のそばに立っているだけで、すうっと汗がひいていくのがわかった。

「有名魔術師とテレジアサモナーについてって、俺がすることなんてないと思うんだけどね。ま、いっか」

ゼスト、頬を膨らませて、手渡された紙切れをつまらなさそうに

ぺらぺら振った。

「言われるほど強くない……巷の口伝えで事が大きくなっただけの話だ」

「またまた、謙遜しないで。クルたんの健闘は砂漠の上空からちゃんと見てたよ」

（クルたんて……）

クルアンも同じことを思ったらしく、帽子を目深にかぶりなおし、マントを思い切り引き揚げた。防衛本能丸出しの行動に、ゼストは全く以て気づいていらっしゃらないようで、軽い足取りで黒い魔術師に歩み寄ると、右手を差し出した。

「はい、お近づきの印」

クルアンは握手には決して応じない。やっぱり、ハルの方を見てきた。

「ゼスト」

「ん？」

幼い子供のように無邪気な笑顔で首を傾げられて、ハルはうっとつまったが、

（だめだめ、私がしっかりしないと）

「クルアンは色々事情があって、手を繋げないんだ」

ゼストは思いっきり不思議そうな顔をした。

それから何を思ったか、さっきのハルと同じように、背中の方に腕を伸ばした。

（えっ）

１５８　弾丸のあと（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
ゼストのターンは色々と込み入った話になりそうです；；
次回の更新日は４日です。
［ｎｅｘｔ→クルアン、魔道書に飽きる］

１５９　クルアン、魔道書に飽きる（前書き）

少々グダグダになってしまいました……
読みぐるしい方は次回のまえがきをご覧になってください。

159　クルアン、魔道書に飽きる

（えっ）

クルアンが身じろぎする前に、ゼストが大きな翼とともにクルアンに抱きついていた。

「お、つめたい」

（えー……っと）

「……握手の代わり」

ゼストが抱きつき魔であると、ハルが確信した瞬間であった。

「あんだよ、やんのかよ、え？」

「だーかーら、違法に人を殺して、物を奪って逃げてんだろ？　とうとうセーン市直々に駆除命令が降りたんだ」

「あああああ？駆除だと？もっかい言ってみろこのヤロウ！」

「まーまーまー、おちけつおちけつ」

ハルとクルアンは目を点にして、依頼仲間と討伐対象の不毛なや

りとりを呆然と眺めていた。

「今、直属ギルドに出頭すれば、死ななくてすむかもしれないし、盗んだもの返せば、そんなに罪状重くないって。だから俺らと一緒に来て」

ゼストは目の前の、いかにも強盗ばかりしていそうな柄の悪い大男三人組に、あろうことか依頼内容を無視して、セーン市に出頭するよう説得していたのだ。しかも顔つきを見れば、どうやらいつもハル達にかましている冗談ではなく、真面目に誘っているようであった。

「てめえらみたいなクズが言ってることに、はいそうですか、なんて言うと思うのか？この俺が！」

ゲラゲラと下品に笑うブ男の、黄色くヤニのついた歯が見えて、ハルは思わず眉根を寄せた。ゼストの白い羽根に、一番似合わない汚い色だ。

「あの青年は先程から何をしているのだハル」

不思議そうな、しかしどこか面白がっているような口調で尋ねてくるミウタに、ハルは苦笑いで返すしかなかった。ハクは周りに木枯らしでも吹いていそうな、乾ききった視線で二人のやりとりを眺めている。二人ともかわいらしく小首をかしげて、切りそろえられた前髪が夏風に揺れている。

「しつけーんだよ！殺すってんならやってみりゃいいじゃねえか。え？どーなんだよ直属ギルドのおぼっちゃま！」

「そうだよ、俺たちは生きるために仕方なくやってんだよ。お前はいい子いい子されて生きてきたんだろうが！」

かわるがわる暴言を吐く三人組に、ゼストもさすがにカチンと来たのか、襟首をつかんだ男の首をゆさゆさしながら

「そんなことないって」

子供みたいな勢いで抗議しはじめた。揺さぶられた方の盗賊は目を白黒させている。

クルアンは本を読むのさえ飽きたらしく、帽子のつばをこすりながら先の見えない話が終わるのを待っている。ミウタとハクはといえば、相変わらず興味津津で運び屋の青年に見入っていた。

「ゼスト、もういいよ、戦おうよ」

とうとうしびれを切らして、ハルは進言した。戦うという単語を口から発した瞬間に、両隣りの双子のまとう雰囲気がさっと険呑なものにかわった。

《マスター、一人は魔術師だ。あれを狙う》

つかみあっていた四人が、一斉にこちらを振り返る。

「今の、誰？」

ゼストが首をかしげて尋ねてくる。ハルが応える前に、ミウタの口が裂けるほどにたりと笑った。

《うまそうだ》

般若の面のような満面の笑みに、ゼストの笑顔から若干血の気が引いた気がする。

「あの姉ちゃんはやるってよ。お前はどうすんだ」

「あれ、律儀に聞いてくれんの？　変な盗賊」

「へっ、一応礼儀ってモンがあるだろ」

盗賊に礼儀だなんだと言われても、正直笑いだしてしまいそうな話であった。が、盗賊と運び屋は、なぜか固い握手を交わした。

と、ゼストが手を握るや否や、男は吹き出して大笑いしだした。

キョトンとしているゼストの手前、ハルはつられて笑いそうになるのを必死でこらえていた。クルアンは口を半開きにして、冷めた目で畳まれた白い翼を眺めている。

「お前面白れぇ奴だな。気に入った！　名前ぁなんてんだ」

１５９　クルアン、魔道書に飽きる（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次の更新日は９月７日です。
［ｎｅｘｔ→死をかわす風］

１６０　死をよける風（前書き）

ハル・クルアン・ゼストは討伐対象のもとへたどり着き、レグルスの二人はいざ戦闘を始めようとする。しかしゼストはなぜか討伐対象の盗賊を出頭するよう説得し始める。しびれを切らしたハルが戦闘を促すと、盗賊は戦闘前の礼儀としてゼストに名前を尋ねてきた。

１６０　死をよける風

「お前面白れぇ奴だな。気に入った！　名前ぁなんてんだ」

「ゼスト。アポロンのゼスト」

三人組のうち首をつかまれていた中太りの大男は、満足そうにうなずいて、自分のむなぐらを親指でさした。

「俺ぁドルガス。下っ端のは1号2号ってんだ」

（なんか、討伐しにきたっていうより……）

友達を探しに来た、の方があっている気がする。

「時間が無い。かかるぞ」

不意にクルアンのテノール調の声が、ゼストをドルガスと名乗る討伐対象から引き離す。

両者は武器を抜いて、向き合った。

「敵は三人。武器から見てもやはりあれは魔法使いだぞハル」

ものほしげな顔で指差すので、ハルは溜息をついて、

「わかったよ」

自国語の発音に、物珍しげな顔をした盗賊達。

次の瞬間、討伐対象の残り人数は一人になっていた。

「……えっ？」

その数秒の間、動いたニンゲンは一人もいなかった。

太陽の熱にとかされてしまったかのように、ドロドロと地面に広がる人の肉塊。塊ですらないその姿に、男が、ドルガスが悲鳴をあげて後ろへ飛び退った。

「な、な、……！！！」

「ゼスト、そこどいて！」

慌ててよけるゼストの耳を、テレジアの影の二人が突っ切って、恐怖におののいている盗賊の頭に手を伸ばした。

と、目の前からドルガスの姿が消えた。

「ハルたん、上！」

言われた方向を見上げると、ものすごい風をまとった大きな人影が、上空からこちらめがけて勢いよく突っ込んでくるところだった。咄嗟に前転して墜落の衝撃をかわし、近場にいたハクを操作する信号をだそうと頭を集中させる。

自分の意志を声に出すのは、リスクが高い。そこそこ有名なニホン語なら訳され、行動を先読みされてもおかしくない。もうテレジアとの脳の連結はすっかり慣れたから、指令も集中して脳から出さ

なければ……と思っていた矢先、

「クリスタルガーディアン」

頭上で何か硝子に当たったかのような鈍い音がして、集中力が一気に途切れた。信号の受け取り途中だったハクがうまく動けずよろめいて転ぶ。続きの信号をうまくつないだミウタが、クルアンのだした障壁で阻まれたドルガスに飛びかかった。

頭の上の氷一枚に大きな男が乗っているというのは結構怖い。ハルはいそいで下から脱出し、ミウタがドルガスの首に触れる脳内イメージをした。

「逆だハル」

叫ばれて振り返れば、手を伸ばした赤い着物の少女の攻撃は見事に宙をかすり、その姿を横切って大きな影がハルの前に立ちはだかった。

乱髪に風をまとったドルガスの黄色い歯がにぃっと笑った。

「触んなきゃいい話だな……フォーン・タ・レン」

びゅるるっと衣服を切り裂く音がして、腹部に痛みが走った。傷口を押さえるや否や、地響きに似た不吉な音がして、胸を何かでひどく打たれ、ハルは空中に舞い上がった。尻尾が引きちぎられる様に傷んだ。

「けほ……っ」

「ハルたん！」

温もりにそっと包み込まれ、ハルは慌ててテレジアの双子の尻尾をつかんだ。宙ぶらりんになっているのがゼストに当たったらまずい。

「ありがとう……って、あれ？ゼスト飛んじゃいけないんじゃ」

「んなこと言ってる場合か！　あいつ滅茶苦茶強いって……あ、クルたんも危ないかもっ」

ハルは抱かれたまま地上を見やった。

四角い氷の盾が、太陽の光を反射してクルアンの姿を隠している。そこにドルガスの放つ風魔法が、細かく切り傷をつけていた。あのまま行けば壊されてもおかしくない。

（爆弾に耐えた防御壁に傷をつけるなんて）

１６０　死をよける風（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
色々と忙しくて更新遅れましたごめんなさい。
近代史が死にそうです（試験前）。
次回更新が三日後にできるかどうかわからないので予告ができません＞＜
なるべく三日ペース乱さずに更新していくつもりです。
［ｎｅｘｔ→流れ者の怨恨］

161　流れ者の怨恨

（爆弾に耐えた防御壁に傷をつけるなんて）

「どうりで俺について行けっていったわけだ、あのキノコ市長。並大抵の魔術師じゃないね、ありゃあ」

「クルアンの壁は爆弾にも壊れなかったのに」

「マジで!?そりゃすごい。でもさハルたん、クルたん強そうだから俺達適当に上にいない？ハルたん、攻撃当てるの相当難しいっしょ」

「いいから降ろして！」

お気楽な意見を有無を言わさず遮る。

地面に降り立つとすぐ、ハルはドルガスの背後に回り込み、護身用のパペットを幾度か強く噛み合わせた。音に気付いた盗賊の男は、振り向きざまに手にしていたナイフを振りかざした。

脇が甘くなったところをハルは見過ごさなかった。

（今だ！）

ハクの手を一直線に、首筋に向かわせる。肌色と白色との距離は、ごくわずかだった。

しかし、あっさりとかわされる。

「風を操る人間が簡単に殺られてたまるかよ！」

どすの聞いた声が詠唱を始める。普通のよりずっと長いものだ。かなりの威力を想像して、逃げ回っているゼストの所へ向かうと、後ろから追ってくるのがわかった。

（どうしよう）

風使いに走りの速さで勝てるわけがない。

「チラースピア」

突然耳をつんざくような爆音が、抉れた土埃をもうもうと視界にけぶらせた。やったかと思い後ろを確認すると、敵はちょうどハクとミウタの間に突き出した氷の巨大な刃の光を見事に避けて、クルアンの魔法を踏み台にしてこちらへ迫ってくる所だった。

「アイシクルエッジ」

地面に見覚えのある渦巻き模様が、中央に冷たさを宿して現れるが、ドルガスは攻撃を予知しているかのように、飛び出してきた氷の大剣を素早く避け、ハルの頭上を通り越した。

ゼストを狙っているとすぐにわかり、パペットの歯で足首をとらえようとするが、ハルの腕では届かなかった。

「ゼスト！」

「お前は戦わねえのかよ、え？」

ゼストの苦しげなうめき声が聞こえる。目を向ければ、ゼストの首元に、盗賊のいかつい手がしっかりとからんでいた。その上からゼスト自身の掌がかぶさっている。

「逃げてばっかじゃ生きていけねえんだよおお！」

強く首を絞められて、ゼストは声も出ないようだった。宙ぶらりんになってて、ただつらそうに顔をゆがめている。

（クルアン）

背後の氷使いを振り返り、頼み込むような視線を送ってみる。ハルの攻撃よりは、はるかに風に追い返される可能性が低いから、ゼストを助けられると思ったのだ。

でもクルアンは、首を振り、でこぼこになった不安定な地面をこちらに向かって歩いてくるだけだった。詠唱はしていない。

「お前は盗まなきゃ生きていけないような人生してなかったんだろ!?　俺らなんかよりずっと幸せに暮らしてきたんじゃねえか！」

ゼストを、いや、犯罪者でないものを完全に罵倒し、否定する台詞だった。自分に向けられたように感じて、ハルは土を握る拳に力を込めた。

「犯罪に手を染めるから落ちぶれたんだ」

１６１　流れ者の怨恨（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
金曜日まで試験らしいです（人事）。必死で二クロム酸カリウムの化学反応式覚えてます。
次の更新日は１７日です。

162　ハル、クルアンの手をひっぱたく

「犯罪に手を染めるから落ちぶれたんだ」

考える前に言葉が出ていた。クルアンの凍てついた手が肩に置かれるのを、思い切り振り払う。パンッという小気味良い音が響いた。

ハルの言葉は、怒り狂い、わめいているドルガスには一ミリたりとも届いていなかったらしく、ただ運び屋の青年の首元をおさえつけながら、

「新大陸に来たら何か変わると思ってたのに、結局金が必要で、俺みたいなツラのやつはギルドにすら入れない、仕事がなくてくすぶってくしかねえんだよ！」

生き残りたいなら剣を抜け、と、男は叫んだ。他の二人は自分を殺す覚悟があるのに、お前にだけ欠けているのはなぜだ、最初に喧嘩を売って来たのは誰だ、と。

どれもこれも、聞いているだけでイライラしてくる内容だった。しかし一つ一つに妙な道理が通っていて、切実さが詰まっていて、どうにも言い返せない。ここで攻撃をしたら、かえって自分が卑怯になってしまう気がした。

（もしかして）

ハルはハッとしてクルアンを振り返った。自分が膝をついているせいで、帽子のフェイクファーの下から青く鋭い目が見えた。

自分と同じ瞳をしていた。

『卑怯なことはしたくない』

再び、ハルを抑制するように肩におかれた掌から、感情が流れ込んでくる。

「俺……だって、ずっと、幸せだった、わけじゃ、ない」

耳元で微かに聞かせるような、音のない言の葉が、押し殺したように囁いた。

「ゼスト……」

歯をくいしばって、ゼストは首にかかる力の苦しみに耐えていた。討伐対象から逃れようとする両手が、ぎこちなく震えていた。

「けど、今の幸せは……自分で、掴ん、だものじゃない……だから、必死で生きている君に、剣を向ける、ことは、できな」

「ふざけるな、このガキがぁ！」

盗賊の大男が両手に力を込めたのを見て、ハルは急いでミウタをドルガスの首筋に差し向けた。

地面を片足で強く蹴り、逃げる隙も作らせないほど早く動かそうと、ハルは神経を研ぎ澄まし、最高速の攻撃を繰り出したつもりだったが、相変わらず風の力でたやすくかわされてしまう。引きずられるように動いたゼストの体がぴくりと跳ねた。クルアンはまだ、動こうとしない。

青い目がこちらを見た。何の温度もない、冷酷な瞳孔が、帽子のつばに隠れて光っている。

（何でよ）

こんなに苦しがっているのに。

魔術でテレジアの殺意をよけた風使いの大男は、自分の飛び上った反動を利用して、ゼストを地面に思い切り叩きつけた。背中の衝撃と、息をとめられていた所為（せい）で、息苦しく咳込む青年を見て、ハルは本当に我慢ができなくなった。

私がどんなに卑怯になっても、この男みたいには及ばない。

目を閉じて意識を集中し、まぶたの裏に双子の影と、ドルガスの姿だけを映した。本来ならばテレジアサモナーはこうして、狙った者の生気だけを視て攻撃するのが基本なのだ。

ハルはあまり慣れていなかったが、このさい試してみるのも悪くない。

闇色のまぶたの中、二人の姿が青白い影になってくっきりと現れた。ハルは無駄なものを意識の外に追い出して、じっと狙いを定める。

肩をいからせた盗賊の肩が上下して、なかなか照準があわない。ゼストを罵倒する言葉をシャットアウトしているから、何を叫んでいるのかわからないが、激しく不満を撒き散らし、ぶつけていることだけは気配で判った。

肩に触れたままの冷気さえ意識の外に放り出したその瞬間に、青白い靄のフォーカスがぴたりと合った。

闇の中にともった月光に似た命の影が、首に触れようと手を伸ばす。ハルは薄く目を開けた。そして今度こそ息を呑んだ。

疾風のごとく動いたハクの攻撃を、阻止しているものがある。

それはドルガスの風でも、剣でもなかった。

土埃に汚れた、大きな羽根の集合体だった。

１６２　ハル、クルアンの手をひっぱたく（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次の更新日は２０日です。
［ｎｅｘｔ→風を操るものｖｓ風にのるもの］

１６３　風を操るものｖｓ風にのるもの

立ち上がったゼストが討伐対象を庇っていたのだ。ハクが触れた場所から、翼にじわじわと穴が広がっていく。テレジアが腐食している。

ハルは脳の指令で、有翼人からテレジアの影をひっぺがした。液状化した翼は、もともと白しかないせいか、地面にボタボタと落ちる水は乳のように白かった。

息がつまる。

「なんで」

視界がけぶる。瞳孔が揺さぶられて、人影が二重にも三重にも見えた。

まただ。また人を傷つけた。死なせていたかもしれないのに、目を開けなきゃゼストの存在すら把握できなかった。

もっと高度な技で、精密に気配を感知し集中していれば絶対に方向転換だってできたのに……

「こいつは俺が戦う」

片翼の一部を失った運び屋の口が強く言葉を紡いだとき、氷の手がハルの手首をそっと掴み、後ろへ下がらせる。

「……本当に一人でいかせるの？」

クルアンはちょっと考えてから、

「有翼人（ウィンカ）は風の扱いに長けている。当たらないお前や、照準が粗悪な俺は、逆に足手まといだ」

しゃべるたびに、マント越しに耳元に冷気が吹きかける。

でも、と言いかけて、ハルはにらみ合っている二人を振り返った。

凶悪な風の魔術師は、わけのわからない奇声を発し、猛獣の、喉からつま先の、地面に轟くほどに太く重く咆哮した。鼓膜が揺れて、視界もぐるぐる回った。

なんて大きな声なのだろう、とハルは思った。世界中に自分の不満を撒き散らせるほどの叫び声だった。

「そうだ、戦うんだ。負けた方が死んで勝ったほうが生きる。そこに人情も道理も、要らねえんだよぉ」

叫び声をあげ、小剣を持った手を振り回しながらしゃべるドルガスの横顔は、最早化け物にしか見えなかった。少なくとも、武器も持たずに身構えたゼストと同じ世界に、生を受けたとは思えないほど、怒りに満ちていた。

「それは、どうかな」

ゼストは、さっきまでずらかるみたいな発言をしていた人格はどこへやら、息を整え、真剣なまなざしのまま二、三歩下がり、片足のつま先を地面にトンとつけた。

「ドルガスは今も道理を信じているように見える」

ドルガスは青年の一言に、瞠目したようだった。手あたりしだい、言葉を選ばず、ただ武器を振り回していた腕が止まった。

「戦う前に名前を通達するのは、礼儀……新大陸に古くからある信仰だ。君はそれを、今も、律儀に守ってる」

道理を消し去った人間がどうしてそんなことをするのかな、と、ゼストは討伐対象を見据えた。

「俺は戦ったことはないけど……いまなら討伐対象って呼ばれる人達がなんなのか、わかった気がする……クルたん」

ハルはクルアンを見た。クルアンはちょっと考えるようなそぶりを見せてから、口の中で魔法を唱えた。

小さな戦場の静寂を突き刺す、氷の剣の音。少々砂埃が立ち、ミウタが目をごしごしとこすった。

クルアンは自分の出した攻撃魔法の太い棘の根元に、詠唱で透明の板をはさんだ。ガラスが割れるようなぴしりという高い音がして、じきに氷できられた氷の剣がゼストの手のひらにわたる。

ゼストの大きな手が、太い剣の根元を握った。

青年の横顔が、討伐対象を見据えた。

青嵐にはためくクルアンのマントが音をたてた瞬間、ドルガスが

大きく咆哮しながら、小剣片手に手負いのゼストの脇腹めがけて勢いよく突っ込んでいった。

１６３　風を操るものｖｓ風にのるもの（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
今日、学校の文芸部の大きな仕事が一段落着きました（；∀；）これで少しは小説に時間をまわせそうです。
次の更新日は２３日です。
［ｎｅｘｔ↓アルタ、追悼をささげる］

１６４　アルタ、追悼をささげる

腕を組んで仁王立ちしているフェララの傍ら、アルタは身を縮めて、ギルド・アポロンのメンバーの顔色をうかがっていた。

アポロンはゼストはじめほとんどの有翼人が所属している配達依頼専門ギルドである。かなりの大人数が登録されているため、細かく班に分かれて管理されている。ゼストはそのうちの第五班所属で、幼い少女である班長を除いては第五班のうち最年少ということであった。

「もう少し要求内容を明確にしてから、出直してきて下さる？」

失礼極まりない台詞をぺっと吐いて、ツンとそっぽを向いたフェララの横顔に、副班長と名乗る三十前後の女性運び屋の、もともと険しかった表情がもっと物騒なものになった。

「ゼストを連れ戻して下さいと言っているんです！　あの子は左翼に怪我をしているんですよ？　なのに討伐依頼なんて」

「あの……一応確認させていただくと」

この空間において絶滅したと思われる穏便という言葉に追悼を捧げながら、アルタはおずおずと手をあげた。苛立ちをあらわにした視線がこちらを一瞥する。

「私達の討伐依頼の補助にゼスト君を指名したのは、セーン市の方なんですけど……」

「断ってくだされればよかった話です」

ぴしゃりと言い切られて、アルタは

（こりゃ駄目だ）

と、内心溜息をついた。

ゼストを討伐依頼に同行させたことに、不安を感じた第五班の面々が直々に話をしにきていたのだ。最初にノックされたとき、フェララに対応してもらったのがまずかったと思う。というか、フェララは客人を邪見にしすぎている感じがする。

「アポロンの有翼人はもともと、戦闘向けに養育されていないんです。新旧大陸に名を馳せた最高技術者（ナイルカント）とあらば、御存知だと思っていましたが？」

「戦闘経験がないからといって、敗色が濃くなるとは限らないわ。確かに一般論を適用すればあなたの論理は通じるけれど、それ一本じゃダメね。大体テレジアサモナーと優秀な魔術師が同行しているのだから、まず失敗することは無いと思うけれど？」

「あなたの言葉を返すようだけれど、優秀だからといって負けない保障はないわ。だから心配なんです」

運び屋の女性は額に手をあてて重苦しく溜息をついた。そのまま黙り込んでしまった女性の代わりといっては何だが、以前ゼストと一緒にいたミラノという第五班班長が、たどたどしい大陸語を喋り出す。相変わらず大袈裟なジェスチャーを混ぜて、

「今回の相手、風の魔法使い。とても強いです。セーン直属の剣士ギルド、追いつけなかったです。風を使って、色々技使う」

実際、彼には何度もセーン直属ギルドの戦闘メンバーを差し向けているが、大がかりな魔法の前に誰も太刀打ちできなかったというのだ。

「そんなに強い相手だったの？」

「レベル４って書いてあったでしょう。依頼書に。読んでなかった？」

ひそひそ声で尋ねると、呆れたように肩をすくめられた。

「とにかくレグルスの判断で彼を行かせたのですから、レグルスの方々が対処するのが妥当では？」

フェララの赤い唇が、拉致が明かないわね、と呟いたのをアルタは聞き逃さなかった。

フェララはにこりとアポロン第五班に作り笑いを飛ばし、自室の机上にずらりと並べてある書類の束から一枚を素早く抜き取り、棚に備え付けられたボールペンで流れるように文字を書いた。

「これで承諾して」

マニキュアの塗られた爪さきで用紙の端をつかみ相手に見せる。五班の副班長は見るなりギョッとして、信じられないという驚愕と、若干呆れも入ったような表情で、班員に目配せした。

「行くの？　行かないの？」

１６４　アルタ、追悼をささげる（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
今日は山梨に行ってきました（また）。山の上って寒いですね。
次の更新日は２６日です。
［ｎｅｘｔ→ゼストの最後の頼み事］

１６５　ゼストの最後の頼みごと

「い、行くけれど……これを依頼として受け取っていいのかどうか」

「いいのよ、致し方ないわ」

再び笑顔を見せるがどことなく毒々しい雰囲気を併せている。アルタはあまり目立たないように、フェララの書いた依頼書をチラ見した。

『民間ギルド依頼書

ギルド名：レグルス

指名ギルド：アポロン一第五班

依頼部類：配達依頼

依頼詳細：アポロン第五班所属のゼストを討伐対象の拠点からセーン市噴水記念館へ配達する』

よくもまああんなにサラサラと書けたものだ。アルタは紙面に綴られた、端正な字を見て勝手に感動した。そして最後の欄にふと視線を移した。

『報酬：１０万ミル』

え？

「それじゃ、戻り次第報告を頼むわね。報酬を準備してお待ちしているわ」

フェララは余裕たっぷりに微笑むと、悠々と自室を去って行った。

主のいない部屋の中に、常人の感覚を持つ人々が、自分が正常だという事実を確認したがるかのように、たがいの顔を交互に見た。

そして安心したらしい副班長は、額に手をあてて首をゆるくふると、

「……行きますか？班長」

三十歳にしてはスラリとした足のかげで、第五班の班長、ゼストの保護者、ミラノが小さくうなずいたのが、微かに見えた。

「五班、ゼストの所、向かう。副班長、報告してほしいです。ミラノ達、先行く」

「了解しました。すぐ追いつきます」

有翼人がじきに慌ただしく部屋から出て行き、アルタは置き去りにされた依頼書の報酬欄を見て、

「……あの人ケタ間違えたんじゃないかしら」

そう信じたい。

が、フェララのことだ、勿論正気の沙汰であろう。

アルタが紙っぺら一枚を眺めている間に、外でいくつもの翼が仲間をめがけて空に飛び立っていった。

鉄の匂いがぶわりと地面に広がった。ひどく濃い赤が、陽の光を浴びて眩しい程に輝く、白の扇に、叩きつけられて、染みた。

戦場はしんと静まり返っていた。

ただテレジアの喰った翼の穴の向こうに飛び散った重たい滴が、ボタボタと音をたてて地面に落ち、吸い込まれていくのだった。

二人の男が、真正面からぶつかったきり、微動だにせずにそこに立ちつくしているのだった。

先に持ち主が手を離したのは、氷の剣の方だった。節くれだった手がひどく痙攣して取り落としたようだった。クルアンが大きく切り出したせいで、まるで人が倒れたかのような鈍い音をたてて落ち、地面を転がる。それきり、敵に身体を預けたまま、片手はぴくとも動かなくなった。

１６５　ゼストの最後の頼みごと（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
「ゼストの最後の頼みごと」は三つに分かれてます。
次回の更新日は２９日です。
［ｎｅｘｔ→ゼストの最後の頼みごと　＊］

ゼストの最後の頼みごと＊

それにかぶさるように、血に覆われた小剣が人の手からはなれて氷に当たり、今までふたりが立てていた、攻撃のぶつかり合う悲しい音を奏でた。剣と剣があわさり、削れる音によく似ていた。まだ武器を手ににらみ合っているかのようだった。

でもそこには言葉がない。憎しみと慈愛に満ちた、覇気のある掛け声も、痛みに耐える小さな鳴き声も、今は無い。

戦いは、終わってしまったのだ。

「……ね……」

息を交えた微かな音韻が、ゼストの口からそっと吹かれた。

「ゼスト！」

大きく広げられた翼が風にゆらぎよろめくのを見て、ハルは思わず、テレジアの影を動かしてクルアンの氷の箱を壊し、負傷した有翼人に駆け寄った。

差し出した両手に、己と敵の血を吸って重たくなった運び屋の制服が身体ごと預けられる。ずしりと腕にかかる力に耐えられず、ハルはそっとゼストを地面に横たえた。ハルの顔を、白い羽根が柔らかくなでた、まるで赤子を慰めるかのように。

ゼストの顔は半分、無数の切り傷で血だらけになっていた。ドルガスの風魔法が傷つけたのだろう、憎しみに狂った攻撃から避けるのは、とても難しかったと思う。

ハルはドルガスを見やった。

風使いの盗賊は、血走った目をかっと見開き、黄色くやにのついた犬歯をむき出しにして、立ちつくしていた。しかしハルにはわかっていた、いずれ彼も倒れるだろうと。そして二度と起き上がることはないだろうと。

二人が渾身の力でぶつかりあった瞬間に、たがいの腹に刃が突き刺さった。ドルガスの小剣に比べてクルアンの大雑把に作った長い剣の方が、ふかぶかと相手に突き刺さったのは、氷の障壁の向こうでもはっきりと見て取れた。

「ハルたん……」

ハッとしてもう一度名前を呼ばわると、ゼストが血だまりになっていない方の目を薄く開ける所だった。

「あいつに……話を」

させてくれないかと囁かれて、ハルは、背後でドルガスの僅かな生命力を喰おうと手を伸ばしていたハクの動きを脳の指令でとめた。突然指令を出されても、ハクは特別驚く様子もなく、干からびた視線をこちらに向けた。切りそろえられた髪が首をかしげた拍子にゆれた。

ドルガスはいつの間にか地面に倒れ伏していた。ゼストの白い羽衣に赤いしぶきをつけた液体が、腹のあたりからじわじわと地面に広がり、土は命の水を吸っていく。

ハルはゼストを見た。激しく動きぶつかり合ったせいでひどく息があがっている。命に別状はなさそうだが、討伐対象に切られた部分からはひどく血が出ている。

それでもドルガスから流れ出るそれの量には遠く及ばない。

「もうほとんど死んでいるぞ」

ミウタが淡々と告げた。いや、少しつまらなさそうだった。それでもゼストは話を聞きたいというばかりで引かない。

「何か……言い残したことはないかって」

聞いて、という口の動きに、ハルは急いでミウタにそれをやるよう頼んだ。ミウタは首をぎゅるりと動かし、真上からドルガスの身体を見下す形で、声をかけた。

「お前は何か言い残したことがあるのか」

顔だけ下に向けたまま、襤褸の赤い着物がはだけるのもおかまいなしに、ミウタは大男の血にまみれた躰を食い入るように眺めている。

（やっぱり、もうだめかな）

ゼストの最後の頼みごと＊（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
文化祭が近いので、あと二、三回更新したら少し更新日の間を空けます（４～５日）＞＜
次の更新日は１０月２日です。

166　発祥の地

ハルは依頼の完了を、悲痛な表情を浮かべている運び屋の青年に伝えようと口を開いた。

その時だった。

ミウタが膝をおって、耳を討伐対象の口元にあてがったのだ。

「なんだ、聞こえないぞ」

ハルは胸の奥が締め付けられるように痛むのを感じた。あんなに深く切られて苦しいだろうに、それでも男はしゃべろうとするのだ。ミウタが何度も何度もうなずくのを、ハルはただ息を呑んで見守ってるしかなかった。しばしば後ろ髪を、意識があるのかないのか、ゼストの大きな翼の一部がかすめた。

しばらくして、双子の姉の行動を眺めていたハクの視線が、ふっと宙に揺れた。倒れたドルガスの身体の興味がなくなったのだ。ハクには生命力を吸うという本能以外に興味を示すものがない。もう吸う価値のある命は、どうやらその屍から一滴残らずあの世に持っていかれてしまったらしい。

しゃべらなくなった風使いの盗賊の死体から、ミウタの耳が離れた。ハルは指令を出して、ミウタの細い足を駆け足で自分の所へ来させた。

「なんて？」

「病気の妹を守ってやってほしいと言っていたぞ」

「妹？ドルガスの？」

「今まで盗みを繰り返していたのはいつかその財産で妹を助けてやりたかったからだと言って死んだぞ」

「その人……どこにいるんだ？」

ゼストが口を開くと、ミウタは首をかしげて静止した。

そして、その唇から機械のような声が漏れた。

《アークルーン発祥の地だと言っていた》

黙りこくっていたクルアンが、息を呑むのが小さく聞こえた。

「いいって、一人で歩けるって」

子供のように文句を言うゼストに、ハルとクルアンは無理矢理肩を貸して、手負いのウィンカを立ち上がらせた。

アルタがクルアンに持たせていた背中の傷用の包帯が役に立って、ゼストは重傷の箇所に自分で応急処置をした（これも自分ですると

いって、ハル達に手を貸させなかった）。顔はミウタが自分の浴衣でぬぐってやっていたが、あの浴衣に色々な血が染みているのではなかろうかとハルは変な疑問を覚えた。

「重いっしょ」

「全然？」

実際問題翼の重みがかかっているので普通の人間よりずっしり感はあるものの、大して問題ではない。

ハルにとっては今自分が抱えている問題の方がもっと重苦しく感じられた。

「重いってば」

自力で歩こうとするゼストの腕を無理矢理捕獲して、有無を言わさず肩を貸された状態のままのゼスト含め討伐隊三人はセーン噴水広場目指して歩いていた。

三人とも、口を開かない。

（そりゃ、そうだよね）

アークルーンなんて名詞をポンと吐きだされて、本人が黙りこまずにいられようか。と言いたいところだが、クルアンがしゃべらないのはいつも通りの事だ。もう夏も近づいて暑苦しそうな魔道士衣装に身を包んだクルアンは、いままで杖がないせいで手持無沙汰だったのが片手がふさがり、どことなく一生懸命ゼストを運んでいるように見える。

ハルはゼストの翼をそっと見やった。大きく開いた空洞は、これはどうしたらふさがるのだろうか。治るにせよ治らないにせよ、当分は飛べないだろう。配達依頼が無いとなると……

（剣の扱いは見よう見まねって感じで全然うまくなかったから討伐も無理だし……そうすると）

報酬の安い買い物とか子守りとか、そういった類のものしか受けられなくなる。雀の涙ほどの報酬で、一人だったら生きていけない。

そう、ドルガスのように、一人だったら生きてはいけない。

ドルガスにも手下がいたみたいだ。けれど、ドルガスの放つ一つ一つの言葉に、どこか一人取り残されてしまった悲しみのようなものが、含まれていた気がする。

「ゼスト」

「ん？」

流石に傷が痛むのか、普段ほど明るく笑いかけてこないゼストの返答に、ハルは

「ドルガスも私達みたいにギルドに入れてたら、こんな風にならなかったのかな」

弱弱しい笑みが、ゼストの横顔からさっと姿を消した。

「……ゼスト？」

１６６　発祥の地（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次の更新日は４日、その次は８日の予定です。
→
突然変更通知する場合があるかもですが、ご容赦ください＞＜
［ｎｅｘｔ↓割れた卵と銀のひよこ］

１６７　割れた卵と銀のひよこ

「俺が殺さなければまたギルドに入れてたかも」

え、とハルは声を上げた。予想外の切り返しだった。慌ててフォローしようと言葉を考えるけれど、その前に

「手遅れである者を生かしておくことはできない」

持ち主の歩調に合わせてふさふさと揺れる、帽子の茶色いフェイクファーの下で、氷の唇がぽそりとつぶやいた。ゼストは半分血に濡れた顔に、少し不思議な、面白がっているようで、怪訝そうな色の混じった表情を浮かべた。クルアンは平素通り、相手に目を見せないまま、口の上までたくしあげたマントの中で冷気を放っていた。

ゼストはしばしの間、口をつぐみ、自分が進むごとに後ろに流れていく地面を真剣な面持ちで眺めていた。が、ふっと目を伏せて、

「でも、手遅れかどうかなんて……」

突然ゼストのまぶたが閉ざされたので、ハルは不思議に思って足を止めた。止まる信号を出し忘れたせいで二本の尻尾がひっぱらさって少し痛かったが、

「どうしたハル」

当のミウタ達は冷静な様子で、マスターの背後で足踏みした。

「ゼストが……」

見上げるハルの眼前、太陽の突き刺すような光を何かの影が遮った。

「おいっ」

鋭い声と共に、力なく倒れこんでくるものがあり、ハルは慌てて自分より大きい青年の身体をなんとか支えた。

「悪い……めまいが」

言った傍からまたくらりと来たらしく、ゼストはハルが無意識につかんでいた手首を振りほどいて、道端に手をつきしゃがみ込んでしまった。背中をクルアンがさすってやっているのがひどく珍しくてハルは目を丸くしたが、今はそこで驚いている場合ではない。

どうやら貧血がひどくて歩けないらしい。深手を負ったのと、いつになく激しく動き回ったせいだから、少し休めば大丈夫だという。顔色がひどく悪く、唇まで真っ白になっていた。

「どうするハル。動けそうにないぞ」

「フェララと連絡とってみる」

フェララの作った卵型の通信機は制作者によって携行が義務付けられている。ポケットの中から取り出した機械の、通信ボタンを押そうとして手が止まった。

卵が真ん中からぱっくりと割れていた。日本刀で斬りおとされたような切り口から、亀裂の入った銀色の文字盤みたいなものが覗い

ている。

「あたしの使えない。クルアンのは？」

氷使いの少年はゼストの背中をさする手を止め、何を思ったのかおもむろに立ち上がった。クルアンの手が離れると、ゼストの背中の畳まれていた羽根が、脱力したのかだらしなく広がり地面を擦った。見れば見るほど長い翼の片方の空洞を目にするのがいやで、ハルは有翼人の青年から視線を外した。

「どう？」

と機械の具合を尋ねてみる。

クルアンは道の向こうのとある一角をじっと眺めていたが、マントの内側に手をやり、取り出した青い通信機をハルに投げてよこした。そして、「壊れている」の一言もなく、その場から立ち去ろうとするではないか。

慌ててマントの裾をひっとらえ、

「どこ行くの」

と引きとめると、クルアンはつい先程まで食い入るように見ていた場所を指さし、

「そこへ」

一言残すと、踵を返し、自分が指さした方向とは逆、すなわち、今までハル達が歩いてきた道を引き返して歩いて行ってしまった。

やけに足早だった。

１６７　割れた卵と銀のひよこ（後書き）

読んでくださりありがとうございました
更新おくれてすみません。自分で一日早めたのに忘れるとは・・・
次の更新日は８日です。
［ｎｅｘｔ→ハル、お化け屋敷にお邪魔する］

１６８　ハル、お化け屋敷にお邪魔する

「そこへって……」

動けない有翼人とともに道端に取り残され、ハルは深く溜息をつく。

（こういう時、無口って色々と不便だな）

何をしにいったか位教えてくれてもいいのに、という文句を、うずくまったままごめんと言うゼストの手前、笑顔の裏に押し込めておく。

運良くクルアンの言っている意味が判ったので、ハルは奇跡的に風魔法に切り刻まれなかった護身用のパペットを、手持無沙汰にしているハクの右手にはめさせ、なるべく体重をこちらにかけられるようにしてゼストを立ち上がらせた。

「クルたんのアレ、どういう意味」

クルアンの指さした方向を見ていなかったゼストにとってはまさに何が何だかというところだろう。ハルは、歩いてもさほどかからない距離にある、古びた山小屋を指さして

「あそこで休んで待ってろってことだと思う。そこまで歩ける……？」

「ん、わかった」

レベル４の魔法使いが統べる盗賊団だ。アジトにいくらか武器ぐらいあるだろう。といっても、拠点であるらしい場所にあった小屋は運び屋との戦いでひどく破壊されてはいたが。

死んだ男の小剣を持ってくればよかったのだが、あの短さでは使い勝手が悪い。とりあえず地面に文字が書けるものがあればいい。

あの男は何を知っていたのだろうか。

アークルーン発祥の地、と言っていた。

発祥と言うのなら、誕生とはまた違う。つまりアークルーンと称され奴らから追われていたのは俺だけではないということになるし、あの男の妹が俺の出生地にいるというわけでもない。

アークルーンが俺だけではないのだとしたら、やはり運び屋の言っていたあれは、コードなのだろうか。

私の子供でごめんね、と母は言っていた。

てっきり俺が氷使いだからかと思っていたが、そうでもないらしい。

ならば母が一体何の関係があるというのだろう？

母もアークルーンだったのか？

なら母のコードはどこにあったんだ？

コードをつけられる条件は？

あいつらと俺の共通点はどこにある？

あいつらは仲間なのか？

簡単に信じていいものなのだろうか。

もう何が何だかよくわからない。

胸の奥でぐずっている感情が頭をひっかきまわしてうるさい。

しかしそれも自分のことだとは到底思えない。

誰かが暗闇からもがこうとして叫んでいるのを、違う場所で聞いているとしか思えない。遠い。自分が一番遠い。

剥離した自分をくっつけようとするけれど、うまくいかない。

快晴の空を見上げてみる。

眩しすぎて、光しか見えなかった。

四苦八苦の末、ハルはやっとこさゼストを湿っぽいソファに横たえた。

クモの巣のかかった天井や、色がくすんだセンスの悪い家具が配置も向きもバラバラに置き去りになっている所を見ると、すでに住人はここを出て行ったようだ。ところどころに見かける得体の知れない染みが少し恐ろしかった。これではまるでお化け屋敷だ。

（でも、今は人がいなくてよかった……かな）

ハルは服についたほこりをぱんぱんと払って、ほっと一息つくと、もう一度部屋をぐるりと見渡した。おどろおどろしいことに変わりはないが、屋根があるところで、誰かと一緒にいるというのは、やっぱり安心する。大事な仲間を突き放し、一人森の中で眠った雨の夜は冷たくてさびしかった。

とりあえずここにいればクルアンは戻ってくるだろう。クルアンはよく何も言わずにどこかへいくけれど、それでハル達ギルドメンバーが困ったことは一度もない。

不思議な人だ、と思う。

「ごめん。俺ついてこなければよかったのに」

１６８　ハル、お化け屋敷にお邪魔する（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次の更新日は１２日です。
［ｎｅｘｔ→手遅れ］

169　手遅れ

ソファーに横たわったけが人が、ひたすらに謝ってくるので、

「いいって、もともとついてきてもらったのは私達のほうだし、結局仕事全部やってもらっちゃったし……あ、あと、助けてくれてありがとう、私のこと」

ソファーのひじかけに腰を下ろして、ハルは笑って見せたが、ゼストはいつものように人懐っこい、お日様みたいな笑顔は返してくれなかった。ただいつもよりうすく青みがかった顔で、同じく静脈の色が浮かんだ自分の手をじっと見つめていた。

「ゼスト」

声をかけてみるハルだったが、珍しく反応がない。自分の白い手のひらを、まるで血液の流れでも透けてみているかのように、釘付けになって見入っていた。

「ゼスト？」

肩に手をおいてみると、ゼストの体がビクッとはねた。

お互いびっくりした表情で顔を付き合わせる。あんまりにぼーっとしていたから思わず触れてみたけど、よく見たら制服の白いシャツに赤色が滲んでいた。肩にも傷を負っていたのだ。ハルはあわてて手を引っ込めて謝った。ゼストは軽く笑い声をあげて、

「いいよ、こんなのぜーんぜん」

長い腕を伸ばして、ハルの髪をくしゃくしゃっとなでた。が、すぐにまぶたを伏せた。

下向きの睫毛が、切なげに震えていた。

「……人殺したの、初めてでさ」

頭を殴られたような衝撃が胸に走った。頭と胸じゃなんともちぐはぐだけれど、脳から心へ、強い電撃が走ったような、そして広がるのは悲しみだった。

「ごめん」

ゼストは力なく笑った。

「いいんだ、これが普段、戦闘ギルドがやってることだって判ったから」

戦闘ギルド。

そうだ、レグルスは戦うためのギルドだ。

身体を傷つけ、時には命さえ奪う。

「俺達は誰かを傷つける仕事は、あんまり……つか、ほとんどないから、正直疑問だったんだよね。どうして皆、力にまかせて解決しようとするのかって。話しあって、平和に解決できないのか」

でも、と唇が微かにまた、微笑みを浮かべた。

「あれは、手遅れだった」

ドルガスの、血走った目と、食いしばった歯列の黄色さを思い起こす。振り乱した髪、打撃を拒絶する鉄色の四肢、そこから繰り出される、悪意の攻撃は、何か人ならぬものに取り込まれてしまったかのようなおどろおどろしさがあった。

「俺達は、人やものを運ぶだけだから、そういう余裕がある人達にしか接していなかったじゃん？」

ゼストは言葉を切った。ハルにリアクションを求めているように見えたが、ハルは心にのしかかる重みに負けないように、歯をくいしばっていることしかできなかった。

「……戦闘ギルドの人達は、もっと悲しい過去を背負ってきた人と戦ってる。不幸に不幸が重なってさ、ああなっちゃった人ばっかりとしのぎを削る。それは暴力なんかじゃなくてさ、ただただ謙虚なんだって思った」

「謙虚？」

予想もしなかった単語が飛び出してきたので思わず聞き返してしまった。ゼストはハルの瞳を同じ色の目でとらえ、陽だまりを生む温かさを秘めた小さな笑い声をあげた。

「誰かを救えると信じ込んでいる傲慢さが、無い。戦闘ギルドはいつも奈落の人々を、底に降りる前に殺してる。自分の手で」

ゼストは自分の掌を見つめ、それを強く握った。

「戦う事は、魂を生かすこと。ハルたん達のやってることは汚れ仕事じゃなくて、きっと誇りに思っていい事なんだってわかったよ」

ありがとな、と白い歯を見せて、ゼストはハルとクルアンの頭に手をのせた。

ゼストの腕は、血に染まっても、穏やかな花の香りがほのかにしていた。

しばらくして、ちょうつがいの外れかかった木戸の向こうで小さくクルアンの戦闘用靴の音がした。

まもなくハルとゼストは、暖かな黒熊の毛皮に寝っ転がり、呼び出し主の指示に従って地をかける使い魔のたてる穏やかなゆれにまどろみながら、帰路に着いたのであった。

１６９　手遅れ（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次の更新日は１５日です。
［ｎｅｘｔ→アルタ、並外れた深さの会釈をする］

１７０　アルタ、並外れた深さの会釈をする

運び屋ギルド・アポロンの第五班副班長は、御怒りだった。

少なくともレグルスに関してはかなりご立腹であることがその態度から容易に想像できる。アルタはできる限り深く会釈をして、アルタの隣でモデル然として歩くフェララに不機嫌そうな一瞥をくれた副班長と穏便にすれ違い、廊下の途中でほっと胸をなでおろした。

「そんなに平身低頭にすることはないわ」

ギルドマスターの行動を横目で見ていたフェララが、片手をひらひらさせながら言う事には、

「こちらの依頼を失敗したのはあちらでしょ？　私達レグルスには何の責任もないし、むしろクルアンの判断は完璧だったわ」

「だけど……」

「むしろ上空からさらっと道を確認してすぐに帰ってくるなんて、ちょっとココが弱いんじゃないかしら」

自分の頭を指さすフェララの横顔は得意満面である。勿論、アルタとしても、ギルドの財源から１０万ミルが吹っ飛ばなくて済んだ件だけ見れば得意満面だが、普段余所のギルドとのいざこざに慣れていない分、しばらく運び屋ギルドと接するときにはおっかなびっくりになりそうだ。

「今日は夕飯がおいしくいただけそうだわ」

セーン市噴水記念館というおおがかりな豪邸の、声がよく響く渡り廊下で、ここまでしゃあしゃあと言われ、高笑いまでされてしまっては、何だか段々副班長さんが可哀そうになってくる。一人だけ話の内容がわからないスーサが、何があったのかと尋ねてくるので、ハルと二人で（といってもハルはお風呂に入ったばっかりでタオルで髪を拭きながらだったが）交互に、討伐隊が屋内で休んでいる間、捜索隊が空き家上空を通過し、行き違いで戻ってきてしまったことで起きたゼスト奪還失敗事件におけるひと悶着の仔細を話しながら、アルタは食堂につながるドアのレールを超えた。

豪華絢爛なシャンデリアに照らされた食堂に並べられた、長テーブルの食卓では、テーブルクロスに描かれた金糸の柄がまばゆいばかりに反射している。描かれているのはセーン市直属ギルドの紋章の数々と、セーン市のシンボルマークである大きな鷲の頭だ。

食堂広間にはそれなりに人が集まってきていた。それぞれのギルドが大体固まりになってひとつのテーブルを占領する。なかでも運び屋ギルドは数が多い上に皆制服で、背中にたたんだ白い翼を持っているので、レッドカーペットにその白色が見事に映え、若干神聖にさえ見えた。

晩餐の席は指定席になっているので、アルタは今朝渡された紙を見ながらギルドメンバーに椅子を指し示した。

「スーサとフェララは隣ね。で、私がここで……」

そうしてアルタはちらりとギルドメンバーの一人を見やった。

相変わらず鼻先だけちょこんと出して、あとは全身黒い服に覆われている。食堂の中は人が多いのもあり、それなりに温度が高いから、吐いた息の周りに白い蒸気が見えるのがなんだか面白い。

「クルアンはここね」

謎の依頼で呼ばれた大勢が集まり、人だらけのこの場所で、クルアンと一緒に夕飯を食べられるのが少しうれしかった。

名前を呼ばれた魔法使いは、いつも通り規則的な鉄ヒールの音をたてて、指された場所で一瞬立ち止まり、静かに腰を落ち着かせた。カルマツェーダ国王の好みなのか庶民には少々落ち着かない柔らかさの赤いクッションは、黒衣に包まれたクルアンの体重を受けて暖かく沈んだ。

「ワインレッドにブラックって、やっぱり高級感が出るものなのね。馬鹿にできないわ」

夕食が運ばれ始め豪勢なメニューにはしゃぐ余所のギルドのちびっこ達の声にまぎれて、真剣な顔をしたフェララが背筋を伸ばしてきちんと着席している魔術師のギルドメンバーの姿をまじまじと観察しつつ呟く。

クルアンはフェララにすっと視線をやり、またテーブルクロスの刺繍に戻した。

その仕草をしたとたん、アルタは、クルアンの周りの空気がなぜか透き通るほど澄んで見えておどろいた。

それにクルアンがフェララに目をやることなどほとんどなかった

から、珍しさもあったのかもしれない。とにかくクルアンの所作にアルタは思わず目を見張った。

「アルタ、ミウタたちの席ある？」

ハルに尋ねられて、アルタは慌てて座席表に意識を戻した。

１７０　アルタ、並外れた深さの会釈をする（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
地の文が多かったので少し短くなってましてすみません。
次の更新日は１８日です。
［ｎｅｘｔ→フェララ、コップに負ける］

171　フェララ、コップに負ける

テレジアの双子はハルの『武器』として認識されているから、もちろん市の戸籍にも人として登録はされていない。つまり市にとってみればレグルスのギルドメンバーは五人だったから、昨夜は五人分の席しか用意されていなかったのだ。おかげでハルは、尻尾のつながった二人が、死んだ魚のような目にわずかな好奇心と期待を映して、密集した生命力を吸おうと歩き回るのを食い止めるので手一杯になってしまい、自分の食事どころではなく、しまいにはスーサが自分の肉料理をてんやわんやになっているテレジアサモナーの口に運んであげるという始末であった。

ハルの頼みで二人分の座席と、立派なガウンを二着申請しておいた。まあ、ガウンなんて必要ないといえばなかったけれども、いざ着せてみるとやはり必要だったような気がしてくる。

ハルに前のリボンを結ばれながら、すでに自分で着おわった男の子の頭を乱雑に叩いている赤い着物の少女――ミウタという名前らしい――が、せめて髪型だけでもどうにかならないかとフェララが手袋をはめて櫛を入れたおかげでいつもより清楚に見える顔を右に傾けて、マスターの手つきをじっと眺めていた。

これだけきちんとした格好をしていれば、表情が硬くても、それなりに普通の女の子に見えるだろう。昨日は食堂内でそれなりに好奇の視線の的になってしまっていたから、ハルもさすがに気にしたに違いない。

それにしてもフェララは、アルタができないことを平気でやって

のける。

テレジアの影は、直接触れなければ特に害がないということは、ハルから聞かされていた。けれど布一枚ごしに触るというのはいささか大胆すぎる気がするのだ。少し触れただけで簡単に敵を倒せるような能力だし、一度は危険人物として待機班に異動させられたくらいなのだから。

しかしもう少し危機感を持てといっても、フェララの性格では鼻息一つで飛ばされそうな台詞であった。

「よし、と。これで一般人に見えるかな？」

笑顔で問いかけてくるハルに、アルタは軽く笑みを返した。

「あら、いいんじゃないかしら？」

口を開く前に、『ワインレッドのクッションに座る魔術師』の絵画イメージを膨らませようとクルアンを凝視していたフェララが、集中の糸が切れたように振り向いて、ガウンを着たテレジアの双子を交互に見比べながら、

「まあ、少しサイズが大きいけれど致し方ないわね。それ、直属軍学校の制服だから、もともと１２歳向けのサイズだし」

「軍の学校なんてあるんだ？」

他のテーブルに着々と夕飯が運ばれているのに気をとられていたスーサが、クルアンの隣で足をぶらぶらさせながら聞き返した。

「ええ、私も少しだけそこに通ったわ。講義を聞くより自力で調べた方が早かったけれど、有る程度の授業料と、奨学金を取れるだけの能力があれば、ホテルに泊まっていると思えば随分安い学校だったわよ。それに」

「あ、ねえ、これ錬金術で加工してある」

フェララの自慢話そっちのけで、幼い錬金術師はつい先程給仕係が置いて行った水の入ったグラスに興味津津である。退屈そうに食堂の壁画などを眺めていた氷使いの少年に、はしゃいだような口調で食器の仕組みを説明していた。

じきに全てのギルドのメンバーが席につき、食堂が盛大な食事会でにぎわう人々の笑い声で満たされるのに、そう時間はかからなかった。

171　フェララ、コップに負ける（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
行間＆サブタイトル追加しました。

１７２　それは勧めすぎです。

「ミウタ、もう少しゆっくり食べてても大丈夫だよ」

ハルは大きな海老の黄金焼きをほしがるミウタを、そう言ってなだめながら皿を差し出した。

昨日に引き続き、今日も夕飯は飾り付けから何から何まで、目を見張るほどにぎやかにしてある。倒れても零れない水のグラス（錬金術がかかっているとスーサが得意げに話していた）とか、ずっと熱いままの鉄板（１５歳の少女には到底食べきれないであろう大きさの赤海老が威風堂々と横たわって焼かれている）とか、どうしてそうなっているのかはよくわからないけど、取り敢えず魔法で何かすごいことをやってのけていることは判る。

（魔術ってすごいんだな）

魔術を持たないハルにとっては、未だにおとぎ話と同等と言い切ってしまってもいいくらい不思議な話だ。勿論自分だって他の人から見ればそこそこ珍しい存在ではあるかもしれないけど、理屈的にはそんなに難しくないと思っているのだ。そもそも力を持っているのはテレジアであって、ハルじゃないから、実質ハルは戦士じゃない。だから自力で戦える人がちょっぴりうらやましい。

「どうしたハル、食べないのか」

秒殺で海老を殻ごと平らげたミウタが、ひょいと金色のフォークをハルのサラダにつきたてた。食べてもいいよ、と譲ったハルだっ

たが、言い終わる前にボウルは空っぽになっていた。あまりのスピードに、向かいに座っていたスーサが鶏の丸焼き越しに口をあんぐりさせている。

「どこに入るの、その量」

「さぁ……」

ハルも未だにわからない。

ミウタが物を食べる時の手はいつもせっついているのだ。

その点、弟のハクは真逆だった。

「あっ、ハクそれ食べ物じゃないから……って、あーあ」

ハルが引きとめる前に、つくりものの花弁を口に入れて、ハクは首をかしげてこちらを見た。相変わらず、見えているのかどうか手を振りたくなるほど、乾いた視線だ。

ハルのみたところ、テレジアの双子は、普段足りない生命力の分のお腹を、生き物用の食べ物でいっぱいにしているみたいだった。要するに、何かおなかの中に入っていればいいのである。だからといって作りものの花を呑みこむほど、ハクはせっかちではない。ミウタの食器に食べものの屑が散らかっているのに比べて、しかるべきものだけが美しく残されているお皿の数々からしても、ハクは普通の人より動作が丁寧で、細かいのだ。

その例を裏切る事なく、ハクは無表情のまま唇に手を押し当て、ぬぐった。

（ミウタだったらスイカの種みたいにぶっ飛ばしてそう）

ハルは内心安堵して、手の平にくっついた桃色の欠片にミウタが手を伸ばしかけたのを慌てて制し、そっと花びらの形のそれをつまんだ。

「ああ、ハル、一緒に捨てておくわ」

差し出されたアルタの手にちょこんと乗せると、アルタはほんのり頬の赤くなった顔でふにゃっと笑った。

少々酔っているのだ。

「ちょっと、まだ大して呑んでないでしょう？」

周りの視線を気にせず早々と料理を給仕係に下げさせ、ワインを楽しんでいたフェララが、うとうとし始めたアルタの頬に手をやった。フェララはお酒に強いみたいで、普段の調子と全然変わらない。

「いや、わりと呑んだと思うよ。ほら」

笑い混じりにスーサが指し示したのは、暗い緑色をした赤ワインの瓶四本。その隣に、蝶の羽根が掘られた綺麗なガラスのボトルが二本、整然と並べられている。

先程からアルタに酌をしまくっていたフェララは、自分らの飲み干した空き瓶達を見て、にっこりとほほ笑んだ。

「勧めすぎたかしら？」

ハルとスーサが二人揃って苦笑いを返したのは言うまでもない。

フェララはアルタを連れて、酔いを覚ましに出て行った。

食卓で寝られては格好がつかないのだという。

すでに眠りの世界に入っているギルドメンバーが一名いるのには気づかなかったらしいと、ハルとスーサはこっそり顔を見合わせ、小さく笑った。

１７２　それは勧めすぎです。（後書き）

またまた遅れてしまってすみません・・・昨日は試合で東京に出てました。。
読みにくかったらすみません！
もともと私の文章は読みにく（略
えっと
次回の更新日は２５日です。
更新予定：２３→２５→３１
文化祭が近いので２６～３０はお休みさせていただきます。
長々と失礼しました。

１７３　冷たい水琴

眠っている間は冷気が強くなる。だから近くにいたハルとスーサは、氷使いが静かに寝入っているのに気付いたのだった。

クルアンは、食事中の銅像のごとき体制で眠りの世界に旅をしていた。
銅像は食事をしないという突っ込みはこの際なしである。

背筋をすっと伸ばし、両腕を組んだまま食卓について、舟もこがず、まるで起きているような格好で、しかし逆に微動だにせず寝ている。器用な事をするものだ。

「まだ食堂閉まるまで時間あるから寝かせとこう」

スーサがいたずらっぽくそう言って、自分が着ていた皮色のポンチョを、起こさないようにそうっとかけてやり、クルアンの横顔をしばらくじっと見てから、吹き出しそうになったのを慌ててこらえて、遠くに居る給仕係に水をもらいに行った。

周りにギルドメンバーがいなくなり、他のギルドの人達も大人は酔い、子供は退屈になって帰るか遊ぶのに夢中になっているのをいいことに、ハルはクルアンの寝顔をまじまじと観察し出した。

寝顔といっても大したものが見られるわけではない（寝顔自体大したものではないが）。何せ顔の大部分は帽子と服で隠れているから、どう角度を変えて覗きこもうと、基本的に焦点は鼻にいくのだ。

よく眠っているようだった。肌に当たる冷たさがそれを示していた。

（冷たい……）

無意識のうちに、組まれた腕に手が伸びていた。

ハルの掌が、マントで隠れたクルアンの体に触れた刹那だった。

ぽちゃん。

「あ……」

水琴のようにくぐもった滴の音がしたのは。

ハルは周りを見渡した。音に気付いている人などいるわけもないのに、それでもこんなにくっきりと感じ取れる音が、離れているだけで、無い物のような扱いになるということが信じられなかった。

クルアンには、ハルに触れられたのに気付いた様子は見られなかった。

（そっか、舟を襲撃された時以来、手、つないでなかったんだっけ）

いや、おとい同じ部屋に泊まった時は、スーサも一緒になって一つの寝台にならんで眠ったから、奇サイコメトリーが発動しなかった訳ではない。でも確かあの時は、耳を澄ませど物音一つしなかった筈だった。

魔物の襲撃を受け、舟で一晩過ごした時に聞こえたそれよりも、

今は一つ一つの音の幅が狭くなっていた。矢継ぎ早、とまではいかないけれど、かなり蛇口がゆるくなっているみたいだった。

ハルはクルアンの目元を見た。下を向いているから、ほとんど帽子のつばに隠されているけれど、涙を流すような気配はない。ただ静かに、存在以外の行動を打ち消すような気を身にまとっているように感じられた。そしてハルは、その聖域に迷い込んだ獣だ。

何もしないということは、これだけの武器になる。無という名の暗闇に四肢を縛られ、全身を圧迫され、悲しみの滴に濡れて震えている獣みたいな気分は、奇サイコメトラーの少女の表情を曇らせる。

「何だ」

低い声で問われ、ハルは素っ頓狂な声をあげて両手を上げた。

１７３　冷たい水琴（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次回の更新日は３１日です。
［ｎｅｘｔ→穴に入りたいカエル］

174　ハル、カエルになる

「何だ」

低い声で問われ、ハルは素っ頓狂な声をあげて両手を上げた。

闇の牢の持ち主が少女に顔を向ける。闇の支配者とも言うべき存在。

否、ただの少年だった。

「さきほどから何をしているのだハル。肉料理なら残しておいた」

少々退屈そうな風を帯びた台詞に、ハルはいよいよびっくりした。ギルドメンバーがいなくなったからって油断していたが、

「ミ、ミウタ、いたの」

「？　ミウタはハルのそばにいる」

そりゃそうだ。しっかり見られているではないか。

「僕もいるけど」

「うおう！」

ハルが席から飛びのくと、肩に顎を乗っけ損ねたスーサが拍子抜けした顔で首をかしげた。片手にはすでに中身が半分に減った水の

グラスが握られている。

ハルは四人のギルドメンバーから不思議そうな視線を受け、椅子に座りなおしたまま硬直した。

「ハル、何してたの？」

理由はわからないが真面目そうな顔をしているから声をかけられなかったのだと童顔の少年は訝しげに首を傾ける。

まさか涙の音に聞き入ってたなどと本人の前で言える訳もない。

「えーと……」

クルアンの様子を横目でちらりとうかがってみる。黒衣から鼻だけ出した氷使いが、口元から微かな冷気を放ちながらじっとハルを見つめていた。

（もしかして、ヘビに睨まれたカエルって……）

こういうことを言うのかもしれない。

あやしいものでも見るような視線を、四方向からじりじりと感じながら、穴があったら入りたい心地のハルであった。

「あら、おはよう」

フェララが時間帯的にミスマッチな挨拶をしながら手を振ったので、ハルはまだ酔いが残ってるのかな、と敢えてツッコミを入れず笑いかえした。

噴水記念館の廊下は縦にも横にも目を見張るほど長い。円形の会議室の周りは廊下も弧を描くような形になっていて、微妙に歩き肉いのが逆に面白いと、スーサがはしゃぎながら出口へ駆けていった。

ハルは幼い錬金術師を先に返し、手洗いに行った帰りだった。

「もうみんな宿舎に戻るのかしら?」

フェララが人差し指を立てて口元につけながら尋ねてきた。

「うん。クルアンは二人が出てったあとすぐ戻って、スーサはついさっき、向こうの丸廊下を走って行ったよ」

相変わらず楽しそうでいいとフェララが笑う。

いつもよりキツさが抜けて、若干アルタ寄りになっているように思えた。

「酔い覚ましにいったはいいけれど飲みすぎたみたい」

高笑いは寸分狂わずフェララそのものだけれども。

(なんか……いいな)

これで場所が拠点だったら、すごく落ち着くだろう。首都の建物は飾りつけが豪華すぎて、ハルの目にはいささかきらびやかすぎる。

早くセーン市が皆を呼び寄せた本題を明かしてくれればいいのにとか、やっぱり市長がマッシュルームじゃ話にならないとか、好き勝手な話題でしばし談笑してからハルはフェララとわかれ、丸い廊下の曲がり口を右に行こうとして……足を止めた。

１７４　ハル、カエルになる（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
場面転換の空白がありますが時間帯は食後の夜のままです・・・。

次回の更新日は3日です。
［ｎｅｘｔ→Ｔｈｅ　ｔａｌｅ　ｏｆ　Ｓｅａ］

The tale of Sea

x + x + x + x + x + x +

死神の女は舟を漕いでいた。

一人で櫂を動かし、遥か遠くの大陸を目指して、ひたすら海を進んだ。

背中は骨の髄から痛み、重たい水の所為で息は切れていた。

それでも舟を漕ぎ続けたのは、傍らにある黒い布切れのためだった。

彼の故郷へ行きたい。

彼がどんなところで育ったのかを知りたい。

舟の内側の壁には、黒い何かが絶えず蠢いていた。乗り始めはそれが気になって仕方がなかったのだが、じきになれてしまった。

それらは不快なものではなかったし、ここにあってしかるべきものであったから、追い出してはいけないのだろうと、死神の女は察していたのだった。

黒い古代文字は舟の先頭によく集まった。へさきがびっしりと黒く染まったかと思えば、またおのおの持ち場とも言えないような、まとまりのない居場所へ散っていき、木の肌が見えたと思えば、またちょろちょろと寄ってくる。まるで互いに急いているかのようだ。

舟の中には彩りがなかった。漕ぎ手の、振り袖がちぎれた真黒な着物に、たおやかな髪が日本人形のように伸びているのが、凪いだ海を横切る動きにあわせてこくりこくりと揺れるのであった。

女は海の匂いを胸いっぱいに吸い込んだ。

潮風に当たるのは生まれて初めてだった。

名前も知らない英雄のために、彼女はひたすら、櫂を動かし、水を突き進んでいくのだった。

突然足元が不自然に揺れ、女は驚いて両手を止めた。

何にぶつかったのかと辺りを見渡すが、何も見当たらない。海は凪いでいて、波すら立ってはいなかった。

再び漕ぎ出そうと女が櫂に手をかけた、その時であった。

海を貫く巨大な影が、女の行く手に立ちはだかった。

女は驚いて櫂を取り落とした。

黒い影は奇妙な形をしていた。

女はそれが何であるか瞬時に悟った。

悟って、しばしの間、死神は愕然としたが、ひるまず、己の武器を構えようとした。

黒いそれは女が空を仰いでも形相が見えないほど背が高く、頭が

小さくてどうなっているのかよくわからなかった、しかしただ黒々として、陽の光はとうに水面から光の塵さえ残さず消え去っていた。

女はとある死神から譲り受けた大鎌の柄をどこからともなく引きずり出していた。

これはいつか風のうわさで聞いた悪魔というやつだ、と女はわかっていた。女の故郷はその存在を異国のものとあざ笑い、その伝えを当てにしなかったが、神なる女は知っていた。

針金のように細く角ばった体から、同じようにいびつな動きをする黒い手が伸びていた。干からびた練炭のような色のそれは、人の手のひらの骨のようにも見え、また長い鍵爪のようにも思えた。悪魔は細い両の腕を振り回し、天に向かって甲高く咆哮した。その声で海は波立ち、女の足場はぐらぐら揺れた。

女は手をつき転んだ。

武器を取ろうとしたけれど、砂浜で打ち付けた背中がひどく痛んで動けなかった。

x　＋　x　＋　x　＋　x　＋　x　＋

Ｔｈｅ　ｔａｌｅ　ｏｆ　Ｓｅａ（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
タイトルのＳｅａの前にｔｈｅがないのは仕様です。。
次の更新日は５日です。
［ｎｅｘｔ→ミントよりくさや。］

175　ミントよりくさや。

x　＋　x　＋　x　＋　x　＋　x　＋

「ごめんなさい」

足を止め、曲がり角の向こうの様子をのぞき見ていたハルは、意外な人が珍しい台詞を言ったのを見て、二人のやりとりに釘付けになった。

情けなさそうに下を向き謝っているのはアルタだった。いつも朗らかに笑っているアルタが、すっかりしょげているのを見たら、誰だって少なからずびっくりすると思う。

しかし更に驚いたことに、目を伏せたギルドマスターに謝られているのは、同じギルドメンバーのクルアンだったのだ。

（アルタがクルアンに？）

どうしてだかはよく分からない。クルアンは今日はずっとハルと一緒で、討伐にアルタが関わったとは聞いていなかったが……自分の知らない所で、何かあったのだろうか。

クルアンは頭を下げられても、少しも驚かず、茶色いファーのついた三角帽子を目深にかぶりなおしながら

「アルタに非はない。ただ知っているということを伝えただけだ」

ふっと息をついたらしく、空気が一瞬白いもやを帯びた。

「むしろ寝室の方から盗み聞きをした俺に非がある」

「けど、あんな姿を見せてしまって……」

「感情がないよりいくらかマシだろう」

台詞の通り、感情の欠落した言いようだったが、ハルとアルタは違う場所で同時にどきりとした。本当に、心臓の横からだるま落としみたいに槌を当てられたような、まともに当たればひどく身震いしてしまいそうな衝撃が総身を襲う。

アルタは泣きだしそうな目でクルアンを見た。

帽子のフェイクファーの影に、廊下のまぶしいライトを反射して一点の光を宿した目が見えた。暗かったが、青かった。それがひとたび瞬きをしたらしく、光が寸の間絶たれ、また現れた。

光の強さは、変わらない。

「案ずるな」

それは明確な命令口調だった。「構うな」とはまた別の色をのせた言の端は、鋭く、冷たい。言われた当事者でもないのに、ハルは首筋の辺りがさあっとあわ立つのが悔しくて、短いくせっ毛を首元に押さえつけた。

「わかった」

アルタが短く答えた。あんまりにしょげきっているものだから、

食事を終え宿舎に向かおうとしていた魔術師集団が不審な者でも見るかのような目付きで振り返り、各々顔を見合わせながら通り過ぎていった。歩くたびにはためくマントの裾からは、ミントのようなすうすうする香りがしたので、ハルはその場で涙目になりながら鼻をつまんだ。壁越しに話を聞いている立場としては少々不似合いであるが致し方ない。ハルはミントの匂いが苦手なのだ。鼻がすうすうするくらいならくさやの日干し竿の隣につるされたほうがまだいいのだ。たぶん。

「それと、今朝のように早朝に俺を引き取りに来るな」

立て続けに命令口調だったが、どことなく温和な雰囲気を灯した声に、アルタはようやく顔をあげた。

頬に髪がかかって、少々やつれて見えたが、ハルの首筋の鳥肌は徐々におとなしくなった。

「目覚めて違う場所にいたら、びっくりするかと思ったの。普段はずっとハルと一緒だったから」

ここでやっとハルは二人が何の話をしているのか悟った。ハルは鼻をつまむ手の変わりに、心の中でぽんと拳を手のひらに打った。

（そっか、クルアンは昨日）

ゼストの部屋に泊まったはずが、今朝二人でもう一度ゼストと合流したのはそういう訳だったらしい。ハルにとって、目覚めればクルアンが隣にいて、結んだ手のひらが凍てつくように冷たく、体の側面がうそ寒いのが常であったから、今朝もクルアンが横で眠って

いることに違和感がなかったのだが、よくよく考えてみれば元々クルアンはハルのそばにいない筈であった。

クルアンの泊まる場所が変わるときに、きっとちょっとしたトラブルでもあったのだろう。大したことではないと判って、ハルは一安心とばかりに胸をなでおろした。

それにしても。

175　ミントよりくさや。（後書き）

読んでくださりありがとうございます。
切り方がうっとうしい切り方ですみません・・・。

次回の更新日は8日です。
［ｎｅｘｔ→現行犯］

176　現行犯

クルアンは先ほどから、よくしゃべる。

（アルタの前だからかな？）

無論、今までのクルアンを知らない、廊下を行き来する他所のギルドの人々からすれば、一見して十二分に口数少なだけれど、一日の大半を傍ですごしたハルからすれば、普段自分がするよりも、いつも紙束の群れに追われて忙しいギルドマスターが耳にする言葉の方が多い気さえする。

（二人はずっと一緒にいたんだもんね）

アルタとクルアンは今の居場所をゼロから作り上げてきた仲なのだ。お互いの信頼は並ならぬ固さだろうし、他のメンバーよりずっと安心して話ができるのだろう。

（いいなあ）

ちょっとうらやましいと思う。ハルだって一応クルアンの仲間だし、同室ということもあって他のメンバーよりクルアンのことを色々知っているつもりだ。赤の他人に比べれば、多少なりとも仲良くなれているつもりだ。

が、それと同時に、やっぱりアルタには追いつかなくてもいいという妙な安堵感も、確かにある。誰よりも近くて、傍にいると自分も優しくなれる。それはアルタだけが持っている、特別な魔法みた

いな気がしたから。

突然ハルの両肩にとんでもない重みがかかり、ハルは心臓が口から飛び出るほどびっくりして声もなく飛び上った。

ぱっと振り返り、犯人を確認するや否や、ハルは慌ててミウタの口をふさぎ、大人しくしていた弟を巻き添えにしてずるずるとアルタ達から離れた。

生命力を吸う訳でもなしにずっと無言で待たされて相当退屈だったのか、口を開きたくなったらしく、マスターが安全圏まで移動して口元からふたを外した途端、

「戻らないのかハル。まだ食べ足りないか」

小首をかしげ、例のごとく無表情のまま問うてきた。

「ううん」

（って、立ち聞きは駄目だよね。スーサが待ってるし早く部屋に戻って寝よう）

ハルがアルタ達に存在を気づかれないよう、後ろから歩いてきた満腹顔の有翼人の群れに隠れて丸廊下の角を曲がり過ぎようとした時、

「あいつといると落ち着かない」

そんなようなことを、冷え切った低い声が言った様な気がした。

氷の吐息がハルの両足に絡みつき、その信号が脳を介し誤って伝わったせいか、テレジアの尻尾が立てるふたつの足音もはたりと止まった。

「……わかるわ。その気持ちは」

有翼人たちが邪魔くさそうに、前触れもなく立ち止まった少女を避けながら、眉根を寄せた怪訝そうな表情で振り返って行った。それで、ハルの両サイドの通行量だけやけに多くなり、ハルは人の波と波に挟まれてめまぐるしく動く周りの光景に、しかしその群れを注視することはなかった。

ハルは下を向いて、ただ廊下のど真ん中に突っ立っていた。自分の鼓動の中心が、ひどく揺さぶられているのが白いガーゼ地の部屋着の上からでも見て取れた。

「戻らないのかハル」

鼓動を持たない双子の片割れが先程の問いかけを繰り返す。

「もどるよ」

廊下は人通りが少なくなり、白い床がむき出しになっていた。

飾り立てられている筈の明かりが、ひどくぼかされてうつっていた。

１７６　現行犯（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
ハル達新大陸の人々がどんな服を着ているのか実は考えていなかったのです…。
一度終わって（いつ終わるんだろう↑）大幅修正するときに入れていくつもりですが、大体今の人々がきているのと同じような洋服です（現設定）。

次の更新日は１１日です。
［ｎｅｘｔ↓ハル、スーサに謎の優越感を覚える］

177　ハル、スーサに謎の優越感を覚える

すっかり萎えた気分でハルは観音開きの扉を引いた。

元気が出ないと、腕の力も十分に働かないようで、入り口を開くのに厭(いや)に時間がかかった。おまけに戻ってくる途中でミウタがうとうとし始めたので、脳から指令を出して歩かせようにも反応が遅いため歩調が合わず、余計に脳みそがくったくたに疲れたのだった。スーサは寝に入りかけていたようで、普段より高く小さい声をあげた。

「だれ？」

明かりは煌々とついていたもののほとんど眠りの世界に入っていたらしく、悪趣味な色合いの寝台に身を起こした少年は、まぶしそうに細めた目をしばたかせてこちらを見ている。

「ごめん、起こしちゃった？」

「うん……でもハル待ってたから」

「あ、待たせてごめんね」

薄手の部屋着を脱いで、市のシンボルマークがついた寝間着にさっさと着替える。これを着るのも初めてではないわけで、なんだか自分が軍に所属してしまったような気分になる。ベッドに入ると、スーサが眠たそうにもぞもぞと布団の中にもぐって、ぴとりと身を寄せてきた。ハルもそれにならって、いそいそと枕を掛け布団の中に引き込み、上から立派な羽毛布団をかぶった。

ここの宿舎は自分で電気をつけたり消したりできないらしい。部屋から廊下の電気は全部、光の魔術を込めた宝石の輝きを使っていると、フェララとスーサが夕食の席で話していた。明かりに注ぐ魔力の量によって、その石がどのくらいの時間光るのか定まるらしいのだが、

「今日の魔術、効き目長くない？」

掛け布団から頭の先っちょだけこんにちはしているのに気づいていないスーサが、もぞもぞと動きながら言った。

「いつ消えるかなんてわかるの？」

興味津津のギルドメンバーに、錬金術師の少年はひょっこりと顔だけを出して、丸い瞳をちらりと魔術の照明の方にやった。

「作りたてほやほやの時に一番強く光る部分の色が薄くなって、それまで弱かったものが濃くなればなるほど終わりに近いんだ。ハルにはどこが強く見える？」

指さされた方向に視線を注いでみようとしたが、我慢できずすぐ眼をそらした。

「……全部眩しくてよくわからない」

素直な感想を述べると、スーサの無邪気な笑い声が、豪華ながら古びた印象を覚えさせる広い個室に響いた。

「ごめんごめん、そうだった。魔宝石は魔鉱石と違って、最初は表

面の方が強いから、光だと中身がよく見えないんだった」

そりゃそうだとハルもつられて笑う。眩いばかりに光だけを放つ宝石は、美しいかもしれないが、眠たいたつまきごっこ二人組にとっては少々刺激が強すぎた。

「魔宝石と魔鉱石って何が違うの？」

どうせ明るいうちは寝付けやしないだろうと思って、ハルは話をつないだ。それに魔術に関して最近ちょっとだけ興味がわいているのだ。この期に本人から聞いてみるのもいいかもしれない。

スーサは天井を見上げ、首をかしげたまま数秒静止してから、

「えーっと……魔宝石と魔鉱石はほとんど、単に都合がいいから使い分けてるだけで、実際は……えっと、実際はあんまり」

「本質は変わらない？」

「あ、うん、それ」

スーサよりうまい言い回しをできたので、ハルは心の奥でこっそりと得意気にふんぞり返った。

１７７　ハル、スーサに謎の優越感を覚える（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次の更新日は１３日です。
１４日は誤りでした、すみません。
［ｎｅｘｔ↓小さくて冷たい、現実の世界］

178　小さくて冷たい、現実の世界

いや、フェララがもしハルのほくそ笑みを見たら、五歳年下の少年と知識で張り合うだけ無駄だとか言われるかもしれないが。ハルだって、メンバー歴は一番短いけれど、年齢的にはスーサよりお姉さんだ。若干の意地は、ある。

「つまり、大雑把に分けると、攻撃用かそれ以外かで呼び名が変わるってこと？」

『魔鉱石』は、スーサの樫の杖みたいに、相手への攻撃に成りうる効果を発揮するもので、『魔宝石』は照明や、アルタのような回復師が使う武器など、攻撃に不向きなものを指すらしい。

「そっか」

ハルはじっと明かりを見つめた。

ランプは花のような形をした可愛らしいもので、触れたら揺れるんじゃないかと言うくらい薄い花びらの飾りがついていた。花びらはガラスでできているようだが、普通の透明なものではなく、それをうまく使えばちょっとは光の加減が調節できる気がした。

思い立ったハルは、慣れない柔らかさのマットレスに掌をつき寝台から飛び降りた。下には真っ赤な地に黄土色で何やらよくわからない、文字みたいなものがたくさんかかれた絨毯が引いてある。何と書いてあるのかわからないが、びっしりと描かれていていささか気味が悪いので、あまり踏まないようによけつつ花に辿りつき、花弁の開く方向を横に曲げてみると、案の定、壁にとりつけてある根

元の金具がきゅるりと音を立てて回った。ハルはちょっと緩んでいたそれをきつく締めた。これで光が少しは遮られて眠りやすくなるだろう。

ハルは自分の留めた部分が動かないのを確認すると、満足して、もといた場所に戻って身を横たえた。すると、真横からすうすうと、心地よさげな、しかしちょっと疲れも入ったような、幼い子供独特の可愛らしい寝息がハルの耳をそっと吹いた。

（いいな、なんか幸せそう）

掛け布団にもぐりこんでいる所為で一見誰もいないように見える布団から、しかし髪の毛だけ相も変わらず飛び出ているのがおかしくて、ハルは小声で笑った。

しかし、静寂に包まれると、考えたくないことがやっぱり頭の中に出てきてしまう。ハルの顔からは、つかの間の温かさが冬の冷たさに取り込まれるかの様に、笑みが表情の奥の方に消えた。代わりに、どこか自分だけうそ寒い現実の世界に置き去りにされたような言い知れないせつなさと、自己嫌悪の渦巻がハルの脳内に薄い黒雲をまき始めた。

ハルは、夕食後に耳にした例のやりとりを、聞かなきゃよかった、と心底後悔していたのだった。

（うっとうしがられてたのかな、私）

あいつが近くにいると落ち着かなくなる、みたいなことを言っていた。

寒々しい色合いの唇が発した句は、ただひたすらにハルを苦しめた。ハルは意味もなく、煌々と自分を照らす檸檬色の角ばった宝石を眺めた。花びらの形の枠に包まれて、周囲にぼやけた光を放つ石は、まだ当分仕事をやめてくれそうになかった。直視できないようなまぶしさは、ない。何故なら、花びらのふきガラスにその鋭さを遮られぼかされているから。

けれど、もし何か鋭いものにつつかれた拍子に花がわれてしまったら、瞳に直に光が飛び込んでくる。結果として脳裏に刷られる残像は目を閉じても、暗闇の中で気まぐれに色を変えながら、しばらく居座り続けるのだろう。

目を開けてみたなら、どこに視線をやろうとも視界にもやもやとはりついてくる。

いつか瞳の記憶からはがれおちていなくなると知っていても、またそんな残像が取るに足らないものであることさえわかっているのに、なかなか、もどかしい。

ハルは寝返りをうった。

１７８　小さくて冷たい、現実の世界（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次の更新日は１６日です。
［ｎｅｘｔ→ハルがゼストが抱きつき魔だと確信した時、本当は。
」

１７９　ハルがゼストが抱きつき魔だと確信したとき、本当は。

夏の朝陽の温もりを浴びた氷使いの少年の魔動服の黒を、太陽に仕える有翼人の青年の両翼が白く包み込む。

テレジアサモナーの少女が唖然として眺めているその光景の中、ゼストはがくがく震える手でなんとか、突然の出来事にたじろいでいるクルアンの右腕のあたりを軽く触った。

服の上からでも、ゼストにはその感触がなんであるか瞬時に察せられた。

あった。やっと見つけた。

確かに、アークルーンのコードだった。

ゼストは、自分の手つきを怪しまれないように、ハルの目の前で、クルアンに抱きついたまま率直な感想を述べた。

「お、冷たい」

氷使いの少年はしかし、抵抗しなかった。曰くつきの右腕を改められているというのに、びくともせずただゼストの両腕の中で突っ立っていた。持ち主が動かない代わりに、その手の内にあった討伐依頼書が初夏の青嵐に吹かれて軽い乾いた音を立てた。

ゼストは一寸、どうしたものかと迷った。このまま抱きついた理由について話をしたいのはやまやまだったが、すぐそばに何も知ら

ない女の子がいる。加えて自分は人間の男がひどく怖い。このままくっついていたら、足までひどく引きつって体が崩れ落ちてしまいそうなほど恐ろしかった。

だから、冷たい耳元に自分の口を近づけ、一番意義のありそうな言葉だけをそっと吹きこんだのだった。

「アークルーンフォロワー・箱舟の因子3―3……新大陸名、ゼスト」

その後依頼を完了したあと、まさか殺したドルガスの口からアークルーンの語が発せられるなど、想像もできなかった。

ゼストは、噴水記念館の一角で、ぼんやりと象牙色の天井を眺めながら考えにふけっていた。手元にふかふかの犬のぬいぐるみを置いて。

ぬいぐるみは一抱えもある大きなものだ。白い地は、多少毛羽立っていたが、さわり心地が柔らかいのと、果実のような花のようなふんわりした香りがするから、隣においておくだけでわりと落ち着く。

十七にもなって、少女趣味だと笑われそうだけど、これがないとどうにも寝付けない。ゼストはおすわりしている犬の背中の部分をまくらがわりにして、横向きに体を丸めた。草花に包まれるような、穏やかな気分のなりながらも、ゼストの脳内は盗賊ドルガスの発し

た言葉への疑問でいっぱいだった。

背後で、寝具に身をもぐらせる物音がするのを確認して、ゼストはやっとこさ、胸中で持て余していた問いかけを、臨時のルームメイトに投げかけた。

「ねえクルたん、アークルーン発祥の地ってどこだと思う」

１７９　ハルがゼストが抱きつき魔だと確信したとき、本当は。（後書き）

読んでくださりありがとうございました。
次の更新日は１９日です。
［ｎｅｘｔ→アークルーンを狙う組織のこと］

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9102p/

Regulus

2011年11月16日19時03分発行